

女ばかりの世界に迷い込んだ俺と、そんな世界へ「異世界TS転生」
をしていたあいつと

あずももも

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺がある朝……だと思っていた夜中に目が覚めたのは校庭のど真ん中。そこに駆けつけてきた顔も知らない同学年の女子たち……と、母さんでない母さん。彼女たちが言うには、俺は男がほとんど存在しないという「異世界」に来ており「健康な男」として狙われる存在になっているそうで。信じられないけど信じるしかない状況で慣れない環境を過ごすけど、女しか視界に入らず娯楽も足りず、さらには事情ありということでもなにもかも遠慮がちな環境が嫌になつてきて――

そして俺は、元男だったという同郷のあいつと出会ったんだ。



☆ほんの少しだけ内気な男の子な主人公と、もうひとりの主人公――TS異世界転生というものをした女の子の友情？なおはなし。精神的BL要素はありません。あくまでも友情？がメインです。

☆前半はTSつ子の気配がなく、男の子な主人公の一人称視点でおはなしが進みます。いつも通りに癖が強い作品ですので0話の注意事項をお読みになってから先に進まれるか判断されるのを強くお勧めします。

☆TSつ子を男の子視点で眺めるコンセプトで構成されています。

☆全三十数話、完結後後日談を10話程度。1・2・3話は初日に投稿、4話以降は1日1話ずつ21時前後の投稿です。

☆このおはなしは以前にAAで投稿したものを再編集したもので

す。すでに完結済みですので最後まで投稿します。

☆小説家になろう・カクヨム・ハーメルン等で同時投稿です。

☆TS百合はもっと流行るべき。

表紙絵はこちら：

目次

0話	【本編ではありません】注意事項&人物紹介(話が進んだら)	
1		1
1話	目が覚めた先は、真夜中のグラウンド	3
2話	須川ひなた(仮)と野乃早咲(確定)と……母さん(未確定)	14
3話	追加でローズマリー・ジャーヴィス先生(顔だけは知ってるから確定?)	22
4話	居心地の悪い空間と居心地の悪い空間	32
5話	男の少ない／ほとんどいない世界というもの	41
6話	なけなしの覚悟	51
7話	「無人島」	59
8話	転入	66
9話	結婚制度、など	73
10話	「デイストピア」	80
11話	協力者(婚約者)	86
12話	順応と諦観	94
13話	葛藤	101
14話	Turning Point	108
15話	諦めと、その先の	116
16話	告白／告白	124
17話	「2回目の初対面」	132
18話	早咲の本性	139
19話	早咲の、くだらない本性	146
20話	自覚(前)	154

	2 1 話	自覚 (中)	161
	2 2 話	自覚 (もうすぐ)	169
	2 3 話	自覚	175
	2 4 話	葛藤と……	182
	2 5 話	失った友情と、恋慕	189
	2 6 話	すでに懐かしい教室の風景	196
	2 7 話	思いがけない再会	203
	2 8 話	早咲：女↓男	211
	2 9 話	最後の試練の始まり	218
	3 0	最後の試練 (1)	225
	3 1 話	最後の試練 (2)	232
	3 2 話	最後の試練 (3) そして……	239
	3 3 話	この世界を受け入れた朝	247
	3 4 話	種明かし	253
	3 5 話	早咲の、もうひとつの秘密	260
	3 6 話	修羅場	266
	3 7 話	久しぶりのローズ先生と。	274
	3 8 話	最後の真実	282
289	3 9 話 (終)	俺と早咲という異邦人は、これからもこの世界で。	

0話 【本編ではありません】注意事項&人物紹介（話が進んだら）

あらすじにもありますが、こちらが注意事項です。

☆このおはなしは異世界でひとりぼっちになった主人公の直人くんと、もうひとりの主人公のTSつ子が彼と友情を育む物語です。後半からふたりは仲良くなりますが、「ふたりがくつつくことはありません」。こちらをご承知置きの上でお読みいただければと思います。

☆構成上後半までTSつ子が本格的に入って来ません。TSつ子視点も一切ありません。男の子の方の主人公視点です。TSの肝心となる性別が変わった場面や葛藤はこのおはなしでは欠片も存在しないことを先にお知らせします。あくまで男友達同士の友情？物語です。

☆他の作品同様主人公の一人称視点かつ主人公がもやもやと考える場面重視の構成のため、意図的にテンポを悪くしている場面が多々あります。これを楽しんでいただけたら幸いです。それでもある程度まとめ読み&地の文の読み飛ばしを推奨です。

☆7月19日（月）完結しました。

☆かんたんな登場人物紹介

榎本直人くん：巻き込まれ主人公。華やかな体育会系……ではない方の「普通の男子高校生」な1年生。見た目も中身もごくごく普通、それゆえに悩みに悩んで……という目に遭う男の子。普通なので特に喜びすぎることもなく、かと言って引きこもったりするほどには落ち込みもしません。知らない人とも普通に話せてしまい、傍目から見たらどのようなことがあっても落ち着いている。そのような性格のせいで……。

野乃早咲ちゃん：男装している女の子。訳あって制服は男子のもの、スレンダーな体つきと短めの髪の毛のおかげで男の子に見えなくもない見た目で学園に通っている子。背は男子の平均な直人くんと同じくらいでやや高め、髪の毛は肩に掛かるくらい。顔つきは中性的

で穏やかな子。

榎本美奈子ちゃん：直人くんのお母さん……を10歳くらい若くした感じのショートカットで目つきの鋭い先生。生徒からはさばれば厳しいけれどがんばれば笑顔で優しく褒めてくれると評判。

ローズマリー・ジャーヴィスちゃん：きんぱつでボデイラインを隠しきれない、おっとりして明るい先生。もちろん外国語担当で、少し話し方に特徴がありますー、という感じ。一方で、授業以外のお仕事もある様子。

須川ひなたちゃん：小……中学生にしか見えなくくりくしたおめで髪の方が長い子。早咲ちゃんにべったりで甘えんぼ、一人称が自分の名前。そのせいで、男の子の背丈な早咲ちゃんに小学生の背丈でしがみついている姿が余計にこどもっぽさを見せています。

綾小路晴代ちゃん ザ・和服美人（普段は制服ですが）でお淑やか。髪の毛がものすごく長い子。ひとつひとつの動作がていねいでまさにお嬢様。早咲ちゃんがおっとり系女子なら晴代ちゃんは清楚系女子。直人くんの安全のために「婚約者」になる子、その1。

御園沙映ちゃん 活発……過ぎる女の子。いい子なのですが、仲のいいお兄さんがいることもあって遠慮無くぐいぐい来ます。男の子慣れしているのである意味気兼ねなく、前の世界のようにおはなしできる貴重な子。ひなたちゃんと同じく一人称は自分の名前。肩までのふわふわな髪の毛。直人くんの安全のために「婚約者」になる子、その2。

1話 目が覚めた先は、真夜中のグラウンド

まぶしい。

何も見えない。

真っ白／黒だ。

なのに、光があることだけは分かる。

その光が降ってくる。

その光が昇っていく。

その光に合わせて、俺も昇っていく。

その先には、天を覆う光の扉があつて、……俺に迫ってくる。

ぶつかる、と思つたら……それはぶつかる直前でいい、と軽く開き、

俺を通す。

後ろでそれが、ばたん、と閉まる音が聞こえた気がする。

そこは、闇。

さつきまでのように真っ白だったのとはちがつて、闇。

一切の光がない。

光がない。

くらい。

暗い。

黒。

漆黒。

○

……………ん？

なんだか変な夢……のようなものを見た気がするな。

夢のようなもの……浮かんだって言うよりは、飛んだ？ 感じで、どこかを通り抜けた……みたいな感じか？

……………うーん、よく表現できないし、よく覚えていない。とにかくまぶしかったり暗すぎたりしたことだけは覚えている。

ま、夢だしこんなもんか。

どうせいつも起きてすぐに忘れているんだもんな、夢なんて。

……こうして考えているあいだにも、目が覚めつつある今でさえも、どんどんと遠くに行っているんだからな。

……………ああ、眠い。

二度寝したい……けど、たぶんこれはアラームが鳴る少し前なんだろうな。

たまにあるように、セットした時間のほんの10分20分前とかつていう、ものすごく絶妙なタイミングで目が覚めるやつだ。

できればそうしていたい……けど、これがもし、もうすでに1回無意識で止めて寝直したあとだったりなんかしたら、確実に遅刻だろうな。

今日も学校だし、早く起きるに越したことはない。

じゃなきゃ、ただでさえ朝は機嫌悪い母さんだ、せつかくの俺の気持ちいいまどろみを大声と布団を引っぺがすっていう荒技でどやしつけられながら起こされかねない。

ああ、寝ていたかった。

けど、母さんには逆らえない。

……………やっぱり、大声が近づいてくる。

母さんのだろう。

つてことは、今考えたように寝坊なのか、俺は。

二度寝ならぬ三度寝をするところだった……したかった……けど、こればかりはなあ。

学生とはつらいもんだ。

んじや、気合い入れて起きますか……、つと?

「……………ねえっ! 君、大丈夫っ!? ねえつてばっ!」

ん……………?

声?

母さんのものじゃないよな?

母さんよりも明らかに高くて、幼い感じの声だもんな。

かといって、こんなボイスアラームに設定した覚えはないし。

……………。

だよな？

昨日寝る前にぼんやりしたとかいうオチで、それが今、耳元で叫ばれているかのような大音量で流れているわけ……じゃないよな？

だったらヤバイ。

母さんに……俺がこういうのに興味があるっていうのがバレると近所迷惑やらかしたってことで、かなり本気のゲンコツを落とされかねない。

……が、得てして寝ぼけているときっていうのは、意識が先で体は後で。

だから、……………動けない。

「……榎本先生と……に連絡してきます！ ひなたは彼を介抱して……」

また別の声。

……………そこでどうして母さんの名前が出るんだ？

やっぱり寝ぼけてるのか？

普段なら俺の名前を呼びながらゲンコツだろう？

いやしかし、意識はもうすぐ起きそうになっている感じなんだけど。

あ、ほら、指先とかあつたかくなってきたしな。

けど、これって……母さんの教え子の人とかが来ていたりするのか？

家に？

早朝に？

なぜ？

いや、でも、それならボイスでのゲンコツは避けられるけど、逆になおさらに分からない。

だって、……俺を知らない相手が、俺と同年くらいの生徒……そ

れも女子が、俺の部屋に？

んなわけあるか？

.....。

ない。

.....と、思いたいけど。

俺の体が、揺さぶられる感覚がある。

肩を掴み、.....声の方向から察するに、俺の目の前にかがみ込んで来ている。

.....かがみ込んで？

「ね、.....あの。目、開けて？.....起きない

の。お薬とか、盛られているのかなあ.....ん——.....」

.....この声。

けっこう幼い感じだけど、でも、スマホとかからじゃなくて、現実の女子の声で.....いやいやだからなんで知らない女子が俺の部屋に入ってきているんだ!?

「.....え、と。ケガとかは.....ない、のかな？」

待つて待つて待つて待つて。

ちよつと待つて。

俺の部屋に来たのが俺を起こさせて母さんに言われて来ているんじゃないかって、いや、それでも充分におかしいんだけど、なんでケガがないのかどうか調べようとしているのかとか、知らない男子の部屋に勝手に入ってきて平気なのかとか、肩とか顔とか頭とかをぺたぺたぺたぺたと触られているのかとか、そんなことはどうでもいい。

手が柔らかいとか小さいのかもまたどうでもいい。

寝起きは、まずい。

なにかがって、.....その、寝起きの布団の中が。

いや、大丈夫だとは思いうけど、その感覚はないから大丈夫だとは思いうけど、でも、万が一にも目立つ状態だったとしたら——目も当てられないことになるのは明らかだ。

母さんなら、ふん、とか言っておしまいだけど、もし年の近い女子にそれを見られたら。

俺はもう媚に行けない……じゃないけど、少なくとも数週間は凹むだろう。

ついでに、相手からは学校中に広められることまちがいなしだ。

端的に言うと、……やばい。

男の尊厳の危機だ。

ついでに学校生活の危機でもあるな。

「……………ん。服も脱がされたりした跡はない、ね。……や、そういう風に着させられたとかかもしれないし。なら、もう少し調べないといっ」

これは男の沽券、存亡に関わる一大事だ。

もしそれを見られ、泣かれ、それを聞きつけた母さんが部屋に来たら……ゲンコツどころじゃ済まない。

それをさせたのが母さんだろとか言っても問答無用で、どんな目に遭うか想像もできない。

学校では優しいフリをしている……それでも「実は榎本先生って結構こわいんだね、淡々って感じのお説教、みんな怖がってるもん」とかよく言われるけど、家で怒るときはほんとうにこわいんだ、俺の母さんは。

だから、早く。

早く、起きないと……………!!

焦ったからか、急にからだが熱くなってきて一気に覚醒した感覚。

俺は、布団の下をのぞき込まれないようにと、惨劇を起こさないようにと、全力で両手を……はがされそうになっているだろう布団へと伸ばそうとして、体も起こして。

……………ごっん。

と、焼けるような痛みと光がひたいに走り、俺は悶えた。

○

痛いと言うよりは熱い。

火花が散るような、っていうのを俺自身が経験するのは初めてだけ

ど……………いや、これ、時間が経つにつれて痛くなってきたぞ!?

めっちゃ痛い。

泣きそう。

というか涙がにじめ出る感覚。

とにかく痛い。

「~~~~~いつ……………」

「……………たあ——っ……………」

本気で痛いときってというのは、痛いところに手を当てて目を閉じて、ただただうめくことしかできない。

端から見たら情けない感じにうずくまっているだろうけど、しようがないだろう。

だけど……それは、俺に頭突きを食らってしまったはずの女子にも言えることで。

……まさか、ほんとうに顔の真ん前までのぞき込まれていたっていうのは想像していなかった。

悪いことした……っていうか、なんでそんな近距離まで近づいてきていたんだよ、この子。

警戒心つてもものがないのか？

……そんな考えをできるようになつて来るくらいには楽になつてきたから、俺は変わらない痛みに悶えつつも、布団に手を伸ばし……、伸ばし。

伸ばし。

伸ばし？

……………。

……………布団が、ない？

まさか、もう取られて？

……いや、とにかく謝らないと。

「す、すみません！ 思いつきり起きちゃって……大丈夫ですか!? 俺、その、まさか目の前にいたなんて」

と、ものすごく甲高い声で悲鳴に近いものを上げていた女子に、母

さんの生徒か誰かに対して、声をかける。

そのために目を開けて、頭をあげる。

……………。

……そこには、小さな女の子がいた。

ああ、いや……予想通りに母さんの教え子らしく、俺の学校の制服を着ている以上には最低でも同じ年なんだろうが……とにかく小さい、というか幼い。

さすがに小学生……にも見えなくもないけど、全体的に小さい。

……………なぜに母さんは、こんな子を俺の部屋に入れた。

……分からない。

小さすぎるから大丈夫だろうかという理由なのか？

分からん。

母さんの考えが分からない。

母親で教師なのにな。

……とにかくその……涙目というか涙が出ているしちよつとしゃくり上げているし、ひたいに両手を当てつつも俺を……上目遣いになっただけの子。

ああ、ただでさえ幼い感じなのに髪の毛がかなり長いから余計にそう見えるのか……なんてしばらくぼけつとしていたのか、その子の痛みもようやくに収まったらしく、両手を下ろした。

……まだまだ顔は半泣き以上のそれだけ。

というかけっこう涙出てるし。

こんなところに母さんが来たら、俺、酷い目に遭うなあ……確実に。

「……………ううん、悪いのはこっち。ごめんね……………」

……………じゃなかった！君、大丈夫なの!? 誰に、何されたの!?!」

半泣きが消え、痛かったことを忘れたかのような表情になってがばつと起き上がった彼女は、再び俺をのぞき込むような姿勢になって来て……………俺は、後ろへ後ずさる。

だって、またぶつけたら今度こそ大変だもん。

俺よりも、この子の方が。

と、後ずさるために着いた手のひらからは、ざりざりとした地面の感覚。

尻も、下がベッドなんかじゃなく、もつと硬い平坦なものに支えられてるのが分かって。

靴も、履いているみたいで。

.....

あれ。

なんで、俺.....？

ざりざりざりと、何度も触ってみてなんとなく分かる。

これは.....アスファルトの感触か？

ついでに思い出したように、背中からは硬いところで寝ていたときのようにあちこちが痛む感覚がズキズキと響いてきて。

.....布団なんて、当然に無くて。

.....俺もまた、この子と同じように、制服を着ていて。

目に見える景色は、薄暗くて。

ちらほらとまたたいている光は、きつと星.....それ以外は真っ暗な夜空で。

どう見ても朝の俺の部屋じゃなくて。

「.....ごめんねええ.....ふえええ.....」

と、俺が下がったのを見て.....また泣き出しそうな顔をして、その子も1歩2歩とよろよろ後ろへと下がって、ぽすんと腰を下ろした。

スカートのみまで。

それが視界に入り、この子が俺と同じ地面に立っているらしいのにやっとなげく。

この子は立っていて、俺は寝転がっていたところから軽く起き上がっただけ。

だから、しゃがんだ瞬間にスカートが浮かんで中が見え、.....じゃない、今はそんな場合じゃないんだ。

というか、こんなに幼い子のスカートに反応したらさすがにまずいだろ、俺。

まあ、幸いにして影になって見えなかったからよかったけど。自分でも引く一瞬だったけど……しかしながら男の本能で無意識に目で追ってこうして考えてしまうのが情けない。

……母さんからゲンコツ、もらった方がよさそうだな。

「ひなたが聞いていいことじゃなかったね。ごめんさい……。

……あの。ごめんついでに、あなたを今から介抱しなきゃなの。このままじゃ、ここにいたら危険なの。でも大丈夫、きつとすぐにお医者さんとか先生たちが……」

その子が……たぶん名前がひなた、なんだろうな……なんてことを考えながらも、俺はろくに話も聞かず、周りを見るのに必死だった。頭が起きてきたら、この子のスカートの中とか母さんのゲンコツとか、そんなものはどうでもいいことだって分かってきてしまったからだ。

……なんで、俺は外にいるんだ。

俺は昨日、いつもどおりに寝たはずだ。

なのになぜ、俺は外で寝ていたんだ。

それも、……暗くてはつきりとは分からないけど、だけどたぶんここは、俺の学校の……グラウンドで。

制服を着て、夜空にひとり、校庭で寝ていた俺。

しかも、空を見た感じにはまだまだ夜中だ。

ほら、真上近くを見てみれば満月だって浮かんでいるし。明かりが月と校舎の窓からしか来ていないくらいだし。

さっきの星は……目が明かりになれたら見えなくなつたな。

……けど、まさか俺、夢遊病とかでこんなところへ？

いやいやいや、夜中に校庭に入ろうとしたらあつという間に警備員に見つかる、警報装置もなるだろうし、っていうか、そもそも家から学校まで……ここまで、電車の距離だぞ？

……いや、でも、それよりも。

俺を見ているのが、どうして同じ学校……の女子なんだ。

制服が同じな以上、この子もまた俺と同じ学年以上のはずで。

その子が、なんでこんな真夜中に？

そつちの方が、より不自然に思える。

……………俺、混乱してるな。

元はと言えば、俺がここで寝ていた方がおかしいことなのに。

俺自身のことを考えたらいいのか、この子のことを考えたらいいのか……すぐに母さんが呼び出され、このまま病院へ連れて行かれる心配をしたらいいのか。

それが、なにも分からない。

頭の中でぐるぐるとおんなじ疑問が繰り返される。

「……………ね、ねえ、大丈夫!? しつかりしてえ!」

「……………あー、やっぱり。……………はいはいひなた、落ち着いてくださいね。他の人はすぐに来るそうです。……………それで彼……………ああ、起きたんですね、どんな感じですか?」

分からないままでもう1回同じようなことを考えてぐるぐるとしていたら、少し離れたところから誰かが走って来る音がする。

そのまま顔を上げると、もうひとり……………これもまた女子だ……………が、息を弾ませながら走り寄ってきて、ひなただと確定した小さい子に話しかけるのが聞こえる。

身長差で、……………新しく来た子を女子の平均だと考えてみても、それから頭ひとつ以上小さいから余計に幼い感じに見えるしな、……………えつと、ひなたという子。

「まずい、んだと思うよお。だってだって、ぱつと見たただけだとなんにもないけど、でもっ。ぼーつとしてて、あんまり反応がないの!

これ、……………思いたくないけど、お薬盛られて連れて来られた可能性があるかもっ! なのに私、いきなりごつつんこしちやって、びつくりさせちやって、怖がらせちやって……………ふえ、だからお願い、代わって早咲ちゃん」

俺は人の顔と名前を覚えるのは得意じゃない。

特徴を覚えておくのも苦労する有様だ。

けど、いくらなんでもこんな突拍子もない状況で……………まだふたりしかいないからこそ、俺の頭が必死になって覚えようとしている。

俺を起こしてくれた、……………俺の頭突きをまともに受けて泣かせた、

ひなたという下の学年……中学生に見える女子。

そして、もうひとり。

……ひなたを抱きしめるようにして、もういつかい泣きじやくりはじめた彼女をあやすようにして、俺の方に視線を流してきたのは……早咲、と思しき女子。

満月を背にして、あまりよく見えないけど……ひなたとは違い、ぱっと見て俺と同年な体格で、髪の毛は肩……くらいまで……男子の制服を着ているけど、女……だよな？

髪の毛だつて肩くらいまで伸ばしているし、なによりも声と雰囲気
が女子だし。

そんな、幼い顔つきとは反対に……落ち着いていて、目が慣れてきたからなんとなく分かるようになってきた顔は落ち着いていて、そんな雰囲気男子……に見える、女子。

それが、——俺が「こつち」へ来て、はじめて出会ったふたりだった。

2話 須川ひなた（仮）と野乃早咲（確定）と……母
さん（未確定）

「あ——……ひなたちゃん、いきなりなにかが起きるとパニックになつてしまいますものねえ……。……で。えー、と。その君、ごめんなさいね、いきなり。……よろしければ名前とか教えてもらってもいいでしょうか？ ああいえ、分かるでしょうか？ ……覚えていたとしても言いたくなければ、上か下どちらかでもいいんですけど」

「ふえええん、早咲ちゃああん……」

小さなひなたという女子をあやしつつ、早咲という……胸もかすかにある……ない？

いや、どうなんだろう。

よく分からないままだ……暗いし男の制服着てるしな……とにかく早咲という、男か女か分からない生徒が尋ねてくる。

いや、ひとまず男だと思っておこう。

女顔だけど、それくらいなら学校にも何人かいる感じだし、さして珍しくもない……だろう。

髪の毛が長いっていうのは……ま、まあ、同じ学年にもいた気がするしな。

声も雰囲気も、男と言えば男って感じだし。

……俺、ひなたという子も目の前の男子生徒も、顔さえ見かけたことはないけど……そう思っておいた方が、ひとまずは楽だしな。

初対面なわけだし。

初対面の女子とまともに話すのは、特に寝起きのこの状況ではそれなりにハードル高いし。

「……………俺、は。榎本……直人、だ」

「榎本、……………直人、君ですね」

「榎本……あれ、先生の」

「ああ、榎本美奈子……母さんの息子なんだ。で、俺なんだが……こんなところで寝ていて言うのもどうかと思うんだけど、俺自身がどうやってここに来たのかとか、何も分からないんだ。夢遊病としか思えないけどな」

「……そう、なんですか」

「そうなんだ……と、思う。起きたばかりで何も分からないけど。」

それで、悪いんだけど母さん、榎本美奈子先生はいるのか？ ああいや、今日当直じゃなかったし、夜家にいたからいないか……なら別の先生を呼んで来て欲しいんだ。そうすれば、きっと」

キツイおしおきは待っているだろうけど、これ以上他人に迷惑をかげずには済みそうだと思つて母さんを……つて思つたけど、いないんじゃないだろうがない。

とにかく、「榎本美奈子という教師の息子」として他の先生にも顔を知られているんだし、誰でもいい。

説教はとんでもないことになりそうだけど、こうして初対面で泣かせてしまった子と、男か女か分からない同級生……と、一緒にいるよりは、ずっと。

はつきり言つて、ものすごく気まずいし。

あ、あとぼんやり考えていたけど早咲つて……字は適当に当てただけだし、もしかしたら愛称かもしれないのか、女に見えるからって。

さき、さき……ナントカ崎とか、名字から取った可能性もあるしな。

男子だと思つて気が楽になる……から、「早咲」という奴には、そこまで緊張せずに話しかけることができたらしい俺。

……いや、さっきのひなたさんっていう子は中学生に見えるから楽だったけど、知らない同学年以上の女子とか女性に話しかけるのつて、俺からは無理だし。

それができる度胸があれば、彼女は無理でも女友達くらいはできていたはずだもんな、俺。

クラスで話せるのが男子だけという寂しい高校生活は送っていないだろう。

こんなことを考えている時点で悲しいけどな、俺自身が。

「……えっと、これは……。いえ、でも……。それはありえないでしょう。そんな、まるで……」

「……。失礼しました。とりあえず、榎本先生のお知り合い」っていうことでいいんですね？ あなたみたいなお知り合いがいるだなんて、聞いたことはありませんでしたけど……。で、ですね、先生はもう呼んであるので、少しだけここで……。体に痛みとか吐き気とか、そういうものがないのでしたら静かに待っていてくださいますか？ そうしたら、たぶんすぐに」

「……。おい、野乃！ 野乃早咲はいるか！」

「あ、いらつしやいましたね。なら、あとは大丈夫でしょうか。」

……。私たちが側にいるといけないでしょうし、少し離れていますね」と、そそくさという感じでひなたという子を抱えつつ離れて行く……。早咲、という生徒。

私、……。つてことは、やっぱり女子なのか。

作り笑顔だろうけど、俺に向けてきたそのついでに軽く首をかしげているし。

……。なら、なんで男の格好なんかを？

……。

待て。

今の会話に、唐突な疑問が浮かぶ。

会話と言うよりも一方的に情報をもらったただけだけど、今はそんなことは関係無い。

……。俺が母さんの、「知り合い」？

「聞いたことがない」？

……。母さん、俺のこと、母さんの教えている学校に通っている「俺」っていう生徒のことは、さすがに伝えてはいるはずだよな？

いくら俺に厳しいと言っても身内……。しかも息子のことを隠す人じゃない。

まあ、クラスは別だし、聞かれなきや言わない程度かもしれないけ

ど……そうだとしたら少し凹むな。

けど、他の先生とか通りがかった知らない生徒から「榎本息子」とかからかわれることあるし、そんなわけはないか。

先生の知り合いの生徒なら、まず間違いなく知っているはずだ……俺という、母さんの息子という存在を。

……なら、なんで。

どうして、だ。

そうして頭がもやに包まれたようになっていると、遠くから砂を駆ける音が近づいてくる。

……ああ、教員室のある校舎からここまでなら、たしかに校庭をそのまま突っ切った方が早いもんな。

面倒くさいものには構わず、最短距離を突っ切る……そんなところは母さんだし、大丈夫だな。

ああ、きつと大丈夫だ。

「……………野乃！ 須川！ 通報と介抱と警護、すまない！ 助かった！」

「いえ、平気です。 ね？ ひなた？」

「……………おでこ、いたい」

野乃早咲と、須川ひなた……か。

後から来た早咲はともかく、ひなたさん、には悪いことしちやつたな。

明日にでもなにかお詫びしないと……いや、させられるか、まちがいない。

だって、母さんだから。

「……………母さん！」

まだずきずきする……なら、ひなたさんはもつと痛いだろうな……頭をさすりつつ立ち上がり、薄明かりの中でようやくに見えてきた母さんの元へ走り出す。

……よかった、母さんだ。

これからの折檻が確定してはいるけど、それでもやつぱり、まったく分からない状態に肉親が、ただひとりの母さんっていう肉親が来る

だけで、嬉しくなる。

今だけはマザコンだつて噂されてもいいくらいには、安心して
るんだ。

「母さん！ よかったよ！ 俺、どうしてここにいいのか、どうして母
さんまで……当直とかじゃなかったはずだよな？ いるのか分から
ないけど！ でも、よかった！ ……ところで俺はともかく、母さん
はどうして」

そうしてついまくし立てた……けど。

「……ごめんな、少年」

「……え？」

すぐそばまでたどり着いて、今年になってようやくに背で1センチ
勝てた、女性としては高い方の身長 of 母さんは
……俺が、見たこともないような表情をしてい
た。

泣きそうな、ひどく傷ついているような、そんな顔をして。

そんな母さんを見て、俺の足は母さんにたどり着く少し前で止ま
る。

「今の君にこんなことを言うのは酷だろうけど、それでも伝えておか
なければ……いけないというものだろう。これは、必要な会話なん
だ。 すまない。 ……私には君と、どこかで
会った記憶というものが無いんだよ。 いや、そこまで親しく話しか
けてきてくれるから、もしかしたらということもあるのかもしれない。
でも、な？」

そんな、母さんらしくない顔をして、声をして……壊れそうなもの
を抱きしめるように、優しすぎる口調で——残酷な
ことを言ってきた。

「ごめん。 ごめんよ、少年。 私には、君の顔も名前も……母親、と
いう関係性も。 その、一切に……覚えがないんだ」

「……え？ ……か、母さん、いくら俺が夜中に
出歩いたからって言っても、なにもそこまで言うことは」

頭がぐるぐるとする。

母さんから、俺の母親から……母さんらしくない冗談が、出てくるなんて。

冗談。

あるいは、……そうだ、俺を突き放そうと、……それは、なぜだ？

……いや、やっぱりらしくない。

母さんなら、もっとストレートにゲンコツが先に飛んでくるはずで。

「……それで、彼の名前は？ 覚えているもの、あるいは擦り込まれたものは聞き出せたか？」

「はい、それなんですけど……」

いつの間にか泣き止んでいて、俺の顔を見ていて、……哀れむとも言いたげな目を向けていたひなたさんは、母さんをまつすぐに見上げて。

「……………この子は、その。この子、自身のことを、……………」

俺と、ぴたりと視線が合って。

「榎本直人」くん——って。ぐす。それで、この子の感じ、しかも寝起きでなので、ひぐ、きつと、その通りだと思っっているはず……ですつ。あの、いえ、もしかしたら……うん、きつと、先生の思っているかもな通りで」

「……そう、思い込まされている……みたいですね。私も、そう思います。……………そうですよ、そんなことはあるはずが……」

ひなたのあとを引き継いで、これもまたいつの間にか俺のそばに来ていた早咲が……ちよつと何かをつぶやいていたと思っただら見上げてきて、続けた。

「嫌な話ですが……記憶を改竄するついでに、適当……それらにとって、ですけれど……そのような記憶を植え付けて、前のものはすべて消して。足がつかないようにして、捜査を攪乱して。ええ、よく

ある……とまではないでしょうが、男性を拉致して……そのあとに解放するとき、使われることの多い、卑怯な手、です。……その対象を、よりにもよって榎本先生に押し付けるなんて」

……
俺には、さつきから。

この3人の言っていることが、さつぱり分からない。

理解できない。

……いや。

理解はしている。

事情は分からないながらも、はつきりと冴えてしまったこの頭が、理解を拒んでいるんだ。

「……困ったことになった、な」

母さん……が、俺のそばまで来て、恐る恐るという感じで手を伸ばしてきて、軽く肩に手を置いてきた。

「……なるほど。 私に対しては、恐怖心がないようにしていると。」

まるで、私を容疑者に仕立て上げようとしているかのようだな。

あるいは体のいい保護者として後始末を押し付けようと」

「はい……です、たぶん。 あ、もしかすると先生と国との関係を使つて……とか？　です、か？」

「そうかもしれませんね、ひなた」

だから、俺に分かるように説明してくれないと困るんだ。

理解したくない俺の頭でも分かるように。

「……はあ。 記憶から改竄され、洗脳されていたりすると、下手人を見つける以前に彼のメンタルケア自体が厄介なことになりそうだな。

かわいそうにな、そんなことに巻き込まれていて……」

……。

だから、さつきから母さんは、何を言っているんだ。

だって、俺は……母さんと俺は、つい数時間。

そうだ、寝る前、たったの数時間前までは一緒に。

……風呂の掃除が足りないとか怒られて、だけどいつも通りの夜を迎えて、仕事のために先に寝るって、俺よりも先に寝ただけでも。

……一緒に、そばにいたじゃないか……。

3話 追加でローズマリー・ジャーヴィス先生（顔だけは知ってるから確定？）

………疲れた。

俺、病院とか……軽いケガとかカゼとかでしか来たことがなかったから……精密検査、つてやつは、生まれて初めて経験したんだからな。何時間かかったんだろうか。

退屈だったから余計に長く感じたんだらうけど。

それにしても、病院でもない保健室……の裏側に、ものすごくたくさん機械があつて、こんな夜中なのにお医者さんとか看護師さんとかが常駐しているとか。

………ここ、俺の学校だったはずだよな………？

校舎の感じとかはそのまんまだし。

………母さんに言われるままに勉強して、この春にどうにかして入った………けっこうに偏差値の高い、いい高校。

俺にしては相当無理をしたなっと思うけど、結果的にはよかったんだらう選択。

………受験勉強は母さんが仕切っていたから、そりゃあ酷いもんだつた。

おかげで無事に入学できたんだから文句は言えない。

酷かったけど。

………だけど、この高校にこんな施設があるだなんて、知りもしなかった。

ああいや、たしかにこの機械が詰まっている部屋への入り口自体はあつたけど、でも、ここは当直の先生たちの寝起きする場所だつて噂だつた気がするんだけど………？

と、検査を受けるための微妙な服に着替えさせられていた俺は制服を着直した………うん、シャツもパンツも、寝る前に来たものだったな、たぶん………と、昨日の夜に着たはずのそれらの上に、ハンガーに掛け

ていたはずの制服を着ているっていう奇怪極まる状態になっていたっていう事実にもやもやしていたところで、保健室の方から入って来た母さん?……母さん、から声をかけられた。

「検査はひとまず終わりだ、お疲れさまだな、直人君。すぐに結果が出るよう急かしているから、じきに出ると思う。保健室の方のベッドでしばらく楽にしていたらどうかかな?」

「……………分かりました」

……やっぱり、他人行儀……いや、きつと、母さんが生徒たちに対して接している、ごくふつうの態度だ。

母さんの、……外行きじゃなくて、こうしてふたりのときだったら、こんな態度は絶対に取りたくない。

機嫌が良くつたつてもう少し言葉づかいも荒いし、あれをやれ、それを取れつてせつついてくるんだから。

なら、名前も見た目も同じだけど、他人の空似……つてやつか? いやいや。

ここまで……どう見ても母さんなんだ、そんなことがあるはずは。

母さんに言われるままに保健室へ向かおうとしていたら、こんこん、とノツクの音がして、母さんのいいぞという声の後に入って来たのは……えつと、早咲さんつて名前だったか、あの中性的な男……女子生徒だった。

さつき校庭で見た通りに一部の女子にもものすごく人気が出そうな中性的な顔で、髪の毛も長めで、……だけど制服は男のそのまま、俺と一緒に生徒が。

でも……さすがに明るいところで見たら分かる、こいつ、いや、この子は女子だ。

男だと思いたかったけどな。

でも、少し話した記憶があるからか、そこまで困る感じもしくなっている。

思い込みつてすごいな。

「……はい、直人くんもこれ、どうぞ? なんにもできなくて退屈で眠くなったり冷えたりしているでしょう? こんな夜中ですがまだし

ばらく起きていないといけないでしょうし、カフェインは大切ですもの。私も眠いし、この缶コーヒーはついでですつ。あ、先生もどうぞ」

「うん、……ええと、早咲、さん。ありがとうございます」

「……………」。野乃、助かる」

そうして手渡された、見慣れた缶を……熱いくらいのそれを受け取り、ぷしゅ、と空け……いつもの味と香りが、昼を学食で食べた帰りに買って飲んでいいるそれが、口から喉へと流し込まれる。

その液体は、さつきまでの機械から聞こえてきていた轟音や金属の冷たさと同じように、俺が紛れもなく現実にいるんだと言うように、口から喉までを暖かく……苦く、染める。

「けどつ、さっきの話は……なんていうか、すごいねつ。想像もしたことないよ、そんなのつ。……あ！あの、あんまり信じられない

わけじゃないけど、でも、えつとね、実感が湧かないっていうかつ」
幼い声が下の方から聞こえたと思ったら、ひなたの長い黒髪が目に入る。

俺の視界に入ろうとしてか、ぴよんぴよんと跳ねているちっこいのが。

……………。

……こうして俺が座っていてこの子が立っていても、いくら母さんたちと話していたから顔を上げていたとしても、それでも小さいってことは……初めの印象どおり、この子は相当に幼い見た目……背丈なんだな。

「あ、ごめんね？ 直人くん。だけど、そう思えるの。……やつぱり先生が言っていたように、記憶をぜーんぶ。一般常識っていうものからぜんぶ、書き替えちゃうことで直人くんが思い出すまでの時間を稼いでいるのかな？ だとすれば……つ、て、あわ、ごめんなさいっ、大変な直人くんの前で、ひなた、悪いこと言っちゃってっ」

「……………いや、いいよ」

俺に話しかけていたと思ったなら次第に考えていることが口から出たのか、ちよつと声のトーンが下がったかと思いきや、あわあわとい

う感じで慌てだしたひなたという女子。

……控えめに見ても中学生だ。

いや、下手したら。

「落ちつけ、須川」

と、いつの間にか横まで来ていた母さんが、ぽん、と俺の肩に手を置く。

「……だが、直人君も、私たちの言うことに不快なものがあったりしたら遠慮なく言って欲しい。遠慮なく、な。大丈夫、私たちは味方だ。むしろ遠慮されてしまうと、どこまで配慮したらいいのか分からないからな。……だが、こちらが思っているものも納得はしなくてもいいが理解はして欲しいんだ。なにせ、君の常識……というものは、たしか。「男女の出生割合がほぼ同じままという奇跡が起きて世界が今日まで来ている」……という、私たちが言うところの戦前までの状態のような……理想の世界そのものなんだからな。

まったく、あるとすればうらやましい限りで、みな不安など一気に吹っ飛びそうなものだからな。……それが、

そんな世界が、存在するとしたら、だが」

……。

……さつきまで検査中の雑談ということで白衣を着た人たちにあれこれと、ヘンなことを聞かれていた。

誰でも知っているような常識だとか、歴史だとか……まあ俺はそこまで歴史で良い点取ってなかったから、詳しくもなければ間違っているところもあるだろうけど……だとか、今の世界情勢だとか、少子化だとか、遺伝子技術だとか。

ちやうど受験で必死こいて勉強したから、他の生徒並には答えられはしたと思う。

受験が終わった途端にかなり頭から抜け出たから、自信は無いけどな。

……。

……とにかく、母さんたちも、冗談とか悪ふざけとかじゃなくて、本気で俺のことを心配してくれているみたいだし、ひとまずは話を合わ

せてみよう。

それでもしないと話が進まなさそうだしな。

「……え、ええと。それならこの……世界？は、ちがうんですか？

その言い方ですと、まるで……その、男と女のバランスが悪い、みたいな？ いや、そんなまさか。 たしかに江戸時代は男余りだとか聞いたことはありますけど、でもそれはずっと昔のことですし」

と、口にはしてはみたけど、やっぱりないな。

たしか生物の授業とか何かで、どの生物も、よつぽど特殊な環境じゃない限りは男女、オスメスの割合はほぼ同じだったはずだしな。

よつぽどのがなければ。

……そんな話は俺でさえ知っているんだ、いくらなんでもダメされたりはしない。

「……あ、あはは、ありえないですよ。俺、あんまりニュースとか見ないし、熱心にそういうのを勉強したりもしていませんけど……あるいは、もしかしたら最近の少子化で、今年生まれたこどもの割合が……たとえば男が少なかったりしたり、かもですけど。でも、それだって精々が数%くらいで」

「1対1000……です」

透き通った声が響く。

響いたように聞こえる。

早咲っていう子の口から。

俺と同じ缶コーヒーを、両手で持っている彼女が。

「……………え？」

そう返すマヌケな調子の俺の声も、部屋に響くように聞こえる。

口が、……笑った形のまま、けど、どう反応したら良いのか分からない数字を聞かされて、俺はその声の主——野乃早咲へと振り向いた。

そんな早咲さんは、……いつの間にか後ろを、部屋の入り口を振り返っていた。

「あ、いえ、最近また急に変わったから、そろそろ1対1500くらいになりそうなんですって？ ねえ、ジャーヴィス先生？」

「……そうですねー、少なくとも数年のあいだにはそうなりそうですねー。私の国ではもーとつくになつていましたかー」

………また人が増えた。

しかも、また女の人だ。

だから、もういちど居心地が悪くなつて来ている俺がいる。

俺、母さん以外の女の人や女子と話すとき緊張するんだよなあ……。

……そう勝手に落ち込んでいるところに入つて来たのは、外人の先生だ。

たしか、今早咲が言つていたように、ジャーヴィス先生とか。

うちのクラスの担当じゃなかったから残念だつてクラスの誰も（男子はもちろん女子も）が落ち込んでいた、美人な……いわゆる金髪美人な人。

もちろん面識なんてないし、廊下で見かけたことがある程度だから、俺だつてよくは知らない。

「ハイ！ こんにちは、直人サン。私はローズマリー・ジャーヴィスと言います！ 英語と物理化学を教えています！ よろしくお願ひしますねー！」

「……………」

……………。

……見た目よりもずっとナチュラルな話し方だった。

というか、イントネーションが完璧に日本語だ。

「でー。さつきまでねー、私が君の遺伝子情報とか調べさせていたのでー、ようやくにお会いできましたね？ よろしくお願ひしますねー？ あ、これからは私が直人さんの健康管理担当にもなりますー、お仕事いっぱいですよー」

けど微妙に言い回しが変わって………そして、やけにフレンドリーだ。

いや、これが外人の距離感なんだろう、英語の読解とかであった気がするし。

で、ジャーヴィス先生は他の人たち……母さんと早咲……野乃さんとひなた……須川さん、だっけ……あとは他には白衣の人たちくらい

しか会っていないけど……とは違って、スキップするように近づいて来ては俺の前まで来て、じいつと見つめてくる。

ものすごく整った顔をした人が、俺を。

香ってきたのは香水なんだろうか、それともシャンプーの匂いなんだろうか。

そんな衝撃が急に来たもんだから思わず顔を背けてしまったけど……そりゃあ人気も出るわけだな、ただでさえ男子どころか女子までの憧れなんだろうし、そんな人が外人特有の距離感で話してくれたら。

見つめられるだけで惚れそうなのは、きっと俺だけじゃないんだろう。

けど、今おかしな言葉が聞こえた気がする。

「……こちらこそ、ジャーヴィス先生。で、えつと。今の、は」

「……hmm、その反応からしますと、ちよろい、ではなくちよろんつと聞いていましたように、ほんとうにメモリーを、それも、かなりにいじられちゃってますねー。徹底的ですねー。

……あ、ハグしてあげましょうか？ みな

さん、ハグ好きですよねー？ 毎朝と下校のときにハグしましょうつて言うときぎゆうつて来てくれるんですよ。……あ、男の子は初めてですけどー？」

「……いえ、お構いなく」

このお方とふたりきりだったらまだしも、ここには他にもいるんだ、さすがに断らざるを得ない。

……俺の理性は相当だからな、この程度は態度に出さずに流せるんだ。

使う機会がほとんど無い理性だけど。

「かわいそうだけど、いろんな検査機器に入ってもらったり、血をもらったりしましたねー、ごめんなさいねー、痛かったですかー？ でもろーほーですつ、体に害のありそうなモノは、とりあえずでは検出できませんでしたし、バイタルも正常でしたからー。……あ、

ちよーつとやせ気味かもなのはダメですよー、もりもり食べてくださいっ」

「……………とりあえず何もなさそうで、よかったです」

「そうですね。よかったです、直人さん……………
ほんとうに」

心持ち近づいてきていたらしい……………背が低いからな、気がつかなかった……………ひなたさんと、彼女と寄り添うようにしている早咲さんが、ジャーヴィス先生と二言三言交わしている。

「……………ええ、そうですねー。これからは時間をかけながらカウンセリングと……………必要ならヒプノ……………催眠療法、でしたかー？……………を使って、地道ーに時間をかけながら洗脳を解いていくしかありませんねー。……………その過程であまりにもかわいそうな記憶があつたなら、中止してこのままを維持するという選択肢もありますねー。でもそれは私のメイン分野ではありませんし、専門家の人を呼びたいところですー、けどー」

改めて見ると、ジャーヴィス先生って、その、スタイルが……………じゃない、今は集中だ。

「……………やっぱり、ですか？」

「ですねー。この話、直人サン……………さんの、ことをこの学園から漏らしてしまいますとー、絶対に「連れて行かれる」のはまちがいありませんからねー」

……………。

連れて、行かれる？

どこへだ？

警察か？

……………いや。

俺だって、バカじゃない。

これだけの人たちが、真剣に……………俺について話しているんだ。

母さんまでが、俺を知らないだなんて……………冗談でも口にはしないはずのことまで言っつて。

だからきつと、これは。

「……やるしかないですねー。 大変そうですー」

「大丈夫ですか、ローズ……ジャーヴィス先生？」

「はい——……ここまで来ますとー、たぶんですが。 テロ組織やど

この国の権力……私の国も含めて……などの、お偉いさんとかが——
……そうですねー、直人さんだけでなく、他の男の子もまとめて「管理」
してー。 ……完全に外から閉じ込めていたのか、お薬を使っている

のかは分かりませんが……ヘタをしますと、たくさんたくさん、
こどものころからずーっと洗脳しつつ閉じ込めていたーと、そう
いう考えまで浮かびます。 やですねー」

「……ひどい話ですね、ジャーヴィス先生」

「そうですー、けど、私の国でもしよっちゅう起きているようなものです
からー」

「……………」
ほんとう、なんだろうな。

ほんとうにこの人たちは……俺のことを、母さんも含めて知らなく
て。

たぶん、……俺の記録とかも、なくて。

それで、「どこかから連れ去られてきた」と、本気で考えていて。

それは、分かってしまう。

分かってしまうんだ。

……だけど、それでも俺は、か細い希望に縋って言うしかない。

分かっているのに、でも、嘘だと言ってほしくて口から出て来て
しまう。

……………そんなの、物語のキャラクターの情けな
いセリフだって思っていたのに。

「……あの。 みなさん？ これ、ドッキリですよ？ 文化祭とか
で使ったりするための……で、その、俺のリアクション、どっかから
撮っているだけ、ですよ？ ほら、よくテレビでやってるみたいな
？ あ、はは……………」

と。

現実じゃないはずのことを、現実だと思いたくて。

現実を、現実じゃないって思いたくって。
そう、思いたかったから。

4話 居心地の悪い空間と居心地の悪い空間

「ドツキリ……？」

「直人さん……」

「あうう……かわいいそう……」

「……………」

「……そうか、そこまで……」

……………。

……誰もが俺に、可哀想な人を見る目を投げかけてくる。

だから俺はまた、情けない声で情けないセリフを吐く。

「……ごめん母さん、何か俺、しちやつてたりするかな？ そりやあ成績だつて……この前のは少し悪かったし、最近家事の手伝いも言われなきやしなかったし、買い物だつて渋ることも多かった。母さんが怒る、夜更かしも多かった。だけどさ。だけど、

……………もう、やめてくれよ。もう、苦しいんだよ、俺のこと、息子じゃないとか母親に真顔で言われるのつて。そうやって、そんな目で見ながら言うつてくるつていうのは。後で情けないつて笑いものになつてもいいから、もうネタばらししてくれないか。……その。その態度が、他人みたいなそれが、俺にはとつてもキツイんだよ。いつもの母さんに戻つてくれよ。頼むよ。……俺が、知らない内になにかしていたんだつたら、本気で謝るからさ」

ああ、人間つて動揺すると小説とかアニメみたいなことを口走るんだな。

「……………」

「……………」

「……………」

……………そう、ではな

い、んだ」

だけど。

やっぱり。

……帰って来たのは、4人分の絶句とも言える表情と、無音で。

……さすがに人前では泣きたくない。

けど、どうしても体が震えて、そうなってしまいたいそう。

母さん以外の人たち……女子たちと女性がいなければ、間違いなく泣いているだろう。

なんとかそれを、少しのところまで踏ん張って、俺は、
……。

「……せ、先生たちっ、早咲ちゃんっ！ あ、今日はもう遅いつていうか明日の方が近いっていうか……じゃなくて、あ、違って、とにかくそうでしたっ。あと……直人、くん、にとつて、この状況はぜんぜん知らないところに投げ出された感じなんですよ？ こわいんでしょう？ 頭ぐちやぐちやなんですよ!!？ ですから、だからあ……うう、ぐす」

「……………、そうですね、ひなた」

ぎゅ、と腰に温かい感触があつたから見下ろしてみたら、ひなたさんの長い髪の毛が広がる頭が、俺の横にしがみついている……その両肩には早咲さんの手が、優しく乗っていた。

恐る恐るで早咲さんを見ると、優しい目をしていて……こくり、とうなずいてくる。

と、ぱつと起き上がって……泣き顔をぐしぐしと擦りながらひなたさんが言う。

「と、とりあえずですっ！ ですっ！ 今日はまだ寝てもらって、明日につ、じゃなくて朝につ……ごはんいっぱい食べて、静かなとこで過ごしてもらって、それから続きじゃダメなんですか？ 人って、いっぱいいっぱいになっちゃうと……えっと、大変なんですよんっ!!？ ほらっ、今の私みたいにつ」

「……そうですねー、ひなたさん。 私たち、びっくりし過ぎて直人さんのこと、考えるの忘れてしまっていましたねー、これは直人さんのためなのですよ。 ありがとうございますっ、ひなたさんっ」

「い、いえっ。 ……せ、洗脳、とかだったりしても、先生ならもつと

詳しく知っているんでしようけど、あの、暗示とか、下手にするとともにと深くなる？とか聞いたことがありますしっ」

「……………たしかに須川の言うとおりだ。ごめんな、少年……………じゃないんだったな、直人くん。……………いや、今は直人と呼んだ方が良いのかな」

「……………はい。……………お願い、お願いします」

母さんから、ようやくいつもの呼び方で呼ばただけで……………たとえば、俺のことを完全に忘れていたとしても、忘れたフリをしていたとしても……………でも、やっぱりそれだけでほっとしている俺がいる。

体の震えも、それだけでぴたっと止まった感覚もある。

……………。

だって。

だって、俺の、母さん……………だからな。

とても口にはできないけど……………でも、なにかあったときに頼れるのは、母さんだ。

俺には父さん、もう、いないしな。

たったひとりの肉親だから。

だからこそ。

「ほう……………、なら、そうしよう。建前上も私の血縁ということにした方が、君、いや、直人くんにとっていいだろうな。ともかく、このちっこい」

「先生？ ひなたちゃん、気にしているんですよ？」

「……………ほん、心配りのできる須川の言うとおりだ。今夜はもう寝てもらい、また明日……………充分に英気を養ったところで、精神的にも落ち着いたところで改めて話そうと思うんだけど、どうかな？」

「母さ、……………はい、お願いします」

ドツキリ……………で、あつてほしいけどな。

今でなくたっていい。

明日の朝、その宿直室とかで寝ているところをいきなり起こされ、カメラが回っている状態でドツキリでした、って言ってくれたら。

そう、……どんなにいいか。

なあ、母さん。

「よし、それでは空いている男性用の部屋と警護を至急用意して
……………」

「おーらいつ、任せてくださいみなごさんっ！ ……あ、もしもしー？
私ですー」

……………。

ん？

また俺の頭がおかしくなったのか？

警護？

○

「……そーりー、あ、ごめんなさいねー、こんな時間にコールをかけて
しまいました。 でもー、絶対に情報を漏らさなくて、それでもって
万が一にも男性を襲わない、そのくらいなら……という方たちは、あ
なた方くらいですからー。 一般の方たちはムリですものねー？」

「いえ、問題ありませんジャーヴィス博士。 我々は24時間待機し
ております。 それに、研究所からの移動だけでしたので待機の隊員
たちを叩き起こす程度で済みましたゆえ」

「部下さんたちはお大事にねー？」

「無論であります。 ……それでは、これからそちらの彼を警護致せ
ばよろしいので？」

「はいー、よろしくお願いしまーす。 ……セキュリティは最高がい
いですよー？」

「承知致しました、博士」

……………そんな会話が響いているここは、俺の知っている
校舎じゃない。

校門から一直線な校舎の入り口から続いて、渡り廊下で繋がってい
るふたつめの校舎とその横のグラウンド、その先の部室棟まではおん
なじなんだろう。

けど……つい数日前には学校を囲むようにして俺の背丈ほどのフェンスがあつて、園芸部とかの植物があつた空き地になつていて、スペースがあつたつていうのに、それがなくなつていて。

そして、さらにはその先の住宅地つてのもなくなつていて……バカでかくていかめしい、フェンスのがつちりしたのが2階……いや、3階くらいまでかな……つていうものがあつて、周りの家がぜんぶなくなつていて。

……校舎の灯りだけだから確實じゃないけど、でも、多分合つているはずだ。

で、そんな場所にそびえるのは明らかに学校に合わない感じのコンクリートな建物だ。

しかも校舎からそこまで廊下作られていて、俺はそこを歩かされていて……その先にフル装備みたいな感じの、映画とかで出てくるような武装をした人たちがいたんだ。

端的に言うとな戦場の兵士つて感じの。

………そして、ぱつと見て分かるとおり、みんながつちりした体とアーマーこそつけているものの、声も、体つきも………女性だ。

………あんなにでかい銃持っているの、こわいんだけど。

というか、あんなにごつくて長いのは銃つて枠組みなのか？

「では、今の通りに。各班状況開始だ。警戒レベルは「4」……今のところな。レベル5は許可が下りなかったらしいが……いずれ下りる。そしてこれが当面は続くだろう。また、不測の事態に備え、α隊とβ隊は敷地周辺、他は学園内に潜伏し、速やかに警戒態勢を整えよ。なお、今作戦はできるだけ発覚が遅れるよう隠蔽を最優先とする。緊急時には自己の判断で交戦も……」

隊長さん………と思しき人は、女の人なのに野太い声で、これもまた映画みたいな台詞を口にして……たぶん外を走っているんだろう、他の兵士の人たちにも小さなマイクみたいなもので命令し………何人かだけをここに残して、ジャーヴィス先生たちや俺に敬礼みたいなものをして、走つて行つた。

「どうですかー？ これで少しは安心できましたかー？ この学園の誇る精鋭のみなさんですよー？」

「……………え、ええ……………」

むしろ怯えさせられただけな気がするけど、言わないでおこう。

「それはよかったですねー。…………で、直人さん。これで、よつぽとのことがあっても、あなたを安全な場所に逃すくらいの時間は稼げるはずですよー。安心して寝てくださいねー。睡眠こそが全てですよー」

「そういうことだ、直人。少なくとも数日は何も、起きることすらないはずだ。安心して眠ってくれ」

「母さ、…………えっと、榎本先生？」

「ああ、君の気持ちが悪くなるのなら、母さんで構わないよ。話し方も自由でいい。私も、できることなら君のような息子が欲しかったところだからね…………と。君は起き抜けだろうから実感が湧かないだろうけど、もう夜更けだ。これから…………浴びたければシャワーや風呂で疲れを取り、用意してある軽食でも口にしてぐつすりと寝るといい。何、部屋に入れば分かるだろう」

俺から1メートルくらいは絶対に離れるっていう、ここに来てからの他の人たち…………ああいや、須川ひなたさんと野乃早咲さんは別か？…………と同様に、母さんとジャーヴィス先生は俺から距離を取ったままここへと案内してきて、さっきの会話をして…………いかめしい建物の中をずっと歩き続け、エレベーターで上がった先にあるドアを指す。

「私たちが君を…………いや、直人、を起こすことはない。ローズ…………ジャーヴィスが言うように睡眠は何よりも大事だからな…………存分に寝坊してくれ。何しろ、今日は大変だっただろうからな。そうして明日…………ああ、時間は指定しないよ、なんなら昼過ぎでもいい、起きてひと息ついて、外へ出られそうなら。

…………あるいはなにかを思いだしてしまったら、部屋の中にあるモニターを操作して知らせてくれ。それか、ここここにあるだろう赤いボタンを押すのもいい。私たちが入ることはないから説明はできないが…………見たら分かると思う。スマホや

タッチパネルの操作、というものはできるかな？」

「え、ええ」

「それはよかった。ではな、直人。 ゆっくり休んでくれ。 …… お休み」

「直人さん、おやすみなさいですよー」

促されるままに開けられていたドアからその部屋に入ると、後ろから声をかけられ、振り向いたときには扉が……これもまた、映画みたいに左右からのスライドなやつだ……閉まり、カチャンカチャンカチャンと鍵がいくつか掛かる音がした。

途端にしんといい静けさで耳が痛くなる。

……………。

閉じ込められた、……とは、考えたくないな。
だけど、なあ……。

室内を見渡すと、そこもやっぱり画面越しに見たことがあるような、スイートルームって感じのバカでかい空間。

高級マンション……あるいはホテルの、そういうものみたいな感じ。

さっきの物々しきから一転、素人目からしてもひとつひとつが高そうな設備が揃っている。

絨毯だつてふかふか……あれ、これって靴は……脱ぐべきなんだろうか？ ……だし、天井は高くて羽がくるくると回っているし、小さいけどクラシックがかかっているし、大理石か何かできていそうなテーブルの上にはバイキングみたいにくさんの食事と……酒まである。

いや、軽食だつて言っていた気がするんだけど？

と言うか、俺、未成年だから酒なんて置いたらダメじゃ？

もちろん呑みやしないけどさ。

……………。

……結局靴を脱いで、柔らかすぎて歩きにくいぐらいの絨毯を歩き回り、ここがリビングと寝室と風呂トイレ完備な、ひと晩何万とか行きそうな部屋って分かった。

いや、それ以上しそうな感じがするけど、金銭感覚が庶民だから分らない。

でも、ここにいるっていうだけで緊張しそうな……ソファひとつとっても新品で、腰掛けたら悪い気がしそうな家具とかを見たら、とても母さんとの旅行で行くようなランクのところじゃないっていうのだけは理解できるんだ。

○

俺は浴槽までバカでかい風呂を後にして、慣れない新品のパジャマを着たまま寝室へとさくさく歩いて行き……ベッドへ倒れ込もうとして、これもまた柔らかすぎるんじゃないかと手で押してみると、予想どおりだったことに、軽くため息が漏れる。

俺の部屋のベッドみたいな調子だったら気楽だったのにな。

「……………はあ——

……………」

何をするにもため息が出る。

……………早く、寝よう。

寝てしまおう。

俺はベッドの布団を……なんでホテルのと違って、足の辺りに邪魔なもんが横に敷いてあるんだろうな、どうせすぐに落ちるのに……はぎ取って、持ってきた制服を近くのハンガー掛けて言うのか？

……に掛けると、ふかふかすぎるベッドへと体を滑り込ませる。

と、灯りはどうしたら？

……ああ、枕元に謎の機械が。

感覚で操作して、灯りを足元だけ……これだけは消し方が分からなかったんだ……にして、ついでに音楽も止め。

ようやく暗くて静かで、俺が寝る前だった環境になる。

……………
ああ、静かだ。

……静か、だけど。

さっきの母さんの態度も、他の人の反応も話されたこととかも、聞かれたこととかも。

俺には、なんにも分からなかった。

理解できなかった。

……いや、うつすらとは理解しているけど、でも。

ああ、そういうえば地面に寝ていたから背中が痛むのか、とか思いつつ寝返りを打つこと数回、少しずつ眠気が頭を支配してきた。

さつき、起きたばつかなのにな。

……。

……俺の知っている、俺が通っている学校……いや、学園とか言っていたっけか……の生徒らしいふたり。

俺を助けてくれたひなたさんと早咲さんっていうふたりも、見たこととすらない。

「ジャーヴィス先生も廊下ですれ違った程度。

直接に知っているのは、母さんだけだ。

だけど、その母さんも。

……これが夢、

だったらなあ。

これが、みんな、タチの悪い夢だったら嬉しかった。

けど。

夢にしては……この、ベッドの感覚も、知らない部屋の匂いっついうものも、なにかもがリアルすぎるし、なあ……。

そう、考えているうちに俺の意識は沈んで行った。

もういちど起きたら、いつものように母さんに叩き起こされますように。

そう祈るようにしながら。

5話 男の少ない／ほとんどのいない世界というもの

さつきから俺の目に映っているのは、ばかに高い天井。

俺がこのベッドに立っても届かないだろうその天井からつるされている、これまたバカでかいカーテンのすき間からは……朝の光が漏れている。

周りの壁を見ると、至る所にパネルだったり絵だったり模様みたにくつついている。

これが高級仕様というものなんだろうか。

そんなことを思いつつ頭を後ろの方へ……枕に沈ませながら見てみると、母さんに無理やり連れて行かれる家族旅行とやらで泊まるようなホテルにある、時計とかラジオとか……小さいモニターまでがあつて、昨日いじくつたボタンとかがいくつもついている機械のようなものがある。

もつとも、俺がいつも見ていたようなものよりずっと大きいし、明らかに高級品だけだ。

……こんなことを観察するくらいには、目が覚めてから時間が経っている。

ただ俺は、目が覚めてからずっと、それを認めたくなかっただけ。

でも、観察するものがなくなった以上には認めないといけないようだ。

こうして、きちんと朝に起きた感覚があつて、意識がはつきりとしている以上には受け入れざるを得ない。

なにしろ2度目の寝起きだからな。

……俺が横になった場所は、環境は、夢だと思っていた世界で寝たときと少しも変わっていなかった。

俺は、十数年慣れ親しんだ……くたびれて微妙に曲がっているマットレスなベッドがあつて、どこもかしこもが俺の物だけで占められている狭い俺の部屋じゃなく。

豪華……すぎて、柔らかすぎてよく眠れなかったバカでかいベッドと、バカでかい部屋で寝ていたんだってな。

「……………」
……………」

はあ

これからどうしたら、という気持ちで思わずため息が出た。

ため息なんて、少ない小遣いと悪い点数と……母さんの説教のときくらいしかしないのにな。

○

「ぐっもーにん直人さん直人サン！ ずいぶんと早起きでしたねー、あ、眠ってからの時間的に？ ですけどもー。 まー、いきなりだったのしょうがないですかねー？ 無意識ではまだまだ緊張しているでしょうけど、それはそれとして直人さん、あれからまだまだ……えーと、数時間しか経っていませんが、記憶の方はどうですかー？ まだあのときの、真夜中に会ったときと変わらないですかー？ イセカイ出身ですかー？」

寝る前にもちらつと見えた、テーブルに作り置きしてあったやけに豪華……過ぎて、朝にはちよつと重すぎる感じのものを適当に食べ、壁に備え付けのモニターから連絡したところ、じゃあ開けますね……と、心の準備もなしにドアを開けてきたのは昨日の武装した女の人次だだった。

心底縮こまる勢いだった。

あの、俺、パジャマだったりしたらどうしたんだって。

あ、いや、そうじゃなく……一晩中警備ってのをしてたんだって、分かって。

俺だけのためにつて。

……………俺が、なにをし

たってたんだ。

俺はただ、俺の部屋の本やマンガで狭くなったベッドで寝ただけだったはずなのに。

……すぐに呼ばれるかもって着替えたり顔を洗ったりしていたおかげでなんとか平常心のままに、適当な相づちを打ちながらその人たちに案内されることができたけど……着いたのは、校長室かって思えるような、これまた豪華な部屋だった。

なんか鹿の剥製とか壁にあるし。

んで、そこにはすでに……寝る前に会った人たちが揃っていた。

時計を見ると、まだ10時。

学校はとつくに2時間目に入っている時間だな。

あれが深夜だったとすると……少し寝不足ってところなんだろう。だけど俺には、そんなことを感じている余裕がない。

だって、俺は今みたいに注目されている状態は苦手だから。

だから、なんとか用意して置いた言葉を絞り出す。

こういうのは得意な方なんだ、だからここも、何とかやり過ごそう。

「え、ええと……おはようございます、みなさん。まず、昨日はあり

がとうございました……、で、あの、俺、やっぱりどうしても……

俺は昨日、あそこで起こされるまでは昨日話したとおりの世界つての
で、俺にとつてのふつうの世界で、その母さ……榎本先生」

……と思っただけど、すぐに頭がぐちゃぐちゃになって訳がわからな
い話に。

「先生、ではなく母さんでいいよ、直人く……直人。それに、「偶然」

とはいえ君の名字も私のものと同じなんだろう？ わざわざ自分の

名字を他人に言うのも落ち着かないだろうし、かといって下の名前で

呼ばれても……その、いきなりだしな、私が困る。君のメンタルの

ためでもあるし、ひとまず、落ち着くまでは「母さん」でいいさ。

そう呼ばれて嫌な気持ちはいらないからな」

「んー、でもみなこー？ みなこ、高校生のお子さんがいるにはちよっ

とばかり産むの早すぎませんかー?? その設定ですとみなこがまだ

……えと、小学生のときに」

「別にいいじゃないか、ローズ。あくまで設定だ、それに彼のことは

親戚の子とでもする予定だしな。母さん呼びは……おばさん呼び

が癪に障るからという理屈でどうだ？ ああ、引き取った先の義母と

という意味での母さんもいいかもな？」

「ん——……そーいうものですかねー？」

と、美奈子さん……母さんとよく似た人とジャーヴィス先生が話しているのを聞いているうちにひとつ、気づいたことがある。

母さんが、この人が………とんでもなく若いって。

いや、若いなんてもんじゃない。

夜にはまだ動揺していたし、なによりも暗かったからよく分からなかったけど……この母さん、いや、美奈子さん、下手したら20代なんじゃないかって見た目なんだ。

若作りとかじゃなく……そうだ、昔のアルバムにいた母さんみたいな感じなんだ。

うん、少なくともおばさんよりはお姉さん寄りの歳って感じ。

だから母さんとは思っていたくても、やっぱり別人なんだって俺の意識が認識している。

……ってことは、つまり、ここが俺のいた世界じゃないっていうのは。

………。

「んんっ、話を戻そう。　ということとはだな、直人。　君は厄介な状態に置かれているということになるんだよ。　なにせ君の記憶は、少なくともひと晩寝た程度ではまったく動揺しないくらいには徹底的に変えられている……暗示されていると想定できる。　あえて君を、この学園という場所に置き去りにしたくらいだ、よほどの理由があつてのことで、よほどの方法で……数ヶ月程度では解除できないようになってるだろう。　その自信がなければ、連れ去って記憶を改竄した男子を解放なんてしないはずなものな。　それに」

「すどーつぶですよ、みなごー。　いっぺんに話しても理解が追いつきませんよー？　それに、直人さんはまだ、私たちの知っている現実というものを受け入れられていませんのでー」

「済まない、直人。　つい、熱が入ってしまったて」

「………いえ、平気です」

俺は、連れ去られて記憶を改竄された……ということ、このふたりは話を進めている。

ジャーヴィス先生は俺を擁護してくれているように見えるけど、あくまでそれは先生たちが言っている……言っていたような「世界という設定」を、俺がまだ信じていないっていうニュアンスなんだ。

だけど、昨日の話からするに、俺以外の全員がおんなじことを考えていて……俺ひとり、別の記憶、別の世界の記憶を持っていて。

だから、俺の方がここでは………異質。

「んー？ すまーいるですよ、直人さーん？」

「………、はい」

にー、っとジャーヴィス先生が指で自分の口元を上げるのに釣られ、少しだけ……演技だけど笑ってみせる。

「……ん、いいですねーっ、まだ硬いですけどそれでもぐっどですー」

あ、それで、直人さんはこれからどうしたいですかー？」

「これから、ですか？」

「ですー、これからですー」

………

………そうか。

この人が、美奈子さんが、俺の母さんによく似た人が母さんじゃないんだっいたら、下手をすると……俺が住んでいた家すらも、家ならまだしも部屋もないってことになっている。

ということは、俺は着の身着のまま何も持たず、誰も知らないままにここへ連れて来られたのも同然っていうわけで。

「そうですねー、私たちとしてはー、学園の先生している私たちとしてはですねー？ 直人さんをいちばんに安全で自由にできるといいう環境な、ちよーつと特殊なこの学園の敷地内で暮らしていただいてー」

あなたの記憶が戻るか、あるいは戻らなくてもここでの生活に慣れて……暮らせるようさぼーとしてあげたいと考えているんですねー？」

さつきから黙ったままだけど、優しく接してくれるとは言っても若返ったようで、……まるで俺の、年の離れた姉さんとも思える母さ

ん。

でも、俺の知っている母さんと性格は似ているようで、話し方がところどころ厳しいのは一緒だ。

真剣になるとこうして眉間にしわが寄ったままになるのも同じ。

それに対してジャーヴィス先生は……前に会ったことが、残念なことにクラスがちがったばかりにないから分からないけど、この人はのんびりした話し方……聞いているだけで落ちついて、だから人気があるんだらうなって思える。

……………。

母さん……みたいな人、については、俺が知っている母さんの印象が強すぎるっていうのがあるんだらうけど。

「ただですねー、直人さん」

「はい」

「直人さんにとって、私たちの言うことが信用できるかどうか分かりませんですね？」

「……………え？ いや、別に、

あの」

「だってー、直人さんにとって私たちはアカノタニンというもので、しかも私たちは直人さんのこと、記憶を書き替えられた、何かの事件の被害者さんと思っっているのですから……ですよねー？」

「……………」

「ずい、と顔を近づけてきたジャーヴィス先生に、思わずどきつとずる。

……金髪碧眼……って言うんだっけ、な美人さん、それも胸元が開いた服装の人がいきなり近寄ってきたって言うのと、俺が考えていたことが筒抜けだったみたいなのがして。

「正解でしょーか？ ……なのですねー、なら、聞いてくれたらいくらでもいつまでもご質問にお付き合いますよー？ この世界……直人さんにとっては、最近生徒さんたちがよく勧めてくれますイセカイもの？というものでしょうからねー。なので、どんな情報でも。

あ、教科書とかならもちろんいっぱい揃っていますし、テレビもウエ

ブも好きに使ってもらっていいのですけども——……それは、直人さんに決めてもらわなきゃなんですねー、結局のところー。人って、自分で調べて自分で経験して、自分で納得したものしか判りませんものー」

「……ローズばかりまくし立てても直人が困るだろう。私からもいいか？」

「はい、どうぞー。……あれ？ 私、まくし立ててました？ はえ？」

と、ジャーヴィス先生の独特の口調でぼーつとしていたら、母さんがこの部屋……昨日この人たちに囲まれながら話をした部屋だ……の真ん中のテーブルには、いつの間にかなにやらのパンフレットが揃えられていた。

それも、俺の知っている名前的高校……なはずなのに、「学園」とだけ変わっていて……そして、写真に写っている校舎の様子とか、なによりも。

「表紙から見ても分かると思うが、この学園は少しばかり特殊なんだ、直人。君は、同じ名前的高校……同じ場所で、校舎も見慣れたもので、そして、……偏差値も少し高め程度のもだったんだろう？」

「え、ええ……まあ……」
程度つて。

……ま、家に近いからっていう理由で選んだんだしな。

去年にそう言ったら、母さんは……とりあえずでゲンコツを落とすてきて。

『だがまあ……悪くはないところだし、しっかりと勉強すればお前なら入ることができるだろう。私が教師をやっている学校に息子が入ってくるというのは、少しばかり、同僚からいじられそうで嫌だな』

……とかなんとか言っていたっけ。

俺の知っている、受験に入る前のころの母さんは。

「だが、ここはちがうんだ。君の知っている学園ではない。……恐らく立地も異なっているはずだしな。……というのはだな、ここは各

国のエリートや上流階級……無論うちの国の生徒の割合が多いんだがな……が集まっている。だから、世界の」

「トツプテンのひとつにランクインしていますねー。私も働きがいがありますー。やー、がんばって新しい言語をちよいちよつと勉強して来た甲斐があつたというものですねー」

は？

進学校じゃないから雰囲気か緩いって評判だった、この学校が？

偏差値……家から無理なく通える範囲ではいちばんだったけど、そこそこ止まりな高さだったはずの、この高校が？

嘘だろ？

トツプテン？

……ああいや。

学園、なんだっけ。

それも、兵士さんとかがうろろしているくらいには重要な。

つまりは、ここと俺の知っている学校とは別物ってわけ。

「だからだな、世界中のお偉いさんの子女が集まっているというわけだ。理由については、理解が追いついてから改めてにしようと思っているが……だが、先に言っておく。ここは、一種の治外法権が適用されている、半独立国……のようなものなんだ。だからこそ、セキリティに察知されずに君が運ばれてきたルートを探すので、裏では大わらわなんだがね」

「みたいですねー、私の下の人たちも、直人さんの警護の人がうらやましいってずーっとインカムでぶつぶつ言ってるくらいには大変みたいですー。あー、ずーつとお耳がきんきんしてますよー、みなこー、後でお耳をふーって」

「と、いうことで、だ」

「What!?! ……ひどいですよ、みなこー」

「……仮定としてだけでも、なんならそういう設定だとも思ってもらってひとまずで理解してもらいたいところなんだがな？ 直人。

この学園の敷地内は、この国の法律ではなく、この学園の法律と……私たち教師陣の判断でどうにでもなるんだ」

「……まるで、よくあるマンガに出てくるみたいなものですね」

「うん、そう考えてもらって構わないよ。今はそう思っておいてほしいだけなんだ」

「なんならハリウッドのB級ものでもいいですよ？ 今度おすすめ貸しましょうか？ あ、後でお部屋のおすすめ配信こんてんつに載せて」

「……ローズ。それは後にしてくれないか？」

「ぶーぶー。みなこずるいですー。 けちんぼー」

「こほん……すまない。そういうことでだ、直人。君がここにいと、残ると決めるのであれば、私たちが全力で君の男性としての人権を守る。 なにがあつてもな。 だから、直に嗅ぎつけてくるだろうマスクコミや各国の権力者からも……しばらくは守ってあげられるだろう。 ……もつとも、これは君が私たちの言うことを信用してくれて、安全だと思ってくれて。 仮にでも……そうしてくれて、ここに留まってくれるのであれば、だがな」

「そうですね、直人さんにとってはここではなくここから数キロ先の故郷の方が馴染みがありますからねー。 あちらの政府の方に保護していただいた方が安心はできるかもですねー。 ……私としては、私の祖国と同じくらいに信用できませんけど、東側よりはずっとずつとずーつとマシですよー？」

「……………」

昨日、夜、目が覚めてから。

初めに幼い声、次に頭の強烈な痛み、そんなもって校舎の先にあつたいかめしい建物と、その中の広さと。

まるで俺の方が間違っているかのような説明を次々と浴びせられ、ようやくのことで寝心地の悪いベッドで寝たかと思つたら、もう1回……今度は、よりドツキリというよりも電波な説明を浴びせられて。

……………だけど。

目の前には、確かに。

母さん……のはずだけど、でも、10歳以上は若返っている女性が、
いて。

そして、なによりも。

昨日から、ずっと感じていたけど。

………誰も彼もが、俺から、必要がない限りには、俺から距離を取る。

それが、あたかも当然のように。

俺と、絶対に触れない距離に……母さん、美奈子さんとひなたさんのあのとときのそれ以外は、それはもう絶妙に、間違っつて触ったりしないようにって離れているようで。

………まだ俺が知らない「何か」が原因で、そうなっているかのよう
に……。

6話 なけなしの覚悟

「……………俺。あれから、考えた、んですけど」
放っておくと、……、母さん、がまだまだいろんな説明をしてきそ
うだったから、いちど俺の方からも話をしてみる。

ああ、そうだ。

話し始めると……特に教えるとき、叱るときにはいつまで経っても
終わらないっていうのが母さんなんだからな。

しかも、聞くところによる友だちの母さんたちとは違って、理詰め
でこんこんとって感じなのがまた困るし……口を挟むとどんどん延
びるっていうタチの悪いものなんだ。

だからついつい、で聞いちやつていたけど……って思っ、口を開
いてみた。

だけど、俺が声を出すと、……少し警戒……いや、怯えて？ いや、
そんなはずはないだろうな……よく分からない表情をして、ふたりが
口を閉ざして俺を見てくる。

……………

ものすごく注目されている。

いちいちこういう態度取られるとなんだか腫れもの扱いみたいで
嫌なんだけどなあ……。

だけど、でも。

聞いた話がほんとうのことだったなら、ムリもないのかもしれない。
い。

「……………ええと。……母さん、とジャーヴィス先生は、俺が記憶をどう
とか、事件がどうか言っていて……いますけど。俺にとつては
やっぱり、俺自身の記憶、俺が昨日まで持っていたそれっていうのは
正しいもの……で、俺の知っている……世界。そう、それが俺の世
界で」

もちろんあれからまったく考えていない。
考えるヒマなんて、なかったんだから。

部屋に入るまでは知らないことばかりを聞かされて調べられ、あれよあれよと押し込められ、それからちよつとだけ食べて寝て、起きて軽く食べて相談するためにモニターを操作したら開けられたんだもんなあ。

そうしてそのままここに連れて来られたんだ、そんな余裕なんて欠片もない。

.....

あれ。

そういやあの扉、ドアノブも鍵もなかった気が。

あの扉つてもしかして内側からじゃ、なんもできない……？

つまり、監禁……じゃなくて、軟禁ってことか？

.....

……いや、なんにもされなかつたんだ、とりあえずではあるけど信用しないよ。

少し考え込んだ感じにうつむいてみていたけど、ふたりは沈黙のままだ。

なら、まだ頭の中がぐちゃぐちゃしているけど、でも、なにかを言わないと、またあの部屋に閉じ込められるだけだ。

「……正直、俺の知っている母さん……よりは、けっこうに若くなつてますけど、でも中身はおんなじ母さん。あなたしか知っている人も、信頼できる人もいません。あ、もちろん親身になつてくれて……くださっているジャーヴィス先生も、疑っているわけじゃないですけど。……で、えつと、……かといって、部屋にあつた家具とか電化製品とか見ても、見た目はそつくりでも俺の知らないメーカーのロゴとか、椅子とかの形が俺の知らない感じになつていたりして。えつと、機能は一昔前みたいな印象でしたけど……って、すみません。とつ、とにかく……ここが、俺の知らない世界だと、信じるしかありません。記憶が変わっているんじゃない、世界が変わつたんだって。俺が、こつちへ来たんだって」

そうだ。

よく似てはいるんだけど、でも、ちがうんだ。

液晶とかの操作だって、なんだかもつきりしていたし、テレビも……えっと、アナログだっけ？な感じになっていたし。

画素数みたいなものが少ない印象だったしな。

詳しくないし、ちよつと見ただけだからあくまで印象だけど。

それに、家具……インテリアって言うんだっけ？……のデザインなんかは、おしやかな感じに揃えたならこうなるのかもしれないってものだったけど、でも、学校に置いてあるっていうのが不自然なものばかりだったしな。

「……だから俺、おふたりを含めて、みなさんのこと、信じてみます。

もちろん、母さん……にそっくりなあなたがいるからっていうのがいちばん大きいんですけど。でも、みなさんを疑っているままじやなんにもできませんから。なにより、昨日聞いたことが本当なら、俺、寝ているあいだに……その。襲われても、おかしくなかったんです……よね？俺、その話が本当なら……俺の世界での女みたいなんですよね？……だからこそその、あの警備だったんで」

物騒な武装の人たちがいっばいいたしな。

この人たちが俺をどうにかしようとしていたら、もう、とつくにしているはずだ。

なにせ、中からは何もできなくて外からだけ開くんだから。

……こうして安心させておいて……だとか、絆してとか。

そんなことまで考えるのは、ただの高校生な俺にはとうてい無理だ。

だから、母さんを見て……母さんに似ている人を見て、信じてみるしかないんだ。

ここまで話してもまだ俺から距離を取ろうと、いつの間にか座っていたソファにめりこむようにして座っているふたりを見て少しだけ笑いもこみ上げてきたけど、その勢いで気が楽になったから一気に言ってみる。

ああ。

この世界じゃ、男と女の関係はそうなんだな……って。

稀少な男と、大多数の女。

その関係性を考えたら、男な俺は高級なガラス細工みたいなもの。「ですから、とりあえずで申し訳ないですけど。あの、俺、ここでもなさんのお世話になりたい……です。対価とか、そういうものは無理ですけど……でも。もしほんとうに、この世界が……俺みたいな男、っていうのが貴重なものだったら。きっと、外に出たって……まともな生活、できないと思いますし」

1対1000。

ああいや、1500だったか。

まあ、そこまで来たらもうどっちでも変わらないだろうな。

男ひとりに対して女1500人。

バカみたいなシナリオの……えっと、マンガとかで、その逆のシチュエーションを想像したら、俺にだって分かる。

………まちがいなく、「種馬」だ。

人間としての尊厳なんかない……ただただ飼われるだけの、ヒト以下のモノ。

悲しいことに、いいなと思っていたそういうものが、いざ俺の身に降りかかってみた途端どうしようもない恐ろしさって言うものがこみあげてくる。

俺なんて、しょせんその程度の学生なんだからな。

人並み以上でも以下でもない、いや、対人関係は少し以下かもしれないけど……でも、人並みの範疇ではあるだろう、ただの高校生なんだ。

だからこそ、せめて……顔見知りくらいには感じる母さん似のこの人と、この人と仲がよさそうで物騒な人たちを指揮していたジャーヴィス先生に、頼るしかない。

じゃないと、きつと、そのうち……だから、な。

○

「……承知したよ。

直人く……直人。

君が現実を受け入れなかつ

たり、この話を聞いて取り乱したり、そうしてあの部屋に引きこもってしまったり……そういう男子じゃなくて、冷静に、知的に……理性的に考えられる子でよかったです、心から思う。私、……ここの私には息子などいないし、そういう縁もなかったんだが……世話をしたりしたいと思う程度には、私の好みの考えを持った男子だ。ああ、もちろんここの、こちらの基準で、な。……………

ああ。もし君の言う世界に私が行ったのなら、君みたいな男子学生たちにも指導をしてやりたかったと思うくらいには」

なんども確認されて、俺が取り乱したりなんかしない……いやだつて、少なくとも今のこの状態で俺の身を考えたなら、この人たちのお世話になるっていうのが最も安全なんだし、むしろダメだつて言われたら何をしてでもお世話にならないといけなさそうだから、大丈夫ですを繰り返すこと数分。

ひとしきりの毎回長い母さん……似の人と、それに相づちを打つ感じのジャーヴィス先生の会話があつて。

「……なら、どうしようかローズ」

「そうですねえー、とりあえずー」

そんなわけで、母さんによく似た人は、これもまた母さんに似て……真剣に相談をしたときみたいに俺の意志をひとつひとつかみしめるように確認していつて、それでようやく納得してくれたみたいで、隣で静かにしていたジャーヴィス先生に話しかける。

ちよつと考えたジャーヴィス先生は……ぱあつ、と。

ああ、こりや金髪美人とかいう見た目じゃなくても男女関係なく人気出るよな、つて感じの……人なつっこいような笑顔を俺に向けてきて。

「……おーらいですつ！ それじゃあ早速ですねー、この学園の裏の権力をいただいている私がー」

……………ん？

裏？

権力？

「できる範囲の……あ、ほとんどぜんぶですねー、つまりは総動員とい

「……………、え？」

数人ならともかく、10を超える……100人以上の女の人手？
そんなわけ、……………。

……………1対、1500。

それに比べたら、まだ温情な方だと思えてしまう数字だ。

そう、数字。

「いずれ……たとえローズの工作がすべて成功しても、必ずにあらゆるところからの女性たち……年齢、出身を問わずにアプローチがひつきりなしに来るはずだ。それも、彼女たちの人生をかけた、熱いものが、な」

「……は、はあ……」

「だからな、直人。私は」

「……………おはなしに夢中なところごめんさい。失礼しますね？ 先生たち、直人さん。……それでですね？

榎本先生。 そんなに一気に知らなかったことを教えられても、教えられる側の生徒としては困ってしまいますよ？」

「む、……野乃か」

「はい、みなさんおはなしに夢中だったようでしたので、ノックはしたのですがお返事がなく……ロー、ジャーヴィス先生が鍵を開けてくれましたので、勝手に入ってきてしまいました。 申し訳ありません」

その声をした方へ顔を上げると……入り口の扉が開いていて、気がつかない内にかいていた汗がひんやりとするくらいに涼しい風が入ってきていた。

そして、昨日会った……野乃……えっと、早咲、さん、だったか？ 普段は覚えの悪い頭を何とか使って……数時間前にあったばかりの女子の名前を思いだす。

あいかかわらずに男か女か分からない格好をして、優男でもツカ系？とも見えるし声だつてどっちとも聞こえる彼女が歩いてくる。

ああ、あと、その下の方にはちっこいのも。

ひなた……須川さん、だったか。

「彼が私たちを信じてくれる……ことになったんですね？　なら、私たちだけでも彼の言うことを信じて。そして、彼のペースに合わせないといけけないのではないのでしょうか？」

……………ね？　直人さん？」

……………。

母さん似の人からの情報の嵐から解放してくれた早咲さん。

……私とか言っているし、やっぱり女……なの、か？

……微妙なところで、雰囲気とか話し方とかで女だろうって分かってはいるんだけど、なんだか妙に気になってしょうがない。

なぜかは分からないけど……熱くなった母さんは止まらないから、それを抑えてくれるだけで助かる。

それを止めてくれた彼……みたいな彼女には、感謝しないとな。

だけど、何か。

何かが引つかかる気がするんだけどな、早咲さんという人は。

7話 「無人島」

ちっこいの……失礼だけど、でも小さいよりもちっこいっていう表現の方がしっくりくるから仕方ないよな……ちっこいひなたさんがすぐ目の前に来た。

でも、ちっこいとは言ってもソファに座っている俺よりは目線が高いかからか、少しだけ腰を落として俺に話しかけて来る。

……髪の色、長いなあ……。

でもこれで、同じ年なんだよなあ……。

いつもくつつくようにしている早咲さんと……背の高い早咲さんとの差で、余計にちっこく見えるんだよなあ……。

「おはよつ、直人くんっ」

「あ、うん。おはよう」

「……ああ、済みません、ご挨拶もせずにおはなしを遮ってしまいました。榎本さん……よりは、直人さんの方がいいのでしょうか。昨日はとりあえずで下の名前で呼んでしまいましたけれど……あ、私も。おはようございます」

「ああ、うん、下の名前がいいよ……で、早咲さんも、おはよう」

ちよつとしか視線を下げなくていいひなたさんとは違って早咲さんの方は背が高いから、かなりのぞき込んでくるようになって来て、髪の毛がふわりとなって……俺の中までをのぞき込んで来ているかのような目が、俺を見てくる。

「……………」
「……………」
……………?

妙な沈黙が。

「あのっ、話っ、おはなし戻しますけどっ、榎本先生のおはなしはいつも分かりやすいですっ。で、あの、私にとっては、授業で難しいこととしてるときみたいなので何とかついてつける感じなのでいいんですけどっ、でもっ。まだなにも、この、あう、えと、私たちの世界

？について知らない直人くんにとっては、ちょっといっぱいになったっちゃうかもですっ」

「……そう、だな。 つい熱が入ってしまったって」

「先生が生徒想いなのはみんな知ってますっ！」

「それが美奈子のいいところなのねー」

「はい、まさに熱血先生という感じですね」

「あ、で、ですっねっ？ もっと時間をかけて、ゆっくりとっ。 ……私

だって、理科とか古文とか、授業だけじゃよくわかんなくて、いつも早咲ちゃんに授業のあとに聞いて。 それでも宿題とかしようとする

と、またよくわかんなくなっちゃうともう1回聞くから……んで、あの。 だから、そんな私みたいに、ですっね……んと」

「……落ち着いて、ひなた。 大丈夫ですから。 ゆっくりと、ね？」

「……ふう、ありがと、早咲ちゃん。 ……あ、で。 その、たぶん、

直人さんがとりあえず知らなきゃいけないことからちよつとずつ教えていってもらって。 で、直人さんが大丈夫だからもつと知りた

いって言ったなら、そのときに他のこととかを教えてあげて。 そんな感じにしたら、まだなんにも知らなくて、なんにも分からなくて。

………、なんにも、だれも、ほんとの意味では信用できていないはずの直人くんにとって、いいと思いますっ。 あの、精神的に、とか」

………。

ああ。

昨日も、なんとなくで思っていたけど……この人たちは、いい人たちだ。

俺になにも説明せずにいれば楽なはずなのに、わざわざ教えてくれて。

こうして、みんな、方向性はちがっても、俺のことを気にかけてく

れて。 昨日会ったばかりで他人でしかない……そして、説明が真実だとしたら、じゃない、説明通りなら厄介者でしかない俺に対して、ここまですてくていてるんだから。

「ごめんな、直人。 つい、いつもの癖で……ああそうだ、須川にも忠

告されたように、私はきちんと教えようとすればするほどに手と口が速くなってしまうてね……。須川の言うとおり、君の身を案じてのことだとは言っても、先走りすぎた。……黒板がないから、さらに早く説明してしまっていたな……。反省だ」

「い、いえ、大丈夫です。話にはついていけていました……。から」

「んー、気持ちの方はだいじよぶなの？ 直人くん」

「うん、平気……。だと思う。ありがとう、ひなたさん」

「……けれど、精神的な負担というものは、得てして自覚が薄く、あとでまとめて来るものです。ご自愛くださいね、直人さん」

「あ、ああ……。早咲さんも、ありがとう。いや、野乃さんって呼んだ方が」

「私も下の名前でお願いできますか？ ……ひとりだけ仲間はずれはイヤですもの。ひなたちゃんと一緒にいいですっ」

「あ、なら私もお願いしまーす直人さーん、ローズ、ローズマリー、ですーっ」

「あ、え、えっと、はい」

男が少ないって言うから、てつきり……。悲しいことに、女子校……。あ、こつちじゃなくてあつち、俺がいた世界の……。……っていう夢の場所だと、なにがどうしてか、女子が男子化するって、ぼんやりと聞いたことがあるけど。

少なくともここではちがうようだ。

なんとなく……。えっと、姦しい、って言うんだったか？

そんな雰囲気、漂っているから。

長い金色の髪の毛をかきあげたジャーヴィス先生が……。俺はローズマリーさん、と呼ぶことで決まったらしい……。ソファから立ち上がって、その大きい胸を張りながら言う。

「それじゃー、私は失礼しますねー。これからねつぞ……。じゃないですねー、かいぎ……。んでもないですねー。んー。あ、そうです、直人さんの個人情報というものを、プレス、外向けに、政府向けにですけどもー。話題にはなっても適当なところで静かになつてー、ずーっと引っ張りだこにはならない軽度で作ってきますっ。 楽し

みにしていただくさいねー、ではまたですよー、直人さんっ」

「……はい、ありがとうございます」

「問題ありませんのでー」

そう言い残して……あと、いい香水の香りを残して、ジャーヴィ
……ローズマリー先生が出て行った。

○

「……あうー、私から言い出しておいてーなんだけど。常識、世界が違うっていう直人くんに対して、私たちのこの当たり前っていうの、分かりやすく教えてあげるっていうのってとっても大変だよね………うー、早咲ちゃん、どうしよ——……これじゃあ美奈子先生も困っちゃうよう」

……さつきは、小さいけど頼りがあるかも……って、一瞬だけ考えたんだけど、やっぱりひなたさんは見た目どおりの性格らしい。

俺を見ながら考えていたかと思ったら急にベそをかきはじめ、早咲さんにすがりついている。

そういう様子を……抱きつかれているのをなだめている早咲さんを見ていると、なんだか、なぜだか……あ、やっぱり男なのかな、って感じる瞬間はある。

いや、でも、なあ。

名前とか、話し方とか、顔とか……一人称とかは女、なんだよなあ。

……頭が混乱しそうだ、後回しにしよう。

それに、男だったなら……そう、俺の気が休まるからとかで絶対に言ってくるはずだもんな、自分が男だから安心しろって。

でも、そんな気配はない。

だから、早咲さんは男装してはいるけど女子で。

そうだ、何も言ってきていない以上、男装している女子なんだろう、うん。

「よしよし、大丈夫ですからね、ひなた。……うーん、そうですねえ。

分かりやすく……分かりやすく、ですか。

……あ、直人さん」

「なんだ……ですか、早咲……さん？」

「あは、同学年なんですからふつうに話していただいて構いませんよ？ 私のは……癖、ですし。あ、で、話を戻しますが、そちらの世界、直人さんのいらっしやった世界の娯楽についてなのですけども。」

小説、戯画……ああ、コミックとかマンガとかで通じるでしょうか？ ……よかったです、あとは映画など、そういうものがある……のですよね、きつと。それで、その題材などですね、無人島や荒廃した世界で生き延びる……といったものは存在しますか？」

「うん、あるな。読んだことも観たこともある、……けど」

「それなら話は早いですね。……落ちついて聞いてくださいいね」

と、さつきまでローズマリー……先生、が座っていた席に腰を下ろした早咲さんは、俺を見据えるようにして、真剣な表情のままと言う。

「その……無人島でいいですね。絶海の……地形まで同じ地球とい

うものでしたら、太平洋や大西洋の外れも外れ、まさに孤島。そこへ、例えば男性ひとりと女性10人とが漂着したとします。救助は恐らく来ない、他の島へでさえもたどり着くことは不可能、しかし生きていくだけの物資や設備があつて、動物や病気の脅威というものはない。そして食料などは、数世代分が……どうにかして、あります。

そのような状況で、ですね？ いちばんに問題になることというのは何だと思えますか？ ああ、とりあえずで誰がリーダーかとか、権力を持つとか、病気だとかそう言った面倒くさいことは抜きにして。ドラマチックな人間関係とかもなく、みなさんが仲良しだとして、です」

無人島。

男ひとりと女10人……これは、俺に合わせてくれたんだろう……そして、ずっと生きていくだけの環境は整っていて、全員の仲は良好で、平等。

そんな環境、だったなら。

……やっぱり、さつき考えたみたく。

「……早咲さんが言いたいことは分かるよ。子孫を残していくことが最優先、だろう？ 助けは来ない、求める手段がない。だとしたら」

「はい、そうです。直人さんにとっては……恐らく、こちらのように男女比が偏っていないのであれば、昔のように……まだまだ結婚などはずっと後でしょうから、このような話は酷、だとは理解しています。……ええ。生きていく、生き延びていく以上には、どうしてもこのものが必要です。それも、なるべく早くに妊娠と出産とを繰り返して、ひとりでも多くのこどもが。……なら、その1人はどのようにしたらいいか？ ……と、そのような感じですよ」

「……………、うん」

「はー、早咲ちゃんすごいねー、さっすが万年学年主席さんだねっ」
「いえ、それほどでも。直人さんにもご理解いただけたようですもの」

「よくそんなに、すらすらーつと先生みたいに口が動くねえ。……いつもどおりにい——…むう」

「はいはいひなたちゃん、今は置いておいてくださいね」

「むううう——…あ、えつと、それで、早咲ちゃんが言ったみたいなき感じ……かな？ でね、えつと、ここではその無人島がものすごく大きくなって地球になってっ。つまりは世界規模で、世界中どこを見てもほとんど女の人でっ。……だから、女の人の社会っていうのにずいぶん前になって、ね？ ……男の人の価値……やな言い方だけど、それが、とっても高いの」

「価値……」

「ええ、価値、です。戦略的に……人類としての、種の価値として、ですね。ですから、男性と結婚して子を授かることができる、それも自然な形で……というのは、ひとにぎりの特権階級の方たち。それと、男性自身が気に入った……せいぜいが数えられる程度ですけれども。でも、多くて妻の数は10人から50人程度、それ以上は年に数回会えたら良い程度の薄い関係です。……お分かりでしょ

うが、女余りというものが社会問題なんです。人類自体の問題なんです。女だらけ、なんですね。世界規模の孤島なんです」

.....。

これで、まだ抑えているって言うことは、まだまだあるってことだよな。

知らないやいけなくて、しかも、俺のショックを考えてくれて抑えめにしてこれって。

.....これ以上、この.....どう考えても滅びそうな世界に、まだなにがあるっていうんだ。

8話 転入

「いいだろうか、直人」

「あ、はい、母さん」

「あー、たしかに直人くん、美奈子先生に似てるかもー」

「はい、ひなたー？ 今からは静かにですからねー？」

「……野乃、助かる。 須川はもう少しおしやべりの癖をだな……と、それで、だ、直人。 先ほどの発言は彼女たちから聞いたような私たちの世界の常識の元にしたものなんだ」

「はい、今は理解しているので大丈夫です」

「そうか、それはよかった……の、だが。 ここでもうひとつ、君の存在がローズの工作が済む前に……いや、済んでもだな。 君がここにいるとごくわずかの人間にでも露見することになれば、少なくとも数年、長ければそれ以上の期間。 世界に対して公になる前に、先ほども出てきていた特権階級層の女性で、出産までたどり着けなかった方たち……強引に押し通す権力があって、出産限界に近い年齢の60、70代の女性のところから、有無を言わずに連れて行かれることになる予想される」

「……は？ な、70!?! それって!?!」

せっかく分かりやすい例えを持ち出してくれて、雰囲気も落ち着いてきたから気持ちも楽になってきたと思ったのに、とんでもない数字が出て来てそれどころじゃなくなってきた。

いや……聞き違いであってほしい。

70？

70だあ？

60でも充分な婆さん……ああいや、確かに最近の年寄り……お年寄り？は、テレビとかに出ている人たちはもつと若く見えるけど、それにしたって。

……いや、待て。

確か、保健で習ったとおりだとすると。

「待ってください、70と言ったら、いえ、60でも、その……とつくにこどもなんて」

「ふむ、そちらではまだ……いや、必要がないからか、遺伝子を操作しての妊娠環境の維持は行われていないのだな。肉体への副作用は大きいのだが、こういうのは得てして地位が高く、しかも30代までに子を持たなかった女性ほど受けるものなのだが……しかし、な」
頭がぐるぐるする。

「だけど、母さんに似たダレカの話は止まらない。」

さつきまでよりもずっとゆつくりと話してくれているのに、いるから、理解できてしまう。

無人島だなんて、生やさしい例えだったんだって。

「こちらの世界ではな、直人。最近では80代でも、子を産むことはできるようになってるんだ。男性は元からだが、女性ですら……健康な子孫を、な。まあ、ここまで来ると資金と権力と、なによりも精神力がなければ不可能だが……けれども、可能ではあるんだ。そして、それなりに普及しているんだよ。だから、直人、よく聞いてほしい。君の、男子、青年としての……これまでは自由な恋愛の価値観の元で育ってきたという君には残酷だろうが、だからこそ、君の自由意志を尊重して言わなければならぬんだ。……いいか？」
「……………」

このヒトは、少なくとも俺に対して悪意はなくて、俺のことを想って言ってくれているんだ。

だから、しっかりと聞かないといけない。

「なら、……そうなる前に。君が明らかに顔を青くするような、そのような女性を相手にしたくないのであれば、だ。ただ子を成すという目的にだけ囲われて何人も、何十人もそれらの相手をさせられる時間を過ごしたくないのであれば。最低でも……そうだな、数人は必要だろう。数人の嫁を、妻を、その前に得ておき……可能であれば、産まれていなくとも子ができていることが望ましい。そこまで行っていれば、その相手の家族が盾となり矛となり、君を守るだろうからね」

「……これで最後だ、何とか気を張ってくれ、直人。この学園は、幸いにして特殊な事情ゆえに各国の権力者の娘で、まだ相手のいない生徒が大勢いる。だから、それらを嫁にしようんだ。ひとりでもいい、ふたりでもいい。もちろん多いほどにいいが………：そうすれば、君は……見た目でも性格でもなんでもいい、ある程度は好きで、ある程度は好みで、ある程度は自由に、年が近くて好いた女子と結ばれることができる。そうして、この学園の関係者ならまず間違いない君をそういう輩から遠ざけておけるだろう。だから直人。ローズの工作が済み次第、君には私の受け持つクラスに通ってもらおう。そこで気に入る者がいたなら、早い内に結ばれるといい。いや、結ばれなければならぬ。なるべく早く、遅くとも………：そうだな、1、2ヶ月以内には」

「なぜなら、君には——極めて健康な男子で、しかも嫁がゼロという君は、世界中の女性たちが、なにをしても手に入れて困い、閉じ込めてしまいたい存在なのだから………ね。分かってくれ、直人」

○

こういうのは、とにかく早い方がいい。

考えるのはローズ……先生たち大人に任せろと。

そう、母さ……美奈子さん、に言われた。

それに、すでに俺という男がいたと知られている可能性もあるとか。

あの夜に俺が校庭で寝ていたのとか、起きて大声を出したりしたのとか……校内を歩いていたのとか、それをあるとき俺のそばにいた人たち以外の誰に見られているから分からないから、らしい。

ローズ先生が監視カメラとかの情報を何とかしてくれているらしいけど、そのときに映像を覗いていた人が俺を見たのか、そしてすでに誰かに連絡を取ったのかは調べている段階だそう。

それに、いちおう先生たちのできる範囲で俺を守ってくれるとは

言っても、いずれは漏れる。

俺という、学校どころか国へも登録されていない男という存在がいるという情報は、必ず。

そもそも男の数が極端に少ないんだ、だからこそ近くにいて、住んでいる男の顔なんてその周りの人たちはみんな知っているわけで、さらにここは学校。

男子生徒なんて10人を超えている年があるだけで奇跡だと言うくらい。

だから……………「というわけ」、なんだそうだ。

目の前には女子校としか思えない教室……………の生徒たちの全員が俺を見ている光景。

もつとも、こうして俺が壇上に立たされ……………目に映るクラス全員が女子というんでもない事実には圧倒されて、ただぼーっと突っ立っているしかなかったわけだけど……………美奈子さんたち、あのときにいた人たちの前で聞かされたものとは結構に違う説明を横から聞き流していた……………というわけだ。

これが、「というわけ」。

何やらを隠すには森の中、というわけだと。

……………物事って、隠せば隠すほどにヤバそうに感じるもんだな。

少なくとも、当分はこれで通すらしい意味深な説明を聞いていた俺は思う。

ことごとく主語を省き、有無を言わさない調子で淡々と説明し、理解が追いつく前にさっさと終えてしまうという魔法のような言い回しを。

……………素直に「起きたら俺にとっての異世界の校庭で寝ていました」の方がよっぽどに簡潔なんだろうって思える。もちろん、こんなの誰も信じないわけだけど。

信じられないわけけど。

「……………で、だ。今の話を聞いたお前たち、私のクラスの生徒なら察せられるだろう」

突っ立って30人以上の女子の視線を受け止めなきゃならない俺

としては、ただそれをぼんやりと受け流すしかない。

だから無意識に考えないようにしていたんだろう。

頭の中がぐちゃぐちゃした状態から、少しずつ正気に返りつつある感じがする。

だって、……このクラスの生徒、ほぼ女子であって……残りは、在籍はしているけど出席はしていない、机すら使われたことの無さそうな綺麗な空席がふたつ。

そのふたつのためのふたり以外はみんながみんな女子であって……驚くほどに顔が整っているんだからな。

今日のために顔が綺麗な人たちを急いで揃えたって言われても不思議には思わないくらいだ。

ただでさえ女に免疫がなくって、しかも昨日の説明がまだ頭の中でぐるぐるしている。

だから、教室の造りにでも興味のありそうな顔をしつつ、30対もの視線を受け流さなきゃならなかったんだ。

もつとも、美奈子さん曰くこのクラスは「この世界でも飛び抜けてマシ」なんだそうだが。

……訳アリの転校生を見るみたいな視線が来るだけというでもありがたいんだと。

「彼、直人君については……この学園の教師陣の判断次第でいかようにもできる。いずれはと考えているものの、男性を保護する国内外の条約の中で最も有利なものを、とな。けれども、それには少々の時間が掛かるのは義務教育でさんざんに聞かされただろう」

と、肩に手の置かれる感覚がして、俺はようやくにクラスの全員からの視線を美奈子さんだけに絞ることができるようになって、背中に冷や汗をかいていたのに気がつく。

……、気持ち悪い。

「直人君……、直人は現在、身寄りがない形となっている。だからこそ、彼の姓を「榎本」……私の家に縁のある者とする手続きが完了するまでのあいだ、このクラスで保護することとした。このクラスの

生徒である以上、お前たちは馬鹿な真似をしないという確証があるからな。だからこそ私の生徒、特別クラスなのだから」

この辺のことについてはまたあとで、と言われていたからよく分からないけど、とにかく今すぐに俺を取って食うような生徒でも、そんな輩がバツクにいるわけでもないらしい。

いきなり襲ってきたりはもちろんしないし……する人が大半だつて聞いたときにはドン引きしたけど……ノコノコと誘われて人目につかないところに行かない限りには、まず大丈夫な生徒が選抜されているんだと。

だけど、安心は……できない。

だって、ここは別の世界だ。

俺の常識に合わせたら、男女をもつかい逆にして……つまりは俺が男だらけの世界に飛ばされてきた女で、周りのほとんどは独身の男しかいなくて……とかいうトンデモな状況なんだ。

だったら、この世界の女にしてみれば、俺はそんな女……ああいや、男に見えてはいるはずで。

だから、安心はできない。

それは、あの場にいた人たちもおんなじだ。

……後ろ盾も何も無い、そもそも説明を受けた内容がほんとうかどうかも分からないけど、いちど信じるつて言った以上、思った以上には、あの人たちだけでも信じるしかないんだけどな。

最低でも、目の前の……とんでもなく若くした母さんに似た人、美奈子さんだけは信じたい。

じゃないと、どうにかなってしまいそうだから。

「で、だ。先ほどの用紙は国際法上極めて重要な意味を持つというのは理解しているだろう？ できるだけ……と言っても、数日で全校生徒が知ることとなると思うが、とにかくできるだけいい、彼への過剰な接触と、彼についての情報漏洩には細心の注意を払って欲しいんだ。……私だって、受け持ちの生徒傷つ
けたくは無い」

美奈子さんは、俺を見たままもう片手を挙げ……そうすると、教室の四隅と俺の後ろにいた数人の「兵士」さんたち、映画とかでしか観たことがなかった武装をした兵士の人たちが、カチャ、と銃を鳴らす。

……見慣れてきたとは言っても、やっぱりこわいものはこわいな。

「これからは、どこでも……直人のいる場ではどこでも、常時数名の護衛が付く。はじめは緊張もするだろう。しかし、いずれは慣れる。彼だっていきなりこの場に連れ出されて恐怖に襲われているんだ、どうか君たちも耐えて欲しい」

いや。

いやいや。

……一応誰にも向けてはいないけど、あっちこっちに銃口をこれ見よがしに構えている兵士の人たちを見て、これからずっとこうだからと言われてびびらない女子はいないと思うんだけど。

ああいや、この世界の女子……女性のメンタリティってやつは男に近いんだっけ？

男女が逆転し切っているから。

「もし……もし、だ。無いとは信じているが、直人に対して明らかに同意のない接触やそれ以上の行為を働いたり、または働こうとしたならば」

カチャ、と、いくつもの金属音が静かに響く。

「護衛には、各々の判断での発砲も許可してある。やり過ぎだとは理解しているが、彼の立場を考えてみたらこれでも優しいくらいなんだ。……済まないな、みんな。最初くらいは強く言っておかないと、なにかがあつてからではみんなが不幸になる。それに、余程のことをしない限りには撃たないようにも言い含めてある。だが、生徒に銃口を突きつける生活を送らせてしまうのは……申し訳ない限りだ。済まない、どうか彼のため、耐えてくれ」

そう言つて、美奈子さんは俺の1歩前に出て……生徒たちに向かって深く頭を下げた。

まるで、本物の「母さん」のように。

9 話 結婚制度、など

「……さて。では少しばかり長引いたホームルームは終了だ……が、事情が事情だ、しばらくは私がすべての教科を預かることにした。安心してくれ、普通教科はよく頼まれて引き受けているし、体育などは……そうだな、教室で教科書を、という形にでもしようと思っている。体なら放課後に動かしてくれ。……さ、5分の休憩のちに1時限目を……と、立たせっぱなしで申し訳ない。直人はそちらに用意してある席へ頼む。みんなも、気持ちは分かるが彼をあまりじろじろと見てくれるなよ」

「「は、……はいっー」」
「……はい」

先生……母さん似の、の号令でここまで高い声しか聞こえないのは、やっぱり女子しかないからなんだな……とか考えつつ、俺はようやく腰を下ろすことができた。

もつとも、教室を……いちばん奥の席、窓際という席まで移動するあいだ、もちろんに知らない女子たちからの視線をこれでもかと浴びていたけど。

……男女を逆にして考えたら、無理もないか。

いや、そうじゃなくともある日突然にこんな警備がつくことになれば当然だし、俺の世界でも転校生なら同じ目に遭うはずだもんな。

それに、この席……へタに前の方の席で、1日中視線が刺さるようなのに比べたら……と思えば、アニメとかでよくあるような特等席がいろいろと都合のいい場所だということに気が付いて、同時に美奈子さんの気づかいも分かる。

ちらちらと振り返る女子はいるけど、ずっと見られるわけじゃない。

ずっと来るのは教卓からは美奈子さん……先生と兵士さんたち、俺のすぐ後ろとドアの手前からも兵士さんたちからの視線だけ。

……………俺の立場的には、これ以上安心できるものはないものな。

○

授業が始まる……と美奈子さんは言っていたけど、実際には雑談に近いものだ。

教科書を開かせて黒板に書いたりはするけど、肝心の中身のことは話していないみたいだし。

周りの生徒たちも……この世界の生徒たちも、女子たちも、机に手を載せたままだしな。

……だから俺に、鞆どころかノートやペンも要らないからとにかく着いてこいつで言つたわけか。

たぶん俺への一般常識の説明ついであんなだろう、時事ネタや歴史やら、他の生徒に変に思われない程度にしていって、ときどき俺の「特殊な転校生」という設定をちらつと口にする。

それだけで、俺以外の生徒……女子たちの意識は美奈子さんだけに向かっている。

さすがは先生だな。

……………。

……母さんも、こんな感じで教えていたんだろうか。

……………。

だけど。

いくら俺のためとは言っても、俺のすぐ後ろで身動きひとつせず立ち続けて銃を構えている兵士さんの圧というものを感じるのには、どうしても慣れないな。

これが今日だけならともかく、昨日の話がほんとうなら……これからずっと、なんだろうから。

いや。

……………学校を卒業しても、どれだけ経っても。

俺が、元の世界に戻れなきゃ、ずっと、このまま……こうしているしかないだろうから。

「……………けっ、結婚って。俺が？ まだ16ですよ!? いくら男が少ないからって、いくら何でも早すぎますって! 男は18からで女子は16からって習って、……………あ」
雑談混じりの授業、休み時間も話す相手はみんなよそよそしいというか話しかけてこず、誰ひとりとして……………ほぼ知り合いいない。
そんな時間を過ごしていたら、ぼーつとして意識が適当なところへ行くのは当然だ。

だから俺の意識は……………俺が「このクラスに通って早く何人かと結婚した方がいい」と勧められた場面へと戻って来ていた。

「そうなんですかあ、直人くんのいた世界じゃあ男の子の歳の方が上じゃないとなんですえ。変なのー」

「いえ、ひなたちゃん。たしかこちらでも……………ええと、男性が生まれなくなってきたもすればらくはそうだったはずですよ。出生率が激減してきてから一気に法律がいろいろと変わったと歴史の授業で聞いた覚えがあります」

「あれー?」

「……………今年も勉強、がんばりましょうね、ひなたちゃん。まあ、今のは試験には出ないでしょうけれど、今授業でやっていることは……………ね?」

「あう……………早咲ちゃん……………」

涙ぐみながら早咲さんの胸に頭ごと包まれに行っているのは、やっぱりどう見ても数歳年下にしか見えないひなたさんだ。

もつとも、早咲さんもひなたさんほどじゃないけど胸は貧……………と、いくらなんでも失礼だな。

でも、わざわざ男装しているんだ、実はそこまでのことじゃないのかもしれない。

胸だって、無いように見えるし。

まあ、上を着ているからかもしれないけど。

.....

それにしても、この世界の常識手特に男女のそれについては早く教えてもらわないとなあ。

事あるごとにこうして驚かされていたんじや、俺の身が持たない。

……まずはこの、俺がすぐに結婚とかいう大問題だけど。

「……と言いつつも、私も詳しい年号まではもう忘れてしまいましたけれど。でも、昭和の半ばまで……あ、年号とかは」

そう。

これだけいろいろと変わっていても、そういうところは。

「……同じ、だったな。変わる年まで……とりあえずで明治からずっと」

「世界が違えども、こんなに違ってもこういうところは同じなんですか。……何だか不思議ですね？ 直人さん」

早咲さんは、……どう見ても俺の世界……だったところにも滅多にいないような、お淑やかな雰囲気醸し出しつつもひなたさんを撫で続け、ぐずっていた彼女をたちまちにごきげんにしていた。

……だから余計に優男っぽく見えるんだよなあ。

「……すんっ」

「いい機会だ、須川。中学のときの歴史の授業を思い出してみて、かんとんに……むしろこの方が彼にとつてもいいだろう、教えてやってくれ。こちらの今というものを」

「うえ、せんせー!? はっ、はいっ。……えっと、こっちでは、ですね。最近の法律では、結婚年齢を昔の……えっと、元服っていうのに合わせて、いえ、戻してですね。男の子は13くらい……その、は、恥ずかしいですけど……せつ、生殖可能年齢? になったら、ふたりがいいって思ったら結婚できるようになっていきますっ。……ですっ?」

生殖、という言葉とともに顔を真っ赤にするこの子は、やっぱり、どう見たって中学生にしか……。

いや、俺だって女子にこんな話題を話せと言われたらそうなるだろうけど。

「……で、ですねっ。あの、それで、男の子なんですけどっ！ほとんどはちっちゃいときから許嫁っていう子が何人も当てられていて、まずはその子たちからお嫁さんになっていくっていう仕組みですっ。……残念だけど……いえ、私はそのおかげでよかったのかもしれないんですけど、……あ。わ、忘れてください今のっ！……とにかく私や早咲ちゃんには許嫁さんがいなかったから、こうして結婚しないで学校に来ているんですけどっ」

「はい、お疲れさまです、ひなたさん。……で、直人さん。この世界の男性は、あなたに取ってみれば「まだ」中学生になるころにはもう、よっぽど嫌では限りには何人も女子を娶って、お嫁さんにして。ほとんど強制的に結婚をして、させられて……その、大体は1年以内に誰かしらのお父さんになります。……恥ずかしいでしょうけれど、辛抱してくださいね？ これを知っておかないと、あなたがなぜ、急いで……美奈子先生の仰ったように結婚をしなければならぬのかが分かりませんから」

そう言う早咲さんは、まだ顔を真っ赤にしながらあわあわ言っているひなたさんとは対照的に、とても落ち着き払って、淡々と……静かながらもよく透き通る声で教えてくれる。

「まあ、女性同士でも……ごもはできるのですけれどね」
「……え？」

ついでのように、とんでもない事実も。

「女……同士、で？」

「くすっ、やっぱり。……私、SF小説は好きなので、「もし世界から男性が一気に生まれなくなったら？」というような趣のものも読んでいますので、直人さんの驚きようも半ば予想はしていたのですけれど……くすくす。そんなに驚くことでしょうか？ そちらにも、似たような技術は存在すると言っていたでしょう？」

「え……つと、そう、だな。少なくとも俺のいたところでは、そういうのはまだ完全には実用化……いえ、技術はある、とは……いや、もしかしたら俺がニュースを見ていなかっただけで、実は始まつたりしていたのかも……だけど」

「倫理的……いえ、なによりも需要がとても低いから普及していないのでしょね。話を聞く限り、そちらは少しばかり技術が進んでいくようですし。電化製品とか……。ですがこちらは逆に、しなければ人類の滅亡が……。核戦争よりも明らかかなそれが目に見えていたので、倫理的ないろいろは私たちが生まれる前にはとつくにクリアされていたのでしょね。でも、ですね？——いくらそうだとしても、たったの3世代前。ほんの100年にも満たない過去までは、男性と女性は、直人さんの知っているような「普通」のやり方で結ばれていたんです。なので、それに対する憧れは……とつても、強いんです。だからこそ男性の取り合いになって……ですよね？ 美奈子先生」

「そうだな、いつもどおりに大変優秀で結構だ、野乃。だが、私たち教師と同じように説明が長くなりがちな欠点には気をつけた方がいいぞ？ 助かるが、な」

「……………忠告、痛み入ります、先生」

静かに下げていた頭を、長い前髪と一緒に持ち上げる早咲さんと、まだ彼女にひつついていひなたさん。

そして、ふたりの説明が終わるのを待っていたらしい美奈子……さんは、改めて俺に向き直り、続きを口にする。

「……直人くん、まだ頭は着いて行けているか？ 別に、この場でまとめて話す必要もないし、なんなら」

「……………いえ。大丈夫、です。まだ、今だからこそ逆に頭に入ってくる気がします、から」

「そうか。強いな、君は……なら続けよう。たった今野乃が言ったとおりだが、君の危機感を煽るために先に言っておこう。ほんの30年前……私が産まれるほんの少し前までは、男性が襲われる事件は数え切れないほどだった。もちろん、性的に、だ。——何せ、人工授精ではなく本物の男性と結ばれるというのは、この世界でのステータスでもあり、そのためならいくらでも金を出す輩がいたからな。だからこそ、男性は1カ所に隔離されるようにして……守られて、生きていた」

「……………」
男だけが、守られるためだけに。

それじゃまるで、絶滅危惧——種、だったな。

「脅した形になって悪いが、今はそんなことはないよ。警備はつくものの、普通に家族と暮らし……その家族という定義こそ変わりはしているけどね……外出もできる。好きなところへ、な。だが、それでも男だというだけで……平均よりも嫁やこどもの数が少ないと言っただけで、幾つになってもしつこく狙われるのは……最早この世界の宿命と言ってもいいだろう。こうして口にしてみるとんでもなくねじ曲がった世界だが、これがこの世界というものなんだよ」
美奈子さんは……やっぱり俺の母さんによく似ている。

俺が不安じゃないかと……話し方はきはきはしたものに優しさが混じっているけど、目はとても心配しているって言っているようなもので。

それは、俺が小さいころ、よく叱りながら俺に向けていたような目つきで。

「……だから、直人君。よほどの事情がない限りには、成年の男子……君も、この世界ではそう数えられるんだ……嫁は、最低で数人。さらに、30、40くらいまでは内縁という形でさらに10人以上の女性が………言い方は悪いが、要は男性の気分転換のための順番待ちという具合で待っているのが、私たちの世界での当たり前、なんだよ」

10話 「ディストピア」

「……………ここがそういう世界、そういう理屈な場所って言うもの自体の理解は追いついていますし、できています。理屈も、もちろん……ただ、納得はまだ」

「当然だろうな。直人君からしてみれば、夢物語を通り越した先のホラーな世界なのだからね」

「ホラ——……。……ええ、そうでしょうね。男女の数が自然でした私たちの世界の過去、戦前から来たのと変わらないのですから」「早咲ちゃん、それって……えつと、でいすとぴあ的な映画みたいな？」

「そうですねえ。そうかもしれないですね、ひなた」

男が、ある時点から激減して、だからこそ変わった歴史の先の世界……それが、俺が説明を受けた、俺が来てしまったここなんだもんな。まさに、ひなたさんの言うようにディストピアだ。

その原因が疫病やロボットやらAIやら戦争じゃなく、人類を襲った特殊な……前兆もなく、じりじりと毎年に生まれる男の数が減っていくつて言う、種の繁栄そのものの危機つていうものであるだけに。

「だけど、です。理解はしているんですけど、納得できるまでには時間がかかると思うんです。だってここは、ひなたさんの言うように……俺にとつては、いきなり過ぎる映画とか……マンガとかみたいな世界なんですから」

そう。
俺に取っちゃ、メインターゲットな青少年な男子に人気な設定の世界。

そんなマンガの設定をみんなで語っているようにしか聞こえないんだ。

………………………………………だけど。

それを、大のおとなまでが真剣に話し合っていて、……俺を騙す意

味なんてなくて。

「……だから、考えたくないくらいなんです。だってそうでしょう？ 俺が、寝て起きたらそんな……すみません、ですけど、この世界、イセカイに来ていただなんて。……いえ、もちろんただの愚痴です。みなさんの話し方から、それがきつと事実なんだって分かっています。分かっているんです。ですけど、ちよつとは時間の猶予があつたつて」

「だろうね。 そうだろうとは思っていたよ」

「か、……美奈子、さん？」

「……君にとっては、私は母親にそっくりな人間なのだろう？ なら、別に好きに呼んでくれてもいいんだよ？ ……と、まあ、君がひと晩眠って気持ちの整理が付いて、少しは話ができそうだからとあえてまとめて話させたんだ。 恨むならこの子たちではなく私を恨んでくれ」

「………いえ。 俺の知っている……母さん、でも、こういう大切な話のときにこそ直球で、対等な人間として扱ってくるでしょうから、むしろその方が安心します」

「そうか。 ……私、この世界の私も、子に恵まれていたら、あるいは。

………すまない、直人」

………そういえば、美奈子さんの年齢のころには、俺の母さんは俺をとつくに産んでいたはずだ。

なのに、「子に恵まれていたら」……と。

………

………男が少ないって言うのは、やつぱり。

「……私が口を滑らせて変な空気にしてしまったね。 では、改めて、君の結婚の話に戻そう。 それが今、君が……来たときと同じように唐突に、数日の内に君の世界に帰ることができないのだとしたらまずしなければならぬことだからね。 ……丈夫か？」

「………はい。 お願いします」

「……早咲ちゃん、眠いよお——……」

「もう少し我慢ですよ、ひなたちゃん」

これまでの会話にふさわしくないような、甘えた感じの声が出て、俺は少しだけほっとする。

「……………まさか、これを見越してこの子たちを連れてきたんだろうか。」

だって、いくら昨夜俺を見つけてくれたひなたさんと早咲さんとは言っても、話さないように注意して俺に関わらせないようにすることもできたはずなんだ。

先生たちや、あのときにいたお医者さんたち……………あとは護衛の人たちだけで充分だったはずなんだから。

なのに美奈子さんは、わざわざこの子たちを俺の前に連れて来て、彼女たちにもこの世界について話させた。

……………俺の、気を紛らわせるために。

そう思ったら、脚に力が入っていたのに今さらながら気がついて、この瞬間まで無意識に緊張していたんだなって、実感してきた。

「さて。この世界の男子には結婚相手がいなければ我先にと後がない輩が見境無しにきてしまう。だから急がなければならぬのはいいね？ ……だが、君には。この世界の多くの男性のように、教育と環境のせいで……………極端に人任せに生きることになるか、あるいは人間不信になるか、それとも完全に考えることなく言いなりになるか。そのように洗脳されて生きてきた男子たちとは違い、君は外から来た。……………自由な世界、自由な価値観、自由な恋愛と結婚というものを常識としてきたんだ。だから、いきなりというのは受け入れ難いだろう？」

「……………ええ」

「だから、だ。その相手を、……………ああ、もちろん気に入らなければ断つてもいいようにしてあるからね？ ……私が選んでおいたんだよ。いずれ打ち明けることになるかもしれないけれど、話さなくても話せない事情というものをくみ取ってくれ、その子たちの家自身も切羽詰まっていないうえに君に強引に迫るよう指示をするようなこともしないと確信が持てて。さらには直人が嫌だと言えば素直に

手を引くと契約書を交わすことができそうで……今朝交わしてきた相手が。事後承諾になって申し訳ないが、まずふたり、そういう相手を……君を守るために用意してあるんだ。彼女たちには君の盾として、ひとまずの期間を守ってもらおう」

すつ、と、美奈子さんが履歴書みたいな……履歴書なんだろうな、テーブルに伏せてあったクリアファイルの中にあっただそれを、俺の方に差し出してくる。

「君に、これから転入先として通ってもらうことになる私の受け持ちのクラスで、君の、秘密の間柄だった許嫁……」

だった、という設定を、今朝双方の家とも交わしてある。もちろん彼女たちも承諾済みだよ。これで、ひとまず君が知られることになっても、いきなり手を出してこようとするとする輩からは距離を置くことができるだろう。……ぜんぶがぜんぶ、今朝になってローズと出した結論ありきで動いたからな、今になってからで申し訳ない」

「くすつ。先生？ 謝ってばかりですよ？ 直人さんにとつては、お母さまやお姉さまのような方に、そうもかしこまられては彼も困ってしまいます。ね？」

「あ、………はい、早咲さん。じゃなくて、野乃さん………って呼んだ方がいいのか。話し方も……、だって俺たち、会ってまだ間もないですし」

「早咲でいいですよ。もちろんこちらのひなたちゃんも、ひなたで。私たち、クラスメイトということになるんですから」

「うゆー？」
……寝ていたのか、名前が出て来てから変な声で返事をしてくるひなたさん。

………うん。

こういう子は、恋愛対象じゃなくても守ってやりたくなるな。
まあ、この世界ではこの子よりも俺の方がずっと危険なのは聞いたとおりなだけ。

「……やはりお前たちに任せて正解だったね、野乃。これからも、彼の手助けを頼めるか？」

「はい、もちろんです。……数奇な運命ですものね、私はひなたさんがいちばん大切ですけど、直人さん、あなたも同時に守って差し上げますっ。これでも学年主席、運動も抜群なんですよ？ 文部両道、才色兼備というものですっ」

「……それを自身で自慢し、それでいながら文句のつけようがないところが困った奴なのだがな……」

実にあざとい仕草……この世界ではどうなんだろうか？……指をほつぺたに当ててウインクをしてくる早咲さん。

正直、俺にとつては会ったことすらない子よりも、このふたりに、形だけでも婚約者とやらになってもらった方が気が楽なんだろう。

けど、贅沢を言っちゃいけない。

事情を知る人が多くなるほどに秘密がバレやすくなるのは美奈子さんだって、朝まで一緒に相談してくれていたというジャーヴィ……ローズ先生だって分かっているはず。

なのに、あえてこのふたりじゃない人を選んだんだ。

なら、きつと相応の理由があるはずだもんな。

……好意に甘えているだけの俺が言っているいい贅沢じゃないだろう。

それに、恋愛をすっ飛ばした結婚とかを抜きにして話ができる同世代っていうのも、この先きつと必要だしな。

「こほんっ。で、そちらの方たちのプロフィールに目を通してくださいいますか？ 直人さん。その方たちは、信頼できる名家のご令嬢の……3女と4女ですので、結婚にそこまで焦る理由がないというのがひとつ。ご本人たちがそこまで結婚も出産も望んでいないというのもポイントです。私が知る限りでも極めて常識的かつ理性的で、人柄もいいので間違いもないと信頼できる方たちというのがふたつ……です。もちろん私個人も親しくしていただいています」

ばら、とめくつてみると……こつちに來てからというもの、誰も彼も。

いや、誰も彼女も……美奈子さんにローズ先生、早咲さんにひなたさん、その誰もが俺の世界にいたらまず学校中に名前が知れているだろう……、早い話が美しい、かわいい人たちなんだけど……この写真

の子たちも、また。

クラスどころか学校に何人いるかいないかっていう感じで。

うん。

普段着かどうかは分からないけど、和服で早咲さんよりもお淑やか
そうな子と、ジャージを着て泥だらけの子。

なんでこんな写真を……ああ、あえてどういう性格かを分かりやす
くしているのか。

けど、……………うん。

ふたりとも美しい系とかかわいい系で、……あと、胸が。

うん。

大きくて。

うん。

「……少なくとも写真越しでのお顔や雰囲気の方は好みではない、と
いうことはなさそうですね？」

「え？ ………………え、いや、その」

「いいんですよ、こちらでは私たち女子が男子の顔をえり好みするの
ですから。その逆、と考えたら……と、今朝もう数名のプロフィー
ルを渡されたときにこのふたり、と先生にアドバイスしておきました
のは、この私ですから」

「む……………」

「こーら、ひなたちゃん拗ねないの。……で、ですね？ 私も先ほど
お会いしまして、先生と……一緒にぼかした事情というものを伝えてあ
りますから詳しいことは話さなくても大丈夫です。もし話したほ
うがいいのか、とか、話したくない、とか……どう対処したら良いの
か、とか。そんな悩みが出てきましたら、彼女たちや先生方……も
ちろん私たちでもいいです。頼ってくださいね？ 直人さん」

そう言つて、早咲さんは……俺に向けて、飛びきりの笑顔を送つて
来た。

あざといほどにかわいくて……この人が婚約者、だったなら、つて
ちよつと思つたくらいの笑顔を。

11話 協力者（婚約者）

「直人様。 ごきげん麗しゅう。 私は綾小路晴代と申します。

……ええと、私も今朝お母さまから聞かされたばかりですので、詳しくは存じないのですが……その、榎本様の内密の婚約者だった、という事になったそうで……」

腫れもの扱いの午前を腫れものゆえに静かに過ごせた俺は、今朝プロファイル写真を見たばかりの女子ふたりと昼を共にすることになっていた。

護衛の人たちが囲んでいたおかげで、近くの生徒たちからすら話しかけられなかったくらい。

……まあ、これも母さん、美奈子さんなりの気づかいなんだろう。で、このふたり。

もちろんクラスメイトなふたりだ。

もつとも、午前中は教室にいただけでいっぱいだったから、ふたりの顔すら見ていなかったわけだけだ。

それで、今の場所は個室の……学食が出てくるレストランということなんとも不思議な空間の1室。

なんだか落ち着かないけど、周りからじろじろ見られないからほつとする。

こういうところがある、っていうことからこの学校……学園か、がものすごく特殊な場所なんだっていうのが分かるな。

さらに嬉しいことに、さつきまでの教室での30人の生徒たちと兵士さんたちの視線が、たったのふたりになったんだからな。

……いや、まあ、護衛の人は俺の周りに3人ほど、もちろん外にもたくさんいるんだけど、それはもう気にしないことにした。

慣れろって言っていたいな。

兵士さんたちは俺に対して好奇心の籠もった目つきをしてこないから、意外と楽だっことも分かってきたし。

……ということ、まずはテーブルの反対側、左手に座っているのが最初に声をかけてきてくれた綾小路さんだ。

なんかというか、いかにもな和風美人という感じで……着物を着るととても似合いそうだな、あの写真みたいに。

学級委員……いいや、生徒会長とかそんな印象だ。

というか、ここへ案内されるときから思っていたけど、動作も姿勢も綺麗すぎるからふだんからあの写真みたいに和服を着ているんだろうな。

なんとかの家元とか、そんな雰囲気だ。

しずしずというか……歩いているときにも体がブレないというか、そんな印象の、俺が会ったことがないタイプ……いや、階級の人って感じ。

だって、今でも背筋とかすっごくまっすぐだし。

俺までそうしなきゃならないって気にもなるくらいだ。

「でえでえっ！ 私が御園沙映って言うの！ 直人って言うんだっけ？ よろしくねっ!! けど、本物の男の子だー、外じゃ初めて見たかもー」

綾小路さんが続きを話そうとしていたところに体ごと乗り出してきたのは御園さんだ。

とりあえずで声大きい。

でも、俺が嫌いなタイプののでかさってヤツじゃなくて、クラスで誰とでもずつと話しているタイプの体育会系……ギャル系？ いや、違うか……な、でかさなんだけど……いや、やっぱでかいな。

これまでに会ってきた人たちが控えめだった分、余計に。

そのせいかな、一瞬後ろで護衛の人が身構える音がしたし。

……大丈夫な人、なんだよな？

華道とかやっていそうで距離を初めから取っていた綾小路さんとは違って、会ったばかりのときからそわそわしていたし、こうして今もテーブルに手をつけてぐいっと顔を近づけてきているし。

好奇心ですってばかりの顔と目が、俺を食い入るように見ている。

「ほら御園さん、榎本様が驚かれましたよ。初対面の男性

に対するときにはどうすると教わってきましたか？」

「え？ 私、ぜんぜん話したことないしキョーミ持ったこともなかつ

たから分かんない。お家ではお兄ちゃんにはいつも抱っこしてもらってるし。なのになんで駄目なの？ ね、なんで？」

「……………」
思わず綾小路さんと目が合う。

……………たぶん同じことを考えているんだろうな。

少なくともこの人とは上手くやっていけそうな気がする。

御園さんは……………元気を増し増しにしたひなたさんみたいなものだって思えばいいのかもな。

体のサイズはぜんぜん違うけど。

あと胸も……………いやいや、だから失礼だって。

「……………ええと、榎本様。私たちの名字で……………と、失礼しました。ご事情がお有りでしたね。私たちはこちらの学園国家の所在しております日本国の綾小路家と御園家という家の末娘です。なので……………一応は名家と呼ばれる立場ですけど、この歳でも結婚も出産もしていませんわ。この先も……………まだ保留ですし、予定もございません。こういうわけですので、お気軽に接してくださいね？ ……あと、御園さんが苦手なようでしたら、先生におっしゃってくださいいな。きつと別の方に」

「いつも思ってたけど、綾小路さんってカタッ苦しい話し方するよねー？ ねー、お嬢さまってそういうものなのー？」

「……………御園さんも私と同じような家の方だったと記憶していますが……………、と言いますか、これまで何度もパーティーなどでご一緒しましたよね……………？」

「え？ ……だってうちはお母さんが好きなようにしていいって言うから好きなようにしてるんだよ？ お姉ちゃんたちもお兄ちゃんも綾小路さんみたいな話し方してるけど、私は別に怒られないし。あ、パーティーっていつもおいしいごはん出るから大好きっ！ あー、タッパーダメなのが毎回もったいないなーって思ってるのっ」

「あり？」

綾小路さんともつかい目が合って、無言で軽くうなずき合って、納得した。

と同時に短い沈黙が降りたことで、俺がまだほとんど話していないっていうのに気がつく。

「……あの。 ええと、綾小路さんと御園さん」

「私は沙映！ さえでいいからね！ 友だちはみんなそう呼んでくるしっ。 さえちゃんでもさえびよんでもいいよ？」

「……私は綾小路で構いません。 もちろん晴代と呼んでいただいた方が……その、婚約者という立場上、何より直人様のご事情的には良いのですけれど、無理はされなくとも結構ですよ。 だって、たった今、こうして軽くおはなししている仲なのですから」

中腰のまま疲れのないのか分からないけど、御園……沙映さんは、ずっと俺のことをびよんぴよんとしながら興味深げにのぞき込んでいる、テーブルの上の食器がかたかたと音を立てる。

綾小路さんは、さつきまではそれを止めようとしていたけど……俺が落ち着いているからか手を引つ込めて、背筋を伸ばして俺を控えめに見てきている。

「……じゃあ、とりあえずで沙映、と、晴代……って、外では呼ばせてもらってもいいか？ なるべくそうした方が良いつて、美奈子さんからも言われたし」

「もちろんだよっ、直人っ！」

「ええ、直人様」

「……………」

……今朝まではあまりにいろんなことがあったから、気にならなかったけど……女子に下の名前で呼ばれたのなんて、中学生生活でも限られたくらいだったからものすごくむず痒い。

大体は「榎本君」……まあ、親しくもない相手だしな、それに他の男子からもそんな具合だったし。

……悲しくなんか無い。

それもこれも、俺に積極性がなくなっただけ距離を置いていたせいなんだ

からな。

と、こんな考えが浮かんでくる程度には、彼女たちと顔を、目を合わせているだけで手汗が出てくるほどには緊張しているんだけど、それは相手、この世界の女子、女性たちも同じらしい……っていうのは、教室を出るときに早咲さんに言われたばかりだ。

なんでも、お嫁さん……ないしは愛人、もしくは気まぐれの相手として選ばれなかった女性は、幼いころからほとんど男を直接に見ることにすらないとか言うからな。

……あの人、ほんとうに頼りになる人だな。

いつかお礼したいところだけど……まずは俺が、慣れなきやな。

けど、さっきお兄さんと言っていたし、綾小路……晴代さんはともかく、御園……沙映さんは。

「それで、御園さん？ 御園さんご自身のご紹介、まだされていないのでは？」

「え、そだっけ？ してなかった？ ……あ、してなかったねえ。んじやね、沙映、実はちよつと前まで海外ふらふらしてたの。だっておんなじとこにいても退屈じゃん？ ってことで、1年おきくらいにいろんな国の学校行って、けどさすがにそろそろ戻ってこないと日本語忘れちゃうし勉強追いつけないよー、いいとこ入れないよー、ってお兄ちゃんにすっごく心配されたから戻って来たの！ あ、うちのお兄ちゃんって他の子のお兄ちゃんとかお父さんとは違ってますっごくフレンドリーなの！ だからねっ、そんな感じ！ よろしくね!! で、直人はどーして今まで」

「はーい、そこまでです。 ……御園さん、先生から念を押されたばかりですよね……？」

「あー、そだっけ？ …… ……ん——
……あ、そだつた、直人のことはあんま聞いちゃいけないだよ、りよーかいですつ。 ゲンコツやだしー」

……なるほど、このふたりの関係は早咲さんとひなたさん……よりも、なんかこう、クセが強いもんだって思っておけばいいのか。

ついでに言えば、沙映さんはふたりで抑えておかないと、うっかりで俺のことを外で話しかねないっていうのも。

……………ほんとうに大丈夫なんだろうか？ 協力者が、この子で。

晴代さんは、美奈子さんとか早咲さんくらいには頼りになりそうだけど。

ひなたさん……………よりも、なんだか危うっかしい感じだし。

「……………その辺りは追々話し合いきましょう。私の方でも、御園さんとはなるべく時間を取って打ち合わせをしておきますから。今は顔合わせですものね」

「……………よろしくお願いします、晴代さん。俺も、あんまり慣れていなくって」

と、こっそりと話しかけてきてくれる晴代さんに、小さく返事をする。

……………うん。

こういう人は落ち着くな。

「あ、そだ」

「……………まだなにかあるんですか？ えっと、沙映、さん」

「だからささえていいってー。それよりそれより、私たち婚約者ってことにしてるんでしょー？ 直人のための演技でー。なら、綾小路……………呼びにくいから晴代ちゃんね、はるよちゃん。晴代ちゃんのはるよちゃんってキャラだからいいとしてー、直人ってどー見ても女の子が大っ嫌いー、な男の子じゃないでしょ？ うちのお兄ちゃんくらい……………えーつと、自然？ な感じでしょ？ なら、他の人にはともかく私たちに対して丁寧な話し方っておかしくない？ 他の人からしてみたらさ？」

「…………………………確かに」

「…………………………それは、そう、ですね……………」

……………もしかして、頭は良い……………のか？

いや、勉強も運動も平均を行ったり来たりな俺が言っているいいセリフじゃないけど。

いや、でも、その。
会って早々からの話し方が……なあ。

○

「……では、今後はそのように。 私たちは「事情」があつて内密、しかし幼いころから顔見知りではあつたという程度の婚約者であつて。呼び方も、下のお名前です。 榎も……直人様も、できる限りふらんに話しかけてこられるという事で、よろしいですか？」

「いいと思いますっ……この定食おいしいねー」

「はい……じゃない、いい、と、思うよ」

方針が決まつてからというものの、綾小路さん……いや、晴代さんか。晴代さんがいろいろと決めてくれたおかげで俺自身は特に言うこともなく、すんなりとこれからについてが大体分かった。

ちなみに途中から沙映さんは食事に夢中だ。

晴代さんと俺のプレートから「もらうね？」って言いながら、ちよいちよい取っていく有様。

………お子さまか。

「それは良かったですわ。 直人さん、もし今日決めていなかったことについて聞かれたり、対応が必要であれば私……いえ、恐らく沙映……さんでも大丈夫でしょう。 そのまま私たちに連絡をして、問題を投げてください。 そうしたら、私たちのどちらかが対処致します。 ……基本的におひとりになることはないと聞いていますけれど、同じ部屋で住んでいる訳でもありませんし、どうしても私たちがすぐに駆けつけられないこともあるでしょう。 もちろん榎本……あ、ええと、美奈子先生とジャーヴィス先生もご承知のことと伺っておりますので、そちらでも問題ありませんわ」

「あ、でも、SP……ガードの人がいつも一緒なんじゃないの？ ほら、今みたく。 ……あー、おトイレとかおふろは別かなー。 なら、スマホずつと持ち歩いておいてすぐにおはなしできるようにしておいて、ものすごく困ったら思いっきり硬いものに叩きつけたらブ

ザーなるようになってるんじゃないやなかつたんだっけ？ 男の人のって。

だからそうしたらいいと思うよー？」

「そうですね。 なら問題ないのですね」

.....。

スマホが防犯ブザー代わり？

.....ひよつとして、ここつて男にとって.....美奈子さんが言っていたよりもずっと物騒な世界なんじゃ.....？

いや。

.....分かってたこと、だったな。

ここが、俺みたいな男にとって、生きづらいことこの上ない世界だっけ。

12話 順応と諦観

「……あ。あとー、なんか言っておいてって言われてなかったっけ？ 晴代ちゃん。先生から。なんだっけ？」

「……そうでしたね。ありがとうございます、沙映さん」

食事こそおいしかったものの、俺が知っている女子っていう生きものの食べる量じゃなく……沙映さんは俺よりも多い皿を食べ切り、ついでのように俺を見上げる。

一方の晴代さんは俺と同じくらいの量。

………とりあえず、俺のことをそこまで意識しているとかじゃなさそうで安心する。

そんな人たちだから、俺にとっては安全なんだろうな。

晴代さんは……どう見ても襲ってくるような人じゃないし、ああいや、怒ったら長刀とかで迫ってきてきそうな雰囲気はするけど、沙映さんはひなたさんほどじゃないけど精神的にまだまだお子さまって感じだし、せいぜいがほっぺを膨らませる程度だろうって印象だ。

……ふたりとも、悪い意味じゃなく、無害っていう意味で。

「直人は別のところから来たんでしょー？ だったら着いて行くの大変だし、男の子で高校の勉強してるって言うのってすごいもんねえ。

だからここについての知識とか勉強とか教えなさいってことなんだったっけ？ 外からはだいたい進んだことしてるしねー、追いつくの大変そー」

「そうですねえ、特にうちを含めた数クラスは来年には大学の内容に入りますし。……ああ、後日榎本先生や野乃さんに分からないところを教えていただきませんと」

お茶をすすりながらしずしずと口にされたその言葉は、高1になって間もない俺にとっては聞き逃せないものだったけど……今は置いておこう。

なにせ、まず慣れることだもんな。

美奈子さんにもそう言われてるし。

と言うか、大学？

……俺、高校受験終わったばかりで楽しい春休み終えたばかりなんだけど？

「休み時間とか放課後とかつ。あ、おやすみの日もそうだろうねー、家族の時間ってことでちよつと広めの個室使えるようになるから、護衛さん以外の人たちが気にしないで教えられるもんねっ」

「……あ、もちろん直人様がよろしければ、ですよ？ 護衛の方をお願いをして、人目を遠ざけたならどこでだっておはなしはできますし。別にお勉強は求められませんから、もっぱらこちらの環境に慣れていただくためのものです」

「……いや。大丈夫だ、ありがとう、晴代さん、沙映さん。俺、聞いてのとおり……その、いろいろあつて。

何にも分かんないからさ」

「だから私は沙映って呼んでって！」

「……ああ、沙映」

「……ふふつ。私はお好きな形で結構ですわ」

こうしていると、ここが似ているようでぜんぜん違う世界なんかじゃなく、元の世界の、俺の学校の……「学園」とかに地味が変わってしまっている高校で知り合った女子たちみたいな感覚だな。

……そうじゃないのは、視界のあちこちにいる直立不動の兵士さんたちだけだ。

だからこそ、良くない。

許嫁、結婚目前の間柄、家族……っていう設定で通すって美奈子さんに言われているからか、ふたりとも最初るとき以外はかなり距離が近い……いや、沙映さ、沙映は初めから近かったか……とにかくふたりとも距離が、心理的にも物理的にも近いんだ。

そういう設定だから怪しまれるのは当然の上で、それでも演技をしなきゃいけないって言うのは分かっているんだけど。

でも。

……俺が話したことのある女子たちとは比べものにならないくらいに顔を近づけてくるし、俺と話をするたびにどきつとするような笑

顔を返してくる。

休み時間に他の女子から声をかけられたりしていたときに、さりげなくどつちかは俺に体をくつつけるようにして牽制していたし。

……肩がくつつくだけで、髪の毛の匂いが漂ってきて……それだけで俺はキツかった。

その上に両腕で軽くでも抱きつかれてきたら……まあ、その。

柔らかい感触が嫌でも分かるんだ。

つまり、だな。

女っ気の無い小中高生活……高校は1年目でこれだけ……を送って来た俺にとつて、これはかなりクマ。

ふたりからそれぞれ別々の匂い……香水でも使っているんだろうか……が漂ってくるし、それだけで今どつちが俺の側にいるのか分かるようになったくらいだし。

……あと、ふたりとも、背はともかく……でかいから。

なにがとは言えないけど。

……常識が違えど、男女の価値観が逆であろうと、こういうところは変わらないのか。

あいかかわらずに、俺の世界の俺の高校だったらまず間違いなくどの学年の男子も知っているレベルだろう美しさと……かわいさ、あとはでかさを揃えたふたりが話し合っているのをぼうつと眺めて俺は思う。

……俺、持つんだろうか。

彼女いない歴イコールな人生を送って来た、どこにでもいる男……だった、俺が……こんな子たちに囲まれて。

あ。

そうか。

この世界の……貴重な男っていう伴侶を得られない99%の女子、女性にとつて……俺は、そういう気分させられるもので……そういう存在なんだ。

たどえ顔も体つきも頭も平凡であっても、男という、ただ、それだけで。

誰もいない密室にでも入ったら、理性が負けて襲ってしまいたくなるくらいの存在なんだ。

○

「……直人様？ 今晩は何に致しましょうか。 この前お好きだとおっしゃってましたイタリアンに致しましょうか？」

放課後になって、……あれから少しが経ち、勇気があって、かつふたりと護衛さんたちのアイコンタクトで俺に近づくのを許された女子たちとの会話が途切れた瞬間を狙って、やっぱり制服を着ていても着物を着ているような印象の晴代さんが近づいてきた。

「あー！ 私はなんでもいいよ！ でね、昨日寝る前……うわつとと、えと、夜更かしして起こさないようにーって別の部屋行って映画観てただけどねっ！ ……ふー、それ超おもしろかったんだー、きつと直人もおもしろいって思ったから、今夜3人で観ないかなーって思っ！」

……こつちの方は完全に、何も考えずに突撃してきて、俺のうなじに柔らかいものを押し付けつつ上からのぞき込んでくる沙映さん……、沙映。

……この子、婚約者って立場にならなくてもなんやかんやでゼロ距離な気がする。

誰に対しても……俺が男とかそんなのは関係なく、わざとじゃない、あくまでも普通のこととして。

……ああ、仲のいい兄さんがいるとか言っていたし、そのせいだろうな。

だけど、これ、念のためにだけ……わざとじゃないよな？

いや、さすがにそれだと護衛の人たちに怒られるからしないか。
しないよな？

……それに、こんな裏の無さそうな子が腹黒いだなんて、思いたくもないし。

そんな、牽制だろう嘘の会話をしているふたりを見て、女子たちが
少しずつ離れて行く。

……………。

カバンに荷物を……ノートとプリントだけだけど、を詰めているあ
いだに聞こえてくる、姦しい女子たちの声。

前の方では晴代さんを中心に、おとなしめ、上品な感じの女子たち
が料理の話題でクスクスって感じに盛り上がっていて。

後ろの方では、そもそも俺に興味が無いような女子も含めて、……
体育会系？な感じの女子たちが、あーでもないこーでもないって感じ
の話を繰り返して、とにかくに笑っていて。

それは、俺の知っている放課後の居室とは雰囲気がるで違うもの
で。

「……皆様、申し訳ありませんが、そろそろ私たちはお暇致します。

さあ、直人様」

「そだねー、部屋に戻ったらまずおやつだもんねー。今日はなんだ
ろねー、直人っ」

カバンを閉じると共にふたりから同時にかかってくる声で、今日の
学校……いや、学園になっていたか、での放課後はおしまいとなり、俺
は教室を後にするっていうスケジュールになっていた。

部屋……もちろん俺の個室、いや、やたらと広いアパートって感じ
だけど、そこじゃなくて、「家族」な男女に与えられるダイニングみた
いな、応接室みたいなところへ向かうことになるそう。

そして夕飯までを3人で一緒に過ごしたら個室の前まで送っても
らい、そこでお別れ。

そういう流れを、これからずっと続けて行くんだそう。

.....
もしかして俺、もう死んでいて.....ここは天国な
んじゃないか？

この都合の良い、良すぎる状況を正当化するための小難しい状況設定は、俺にそれを気づかせないためのものであつて。

あるいは、走馬灯の代わりに都合の良い妄想を見ているだけだった
りするのかもな。

.....死因はさっぱりだけど、そんなものは今となつてはどうだつて
いい。

だつて、女子ともお近づきつてもものになつたことさえないこの俺が
.....一人称だつて、高校に入ったからついでで「僕」から「俺」にな
んとか変えるっていうしよもない見栄を張るくらいしかできな
かつたこの俺が、学校中の綺麗どころを集めたようなクラスに男とし
てひとりで入ることになつて、特に綺麗な女子ふたりに起きているあ
いだじゅう構ってもらえて。

女子が好きそうな話も知らなくて、できなくて、話しかけることす
らできなかつたから連絡を取る女子もいなくなつたのに、ここではとに
かくにモテて。

何をしても好意的に受け取ってもらえて、笑顔を向けてもらえ.....
甲斐甲斐しく世話を焼いてもらえて。

ほとんどの女子が俺に好意を寄せてくるし、それを隠そうともしな
いし。

なんて答えたらいいか分からないから曖昧にごまかしても怒られ
たりはしないし、機嫌が悪くなるっていうこともない。

気の利いたセリフを思いつけなくても、何も言わなくても、ごきげ
ん取りさえしなくても.....凡人の俺が、ここまで無条件にモテて。

オマケに俺が望むのなら、いつでもハーレムいいぞつて太鼓判押さ
れていて。

冗談半分で美奈子さんに聞いたら、クラスどころか学校の8割以上
はフリーだとかとんでもな状況らしくて。

元の世界の、……本物の母さんや知り合いと会えないのは寂しいし、あつちは今ごろどうなっているんだろうとかも思うけど。

でも、本物の母さんを若くしたような美奈子さんもいるし、家族扱いしてくれているし、本物の母さんよりもぜんぜん優しいし。

フロア……俺の個室は男用の特別なところだったらしい……は違うけど、建物自体は同じところで寝泊まりしているから、母さん、それに他の先生たち……ローズ先生とも、俺が頼めばいつでも顔を合わせられる。

下手をすれば、残業とか部活の顧問で家にいないことが多かった母さんとよりも、一緒にいることが多いくらいになりそうだし。

……部屋を汚くするほどに私物が無いっていうのもあるけど、きつと散らかしっぱなしでも誰からも怒られることなんてなくて、寝る時間も起きる時間もある程度好きにしている始末。

聞くところによると、勉強すらする必要もないらしい。

なんなら授業を受ける義務もないんだとか。

「男」は。

それでもって、映画もゲームもマンガも本も望めば好きだけど、すぐに用意されるっていう、正に天国な環境だ。

「やっぱここ、天国なんじゃないか？」

天国だろうな、きつと。

だって、ここは夢みたいな世界。

何不自由ないどころか身に余るほどのものを、知り合うすべての人から与えられるんだから。

そう思うと、思わずで顔がにやける。

きつとだらしない顔、俺、しているんだろうな。

そう、思う。

……
けど。

んなわけは……ないんだろうなあ……。

13話 葛藤

.....あれからしばらく考えてみた。

幸いに俺がひとりになりたいって言えば放課後は帰宅部ができたし、なんならダラダラ菓子を食べながら適当なドラマでも観てぼーっとする時間も充分にあった。

だから、こうしてだらしない格好でテレビを観ながら菓子を食ってごろごろしている俺だけど、頭の中じゃ理解しているんだ。

ここにいて、俺を好きだって気持ち隠そうともしない女子たちは、みんなかわいくて、金持ち……名家、それもいろんな国からの、つてやつの子で、優しく、俺が引かない程度に積極的で、誰かひとりを選ばなきゃならないどころかむしろ気に入ればどんどんハーレムしろってなっているし。

こうして挙げてみるとどんだけ都合がいいんだって思うけど、実際にそうなんだからしょうがないよな。

ああ、しょうがない。

……やはりここは天国。

男の俺にとつての楽園だ。

そのはずなんだ。

.....。

だけど。

なんとなく、分かるんだ。

俺はもう、あつちに戻ることはできない。

仮に戻るとしても、それはきつと……ここに来たときのように、気がつかない内に戻っていて。

戻ったらきつと、母さんにどこ行っていたって引つ叩かれる程度。

そうしてここでの全ては夢だったってことで終わって、遅れた勉強やらなんやらで終われる、これまでの日々が続くんだろう。

だから、それまではここを満喫するしかないし、周りのすべての人もそれを望んでいる。

さもなくば、これのぜんぶを兼ね備えた究極のバカしかいない。
そんな完全なるバカじゃなきゃ、こんな状況……手放しに喜べるはずが無いんだ。

できれば俺もそんなバカでありたかった。

こういうときにだけムダに常識が邪魔するんだからな。

……だって、そうだろ？

気分が沈みそうになるときにはあえてさつきみたいに煩惱に頼ってはみるけど、それでもやっぱりキツイ。

たぶん頼めば……というか酒が入った冷蔵庫が用意されている時点で、この世界の成人にはとつくになつていっているわけで、だとするとなんにも考えなくてもよくなるっていうアルコールに頼ることもできる。

そのアルコールの勢いっていうものに頼って、理性を飛ばして……ってことができるはず。

酒池肉林、酒を浴びながら何も考えず、うまい料理を毎日楽しみ、よりどりみどりの女子たちに囲まれて勉強も就職もせずに、俺の「この世界の男としての義務」という理想郷を楽しむことだってできるんだ。

………ただけど、それが解決になつていないっていうのにも気がつける程度には、俺は正気だ。

どっかで聞いたことがあるように、周りが女だらけっていう環境は……夢見がちだし実際にこの夢のような世界でもそうだろうけど、キツいらしい。

男の、精神的に。

幸いにして、ここではマイナスの感情に巻き込まれるどころかまぶしすぎるプラスの感情で困っているっていう、きつと贅沢な悩みではあるんだろうけど……それにしたつて、周りがほぼ女で男は見かけないっていうのが当たり前な状況がずっと続くっていうのは、つらい。

ニュースで目にしたことがあるような共学になったばかりの元女子校とかとは違って、ここには……先生ですら男はいない。もちろん用務員さんたちも全員女。

数少ない男子生徒も、あくまで在籍しているだけという建前だという。

だから当然にして、できるだけ人目を避けるようにとはされているけど、それでも他のクラスの女子と廊下をすれ違ったりすることはあるし……品定めされるように、じつと、立ち止まられて見られるんだ。

それは、このクラスの女子たちも同じ。

控えめか大胆かっていう違いしか無い。

もちろん、俺が恋愛とかに積極的じゃない性格っていうのも、女性に慣れていないっていうのもあるんだろうけど、それにしたって……出会って数日の女子たちから痛いほどの恋愛感情でさえない憧れの気持ちや珍しさ……そして、自分の将来、結婚相手が男だっていうステータスと……こどもが欲しいっていう無言の視線を感じて、嬉しい気持ちになれるはずがないんだ。

俺は、それで喜べるバカじゃないからな。

そんな喜べる大バカだったらどんなによかったか……きつと、今ごろはもう何人も囲って、こうしてひとり寂しく過ごすじゃなく、なんにも考えずに囲まれているんだろう。

酒池肉林をして。

けど、………あの子たちが見ているのは、「俺自身」じゃないから。

俺っていう、特殊な事情でまだたつたふたりのお嫁さん……それもまだ婚約者しかいないっていう男。

男性という生きものの、下半身だけなんだから。

○

分かってはいる。

何度も何度も考えたんだから。

この状況が正反対になって、男が多くて女が少なく、それで俺はその男の中のひとりで、さらに突然クラスに相手がふたりしかない女子が入って来たら……俺だって、きつと、同じような視線を向けるだ

ろうってことに。

だからしょうがないことなんだし、美奈子さんたちに守ってもらえているこの状況はずっといいものなんだっていうことにも。

……ああ、うだうだ考える俺自身が情けない。

けど、こういう性格じゃなきやとつくに元の世界でもいくらかは女慣れしていたわけで。

……品定めされる方っていうのはキツいなだな。

何がキツいって、視線がキツい。

晴代さんと沙映でさえ……美奈子さんが選んだだけあつてそういうのはほとんどないけど、それでも俺のことは、きつと「男という生きもの」っていうカテゴリーの中の「相手がいないっていうものすごく珍しい生きもの」でしかないだろう。

ああ、いや、あの沙映はどうか知らないけど、でも、たぶん。

押しが強くない、それだけでもありがたいことではあるし、さりげなく守ってくれているからありがたく思わなきゃなんだろうけど。

……だけど、こういうのを感じて今日みたいに参っているときに癒しになるのが、視線が合う女子のみんながみんなそうだってわけじゃないってことだ。

それだけが、唯一の救いだろう。

——ひとりめは、俺を見つけてくれた恩人……変な輩とやらに連れて行かれる前に起こしてくれて美奈子さんたちを呼んでくれたひなたさん。

あのちびっ子、……いや、背が低いからこそ倒れている俺を見つけれられたのかもしれないな。

ああ、どうしてあの日、あの時間にあの校庭に出てきて俺を見つけられたのか、聞くのを忘れていたな。

とにかく、今でも変わらずに中学生……下手をしたら小学生にしか見えないけど、それが逆に俺を安心させてくれる。

基本的にひとりで見かけるところを見かけることはなくって、だいたい早咲さんや他の女子たちと一緒に……というか子守をされている感

じだ。
で。

もちろん、ものすごくこどもっぽいついていうのもあるんだけど、それ以上に安心できる情報がある。

なんと……あの見た目と中身ですでお相手がいるらしいって、軽いノリで聞かされたときには本気でびっくりしたし、この世界の常識が違うんだって改めて実感させられた。

ま、まあ、この世界で16にもなれば相手がいるならいる、いないなら恐らくずつと独り身、あるいはそうでなくても女性同士でくつつくつという流れらしいしな。

女性同士でこどもが産まれる世界なんだ、当然の流れなんだろう。女性ひとりで産んで育てるっていうのも多いそうだしな。

……ひなたさん、どう見てもこどもなものな。

っていうのは、俺の世界の価値観のせいなんだろうな。

だって、13とかでもう……その、するっていうのが当たり前前の価値観なんだもんな。

それこそ、大昔にタイムスリップしたかのように。

俺にその気は無いけど、男の、俺の世界の男たちの価値観で考えてみると……肉食獣ばかりなところに明らかかな子鹿がいれば、そりや気にはなるんだろうし、相手にもしたくなる。

だから、女子であつてもひなたさんみたいな子は人気があるだろうな。

……こんな憶測はどうでもいいけど、おかげでひなたさんに限っては密室でも襲ってくる心配がゼロってのは何よりも大きい。

そういうわけで、ただでさえ安全だつて思えるひなたさんはさらに安全になつて……必然として、俺から話しかけられる数少ない人のひとりになつている。

——続いてはひなたさんとセットな早咲さん。

いつも視線はひなたさんに向いているし、それなのに初対面するときからなにかと俺のことを気にかけてくれるいい人だ。

こっちの常識とかはだいたい早咲さんがすりあわせしてくれるし……晴代さんや沙映とは違って、ずれているって気がついてから教えてくれるんじゃない、ひよつとしたらこれも違っていたりする？って感じで、まるで別の世界を知っているかのように、異文化を察知するって感じなんだろうな、つまりは気配りがものすごく上手な人。

きつと沙映みたいにいるんな国で暮らしたことがあるんだろう。

……なぜか初めから男装、というか男子の制服を着ていたりして最初は驚いたけど、聞けばこっちではよくするものらしい。

……男女が逆転しているんなら女装って印象なのかと聞いてもみたけど、そうでもないとか……そこところは説明を上手く飲み込めなくって、正直よく分からなかった。

初めのころ、男子がいると思ったら女子だったとかっていうのがあつてどういうことなんだったってもやもやしていたのはこれが原因らしい。

俺が勝手に思い込んで、勝手に落ち込んでいただけなんだけどな。

早咲さんと言えど、その辺りは完全に常識が違うから気づけなかったんだろうなあ……。

学年主席とかスポーツ万能とかとんでもない噂ばかりだけど。

あ、あと、大切なことがひとつ。

……失礼なんだけど、早咲さん、ひなたさんほどじゃないけど胸が控えめだから無意識に目が行かない、男装……男子の制服を着ている姿しか見たことがないから肌や体のラインの露出っていうのがまったくないから……静かな雰囲気も合わさって、他の女子たちに比べると「女」っていう意識が薄くって、女子のクラスメイトっていうよりは女子に囲まれている中性系美男子な距離感なのは、すごく大きい。大きくないっていうのが、すごく大きいんだ。

……いくらこの世界でも胸の大きさは女性の命だ、さすがに怒られそうだな。

絶対口にしなないでおこう。

14話 Turning Point

——さて、どう見てもこどもなのに結婚相手……もう結婚しているのか婚約とかなのかは聞き忘れたけど、とにかく決めた相手がいるし、そもそも無垢って印象しかないひなたさんと、いつも落ち着いているし気が回るし……あとは上手くは言えないけどなんだか「女」って感じがしない早咲さん。

——それに加え、俺の母さんの若いころの写真そっくりで……こちららは結婚していて……お子さんはいないらしいけど……そう言っていた美奈子さんに、同じく既婚者らしいローズ先生。

まあ母さん……美奈子さんは、もういない父さんみたいにああいう厳しい感じの女性が好きな男……いや、それ以前に美奈子さんみたいな人は同性に人気があるんだし、ローズ先生に至っては説明する理由もない。

それにここではほとんどの女性は独り身か女性を伴侶にするんだ、いちいち考えても仕方が無いだろう。

そう思っていたからこそ、それを聞いてもそこまで驚かない俺がいた。

で、この4人……この世界に来てからずっとお世話になって今でもなり続けている彼女たちしか、俺にとって気の休まる相手ってというのは、このトンデモな世界には、いない。

晴代さんや沙映は、俺が気に入ればっていう前提ではあるものの結婚相手として選ばれているわけで、隠してはいるけどやっぱりなんとなくそういう雰囲気を感じる子たちだしな。

いや、俺なんかにはもったいなさ過ぎるくらいの見た目と性格と立場の人たちなんだけどな……さすがに完全に警戒を解くっていうのはできないんだ。

俺は据え膳を、っていう性格じゃないんだし……そもそも女子との接し方すらいまいち分かっていないし。

彼女どころか、いい雰囲気まで行った女子さえいまま高校生に

なつたこの身を舐めないでほしいところだ。

……ということ……ちょうど終わった、モブの大半が女性で「ヒロイン役」の何人かが男っていう不思議なキャストのドラマ、ついでに言えば展開もオチもいろいろと感性が違いそうなものから目を離し、レストランとかにある羽が付いてくるくる回っているインテリア付きの高い天井を見上げつつ、思う。

……この世界で、俺が安心できる相手は、あの4人と、滅多に外に出ないという男たちと……既婚者な女性だけなんだな、って。

あ、あとはあの兵士さんたちもだろうか。

……いや、あの人たちのことはよく知らないし、やっぱり安心し切ることはできない。

で、この俺だけだ。

——このまま帰ることができなければ、たぶん、一生……暢気に歩くことすらできないだろう。

例えばひとりで下校してコンビニで適当なものを食べながら帰ったり、休みの日に適当に駅前をぶらついたり……なんて、な。

どこをどう歩こうとも、治安の悪い国の夜の繁華街をひとりで出歩く女性、っていう状況がびったりだしな。

笑えもしない。

一夜にしてこんなところに放り込まれて、人前ではなんとか慣れたって顔しているけど……やっぱ、気持ちはムリだよな。

少なくとも、俺にはムリだ。

よっほどのバカじゃないんだから。

……。

……ふつうの相手と、ふつうに話して、ふつうに生活する。

それが、こんなにも貴重で、あつけなく持って行かれるもんだとは……思ってもみなかったよなあ……。

○

ん。

……夜中か。

寝る前までずっと考えていたから眠りが浅かったのかな。

少しばかり……そう。

ちよつと慣れたからこそ、逆に、いろいろと考え込んでいたもん
なあ。

……
ぎし、と、変な音がする。

「……あれ？」

両手がバンザイしていて両脚は大の字っていう妙な寝相をしてい
たのに気がついて、肩でも凝ってたのかな、なんて思いながら下げよ
うとしたけど手が動かない。

……動かないんじゃない。

動けないんだ。

軽く動かすと、カチャカチャという金属音が頭の上から聞こえてく
る。

……
……手錠!?

いや、……そんな、まさか。

俺は何も悪いことなんて……じゃない、ここは俺の世界じゃないん
だ、だったらどうして。

……
軽く手脚を動かす。

頭の上からと同じように、下からもカチャリという金属の音がす
る。

……
……足首も、そうらしいな。

カチャカチャガチャガチャとは音を立てるものの、肌に触れている
部分はゴムか何かできていのはまだマシ……だけど、とりあえず
身動きが取れないのが不味い。

肩や脚のつけ根から引つ張られているって感じじゃないけど、肘と

か膝を曲げられない程度には伸ばされているっていう絶妙な状態。

目が覚めたのも、布団をはぎ取られていたからっていうのと……窓が、開いているので、冷たい空気が体を冷やしていたからだろう。

それにしても俺は……どうしてこうなる、いや、こうされるまで起きなかつたんだ……？

ぐるぐると頭が回る。

そのついでに……俺がこっちに来たばかりのことも思い出される。

……
嫌な。

嫌な、考えが昇ってくる。

それを打ち消そうと、どうにかしてこの状態を……暗いからほとんど何も見えない中で、何とか考える。

手脚は、それなりにきつく伸ばされている。

少なくとも姿勢を……仰向けな今のこれを変えられない程度には、拘束されている。

少し力を込めてみたけど、まず肩が痛くなってムリだと分かる。

痛くはないけどすき間がないように止められている4カ所は、手首と足首を回すのも難しい。

すっかり冴えた頭と寝ていたから暗いのに慣れているはずの目で見回してみるけど、分かるのはうつつすらとした……寝たときにみっていた寝室の景色と、開いたままの窓から入り込んでいるカーテンのすき間からこぼれてくる薄い月明かり。

音も当然にしない。

するのは、カーテンがはためく音だけ……
や。

それだけじゃない。

誰かの……ふたり以上の誰かの声が、聞こえる。

遠いところにいるのか、話しているのが分かるっていう程度のものだけど……最低でもふたりの人、もちろん女の人たち、が、俺に与え

られた部屋にいるっていうのは、分かる。
つまりは、侵入者っていうことで。

恐怖。

それを、感じる。

——こわい。

気がつけば手のひらも足の裏も汗ばんでいて、息も荒くなつていた。

ダメだ、落ちつけ。

ふうっ、と息を吐き、何回かの深呼吸で心を落ちつけよう。

相手が誰なのか、何をしようとしているのかが分からない以上、そしてなによりも身動きが一切に取れない以上、俺が起きたっていうのがバレたらまずい。

顔を見られたからには……っていうのはよく聞く話だ。

だから、無理やりにも息を抑え、できるだけ耳を澄ませる。

……とりあえずは寝たふりをおこう。

俺を起こすわけでもなく、どこへ連れ去るでも危害を加えてくるわけでもなく、こうして縛ったまま放置しているんだ。

まだ、ただの泥棒っていう可能性もないわけじゃない。

……そう、あつてほしいんだから。

「……おい」

「……っ!?!」

と、足音と共に声が急に近づいてきて……どう考えても俺の方に向けた声が振ってくる。

起きているのが、バレたのか!?

もう!?

息を抑えていてもだめだったのか!?

「……おい、聞いているだろう。どうするんだ、ここまでやったからにはもう引けねえぞ」

「……っ!」

「……はあ——……、分かってるわよ。 覚悟はとっくに決めていたでしょ。 あんたも、あたしも」

……。
知らない声……だと思う。

女……俺と同年代か少し上つてというのが分かる程度だけど、たぶん。

で、……。
……寝室の入り口に入って来た辺りで立ち止まり、ぼそぼそと話し続けている。

……犯人が複数、それも何かの相談をしているだけか。

俺が起きているのは……バレていたら立ち話なんてしないだろうし、大丈夫だろう。

そうなんだけど……。
……ま、当然女、だよな。

でも、俺だつて男だ、肉体的には……鍛えている方じゃないけど、このふたり……またはもつと多く、ガバラバラに来て、しかもこうしてがんじがらめにされていきやなんとかできる、かもしれないのに。

せめて、上下に引つ張られているんじゃないかと、映画みたいに両手両脚が縄や手錠で繋がれている程度なら、隙を見て……つていうのも不可能じゃないのに。

……。
いや、さすがに作りもんと現実の違いは違うって知っているけど。

でも、全く動けないのとはちょっとは動けるのとはぜんぜん違うし……それにしてもどうしてこいつらは、俺のことを。

「……まだビビってんのか？ そんなんなら私が先にいただいちゃうぜ？ 保護された身元不明の男つてトクベツもんの最初のをよ？ ま、ハジメテなわきやないから、精々が何日か分の濃い奴つてところだろうが」

……。
別に。 最初と2番目と、たいして変わらないでしょ。 量が多いか質が高いかの違いだけだったはずよ」

「……あー、脚震えてんぞ。 普段は威勢が良いのによ……。
……あーあー、分かった分かった、私がしてる

の見て次を真似しろって。男と直接にした経験ないと、ドーしてもビビるもんだもんなあ。分かる、分かるぞお？映像とか紙でしか見たことないもんなあ？」

「うるさいわね、さっさとしなさいよ。……あんまりもたつくと、彼、起きちゃうでしょ」

.....

.....

そ、つか。

そう、だよな。

この世界では、金よりも何よりも……自分のこどもを得るための種を持つ、男っていう種族が「高価なモノ」。

そんなのは、こうして目を覚ましてからちよつとしない内に分かっていたはずだもんな。

分かつてはいたんだ。

……いずれ、こういう目に遭うからこそ警護をつけてくれたんだし、どこの誰とも知らない年寄りの元へ連れて行かれるからって、だから、って。

.....

「難しいもんじゃないんだけどなー、男相手って。女相手の方がよっぽどに難しいしなー、雰囲気とかさあ。ま、したことないじゃーしょうがないか。いつもの自慢はどうしたんだか」

声の大きい方……たぶん年上の方なんだろう女の声が、足音と共に近づいてくる。

「薬さえ……役得だから口移しで飲ませてやりや、ほんの2、3分で男の方からがんばってくれるようになってるしなあ。意識もちょうどベロベロに酔った具合で、だけど体はゲンキそのものって感じ？」

あー、お前と組んで正解だったわ。 やりい」

……いや、待て。

たしか、警備の人たちはかなりいるって聞いている。

それは当然に……ローズ先生があれだけの人たちの指揮を執ってくれている以上、そうかんたんに破れるものでもないし、たとえ穴があったとしたって、そんなに長い時間じゃないはず。

俺さえ……薬って言うていたからものすごく不安だけど、それに耐えさえすれば、こいつらが不用心なおかげで開きっぱなしの窓にも気がついてくれるはずだ。

それに――。

「……声だけは気をつけてよ？　い……ただいて、連れ出してからが本番なんだから」

「大丈夫だって！　言っただろ？　……最高責任者とやらのツテで、絶対にバレないんだって、よ」

……。

最高、責任者？

それはつまり、俺は。

この学園そのものから見放された……売られたって言うこと、なか。

15話 諦めと、その先の

.....

俺の、すぐ近くまで来ているらしい……もう、この後に起きるだろう未来が手に取るように分かって目も開けるのが嫌になったし、耳もふさぎたいけど……女が、聞きたくなかった言葉を落としてくる。

「その協力者って……ほんとうに大丈夫なんでしょうね？ あたし、言ったでしょ？ ここでやるなんていうリスク冒さないで、先に連れ行つて安全なところまで。 まあ、そりや」

「だーいじょうぶだつて……しつこいな。 あ？ 言つたら、どんだけ声出しても大丈夫なんだつて。 なにせ、警備もみーんな、この1時間だけ別の方面に集中させるように……つて手配なんだから。 それにあつち連れてつたら私たち、まずおあずけだぞ？ 少なくとも数日は。 お偉いさんたちが楽しみ尽くして、すっかりやつれたころになってありがたくお裾分けだーつつつて、元気ない状態でしか楽しめねえよ」

「……………そりや あ、そうだけどさ……………」

……もう、大声を上げたらつていう望みもなくなった。

だつて、そういうことだもんな。

上がグルになつていって言うんなら、もう、どうしようもないんだもんな。

美奈子さんだつて言っていたじゃないか。

俺を秘密にしておけるのなんて、せいぜいが数日。

それで、その数日なんて……だらだら過ごしているうちに、とつくに過ぎていく。

こつちに来たばかりだから俺のことを気にかけてくれてしまったあの人たちと、なによりも、次に眠つたら元の世界で母さんに叩き起

こされて、これが妄想に近いただの夢だったんだって思えるはずだ。
……………そう、思い込みだったから、無駄に何日も過ごして
しまったんだ。

初めから……俺がここに来てからすぐに教えられたじゃないか。
いずれ……もたもたしていると、すぐにでも俺って言う「フリーの
男」を嗅ぎつけてくるヤツがいるって言うのを。

……………それが、金や権力がある順に来るんだっ
て言うのを。

そうだ。

最初っから分かっていたんだよ、俺は。

なのに、俺はずっとうじうじして……これまでを、俺の世界の
常識っていうものをどっかで引きずったままで、せつかくのみんなの
好意も受け入れ切れずに過ごしていて。

なんにも考えず、バカみたいに……男としての欲望に忠実になっ
て、俺でもいいって言うてくれていたあのふたりと、早く一緒になっ
ておけば。

冗談交じりに何度も言われた、とりあえずどちらかを部屋に招いた
ら、って。

少なくとも、こうしてひとりで部屋にいるようなバカな真似はしな
いでおけば。

……どこを、どう間違ったらそうなるっていう、俺に取っちゃ出来
の悪い設定としか思えないような、もうよぼよぼの爺さんたちの時代
に始まったっていう、男の極端に少ないっていう世界。

晴代さんたちからの補習で、歴史を教えてもらって知ったじゃない
か……ほんの何十年か前の、まだ遺伝子技術も進んでいなくて、ど
うしようもないって賢明にも気がついたこの世界の過去の人たちが、
「人類絶滅」っていう意識の元に……俺でも知っているような大きな
戦争が、途中で終わったっていうのを。

沙映でさえ知っていたように、人口を維持できなくなっていくついで
た国や地域……なくなつたそれまでがいくつもあるっていうのを。

ここは、そういう世界なんだ。

あの人たちは、親切にもそれを隠すことなく教えてくれていたんじゃないか。

男ひとりが女100人を相手にしても、まだまだぜんぜん足りないんだって。

人工授精の技術がなけりや、今ごろは男の取り合いで泥沼の戦争すら起きていたんだっていうのを。

それでもなお、この世界は100年後には数えられるくらいの国しか残らないだろうデイストピアだっただけのこと。

「んじや、悪く思うなよー? ……なんだっけか、監禁されていた?

それともなんかのビョーキで隔離されてた? あるいは事情ありありの隠し子? だっつうんだから、下手したらハツモノかもしれないなあ!?! いいか? もらっちゃまうからな?!

こんなところに……身寄りも無しに着の身着のまま来てしまった俺は、そのうちにどうなるのか、なんて、分かっていたんだからな。

こんな世界……丸ごとを相手にして俺を守り切るだなんて、その力も気概も、個人じゃどうしようもないものだって。

だから、もしかしたらローズ先生たちも、今ごろは俺がこんな目に遭いそうになっているってことにすら気がついていないのかもかもしれない。

あるいは妨害に遭って、分かっているても手出しできない状況なのかもしれない。

……………それとも、単純に気が変わって。

自分の危険と俺の身とを考えて……当たり前だよな、自分たちの生徒ですらない赤の他人だもんな、そんな俺っていう厄介ごとをさっさと引き渡した方がいいだとか、売った方がいいだとか……どうでもよくなったとか、めんどくさくなったとか。

それとも、俺のことを知った最高責任者とやらのツテ、っていうのから脅されて引いたか。

いずれにしても、何回か会っただけの厄ネタってやつでしかない俺は、彼女たちにとってはその程度の存在なんだ。

そんな俺を命がけで守ろうとする、意味がないもんな。

「……はい、はい、あたしたちの方は万事滞りなく。ただ、予想されていたようにセキュリティが強固で……、はい、もう数十分で対象の寝室へ侵入できるかと。ええ。万が一にでも起きないように慎重に進めておりますので、それまで陽動の方を……」

……美奈子さんだつてそうだ。

あの人にとつての俺は、息子じゃなくなっていて、ただの……自分や親戚の誰かと顔が似ている程度の、違う世界では息子だと言いつ張っているだけの男子生徒で。

いくら生徒想いだとは言つても、個人じゃ限界があるはずだ。

……脅されて、本物の……こつちでの本物の家族と、家族だと言いつ張っている男、どつちが大切かつて聞かれたら、言うまでもないもんな。

ああ……分かつていたんだからな。

俺は、バカになれないバカだつたんだつて。

「……ふう。あつちは手はず通りみたいよ……つてちよつと!? 見とれてなんかいないで、さつさと始めて終わらせてつて! 薬飲ませたらすぐなんでしょう!」

「焦るなーつて。 作戦通りじゃ、私たちまだ外にいることになつてゐるし、お前もそう報告してくれただろ? ……こいつはこの通り、まだ寝かせたままだしな。 調べた限りじゃ、こいつ、こつちに来てからはまだ誰の相手もさせられてないはずだし、何十回だろうと平気なんだからさ。 ……にしても、感心するほど特徴も無いフツの面構えだな。 ま、男は顔よか1日に何発」

「……下品なのは嫌い。 いいから、さつさとなさい」

「その下品なことーしようとしてんじゃねえかよ」

ああ。

……もう、いい、か。

どうでも。

自由がないつて言つたつて、これが男女が逆……俺が痛い目に遭わされてつとつどもをこの体から産まされ続けるわけでもないんだ。あくまで、気持ちよくなり続けるだけの……相手次第じゃ目はつ

ぶつておいた方がいいだろうけど、とにかく肉体的には快樂しかない未来なんだ。

そうだよ、頭の悪い設定みたいな世界なんだ、むしろ俺みたいな男にとつては極樂のはずなんだからさ。

これまで女つ気なんてなかったんだし、見た目が悪かろうと歳が行つていようと、俺に相応の相手だと割り切れば、なんてことはない。

この世界じゃ男は……健康な男はものすごく貴重なんだ、すぐにダメになるような扱いにはしないはず。

薬だけじゃなくて、メンタルだつてどうにかして維持しようとするはずだ。

少なくとも俺が……俺のモノが機能しなくならないようにするため、うまい食事と快適な部屋、世話役の女性たちくらいはつくだろう。

ひとりの時間だつて……ひととおりに落ち着いたら、もらえはするはずだ。

奴らだつてせっかく攫ってきた若い男が不能になったら困るものな。

だから、老人相手だろうと、生理的に無理な相手だろうと、義務とさえ割り切れば豪華な衣食住は保証されて……ある程度の自由もあるだろう。

そう、最低でも何十年かは。

さすがに老人の相手は嫌だけど……俺の世界でも、つまりは現実だった場所でもそういう不運に見舞われている、見舞われていた女の子は数え切れないほどいたはずで、何も俺が特別に悲惨な目に遭うわけじゃない。

ただ俺も、そのひとりに含まれることになつたつて言うだけだ。

それも、扱いは悪くないはずだしな。

こいつらだつて、……俺から望んだわけじゃないし、俺を襲つてくるようなヤツの顔も見たくないけど、どれだけの見た目だろうとひとまずはそこまで年上じゃ無さそうだしな。

「そんじゃー、行きますか。私、急かされるのキライなんだよねー。だからお前はしばらく黙っとけ？　な？　見てる分にはいいから

さ……うし、まだ寝てる。弛緩剤は効いてるだろうけど、気持ちよくなりさえすれば意識なくなつて勝手に動いてくれるでしょ。男も女も薬の前じゃただのドウブツなんだから。ま、硬くさえなつてくれりゃあとはどうだっていいしなあ」

ああ……俺は、ほんとうに映画みたいなあ……男女は逆の、目に遭っているのか。

弛緩剤……ってことは、そのせいもあつて体が動かないってわけだ。

その中で目が覚めてしまったのは、運がよかつたのか悪かつたのか……いや、起きていることが分かる分、こうして考えられた分、まだ良い方なんだろう。

「あ、準備はしときなよ？ 2、3回で交代するんだからさ」

「1回って言うていたじゃない……いや、分かつたわよ……」

最初の頃に、俺を怖がらせないようにって、やんわりと先生たちが教えてくれていたやり口……いや、俺の世界でも当たり前のようにあるんだろう、その中でも穏便な部類のこれを、後悔してから経験することになるなんて、なあ。

こうなるんだつたら、さつきと沙映と晴代さんとくつついておくんだつた。

善意の中で、過ごせていた内に。

「……おーい、起きろー」

「ちよつ!? あんた、何してんの!？」

「いやー、完全に意識ないままクスリ飲ませると、たまーに大変なことになるんだわ。ほんとは寝たまんまでやつてる途中に起きてくれるつてのが好きなんだけど……ま、どうせ弛緩剤で思うように声すら出せないでしょ」

でも、やつぱり。

ただの……ふつうの高校生な俺には、そんなのはどのみち無理だつただろう。

どれだけがんばろうと、結局はこうして襲われるまで待つしかなかったんだ。

今さらながら意識が向いた。

薬の準備……いや、でも、口移しって言っていたよな？

その、指の感覚がする方へ……どうせ暗くて俺の顔なんか見えないだろうしって思い、軽く頭を向けてみた。

「——あ、よかったです、起きていましたか。……直人さん。」

声、出さないで。動かないで。それで、目、キツくつぶっついでくださいね？」

そうして、首だけを回した先から聞こえてきたのは……この世界に来てから2番目に聞いた覚えのある……安心できる声で。

「じゃ、行きますよ？ キツイですからね？ ……さん、に、いち——

……はいっ」

はいっ、と聞こえたかと思ったら俺の両方の耳をぎゅつと両手でふさいでくる感覚がして、——その瞬間……言われた通りにしていてもなおまぶしい光と、柔らかい手越しから聞こえてくるキーンという音が、まぶたと鼓膜を激しく揺さぶり、俺の意識は軽く遠のいた。

16話 告白／告白

「もう大丈夫だよー、直人くん。……………よかつたあ、なにかされる前に早咲ちゃんと一緒に助けに来られて……ふえええ……」

早咲さんからの声に従ってもなお目と耳がやられて——まあ、あれだけのものだったもんなあ……くらくらしていたけど、気がつけば俺のそばにはひなたさんしかいなくなっていた。

入り口と窓には銃を外に向けて構えたままのいつもの兵士さんたち、俺はベッドに腰掛けた状態、ひなたさんは……いつもよりもずつと離れた距離感でも言おうか、俺から数歩は離れたところに立っている。

ぽつんと、体を縮めるようにして、いつもよりももっと幼い様子で。

……………俺は、助けられた。

ダメだって思っていたあの瞬間に、耳元からの声がしてから、すぐに。

ひなたさんは、制服を掴みながら泣きっぱなしで……ふだんの俺ならなんとか声くらいはかけられるだろうような泣きじやくる格好になっっているけど、今の俺にはそんな余裕はなくて。

「…………ぐす。えっとね、なんとかね、私たち、先生たちとがんばったの。直人くんを誘拐しようって企んでた悪い人たちを騙して、運動神経がいい早咲ちゃんとかちっこい私が通気口からここまでなんとかして来てえ。……途中から、直人くんがひどい目に遭いそうだったというのが聞こえてたのに、急いでも急いでもたどり着けなくてえ——…………」

よく見てみると、ひなたさんの制服……夜中なのに制服って言うことは、昨日の夕方辺りで俺を攫おうとした連中に捕まっていたんだろうか……ぼろぼろになっているし、膝やおでこには血のにじんだガーゼが貼ってある。

長い、いつも早咲さんに梳いてもらっている髪の毛だって、ぼさぼ

さで埃だらけだ。

「でもね、ひつく、早咲ちゃんがね、ここで気がつかれたら連れて行かれちゃってほんとうにおしまいだって、だからねっ、ひつく、こんなにぎりぎりになっちゃって……こわかったでしょおおおごめんねええ——」

「……いや、助けられたし、助かったよ、ひなたさん……ひなた。ほら、この通りに俺、服を脱がされるどころか薬さえ盛られずに済んで、なんともないからさ」

「でもこわかったでえええ——」

涙と一緒に鼻水が出始めた辺りから、さすがの俺も本気で泣いていることも前にしたような感覚でなだめようと、自然と声が出て来ていた。

いや、だって……一応は同級生のはずなのに、小学生みたいな泣き方するもんだから。

「ふぐ……すんっ、ずび」

「ほんとう、もうちよつとで俺……最初の頃言われてたみたいに、まずはアイツらに好きなようにされて……んで、これから先、ずっと俺の意志も生活も自由とはほど遠い飼い殺しみたいな人生送るところだったんだからさ。だから、助かったんだよ」

「……ほんと？」

「あ、ああ、ほんとうだ。ほら、この通り」

まだ体に力があまり入らないけど、せめてってことで笑顔を作つてなだめる。

笑えているか心配だったけど……ひなたさんの表情がいくら和らいでいるのを見ると、ほんの少しだけは取り繕えるようになってきたみたいだ。

「……よかつたあ。男の子が……んと、襲われちゃうと、心が壊れちゃうって言うから、早咲ちゃんもすっごく心配してたの。お薬使われちゃうと、もう、何にも思い出せなくなるって、違う人になっちゃうんだって。……わあああん、かわいそうだよお、えええん……」

……そうか。

この世界では、男と女が逆だから……きつと、考え方も感じ方も、ほんとうに逆なんだな。

そう思えば、ついさつきに教われそうになっていたのが俺っていうのは……この世界で生まれ育った男たちと比べたら大したことはない。

そう、大丈夫なんだ。

ただ少し、恐ろしい思いと……いくら被害者な俺が男だとは言っても、加害者なあいつらが女からだとは言っても、無理やりに襲われるって言うのがどれだけこわいことなのかって言うのが分かっただけだ。

恐怖。

治安のいい場所で生まれ育って、学校だって荒れていなかったもんだから……そういうもの、映画とかマンガでしか、創作のものだってしか知らなかった感覚。

「……あのね。あの人たちね？ もうみんな捕まえたって聞いたけど……業者さんの人たちから直人くんのこと調べ上げて、海外の悪い人たちに目をつけられて、だからこんなにいきなりで、力尽くだったんだって。……間に合ってよかったよえええん……」

収まったって思っていた、鼻をかんでせつかくすつきりしていたひなたさんの顔が、あつという間に真っ赤になって……やっぱりこどもみたいな泣き方を始めた。

「直人くうん……よかつたあ……」

で、ときどき見ていたように……早咲さんに抱きついてあやしてもらっているいつものクセが出たのか、俺の方に抱っこをせがむような感じに近寄ってきて。

それで、彼女の手が俺のそばに来た途端、俺は――

――無意識に、反射で、しちやいけないって分かっていたのに……

その手を、はたいていた。

それも、かなり強く。

「ふえ……? ……………あっ!？」

「っ、ごめんひなたさん、だけど俺っ、……………」

後ろに……下はふかふかの絨毯だから怪我はしないないって思うけど、倒れ込む音。

心配だけど、俺にはもうひなたさんを見る余裕なんてなくなっていた。

息が苦しくなって、何も考えられなくなって、ただただ俺の身になが起きているのかを考えるのでいっぱい、叫んでいるらしい声が理解できない。

けど、これは……………ただの、過呼吸。

保健で習った記憶のあるその状態になっているって気がついたのは、ベッドにうずくまるようにしてなんとか息をしている俺自身に気がついたときだった。

体じゆうから汗が止まらない。

平衡感覚がよく分からない。

……………目を開けられない。

「っ!」

「……………!!」

ひなたさんの声に、聞き慣れた兵士さんの駆け寄ってくる声と音が聞こえる。

けど、俺にはどうすることもない。

ただただ、これが収まるのを待つしかない……………っていうのもまた、聞く気のない保健の授業で習った、たったひとつの、耐える、っていう方法だ。

「……………どうしようよ、直人くん……………」

「——はい、緊急です。こちら護衛対象の寝室。ご学友との不意の接触によりフラッシュバックを起こしたと思われる……………過呼吸になられております。恐らくパニックにもなられているでしょう、私たちでは迂闊に近づけません。至急医師を……………」

落ちつけ、落ちつけ。

ここにいるのは無害なひなたさん……………さつきまでぐずぐず泣いて

いた小さな子と、これまで守ってきてくれていた兵士さんたちなんだ。

ここの外もきつと、守ってくれている。

首謀者たちも捕まったって言っていた。

だから、もう安心なんだ。

安心、なのに………それでも俺の体は言うことを聞かない。

俺に色目を使わない……数少ない、友人になれる、いや、友人のひとりがいっものようにぐずって飛び込んできただけなんだ。

………なのに。

「……ええん、息苦しそうだよつ、どうしたらいいの!? お医者さん………えええん、早咲ちやああん、助け
てえええん……早咲ちやああん、さきちやああん、たすけてえ——………」

「あ……須川様！ お戻りください、ただでさえ直人様は——……」
ばたばたつて感じの足音と一緒に泣き声が遠ざかっていって、兵士の人かどこから声をかけ続けてくれている。

けど、俺の体……いや、心がそれをまだ受け付けていない。

情けない限りだけど、男の俺が女たちに性的に襲われそうになつたつていうただそれだけのことで、同い年どころか年下にしか見えない女の子、友人の子にさえ怯えて、こうなるだなんて。

………悪意。

俺が、そういうものと縁がないつていう平和な生活をしてきたからか。

したくもないマラソンをさせられているみたいに心臓が音を立てて、息が荒いままで、汗もだらだらと流れ続ける。

悪意つていうものに晒されて、ぶつけられて……欲望つていうものを一方的に浴びせられると、男女なんて関係ないんだつていうのが、分かる。

命の危険にかかわらず、……ケンカにすら巻き込まれたこともない俺だからこそ、か。

情けないけど、体に力が入らない。

だけど、こうして頭が働いている以上、いつかは収まるんだ。手を出される前だったんだし、ほんとうに際どいところだったけど、でも大丈夫だったんだから……授業の内容を思い出せ、これは精神的なもの、呼吸が収まれば自然と楽になっていくものはずだ。だからなんとしても息を落ち着かせて、気分も……できるだけ落ちつける。

そうだ、こつちに来たばかりで、なんにも分からなくて……つていう、あのときみたいに。

「……………野乃様！　しかし！」

「大丈夫です。……私なら、彼をすぐになだめられます。当直の方も間もなくいらつしやいますし、もし私で駄目ならすぐに交代しますから。ですから、部屋の外で待っていてくださいませんか？　鍵も掛けさせてください。……榎本先生とローズ……ジャーヴィス先生から一任されました私を、学園主席としての私を、信じてください。私で駄目なら、私の——である、ローズマリー・ジャーヴィス先生のことを、信じてください。お願いします」

呼吸に……吸うのと吐くの意識を向けてしばらく、汗が冷え始めているのに気がつける程度には落ち着いてきた気がする。

ついでに、耳元での会話が途切れ途切れじゃなく、はっきりと聞こえるようになって来たくらいには。

「……と、あれ。」

「……………」

今の声は、ついさっきに聞いて、なによりも助けてくれた、あの。

「……………大変な目に遭われましたね、直人さん。」

まずは、「〔無事〕」でなによりです。過呼吸で済む「程度」で、ト

ラウマで済む「程度」で……です」

……早咲さんの声、か。

そういえばさっきの……光と音の直前に、両手が動かさない以上せめて目はつてことで、つぶるように教えてくれた早咲さん。

ひなたさんと一緒に来てくれていたんだよな。

……けど、さつきまでいなかったはずじゃ。

「……………ほんとうは、私が——いえ。「僕」が、この人生で死ぬまで」

いつもの早咲さんの声のはずなのに、どこか違う声が聞こえてくる。

「誰にも、言うつもりはなかったんです。冗談抜きで、墓場まで持つていくつもり……………だっただんです。ですが、直人さん。私の——いえ。「僕」の同類みたいな「君」を、見過ごすことはできません。ですから、直人さんを信用して打ち明けますね。たったひとりの、信頼できる君だからこそ」

いつもの落ち着いた雰囲気とはまた違うし、……それに、僕、とか、君、とか、ふだんとは違う呼び方をされて、心臓が少し落ち着いた感覚があつて、呼吸が急に楽になってくる。

「……………もし目を開けられるのなら、僕の方を見てくださいますか、直人さん……………いえ、直人。僕を見て、これを聞いたなら、きつと……………その体の反射も、きちんと癒えるには時間がかかるでしょうが、いくらかは収まるはずですから」

早咲さんが、俺の目の前で屈む雰囲気。

……俺もまた、単純な作りをしているらしい。

彼女の、これまでにないような声を聞いた俺は、不思議と楽になってきているのを感じながら……………俺の目から涙が流れていたのに気がつきつつ、目を開ける。

顔を上げると、そこには、いつもの早咲さん。

どこか他の女子とは違う雰囲気をもちつつ、なぜか安心できる、そういう印象を持ち合わせている彼女。

男とも女とも分からない、全てが中性的な同級生の女子。

男装こそしているけど、それでも近くで見るとやっぱり女子なんだなって分かる……………分かっていた、その整った顔立ちが、俺のすぐそばにあつて。

「っ！」

それを見て、無意識に体がこわばりそうになった俺に降ってきたのは――想像もしていなかった言葉だった。

「これは、嘘ではありません。神さまか仏さまか、それとも精霊、天使、悪魔……別の何かには分かりませんが、なによりも君と僕という存在に誓って。――僕は、ですね？」

直人。僕は、……直人の来たような世界で生まれて育った記憶を持ったまま1度死んで、こちらに……男だったはずなのに女として生まれ変わったという、妄想としか思えない意識と記憶を幼い頃から持っている、元、「男」――なんですよ」

17話 「2回目の初対面」

「……済まない、手間取った！　こちらは全員確保済みで黒幕も確保したとの連絡が学園外から来た！　そちらはどうだ!?」

「榎本先生、こちらにも問題ありません。外は私たちが、中は野乃様と須川様兩名の機転により、未然に防ぐことができました!」

階段を駆け上がってきたのは榎本美奈子……この「学園国家」の教師にして、直人の保護者としての手続きを強引に済ませてきた女性。

凜として落ち着いたふだんの彼女とは違い、髪を振り乱し……戦闘があつたために爆薬の臭いが染みついているし顔も煤けてはいるが、切り傷程度であるために、同僚のローズマリーと共に指揮を執りつつ直人という青年の元へと駆けてきたのだった。

直人の個室の入り口には、つい先ほど生徒たちの手引きで突入し男性……それも健康な男子生徒を拉致しようとした重罪人が捕らえられている。

もつとも、彼女たちは気絶しており……明らかにすべてが終わったと分かる様相だ。

「せんせえっ!」

「須川たちもご苦労だったな……もう少し遅ければ、そちらからの中の状況の報告がなければ、もつと突入に躊躇していたかもしれない。

あるいはすでに、直人が連れ去られていたかもしれない。感謝する。……須川、成績には色をつけておいてやろう。野乃は……普段の素行についてだな」

軽い、ひとまずでの尋問を受けていた下手人たるふたりの女……ひとりとは20代、もうひとりに至っては直人と直接の面識がないはずのこの学園の生徒……は、後ろ手に縛られて乱雑に転がされていた。

その「尋問」の場に居合わせたためか、もはや泣くことしかできない須川ひなたは……いつものように、鼻水を流しながら榎本美奈子に抱きつく。

「……………お前は相変わらずだな。野乃も、もつ

と厳しく育ててやればいいものを」

「……いいんです、早咲ちゃんは優しいのです……」

「……それで、状況は？ まあ見たら分かるが、一応な」

「………はい。 えっと、直接の実行犯はこのふたりと……今は別の部屋に連れて行かれています、もうひとりの人。 この人たちが持っていたお薬……その」

「ああ、言わなくていい、常套手段だからな。 それで？」

「それで、……護衛の人が止めたんですけど、早咲ちゃん、いつにない表情で止められなくて。 ……持っていたの、みんな飲ませちゃったんです。 あの、鉛玉？とお薬、どっちが好きか……とかって。

……私は、早咲ちゃんに直人くんのところに行ってって言われて、そこから先は分からないです」

「………あいつが？ それはまた」

「なので、えっと、先にこのふたりが意識を失っちゃったらしくて……で、まだ大丈夫でしたもうひとりの人も、さっきまでは早咲ちゃんに……今は護衛の人に、別の部屋で尋問を受けている……らしいです……」

ちら、とぐったり横たわる女ふたりを心配そうに見下ろすひなた。

彼女たちの足元にはタオルが敷き詰められており……男性を誘拐し、望む状態に仕立て上げるための手口というものを知っている美奈子は、つい先ほどまで繰り広げられていただろう惨状を思い浮かべ、ため息をつく。

「自業自得だから気にするな。 それに、どうせ連行された先では私たちが想像もしたくないような終わりを迎えるさ。 目が覚めたとしても、当分は起き上がることすらできないだろうし、脅威では無い……が、野乃もまたエグい手を使うものだな。 ふだんの彼女を知っている私でも、まさかそんなことをしているとは思ってもみなかった。 てつきり、拘束して残りは私たちにと思っていたんだがな」

「はい、………私も、早咲ちゃんのこと。 たぶん、初めて「こわい」って思ったんです。 早咲ちゃんが、あんなに大きい声で、あんなに低い声で怒るのなんて、ほんとうに、初めて……」

だったので……、私」

再び美奈子の胸に顔をうずめ、しゃくり上げ始めるひなた。

はあ、とため息をつき、小学生をあやすように……小学生を撫でるようにして、美奈子は言う。

「……これを、誘拐した先で使う予定だったんだろう？ 彼ひとりに対して。 いや、ここでしようとしていたのだったか？ ……それを3人で分けたんだ、命には問題が無いはず。 そもそも同意無しに男性を……ましてや襲った後に誘拐となれば、どの国の法律でも極刑は免れない。 彼女たちはそれほどのことをしたんだ、気にするなよ？

これは、殺人よりもずっと重い、「人類を減ずる」罪だ。 な、須川」

「……それで、聞きにくいのだが大切ゆえに聞く。 未遂とは、どこまでを指すんだ？ 今の彼の状態は？」

「あう……はい、その。 お薬を……あ、体が重くて眠くなるものを、冷蔵庫の飲み物に入れられていて。 業者の人が……って。 それで、お手々と足をしばられて動けないときに目が覚めて……この人たちの話を聞いちゃったみたい、です。 私、すぐに離れちゃったので、ほとんどは早咲ちゃんから聞いただけですけど」

「動けない状態で、意識だけあり……これから先に起きるはずだった未来を思い浮かべられ、覚悟を決めるかどうかといった具合か」

「……早咲ちゃんが予定よりも早く動いたので、まだ縛られたとき以外には体、触られていないはずです……けど」

「ああ、お前が近づいただけで……だったか。 それで野乃が」

「はい……ですけど、早咲ちゃんは……その、落ち着かせるのが上手なので、きつと大丈夫です。 護衛の人も、直人くんが落ち着いたように見えるし、なにより早咲ちゃんが外で待っていてほしいからって、なにかあったら呼ぶからって、今はドアの外で待機しているって言っていました」

「ああ、彼女はな。 女相手はまだしも、男相手でもいつもの調子だろうからな。 もっとも、男相手ならばいつもとは決定的に違うところ

があるからこそ任せられるのだが……まあいい。いつもなら頭が痛いところだが、今回ばかりは野乃の「アレ」に助けられたというわけか。流石に当直の中にカウンセラーはいないし、野乃ならば男には手を出さないだろう。ああ……今年だけでもすでに、それはもう散々に迷惑をかけられているから、それは良く知っているともし「せ、せんせい……その、早咲ちゃんは女の子に優しいだけなので、あんまり怒らないであげて……」

「……須川。あとあいつもだ、それについていい加減に、本気で怒ってもいいと思うのだがなあ。1週間と言わずひと月くらい監禁しても文句は言えないと思うぞ?」

○

俺は、さつき耳にした言葉が信じられない。

……そうして、気がつけば完全に息も収まっていた俺は、ここはふたりしかいないから安心して、と早咲さんが言うのを聞きながら、ただベッドに腰掛けていた。

両手を挙げてみる。

手を、指を、動かしてみる。

……きちんと、動く。

もういやな汗もかいていないし、きつと、立とうと思えば立ち上がれもするし、歩けるだろう。

そんな、いつもどおりの感覚に戻っている。

……さつきの、早咲さんから聞いた……ありえない言葉、たったひとつで。

「……ふう。もう大丈夫ですよ、直人。ここにはしばらく、誰も入って来ません。そう、おはなしを着けてきましたから。しっかりと外で、声が聞こえない程度の場所で何十人もの人たちが外を見張ってくれています。そして今は。」

今だけは……絶対に、君に手を出そうとする人は現れません。それはもちろん、僕も、です。それは、さつきの話を聞いたなら分かり

ますよ、ね?」

「……………さつきの。それに、早咲さんの、話し方」

「早咲、でいいですよ? もう秘密、バラしちゃいましたし。それに、その方がより僕のこと、「男」として認識してもらいやすいはずですから」

「男。……………つてことは、早咲、は」

リビングから持ってきたらしいイスに腰掛け、俺から少しだけ距離を保ったまま、どう見ても静かな、中性的な女子としか見えない彼女は言う。

「ええ。……………あ、違うかな、もうちよつと「昔」の口調で……………少し待つてくださいいね? ……………。」

「……、こほん。うん、こんな感じ、だったかな? いや、懐かしいなあ。で、直人、僕は君と同じように……………男女の比率がほぼ同じまま、この世界と途中までは同じような歴史の先にあった世界で生まれて育った記憶を持っているんです。」

「……………あ、中途半端に戻っちゃいますね……………ま、いつか。で、いろいろあつてこれくらいの歳で死んじゃつて……………なぜかは分からないけど、気がついたらその記憶だけを持ったまま、不幸にもこんな絶望しか見えない世界に女の子として生まれ変わっていたことに気がついた。元、男なんです。ね? 誰にも言えるわけがないでしょう? 直人、君以外には」

早咲をよく見てみると、いつもみたい髪を下ろしたままじゃなくなっていて、後ろで……………うなじ辺りで縛っていて、長髪をまとめている男にも見えなくはない格好になっている。

もちろんなのかどうかは分からないけど、これまた服装は俺と同じ、いつもの男子の制服……………まあ、埃と切り傷でぼろぼろだけど、だし。

「……………ほんとう。なのか。だって早咲、お前はこれまで」

「秘密にしておくつもりのはミツ、つて言ったでしょう? それに、考

えてみて？ 直人」

すつ、と席を立ち、俺から目を離して寢室の端の方をゆつくりと歩き始める早咲。

「もし。もし、仮に、直人が……直人が来た世界でもどこでもいいです、そこで、ふつうの人しかいないところで。誰かが「自分は実は前世の記憶を持っている。それも、今とは反対の性別として生きてきた、そういう記憶。もちろん歴史も違うその世界のことについて詳しいし、前世は別の性別として生きてきた自我がきちんとある。」

だから自分を肉体とは別の性別として扱ってほしい」——
「……だなんて、言えますか？ それを、幼いころに……いえ、大きくなっても」

「……………いや、それは」

身近な誰かでさえ、冗談を言っているんだとか、あるいは頭を打ったんだとか、電波を受信しているんだとか。

「そうです、まず信じられません。直人の世界ではどうだったかは聞いていないですが、少なくとも僕が生きていた世界では肉体と精神の性別が別だなんていうのは一般的じゃありませんでしたし、輪廻転生などというものもあるのかもしれないけれど、それを口にする人はふつうの人からは白い目で見られて無視される存在でした。まあ、精々が生やさしい目で見られるくらいですかね？」

「……………俺のところは、たしかトランスジェンダーとかは、最近」

「ああ、じゃあやつぱり僕たちの来た世界は少し違うところなんですね。時代が違うのかな？ それとも流れが少し違うのか……分かりますけど。でも、少なくともことよりはずつとずつと近いところのはずですね」

「……こういうのもありましたか？」と、タッチパネルを……もつと、こつちで何回か使ってもつさりしているなって感じていたのをすすすつと……「スマホ」のようなものを素早く操作する手つきを見てうなずくと、科学力もほぼ同じなんですわ、と言う早咲。

……………。

その立ち振る舞いは、なんとなくだけどふだんの彼女とは違って……いや、服と髪の毛のせいもあるんだろうけど、今までよりも、男に見える瞬間がある気がする。

前から少しだけなんとなくなくなったそれが、より強くなったっていう印象。

……………ああ。

それで、俺の心がすんと落ちた感じに納得する感覚が来た。

……早咲は、彼女、いや、彼は……かつては男だったんだろうなつて。

18話 早咲の本性

「もう少し近づいても大丈夫そうですか？」

そう早咲に聞かれて、試しにとゆっくり来てもらった……けど、さつきひなたさんに対して感じたようなものはなく、手が届く場所まで来られてもなんともなかった。

手を伸ばせば俺の膝に触れられる距離だつて言うのに、震えたりもしない。

「……なら、もっと近くの方が話しやすいですね」

と、イスを引きずって来た早咲は……ああ、筋肉、肉体上は女子なんだもんな、ただのイスでもちよつと重そうだ……俺の目の前にすとんと座る。

……あ、脚も開き気味になっているな。

普通に、男の普通の座り方つてやつに。

もちろんズボンを履いているし胸もないから、今までみたいに目のやり場に困ることもなく、ただぼうつと彼女……いや、彼を見上げる。

印象は、女っぽいのに女子に人気がありそうな、優男つて言うんだっけ？

そんな感じだな。

——初めのころに感じたように。

「そんなわけだから、秘密にしていたんです。もちろん、親にも友達……大好きなひなたちゃんたちにも、誰にも言ったことはありません。言つたとして信じてくれるかも分かりませんし……いえ、あの子たちならきつと信じてはくれます。こんな、荒唐無稽な話でも。

でも、でもですね？ ……面倒なことに巻き込みたくはないから。

僕としては……こんな世界ですから女性同士で恋愛とかは当たり前ですから、それで男子と結婚せずに女の子と仲良くできればそれで充分でしたし。だから、僕がこの世界で物心ついてからつきつきまで、この妄想に近いって思っていた事実は僕の頭の中にしか存在しなかったんだ」

「……………その、早咲。面倒なこと、つて？」

「……ああ、そうですね。けど、直人だって落ち着いて考えたら分かるはずです。直人の存在……別の世界から来た人間だということを先生たちがなんとかして隠そうとしていますよね？先生たちも、ちよつとは信じているんです。直人が、君の知識が、態度が、あまりにもこの世界の男子とは違うから。だけど、それを洗脳された、つてことにしてくれている。だから、直人っていう監禁されて育った世間知らずで健康な男子っていう情報しか漏れていないはずですけど……バレていない。そう聞いたらほつとしますよね？だって、別の世界だなんてほとんどの人にとつては妄想でしかありませんけれど。——でも、この世界では、です。」

「移動可能な異世界」つていうの、かなり真剣に研究されているんです。どれだけお金がない国だったとしても……」

「え？——研究？その、SFみたいなものを？」

「そうです。だって、いわゆる平行世界——そちらのSFとかでもあつたでしょうか？あ、あつたんですね、なら話は早いです——よく似た、別の世界。絶対にあるはずだって結論づけられて、理論上はとつくにあると確信されていて……だから、いつかどうにかしてそこに行き来できたならつて、ものすごいお金と人が動いている研究分野です。だってそうでしょう？——こちらは人工授精と遺伝子操作をしても、どうしても男が圧倒的に足りなくて、ものすごく人が減り続けている世界。つまりは滅亡まっしぐらです。なら……もう、どこかから、この世界でないどこかから、男性を連れてくることしかないのですから。例え繋がった世界が恐ろしいところだったとしても、座して数百年を待たずに滅ぶのを待つよりかはずつと、いい。こちらの富を、余っている女性をどれだけ連れて行かれたとしても、それに見合う男性を受け入れられたなら……この世界は、人類は、滅びを避けられるのですから」

「……………そんな、な」

たしか、この世界の歴史を聞いたときにも驚いた記憶がある。

なにをしても、出生率自体は……なにせ世界の99%は女性なん

だ、男が少なくても人工授精さえあればある程度は確保できている。少子高齢化で騒がれていた俺の世界よりも、たぶん数自体は……この十数年ではらしいけど……生まれているらしい。

それでも総合的な人口があまりに少ないのは、人工授精の技術が確立するまでの期間に生まれなかった男の数と、その期間にこどもを産めなさ過ぎたせいだとか聞いたし。

だけど、俺の世界では禁忌とされているDNAの操作つてもものをしてたとしても、それでもなぜか男はほとんど生まれず、生まれてくるのはほとんどが女。

だから、ますますに危機感があるんだとか何とか。

「で。だからこそ、です。もしうっかりにでも、僕の前世が直人と同じように……ふつうの世界で、その記憶があるだなんて、万が一にでもそういう研究機関に漏れたりしたら。」

——変人扱いならまだいいです、ですけど……それを真剣に捉えられちゃったら」

「……………、ああ、そうだな」

「うん。小さいころならこどもの妄想だって笑って済まされるかも知れませんが、そうじゃないかもしれない。特に大きな国ほど膨大な予算を割いてまで必死ですからね、そういうところに送られたらまずふつうの人生というものは送れません。直人、ちょうど今の君みたいな状態に……僕は、女の子として産まれているにもかかわらず、研究対象となってしまう。いや、記憶を延々と吐かせるために薬漬けで僕というものを失うかもしれない以上、こっちの方がいい、ですね。僕の脳が男かもしれないからって、調べ尽くされるでしょう。だって、ここでは女の命なんてささいなものですから」

「……………分かるさ。俺も、ついさつき……」

これからのことを考えて、諦めかけていたからな」

「ああ……彼女たちはおしゃべりでしたからね。そのおかげで間に合ったとも言えますし、そのせいで君が余計なトラウマを持つことになっちゃったのですが……とりあえずで結果オーライですっ」

ぐつ、と、女子らしいポーズを取ろうとした早咲は、気がついたよ

うに片腕をぐつとする。

「……です。 さつき、ひなたちゃん……ひなた、にでさえ恐怖つていうものを感じて過呼吸になったって聞いたので、元、男として。

……生まれ変わりと神隠し？ ですかね？ ……という違いもありますし、性別ももう違いますけど。 でも、同じような境遇の男子な直人がさつきみたいなの顔をして苦しそうにしているのを見たら、ここで助けたいのは申し訳ないって思っ

て。 ……周りに誰も男子がいなくていいのと、なによりもここに、体は女の子になってしまいましたけど中身は男のまま僕がいるのでは、ぜんぜん違うだろうな、って思ったら………つい、言っちゃったんです。

ほんとうは、落ち着くまで待つて声をかけようって、さつきまで、顔を見るまでは考えていたのに。 ……あは、ないはずですけど、

もしここに盗聴器なんか仕掛けられていたら、直人はともかく僕、明日にはいなかったことにされていますね。 ……冗談です。 そんな顔しないで。 潜入する際にゼーんぶ壊してきましたから」

ふう、と一気に息を吐き出すと、直人は秘密、守ってくれますよね……と、困ったように笑いながらイスにだらしなく座り直す早咲。

その姿はどう見ても……うん、男だ。

スカートじゃないから脚を開いていても変じゃないし、何よりも俺のことを男として意識していないのがはつきりと分かるし。

………ああ。

俺、この世界に来てから、多分、初めて安心、って感覚を。

「……とにかく、助かった。 改めてありがとう、早咲」

「嫌ですね、僕たちはもう同性な友人。 いや、ヒミツをバラされたくないの

で親友ってことでいいですよ？ 同じような境遇でもありませんし？ なので」

「うん、でもありがとう。 あのままだったら、……きつと、教えられた通りに、あるいは俺が読んだことのある頭の悪いマンガみたいな展開になっていただろうからさ。 ……まあ、実際には死ぬよりはマシな程度

の状態になっていたんだろうし。 ……そういう話を読んだときにはうらやましいとしか思えなかったって言っても、実際にあ

いう欲望をいきなり、直接に浴びせられたら……男だって、こわいんだなって分かったから」

「でしょうねえ……僕たちの感覚じゃ、男しかいない環境に着の身着のまま放り出された女の子があんなことやこんなことをさせられるっていう定番ですものね。こちらでは真逆ですけど、でも、僕たちにとっては正にその通りで、僕たちはその女の子だとしか感じられませんか」

「ああ………あ、そうだ、ひなたさんには謝らないとな。あんな反応しちゃって、きつと落ち込んでいるだろうから」「ええ、そうしてください。あの子、泣き虫ですから……、でも」「でもっ」

と、………突然に早咲が立ち上がり、急に声が大きくなる。

同時に俺の体がこわばったりもしないから、少なくとも早咲に対してはさつきみたくないものが起きないって分かってよかつただけ………なんだか顔つきが。

その。

……まるで、女子の話題ばかりしていた同級生の誰かを思い出すようなものになっていて。

だん、つとイスから立ち上がり、片足に乗っける早咲。

「ああいうのはフィクションだって分かっているからいいんですよっ！」

「お、……おう？」

「ですよー！ かわいそうなのはダメですよー！ いえ、作りものとか演技でしたらいいですけど、リアルな女の子でしたらあんまりにもかわいそうだと心が痛んでそれどころじゃ！ ええ、使えるものも使えませんから！！ かわいそうなのは演技で実は喜んでいるって言うのがいいんじゃないですか！！ ねえ、そうでしょう直人！！ 最後の場面でハイライトとか消えていたら興奮なんて消し飛ぶじゃないですか！！！」

「あ、ああ………う、うん

？」

いや、分かる。

俺も男だし、そういうものの気持ちも分かる……けど、なぜ早咲はいきなりこうなっているんだ？

「あ、で。直人の世界って、こーんな感じの雑誌とか、作者とか……こういうタイトルのシリーズとかあったりします？」

「……………これは知らないけど、これなら。ああ、これは俺のところでも人気だったな」

「やつぱり！ どうやら僕たち、よつぽど似た世界から来たんですね！！ やー、嬉しいです！ 同じものを知っているって言うだけで楽しいんだからっ」

スマホを取り出すや否や、ものすごい勢いで文字を入れて……と思つたら、手渡されたそれに書かれていた雑誌や作者……まあ、そういうものの有名どころに、早咲の剣幕に押されながらも答える。

もちろん、普通の……学校で、みんなで回し読みしていたような、健全なものも含まれてはいるけど。

……………あ。

俺、早咲と手が触れても大丈夫になっているな。

俺はもう、早咲のこと……完全に男だつて認識しているんだな。

「いやあ、懐かしいですねえ……僕にとっては、もう十数年も昔のことですから」

「あ、そうか。生まれ変わったつてことは」

「ですね、幼稚園くらいまでは記憶が曖昧ですけど、それからはほぼ地続きな感じなので……すつごく懐かしいです。それこそ、今みたいな場面じゃないと、まず思い出せないくらいの。あ、これはどうです？」

「……ああ、これはテンプレだつて言われつつも、ヒロインもシチュも誰かひとりはず刺さるやつだよな？ 早咲のところでも？」

「うんっ！ あ、ちなみに僕は毎回必ずあった、王道のハーレム回が好きでした！ ちよろい子からなかなか落ちなかつた子までが揃うつてというのがたまらなくて！ まるで僕が攻略しているって思える

からっ」

いつになく早咲が……もう早咲さんとは呼べなくなつたくらいにはすごいことになっている。

いや、ほんとう、晴代さんほどじゃないにしてもお淑やかな感じはどこと行つたんだ。

擬態か？

これじゃただの下ネタ好きな男子だぞ？

「だけど直人？ 女の子はやっぱり貧乳が正義ですよね!？」

「……………は？」

と、予想外の言葉を耳にして俺の意識は一気に引き戻された。

「ふつう……………そうですね、微乳から美乳まではまだいいとして、それより大きいのはちよつと……………将来垂れそうだって思うと、なんだかダメな感じですか？ あとおしりが大きすぎるのもNGですよねえ。」

……………巨乳好きの大多数の男はもつと現実見た方がいいですよ、現実の女の子はだいたいブラで持ってますし？ 理想的なぼんきゅつぽん! だなんて、ほんとうに滅多にいないですよんね？ ねえ？」

「……………いやいや早咲、それはちがうぞ？ 女性の魅力は……………そりゃあ本人の性格とかもあるけど、でもやっぱり胸と下半身だろ？ 実際に人気なのはそういう人とかキヤラクターじゃないか。世界中どこ勝手そうだろ？ それに、スタイルがいいのと太っているって言うのは違う。お前、女として十何年も過ごしてきたのに分からないのか？」

そう言うと、きよとんとした感じになる早咲。

ちなみに彼女は、これまたなぜか……………イスの上に仁王立ちしている。

ものすごい剣幕で見下ろされている。

……………いや、ほんとうにどうしてこうなった。

俺も、思わずで反論……………いや、ほんとうになんとなくでなんだけど。けど。

……………どうしてこうなった？

19話 早咲の、くだらない本性

でん、という風にイスの上で腕組みをしながら早咲が、馬鹿馬鹿しいことを言い続ける。

早咲の……奴の口は止まることがない。

いや、むしろ加速しているまでもありそうだ。

「……………幼い容姿や、スレンダーから見苦しくない程度の体つきがいいんじゃないですかあ。女性の美とはそういうものですよ？なにが悲しくて……そうですね、走るのが辛そうなほどまでに胸とおしりが発達してしまった方々を好きにならないんですか。まあ、気分を変えて……と言うのであればアリではありませんけど、性格が魅力的であればそんなものや年齢はどうでもいいですけど、でも、それはあくまで」

「おいおい、早咲はヘンなこと言うよな？女性の胸はお乳をあげるため、腰は安産型って言って、昔頃から重要視されていたものじゃないか。つまり女性はふくよかな方がいいっていうことで、歴史の授業でも習っただろ？つい最近までは胸のない女性は人気がなかったって」

俺も負けじと……何故かは分からないけど、無性に腹が立って力を込めて言い返す。

「えー？ほんとうにそうですかー??それは衣食住と安全、そして医療が不足していて多産多死な時代のことですよー?特に食べものは大きいですし。ですからその言い分は通用しませんー、単に君の好みってだけですー、理論武装は無駄ですー。しかもこの世界はおっぱいだけですので君の主張はダメダメですー」

「はあ?なんで女性の魅力についての話なのにそっちに行くんだよ。いいか?俺たちの元いた世界、多少違っても男が群がるのは大抵が肉付きがいい人で、スレンダーだったり幼い感じだったりするとちよつと……つていう感じでない!」

……気がついたら早咲とケンカ……ケンカ?をしている俺がいた。

俺も早咲の勢いに乗せられているのか、ベッドで立ち上がって……ベッドとイスの微妙な高さの差のおかげで目線がぴったり合って、腕組みして立ったままの早咲と対峙する形で、俺も同じ姿勢をしている。

……いやほんと、どうしてこうなってるんだ。

なんか、気がついたら早咲の……こいつのペースだったんだけど？

「……………あー、分かりましたー。直人の目が腐っている理由」

「ああ!? 腐っているだ!?」

ほら、こうしていちいち煽ってくるから……頭では分かっている、口は止まらないんだ。

……主席っていうのは伊達じゃないらしい。

ホンモノの頭の良さって言うのは、いろんなところで分かるらしいからな。

今はほんつとうにバカな話しかしていないけど。

「それはですねー、……君、彼女さんとかいたことないでしょう? つまりは、ど・う・て」

「お前一応女だろ!? 変なこと言うんじゃない!」

「いいじゃないのー、もともとは男だつて言ったのにー。あー、でも当たりですかー、いやー、なるほどですねえ。実際にですね?」

……女性の柔肌をこの手で触つてみると、分かるんですよ。余計な脂肪がなくて無駄のないプロポーシジョンだと、美しいんだって。骨格と筋肉の筋に沿った微妙な起伏が、影が、それが素晴らしいんだって。それに感度も良いですし、ね? そんなことも知らないだなんて……ああ、可愛そうですねえ。灰色の学生生活だったんですねえ……うう、不憫」

「さつきっから……お前、なんでケンカ売ってくるんだよ?」

「嫌ですよ、男の声で凄んできたりしちやあ……こわいじゃないですか、童貞さん?」

「こんのっ!? いくら俺たちは同じだつて言っても、言っても良いこと

と悪いことがっ！」

とつきに腕が上がりそうになって……その拍子に、ふと、俺たちはなんて馬鹿げたことで言い合い、そう、喧嘩にすらなっていない馬鹿話をしているのかっていうのに思い至った。

そうして腕を下ろし、……すつきりしている俺自身に気がつく。

「ふふっ。 やつと元気、出ましたね。」

気分、切り替えられたようだなによりですつ。 そうして立ち上がって、大声出せるようになるくらいには。 そしてその表情。 なら、こうして、……ほら」

とん、とイスから俺の方へ……いきなり飛び込んできた早咲は、てつきり俺に倒れかかってくるかと思つて身構えたのに綺麗にバランスを取つて立ち……俺の肩だけに軽く体重を乗せて止まる。

……危ないな、早咲がもう少し勢いよく飛んできたり、あるいは俺が完全に気を抜いていたらふたりとも転んでいたぞ？

まあ、ベッドだからケガとかの心配はない、けど。

……………。

ん？

こいつ……じゃない、早咲の手が肩に乗っていても。

「ええ、少なくとも僕が触つても大丈夫な程度には良くなっていますね。 カウンセリング、成功ですっ」

「……………え？」

「あ、さっき言ったのはこのための演技とかではなくて僕の本心ですよ？ 僕はスレンダーが好きなんです。 もちろん女性の魅力は顔や体だけではないのでそうでなくとも好きにはなったりもします。

……ですけど」

また、とん、と飛び上がって……とんとん、と床の絨毯に着地する早咲。

……ああ、スポーツも抜群だって言っていたような。

そんな、男子の制服を着て……髪の毛は後ろの下で縛って、見ようと思えば男にも見える格好をしたそいつは、俺の方を振り返り。

「ですが、人って単純なんですよ。 どれだけこわい目に遭つたりし

て悲しい思いをしても……まあ、あくまで今回は未遂でしたし、僕たちの世界の価値観的にはたとえ襲われていてもそこまでではなかったでしょうが。本能的な欲求には逆らえないんですっ」

「……………ええと？」

早咲が何を言おうとしているのか、俺にはさっぱり分からない。

俺が過呼吸になっていたのと、今の馬鹿話の関係？

なんだそれ？

「ですから僕たちが同じような境遇で……心の性別が同じだっていう安心を求める本能と、ちよつとした高校生らしい猥談つて言う性的な欲求と、そういういろいろを煽つて闘争本能をくすぐったんです。

実際、今まで忘れていたでしょう？ さつきまでの恐怖つていうものを」

「……………たしかに、そう、だけど。……………だから早

咲、お前は」

「まあ、これはあくまで一時しのぎですから。男であつても悪意で性的に襲われそうになって、お先真つ暗な未来を見そうになつていた直人です、きちんとしたケアを受けないとですし、その記憶がなくなるわけでもありません。けれど、少しは気が楽になつたはずですよ？ あのまま震えてふさぎ込んでいるよりはずっといいかと」

「……………そう、か」

「うん、そうです。そのための、です」

生涯の秘密つていうものを話してくれたり、いきなり変なこと……俺は今みたいな……その、猥談みたいなのはあんまり好きじゃないから、あつちの世界に少ないながらもいた、俺とおんなじような性格の友だちとかとしたこともないそういう話とかをしてきたのは、ぜんぶ。

……………。

俺も、ゆつくりとベッドから降りて……俺よりも少しばかり背の低い、だけど女子にしては背の高い方な早咲を見て、目が合つて。

「ごめんな、大声出して。それに、思わずで」

「いいですつて、わざとつて言ったでしょう？」

「それでも、だよ。俺だって男が怒鳴る声って苦手だから……悪かった。それで、ありがとう、助かったよ、早咲」

「そう言ってもらえると、ヒミツをバラした甲斐がありましたね。あ、もちろんヒミツをのままにしてくださいよ？　これはこの世界のすべての人に対して、です」

「当たり前だろう？　俺のために言ってくれたんだし。……それにしても早咲、お前、さつきみたいなたく話題平気なんだな？　というか好きなんだな……。俺、この世界でもこういうのは初めてで、……少し恥ずかしかつたしイラツともしたけど、でもなんだか懐かしい気持ちになれた。たぶん、ここに来てから初めてだ」

「そうですか。よかったですねえ」

「ああ！　さつきの……現実の女性がどうかというのも、ただ……、と。……あれはただ、俺を煽るためだったんだろう？　怒りの感情でって、さつき」

「あ、あれ、言ったのはすべてほんとうのことですよ？」

「……………へ？」

「え、言ったじゃないですか、さつきのはみんなほんとうだって」

「いや、でも」

気がつけば早咲は……俺じゃなく、窓の外……でもなく、どこかうつろな感じで、ここじゃない別のところを見上げていた。

「だって、僕。前世のこととか男だったこととかを自覚したの、小さいころだったんですよ？　具体的には幼稚園のころですね」

「は？」

「で、つい出来心で幼なじみのかわいい子に手を出しちゃったんです「は？」

「それで、上手く行ったので次々と。……ああ、保母さんたちもよかったですねえ」

「は？」

「あ、保母さんたち以外はもちろん同い年くらいの子たちですよ？　だって、かわいかったし……僕自身もこども、しかも女だったので、つ

まりは合法ですよ？ 同意も得てからでしたし？

……。ま、僕の中身は十数歳で向こうは数歳でしたけど。なあに、歳を取ったら10歳差程度はフツーです、フツー。そういう意味では保母さんたちとも合法ですねえ」

「はっ」

なんだかうつとりとした表情になっているけど……。話に着いていくのが精いっぱい、どう反応していいのか分からない。

「んーと、ですねえ……。途中から数えるの止めちゃったので、正確な数とかは分からないんですけども……。ええと、たぶん……。そうですねえ」

がぼつとこつちへ向けてきた顔は……。目は、やけにきらきらしている。

早咲の、こんな話をしている元男の、その内容がこんなもんじゃなければ惚れるかもしれないっていうくらいに、いい笑顔をしながら「こつちではもう400……。500人くらい、ですかねえ？ した相手の子たち」

「はっ、よ、こひやく」

「いえ。1回限りとかのお相手を入れてしまうと……。とりあえずは1000は超えますかねえ。すみません、細かくは覚えていなくて。いちいち記録に着的るっていうシユミもありますし、適当に流れで、行きずりの人とホテルで数時間とかもよくあることですので」

……。あんまりにも信じられない数だけ……。早咲の目は、これ以上なく輝いていて、ものすごい満開の笑顔だ。

「……。なら、それもほんとうのこと、なのか？」
「ほんとうですよ。これについても嘘なんかつきません。むしろ自慢です。前世もまあ……。そうですね、それなりに？ こつちよりもっと多くの子としたので、それ含めちゃうともう分かりませんか？」

……。そうか、たしか前世の記憶があるんだって言ったもんな。

前世からこういう性格だったとしたら、自分が幼くなつたとしたら、そりゃあ周りに手を出さないとはいへない……のか？

「でもですねー、やっぱりこっちはですと、ほら、この通り体は女じゃないですか。 あちらでは男として妊娠の危険ばかり考えているんですけど、こつちじゃむしろそれを望まれているのに肝心なものが着いていなくて。 それだけが残念ですかねえ——……。 こつちやどれだけ孕ませても喜ばれますのに。 お相手のお家からのお金と国家からの補助金とでがっほがっほでしたのに。 ああ、世界はまったくこれほどに理不尽です」

気がつけば……またうつとりとした表情になっている。

艶やかかっていうのはこういうのなんだろうな、っていう感じの。

肝心の内容で台なしだけだな。

「でも、せつかくなんです、女として産まれてしまったからには女の子たちを食べちゃおうって一念発起して」

「一念発起」

「はいっ！　なので前世の分も……あ、死んだ先の人生でつてことですよ？　……その子たちの分も食べなきゃって思って、たくさん食べちゃいました。 ……あ、今も続けていますけどね、もちろん。

だって高校ですよ高校！　前世風に言うくとJKたちの花園！　男子はほとんど出て来もしませんし、なによりフリーな子がとにかく多いんですっ！　いいでしょうここ、ねえ!!　あと、各国からのお偉いさんたちの娘さんたち、つまりはお嬢さまばかりなんですよ!!　滾るじゃないですか!!!　ねえ!!!」

ねえ……と、言われてもなあ。

「……………言いたい表現が思いつかないけどさ。

とりあえず、お前……早咲、すごいやつだな。　ほんとうに。　尊敬

はするよ。　男としてな」

同時に軽蔑もするけどな。

「男冥利に尽きますねえ、そう言われると。　あちらではいつもクズ男ー、とか、近寄るだけで孕まされるー、とか言われていましたし、こちらでも女を喰う女ってステータスになっちゃいましたけど。　で

もそこはほら、今世は学業とスポーツで印象を稼いでいますし、性格も優等生っぽく修正していますし？ あと、手を出さないお相手には紳士的に対応していますから、大丈夫ですっ」

「何が大丈夫なのかは全く以て、これっぽっちも分からないけど……ただ、ひとつ。」

早咲、……野乃早咲という前世では男だったし、今世でも女になったっていうのにめげずに女性と遊び続けているっていう、女の敵みたいな存在。

こいつは、根っこから、魂から女好きの男なんだろうな、って。

こう、暇があれば女と戯れていないと気が済まないようなチャラ男みたいなやつなんだって、な。

20話 自覚(前)

「……………と、というような事件が、たった数時間前に起きた。皆の寝ているあいだにな」

朝。

榎本美奈子の指導する……直人の編入したクラスの生徒がみんな揃うな否や、黙って座れと一喝して昨夜起きたことを説明し出し……簡潔に、しかしもれなく事態を説明し終えた彼女。

それを聞いた生徒……女子たちは、反応できるはずもなく、絶句している。

貧血起こしている生徒までいるようで、机に突っ伏す様。

しかし保健室に行く許可も得られず、直人が来てからの日常となっていた、教室内の警護についている兵士たちの数人が毛布を取り出し、教室の後ろで寝かせて介抱するという異常事態だった。

教室のカーテンは全て締め切られ、普段は悟られないようにと教室の外はただドアを閉めきつているだけなのだが……今日、今朝のこの場面ばかりは10人を超える兵士たちが銃を手に取りつつ廊下を見張っている。

それも無理はなく……この、人口が異常な速さで減り続けている世界で男を狙うのは、人殺しよりも重い罪であり、数十年前ならともかく現代では余程のことがない限り起きない……表沙汰にはされないものだ。

それは、彼女たちこの世界の生徒たちが生まれてから何十回と叩き込まれてきた「常識」であって——ゆえに、それがどれだけ大それたことなのか理解できてしまう。

だからこそ、気付けにと渡された薬を全員の生徒が飲んでいる。

——それでもひとり、またひとりと毛布に寝かせられる生徒が出て来ているが。

さて、この世界。

男性に対しての危害を企てただけでも……直人のいた世界での放火や貨幣の偽造や殺人よりも……あるいは、国家を危機に晒すような犯罪よりもずっと重い罪になり、ただ手助けをしたり見過ごしただけでも問答無用で何年か何十年かの牢屋行き。

そして主犯格は調べられ切ったあと、世界へ生中継の元、全員が処刑だ。

それは、直人が教われそうになったときの……欲を出したあのふたりの女たちも同様だ。

この事件はは速報として、数時間後、昼のニュースで……直人の情報自体は隠されてはいるものの全世界に発信され、この世界の大多数の人間が改めて知ることとなる。

この世界は、瀬戸際にいるのだと。

ゆえに、このような犯罪は絶対に許されないものなのだ。

——男性は、丁重に保護されるべき、絶滅危惧種なのだ。

「だから、これから自分のあいだは学園全体でも厳戒態勢に入ることになると決まったんだ。……そうだ、生徒にも教師にも業者にも直人を狙う連中が紛れ込んでいた以上、もはや事態は一刻を争うからな。お前たちこのクラスの生徒にはいないと信じているが……それでも移動や通信の履歴は洗われるだろうし、場合によっては事情聴取もあるかもしれない。……なに、関わりがなければ調べられるだけだ、そんな顔をするな。その場には、必ず私がお前たちの隣にいてやるから、な」

自分に向いている顔のほとんどが青ざめていて、多くの生徒が机に伏せているのも、床で寝かせられているのも、事態の恐ろしさに気分が悪くなったからだと分かっている美奈子は……慰めるように声をかける。

「……さあ、授業を始めよう。と言っても、今日は身が入らないだろうから軽めに、だな。うむ、ただの雑談と行こう。例えば私の友人の話や……彼、直人がどのような青年なのかもだな。ああ、先にも言ったように彼はカウンセリングを受け、今は安静にしている。」

また、そのために野乃も……あの野乃のことなら誰しもが分かるだろう、席を外している。しばらくは彼女にも詳しいことは聞かないでくれ」

「……………直人様」

「直人……………」

ちらりと振り返り、席の周りに護衛さえいなくなつて余計にいないのが強調されている彼の席を見ながら、彼の婚約者として最も近いところで世話をしてきた綾小路晴代と御園沙映は、ぽつりと彼の名前をつぶやいた。

○

「……………って感じになってると思いますよ。なので直人の知っている子たちは……すぐには行かないでしょうけれど、直に落ち着くでしょう。もちろん君はほとぼりが冷めるまではずっとここで缶詰ですね。あ、トレーニングルームなどは護衛の方と一緒に行けますからね？　ずっと動けないのも嫌でしょう？」

あれからひと眠り……はできず、うたた寝程度で朝を迎えた俺たちは、リビングで朝食を摂っている。

護衛の兵士さんたちは部屋の外……ドアの先と窓、ベランダの外でこつちを見ないようにして銃を構えたままっていう疲れそうな状態が続くらしい。

俺が完全に立ち直るまで……っていうのは、たぶんこの世界で生まれて俺よりもずっと耐性の無い……ああいう犯罪に遭いそうになった男、あるいは合った人たちに合わせた対応なんだろうな、そのあいだは基本的に俺と直接顔を合わせるのは限られた人たちだけだ。

美奈子さん、ローズ先生、ひなたさん……そして、目の前の早咲。

あの後に俺の前に来て……俺が平気だった相手だけだ。

……どうしても、いや、早咲のおかげで良くなる前までは顔なじみの兵士さんでさえ、近づかれただけで息が上がり始めていたからな。

……………どうも、これはトラウマというものらし

い。

悪意を初めて受けたんだからしようがないんだろうけど……やっぱり情けない気持ちでいっぱいだ。

だって、女性に近づかれただけで……って。

これじゃまるで、男性恐怖症の女性……。

……………。

ああ、そうか。

そういう人たちも、今の俺と同じ気持ちなんだ。

「ほんとうは、またなにかがあつたりしたら……それこそ、まだ捕まっていけないけれどヤケになった人たちが直接にーって可能性もありますから、セキユリテイが「かなり高」なここではなく、もっと安全な場所がいいのかもしれませんが」

「いや、ここでいいよ。今は警備、ものすごくなっているんだろう？」

「ええ。外に出たら物々しくてびっくりするくらいには。学園全体の上空もヘリやドローンで監視されていますし。今ごろは他の生徒も……周りの人たちも、大騒ぎなんじゃないですかねえ。あ、学園の周りにはバリケードとか迫撃砲とか戦車とか揃っているらしいですよ？ あとでテレビの中継で観ます？」

「……いや、いいよ。けど、まるで……ちよつとした戦場だな」

「この世界での男性、しかも健康な少年……いえ、青年ですね、の扱いなんてこんなものですよ？ だって、ひとりいるだけで人口の減りかものすごく変わるんですし」

「そういうものか」

「そういうものです。だって、平均で千人は軽く超える……あ、ごはんのおかわりは？」

「……半分くらい頼むよ。けど、あんまり食欲が」

「なら……適当にオムレツでもどうですか？」

「……………ああ、軽くでいい、頼むよ」

「りょうかいっ」

席を立って台所に向かう、今となっては男にしか見えない早咲を見

て思う。

……こいつが俺に手だししないって信用されているのは、ついでのように聞かされた女癖の悪さのせいなんだろうなっ、て。

だから、この空間に……貴重な男という俺とふたりきりっていうのを先生たちがかんたんに了承したんだらうから。

それは、俺にとっては……他の誰にも無理な、限りなく近い出身の男子と一緒にいるって言う、いちばんに安心できる相手だから。

「だけど、息が詰まる感じがするな。外は物騒で、ここは俺たちだけだし。ただでさえ体動かせないんだしな。この部屋から出るのも物騒みたいだし……ゲームで、テレビの前で動くくらいしかないもんな」

「それもそうですね。……では、台所からですけど、ヤな話の続きです。どうせならおなかいっぱい気分がそこそこいいときに言っときますね。……直人の誘拐には、末端まで含めますと数百人が動員されていました」

「……数百」

「はい。学外を含めて……と言うよりも、外が黒幕さんですのでそちらが大半みたいです。なので、すでに一部の人間には直人の存在も知られていることが分かりましたし、裏の世界の人たちにはとつくに……ほんと、どうやってかは分からないけど、知られている。それが分かってローズ……先生はものすごく落ち込んでいましたねえ……。……ですが、ここで下手に動いて……移動したりして、直人のことを直接に知らないでいた人たちにまで急に直人を知られるっていうのはリスクなんです。ここを固めて迎え撃つのと、移動中に襲撃される可能性。それを考えた結果、ここで様子見だと落ち着いたようですね。ま、今日のお昼で直人って言う飛び入りの男子生徒がいて、襲われたっていう情報は流すみたいだけど」

「……そっか」

「はい」

もそもそと……素材も最高級なはずで、昨日までは美味しすぎるって思っていた飯を咀嚼する。

今は、……まだ、そこまで美味しいとは感じられないな。

やっぱり、なんだかんだ言つて、あれが相当にこわかったんだつて
というのがこういうところからも分かる。

「あ。あとですね、今日から僕もしばらく一緒です。泊まりです
ね、当分」

「……早咲が？」

「はい。その方が……独りにならない方が良さだろうとの判断だそ
うです。実際に、ほんの数時間でしたけど、さつきも眠れましたよ
ね？ 僕がそばにいたのに」

「……………ああ、そうだな」

あの後。

休んだ方が良いと言われてベッドに横たわったものの、うとうとと
しては縛られていた場面を思い出して飛び起きるつていうのを繰り返
返した俺。

そこに早咲がもういちど来て、今度は近くのソファで寝始めて、
……それから30分くらい前までは、たしかにぐつすり眠れたもん
な。

あれを、撃退してくれた……中身は男、同じようなところの出身つ
ていう安心感からか。

「やっぱり誰かがいるつていうのは安心できるもんだな。……そう
だ、俺の……来る前の世界でも、ひとり部屋でこそあったけど、家
には母さんもいたんだ、当たり前か」

「ましてや寝込みを襲われた恐怖というものがありますからねー。
ちよつとやさつとじゃなくなりませんよ。人というのは過剰に恐
れを覚えるものですから。あ、はい、できました。シンプルイズ
ベストなオムレツ。僕がよく家で……あ、前世はひとり暮らしだつ
たので、作っていた手抜き料理だけだ」

「いや、俺なんかカップ麺くらいしかできないし、ありがとな」

ささつとオムレツを……なんでも家事スキルはモテるためには必
須なんだとか……作り、おかわりとして差し出してくる早咲。

おかわりだから知っているけど……不本意ながら、用意されていた

朝食よりも美味しいんだよな。

男の手料理って、もつとおおざっぱな感じだった気がするのに。

その辺は前世……って言うのか？それからの蓄積なんだろうか。

それとも、女として生まれ変わったから味覚とかも変わっているんだろうか。

「ああ、なによりも男がいるっていうのが安心できるのかもな。だから早咲も、男の格好したままなんだろう？」

「はい、これで正解でしたね。もつとも、女の子と一緒にいたいこのような感じですけど。モテますので」

「……………だから、男の格好している姿の方が多かったのか」

「はい♪ だって、この学園にはお相手がいなくて、しかも箱入りな子がたくさんいるからそりやあもう入れ食いで」

「それ以上はいいよ、俺、そういう話題にはあんまり興味ないし」

「それは残念ですねえ……せつかく同性の友人なんです、存分に自慢したかったのに」

「言ってる。俺とお前とじゃ、男同士……体も世界も同じだったとしても、たぶん生きる世界がもともと違うんだ」

「ま、そうですねー。死ぬ前だって、ほんの数人の仲間にしかな理解されませんでしたし」

「……………いたのか、お前みたいな女好き」

「ええ♪ ナンパしていると、自然と知り合いになるんですよ。あ

あ、彼らは今でもブイブイ言わせているんでしょうかねえ？ ……彼ら、もういくつになっっているんでしょうかねえ」

……こういう話になると、早咲は完全に男だ。

見た目は優男、中身はそれを超えたナニカ。

それが野乃早咲という……俺が、ゆいいつ安心できる女で、元・男なんだ。

21話 自覚(中)

「ところで、です。 あ、ところでなんだけど、直人？ ……僕が重い
思いをして持ってきたこれはどうです？」

「ああ、……………最高だな。 だけどそれ、護衛の
人
が」

「そう。 それはよかったですつ。 これは何年もかけて集めてきた
秘蔵コレクションなんですよ♪」

「……………まあいいけど。 だけどそれ、ほんとうに秘蔵、なんだよな。

……………そう、だな。 この世界じゃ、きつと、なかなか手に入らないも
のなんだろうし」

「です。 それはもう……………あ、多分君の世界でも同人ってあったと思
いますけれど、そういうところへ足を運んで何回かに1回あるかどう
かですねえ……………いえ、商業でもものすごくニッチ向けであるにはあ
るんですが。 あとは1発ネタとかで似たのを見かけたりもします
けど、残念ながら続きませんねえ」

「…………………………だ、ろうな」

早咲から振る舞われた食事を……………これまでみたいにとんでもなく
いい素材を使って豪華な料理、じゃなく、もつとふつうの……………母さん
がよく作ってくれたみたいなお味のオムレツを楽しんでから少し。

俺の目の前には、早咲が持ってきた大量の本や、映画やゲームソフ
トのパッケージがあった。

……………どおりで来たときには疲れ切った顔をしていたわけだな、でか
いリュックにパンパンに詰めてきていたんだもんな。

兵士さんが。

早咲じゃなくて。

ダンボール数箱分……………いくら鍛えていても重かっただろうな。

「けど、驚いたよ。 まさかこの世界に……………価値観が変な方向に真
逆って言ってもいいこの世界に、俺たちと同じような、男と同じ感性
を持った人がいて。 俺たちが読んでも違和感がほとんどないよう

な話とかがあるなんて、な。……こういうの、諦めていたから嬉しいよ。だって、テレビつけても……その」

「あ……つまらない、ですよねえ。なにせ、高嶺の花の男性をちやほやする番組がウケるんですもの、そういうのばかりになるのは仕方ないです。昔からある人気番組の例を挙げるなら……そうですね、とんでもなく美形な男の子たちを集めたユニットを引っ張りだこ、ですかね？ いつも人気投票して、彼らが出ない番組は露骨に視聴率が落ちますし。これは世界……子の世界中どこだって同じです。……だつて、絶対数が少ないんだから。

それなりに以上に格好いい男の子や男性つて。僕たちのいた世界でのアイドルやタレントつていう女の子たちよりも、ずっとずーつと」

「……そうだろうな。だからこそ、文化が……俺たちが生まれるずっと前から、映画とかからしてまるで違う方向になったんだろうしな」

ぱらぱらとテーブルに置いた本を手にとって眺めつつ早咲の言葉へ返事を返す。

この部屋には、俺が退屈しないように……いや、この部屋に来た男が退屈しないようにだろう、テレビはもちろん本や雑誌、マンガやゲームや映画など、結構な量の娯楽がこれでもかと用意されていた。

それはもう、リビングの一角の棚を丸ごと使うくらいには。

……だけど、違ったんだ。

どれも、俺の感性とはかけ離れたものばかり。

話は基本少女マンガみたいな流れのものしかないし、ゲームは……その、俺はほとんどしたことはないけどギャルゲーとかいうものの逆バージョンみたいなものしかなくて。

それ以外のものは、……とにかく男を取り合う。

ときどきおもしろいのはあったりしても、結局はそれを巡っての何十人の女性キャラクターたちの争いだしな。

だから、退屈していたんだ。

だから、適当にテレビをつけて……その内容じゃなく、俺の世界との違いって言うものを探そうと躍起になっていた。

けど……ええと、上手く言葉には出来ないけど。

「……ふーん。ここ最近の話題作から古めの人気作品まで揃えてありますね、この世界基準の。さすがは男性用の個室、豪華なのは部屋だけじゃ無いんですね。ま、一面大理石に比べたらこの棚ごとでも足りないくらいでしょうけど」

「……こういう、映画でしか見たことないような豪華な部屋よりも、修学旅行で行ったような和室の方が気楽なだけだな、俺。家だって結構ぼろいし」

「そうでしょうね。僕だってそうですもの。……申請しておきます？　そういう風に。ひと晩とかからず、朝出て夕方戻って来る頃にはすぐに用意してくれていると思いますよ」

「止めておくよ。俺のために部屋の内装を丸ごと取っ替えされるとか、そっちの方が疲れる」

「あははっ、でしょうね、分かりましたっ」

早咲が、壁に掛かっている高そうな絵をこつこつと叩きながら言う。

……………。

ああ。

早咲、こいつもやっぱり、俺と同じ価値観を持っているんだな。

そう思うだけで、暖かくなってくる。

「話の主軸が恋愛と人間関係、それもドロドロでエンディングはお決まりのように理想の男と結ばれるか、それとも暗ーい感じで終わるか。そういうのばかりですからねえ。……まあ、おもしろいものもあるにはありますけど、でも、やっぱり」

くるっ、と、うなじの辺りで結ばれた髪の毛を翻しながら早咲が笑う。

「——僕らが読みたいのは、こういう話じゃない。もっと、少年マンガみたいなものだったり、推理ものだったり。別に恋愛要素はあってもいい、けどもそればかり何回も似たような展開で繰り返される

のは勘弁。いちいち立場が上の女の人にいじめられる展開があつてうつとうしい。登場人物が多すぎ。どうでもいい過去のあれやこれやなんかさっさと飛ばしたくなる……ですよね?」

「……そうだよな! やっぱそうだよな!」

「はいー、だからこそこうして収集つていうものをしていかなければならないわけで。本屋さんに通い詰めて、映画も片っ端から観て、いろんなイベントに出向いて。……でも、売れませんか。個人が作ったもののほうが当たりが多めです。そういう作者さんたちとコンタクトとつておくのが鍵なんです」

「あー、そうか、これ、元はと言えば早咲、お前が楽しむために、だもんな」

「ですね、こういう……僕たちが満足できるようなものを集めているのは、恐らくこの世界ではものすごくマイナーなので、なかなかないでしょうし。家でヒマしてるとき、ぱらぱらと楽しめる適当なマンガさえないとか地獄じゃないですか」

「そうだけど……大変だったんじゃないか? この世界、特に娯楽系が俺たちの世界とは」

「ええ。でも、10年近い時間をかけられましたので、そこそこ、ですかね? 今ではネット……は、そっちにもありましたよね?」

「ああ、あるな。……こつちにもふつうにあるから気にしなかったけど、そうか、……半世紀以上前からの歴史が丸ごと変わっているんだ、ヘタしたらそれすらもなかった可能性すらあるのか」

ネットがない。

……想像しただけでぞつとするけど、ありえない話じゃない。

歴史が……あるときを境に変わり始めて、半世紀前には完全に変わっていて。

起こったはずの戦争が起きていなかったり、全く知らない国同士が男を巡って戦争していたりするんだからな。

だって、テレビを……数日だけだけ見た限りじゃ、ほとんどの政治家だって女の人だしな。

俺が知っている……朝のニュースとかで見たことのある人は、誰ひ

とりとしていないんだから。

少なくとも、娯楽系の歴史に関しちや……ええと、マンガの造りからして違っている時点で相当に変わっているもんな。

「……直人が「こういうこと」について尋ねてきたりしなかったと聞いていたので予想はしていましたが、僕たちの世界は似ているんですね。まあ僕の場合はすでに去ってから十数年も経っているのです。時間の早さっていうものが同じなら、とつくに未来になっているはずですよ」

「……………えつと？ ごめん、どういうことだ？ それ」

「僕が……前の世界で死んでから、もういちどこうして生まれてこの年になるまでの時間が、経っているかもしれないということです。あつちに残してきた彼女たちや、家族は。」

「……………ごめん、これは忘れて。あ、で、こういうことを言いたかったんだけど……何だか難しくして。ほら、これみたいにさ」

「こういう感じの、と、……ぱらぱらと見た限りにはSF系のマンガを手渡してきた早咲。」

「そういうことで……………、この話は置いておきまして」「話し始めたのは早咲じゃないか？ というか、今のは」

「いいじゃないですか、脱線だつてしますよ、僕だつて。なにせ、ほぼ同郷の友人を見つけたんですから。今まで言えなかったこととか、ぽろつと出ちゃったり。……ま、当分は触れなくてくれるとうれしい、かな」

「……………ああ」

ほぼ、同郷。

俺たちが来た世界……生まれ育った世界っていうのが同じっていう保証はどこにもない。

だから、ほぼ、か。

そして、早咲の世界は「こっちで早咲がこの歳になるまでの年月が経っている可能性」が。

……………。

……俺が帰ることができなかつたとしたら、いずれそういう気持ちになるんだろうか。

ぱんつと、軽く手を合わせて早咲が首をかしげつつ笑顔に切り替え。

「……で、ですね？ ネットなら全世界の人が繋がれます。なので、こういう……僕たちの世界では当たり前でした王道の作品とかいうものも、この世界ではものすごくニッチで、ほとんどの人は知りさえしません。けれど、少ないながらも一定の需要はあるみたいで、ちらほらと見かけるんです。だから、時間をかければ集められたんですよ。……これが、ネットのない世界とかだったりしたら、たぶんこの10分の1も見つけることもできなかつたはずですし。直人も英語を読めるようになったら分かるでしょうけど、海外の作品にもそれなりがあるんですよ？ 僕たちが読んでおもしろいものって」
ほら、ネットの前には同人とかで人が集まっていたって聞いたことがあるでしょう、と言われ、そういえばどっかのマンガでそういうのを見た記憶があるのを思い出した。

○

「で、ですね？ ……そのお……」

「……どうした？ 急に」

ふたりして……20、30分くらいだろうか、楽な格好で早咲の持ってきたマンガを読んでいたところ、不意に早咲が起き上がり、……なぜか正座をして俺の方を見てくる。

いや、ほんとうになぜだ。

なにか大切なことを言おうとしているのか、やけに真剣な顔をして。

「……実は、ですね？」

「お、おう」

「……………僕、少ーしばかり、面倒なことがあります」

「面倒なこと、って?」

「まあ、それはいいじゃないですか」

「言いだしたのはお前だろ? 早咲」

「まあまあまあ。つまりですね、そのー、厄介ごとがあるので、僕、あまり帰りたくないんですよ。それに今は試験も遠いですし、特に用事もなくて暇なんです。なので、こうして適当に過ごさせてもらってもいいですか? ここで」

「いや、いいけどさ。そうして扱られると余計に聞きたくなるな、面倒ごとって」

「あー、言いくいなのでそのうちでいいですか? そのうちで。で、いいですか?」

「……………いや、いいも何も、俺が安心できるのはお前とか母さ、美奈子さんとか…………あとは既婚者の人。それも、旦那さんともものすごく近い関係の人くらいだし、別にいいけどさ」

「ほんとうですね? ああ、よかったです。これでひと安心ですねっ」

「ぱあつと、…………この瞬間ばかりはどきつとするような、女子みたいな…………いや、女子になってるんだけどな、早咲は…………はにかむ、っていう感じの笑顔を俺に向けてくる。」

「ガッツポーズもしているけど、脇を締めているからどう見ても女子の仕草だし、それにいつの間にか正座が崩れて…………女の子座りっていうのか? に、なっているし。」

……………

「…………いやいや、こいつは男、肉体は女だけど心も格好も男なんだ、嫌な考えは遠ざけないと。」

「直人が頼んでいるっていうことにしたら、美味しい料理もお菓子もジュースも、なんでもかんでも頼み放題ですし? いやー、直人様々ですねっ。直人様って呼びましようか?」

「…………それ、晴代、…………綾小路さんと被るから止めてくれないかな」

「あら、晴代ちゃん…………あー、同級生にも様付けしますものね、彼女。分かりました、直人のままにしておきます」

「そうしてくれ」

はあ、と、こっさりため息をつく。

……ただでさえ、一瞬でも変な感情が起きたんだ。

これ以上なにかがあったら……今度こそ、俺の心の平穏っていうものが、完全になくなってしまうもんな。

早咲は、男。

肉体上は違えども、俺と同じ男。

それで、いいんだから。

22話 自覚（もうすぐ）

部屋の中に、ときどき新しく菓子の封を切る音が響く。

パリパリと、菓子を口に運んで食べる音が響く。

そんな調子で、もう数時間は経ち……俺たちはすっかりくつろいでいた。

どうせなら床の方が楽じゃないですか？という早咲の提案で、俺たちはテーブルをどけ、テレビの前に陣取り、適当な番組を流しながら……テーブルの上に用意されていた菓子のほとんどを開け、極めて不健康な夕方を過ごしていた。

……………ああ、これだ。

こういう、どうでもいい時間を過ごしたかったんだ、俺は。

ちやほやされるんじゃなく、過剰に反応されるんじゃなく、ただこうして……静かに過ごせる時間っていうものを。

「あ、直人。このマンガでもあったけど、やっぱりタケノコがいちばんってことでいいでしょうか」

「……いや、俺は別にどうだっていいけど。でも、なんでこういうところと同じなんだ……。菓子、見たことないものばかりなのに」

「さあ？ それで直人は、里と山、どっち派ですか？」

「俺は特にこだわりはないな」

「ならここはキノコにしましょうか」

「……お前、10秒で浮気するなよ」

「いやー、だってこれ、意外と盛り上がるんですよ？ 山・里、あるいは第三勢力って。ド定番です」

「知らないよ……俺、興味ないし」

「そうですか。なら仕方ないですね」

「ああ、仕方ないんだ」

そう言ったと思ったら、……その両方をいっぺんに頬張りながら手元のマンガに視線を落として急に黙る早咲。

……………こいつ、話してみると意外と気分屋なんだよなあ……。

なんというか、興味がそのときそのときでころろと変わる感じ？
けど、話している限りはどう聞いても男との会話でしかないわけで
……それが、俺を困惑させるんだ。
……と。

「……あれ。 おい早咲、この続きの巻って」

「あ、ごめんなさい、今手元に。 あと半分なので別のを読んでいてく
れますか？ 久しぶりに読むので楽しくって」

「いいよ、無理しなくて。 適当なのを読んで待つから」

「すみませんねえ。 あ、最後のキノコ食べます？」

「……ああ」

すつ、と、おなじみのデザイン……によく似たパッケージをした箱
の中の袋に入った菓子を差し出され、その中からひとつだけ残ってい
た、……おい、これ莖しかないじゃないか。

「……………」

すつ、と視線を逸らす早咲。

……こいつ……。

……………」

仕方なく箱ごと受け取って味のない細長い部分を食べ、ゴミ箱へ投
げ入れる。

そういうのは任せたとばかりに早咲の視線は紙面に落ちたまま。

……まあ、これまでずっと、何かにつけて世話を焼かれすぎてうん
ざりしていたからな。

こういう素っ気なさこそがいちばん楽だし、ま、いいか。

適当にマンガを引っ張り出し、開く。

もう、とつくに夕飯を……きちんとしたそれを食べようという気は
失せているし、そういう連絡もさつきしてしまった。

だから俺は、俺たちは……ただ黙々と、ときどき二言三言話し合い、
また読みふけるといふ静かな時間を過ごした。

部屋に音楽が鳴り響き、思わずびくつとした。

「……何だ？ この音は。」

「……あ、ごめんなさい、これ、僕のスマホの着信音です。……ちよつと外しますね」

「あ、ああ、分かった」

そう言っただけで立ち上がった早咲は、俺から離れるようにして誰かと会話をしながら歩こうとして、……くるつと周り、引き返してきた。

「直人」

「……どうした」

「えつと、ですね？ 夕飯……正直もういらなくなってると思ってたんですけど、何がいかつていう連絡です。あの、軽くでいいって言っていたけど、じゃあ何がいいのかって聞いてから、いくら直人に連絡しても返事がなかなか返ってこないから、って」

「……あ、すまん。マナーモードにしてた」

「駄目ですよ？ 昨日の件で、ただでさえみなさんピリピリしているんです。そんな中で連絡が途絶えたら、いきなりドアと窓を破って護衛の方たちが入って来ちゃいますよ？ 直人の精神状態っていうのを考えてもらって、外に出てもらっているんですし」

「……そ、そうか。そりやそうだよな、すまん」

「いえ、いいですよ。……というわけです、先生。直人や僕がどうとかいうわけではないのでご安心ください」

見ると、……数十件の連絡が来ていたらしい。

……数字を見てびびったのは黙っておこう。

元から友人はいたにせよ、互いにほとんど連絡はしないような奴ばかりだったし、母さんも直接会って話した方が早いっていう性格だったから、多くても数件っていう具合だった。

それに俺は、ソーシャル何かも……この時代なのに、登録と入学のときの交換のための交換とあいさつをただだけで、それからは手つかずという始末だったんだもんな。

うん、しようがないんだ。

……見てみると、最初はメッセージ、次第に電話の割合が増えていき……という感じだったらしい。

………早咲が言っていたみたいに、よく突撃されなかったものだと思う。

それほどまでに、早咲、こいつという生徒が信頼されているんだろうか。

まあ、中学……いや、小学校からだっただか？ ……主席っていう何よりも説得力のある立場に加えて、俺がこの世界で見つかったときからの仲だし、なにより襲われかけてパニックになっていた俺を落ち着かせたっていう実績まであるんだ、当然なのか。

……それに、早咲の言うことがほんとうなら、こいつはこの世界でも女好きで相当に有名なはずだもんな。

そんな奴が、男の俺を……っていう可能性は低いって思われているんだろう。

俺がそう言うのに慣れていないから、って言って避けていたけど……やっぱり早咲、相当な遊び人ってやつなんだろうな。

俺が、一生かかっても理解でき無さそうな思考回路と下半身なヤツ。

……最初の頃に思っていたように、優男っていう印象。どうも、正しかったみたいだな。

実際はもつと、ずっとひどい有様なんだけど。

心の中ではチャラ男とでも呼んでおこう。

「……はい、はい、それでは。 ……あ、直人、終わりました」
「………ごめん、俺のせいで」

「いえいえ、あんなことがあったんです、今はただゆっくりしたいだけかもしれないって先生方も考えていたみたいだったので、ただ、今ふたりしておかし食べながらマンガ読んでいましたーって言っただけですし」

「……そっか」

「はい。 あ、で、夕飯なんですけど、一応きちんと食べなさいって言

う命令が来てしまったのでなにかしら頼まないで、なんですけど……
どうします？ 朝と昼みたいは、ドアの前まで持ってきてくださるみ
たいですけど」

「……あー、どうするかなあ。炭酸飲みすぎたし、食欲、あまりない
んだけどな」

「僕もですよ——……。けど、美奈子先生、怒るところわいすし」
「……美奈子さん、こっちでもやっぱ説教は厳しいのか？」

「あ、そういえば直人の世界でも美奈子先生は先生しているって言っ
ていましたね。ええ、そうです、ものすごくこわいんです」

「主席っていう、いちばんの優等生のお前も叱られたりするんだな？」
「あ——……。えっと、その。はい。……学業やスポーツ以外
のことで、ちよつと、です」

「そつか。まあ、母さ……美奈子さん、服がよれているだけでも叱っ
たりするもんな、お前でも1度や2度はそういうことはあるか」

「え、ええ、そういうことです。あ、で、どうします？ 何か頼ん
だ方が……主に僕が怒られないために、お願いしたいんですけども」
「……なら、ピザとかにするか？ 体に悪いって叱られそうだけど、俺
がどうしても食べたいって言うって言えばいいだろうし、あれな
らいくらでも食べられるだろ？ こんだけ食欲なくても。サラダ
もお願いしますって言うつとけば栄養バランスがー、とか言われないだ
ろうし」

「あ、いいですねっ。……あ。そういえば、お昼。さっきのお昼も
ラーメンと餃子っていう組み合わせで僕たちニンニク臭すぎいで
しようし、きつと明日まで消えないはずです。ならガーリック系の
も頼んじやいます？ 余ったら冷蔵庫に入れておけばいいんですし。」

あ、直人はそういうのも好きですか？
「ああ、ピリ辛のも好きだぞ？ いいな、こっちに來てからつていうも
の、なんだか健康すぎるっていうか、味付けが薄いものばかりしか口
にしてなかったから、そういうのが食べたくなってきたよ」

「あー、そうでしょうねえ。直人はただでさえ重要人物で男子で、し
かも美奈子先生の関係者と來ています。そりゃあ、……たぶんメ

ニューとか渡されたんでしようけど、それにも「体に悪そうな食事」なんて載せませんよ」

「……そうか。 無いんじゃない、見せなかつただけか」

「ですねえ。 こころって基本、男性の望みはすべて叶える価値観ですの……逆を言うのと、うまいこと誘導して男性に、心身どちらも不健康になりそうなものは与えないっていう仕組みになってるんですよ。 ええ、デイストピアそのものですね？ ある程度の健康と好みの女の子たちに囲まれた、働かなくてもいい生活ができて……下半身だけは満足できるという構図です。 それが結果としてこの世界を少しでも長持ちさせるための機構なんです」

……さらつと言われたけど、こわいな、それって。

元男な早咲でも何でもないって感じで口にした、「与えない」っていうモノ。

……それはつまり、幼いころから洗脳まがいの教育で、この世界の女性が望むような男に育て上げるためのシステムなわけで。

「あ。 ……大丈夫ですか？ ごめんなさい、ヤなこと口にして」

「……いや、平気だ。 こういうことに気がつかせてくれるっていう時点で、この世界の人たちと比べられないくらいありがたいからな」
そう。

俺が頼れるのは、心が完全に男で……男として生きてきた記憶もあって、同じような世界で生きてきた早咲だけ。

こいつだけ、なんだから。

23話 自覚

「……あー、おいしかったですねえ。 やっぱり体に悪いものっておいしいって決まってるんですね——……けぷ」

「そうだなあ……少し食べ過ぎたかもしれないけどな、これ」
「いいんですよ——……あ、でも少し動けないかもです」

ふたりして……腹がいつぱいすぎて寝転がることもできず、もぞもぞとだらしくソファーまで這いずって、だらしない姿勢で座ったまま何でもない話をする。

早咲も俺も、制服こそ着ているもののほんとうにだらしない格好になっっている。

俺の制服もシワが着いているだろうし、早咲に至ってはヘソが出ているくらいだしな。

……

腰が、細い。

肌が、白い。

……そこは、やっぱり男とは……じゃなくて！

「あ、あ——……けど……こういうの、学食のメニューすらなかったよな？ 女子だってラーメンとか餃子とか好きだろ？」

「あー、そうなんですけど、でも、そうですね……こっちの人たちって、基本的にお上品な食事じゃありませんから。 いえ、もちろん今食べたみたい料理自体はあるんですけどね、ほとんど同じ味付けの」

「あるのか……俺はてっきり」

「女性は味覚も嗅覚も感性も違いますからねえ、男とは……もつとも、大半は、なので、こうしておいしいものを出すお店もあるんですけど。 けど、……やつぱり少ないですね。 ほら、このピザだってかなり小さくて、僕が言ったとおり倍の量にしても平気だったでしょう？ こういうちよつとした違いがいっっぱいなんです」

「あ——……確かになあ。 あれじゃ食事と言うよりは間食っていう感じだしな」

「足りないですよね？　なのでこつちの人たちはサラダとか前菜を何皿か食べるんですよ。……ま、ここがお嬢様、いや、ご令嬢様、お姫様階級の子が集まっっているっていうのもあるんですけどね——」

ぼんぽんと……俺と同じように膨れた腹を叩きながら言う早咲。

……肉体は女だからもう食べられないとか言っつて、余りを俺に押し付けたのは忘れていないぞ？

「んあ——……これで、もつと大勢の男子が集まってわいわいするのが楽しかったんですけどね——……もう、絶対に無理っつてというのがちよつとだけ悲しいです」

「……他に男、同年代のっつて」

「いますけど……聞いたと思いますけど、そもそも結婚している間柄の女性に囲まれていて話せもしないっつて言うか、学校自体に来たりもあまりしませんねえ。だつてほら、彼ら……勉強する意味ありませんし。いえ、来る人もいます、お家で勉強する人もいますけど。

でも……ほら、彼らの生きる目標というか生きる意味っつて……子作り、なので。直接的にと、間接的にと。生きている内に……えつ

と、直接じゃなくてもどれだけのこどもをこの世に産み出させたかっつてというのが人生の目的っつて擦り込まれていますし。そんでもって、今の僕っつて女でしょう？　だから」

「……この世界の男たちの悲惨さはともかく、早咲は彼らに近づけない、のか」

「ですね。まあ、今後は直人のそばにすることが多くなると思いますから、直人を利用、おつと失礼、一緒にいないといけないっつていう口実で近づけると思いますが、男子同士の集まりに。いやー、小学校のころまでは結構話とかできて楽しかったもので、これから楽しみですねー。直人さまさまです」

「……………利用とか、不審な単語が聞こえているぞ？」

「いいじゃないですか、軽い冗談ですよ。男同士じゃないですか」

ちらつと横を見ると、男子の制服を着て……胸も尻も出ていなくて、髪の毛も後頭部の下の方で縛っている感じで、少し女っぽい見た

目だけど男としても見る事ができる。

そんな早咲がいる。

野乃早咲。

……この世界で、たったひとりの……俺がほんとうに心を許せる存在。

「あ、ちよつとお手洗いに行つてきますね。食べたものがもう出さうで」

「そんなにすぐに出やしないだろ……というか、下品だぞ？」

「いいんですよー、こんな軽口叩けるの、直人くらいですもん」

「女同士だと……女子校とかだと男みたいに酷いって、俺の世界で聞いたことがあるぞ？」

「でしようし、知っていますよ？ けど、こつちつてほら、相手がいなのが9割つていうものすごい環境なので、自然と男役つていうのが出てくるんですし、それを大半の女性が望んでいるんです。タカラヅカみたいなものですかね？ ……なので、そういう男役の女子の前では」

「共学の女子みたいに「お上品」になるってわけか」

「です。 加えてここに来ている子たちの出身もありますけどね。

あ、それにほら、僕もふだんこういう格好しているでしょう？」

立ち上がってくるつと回る彼女……彼つて言つてやつた方がいいだろうな、いや、やつぱり「こいつ」でいいか……は、女子みたいにスカートを翻したりもせず、縛った髪の毛をふわりと浮かせる程度、上着が軽く浮く程度の……中性的な男、男子生徒にしか見えない。

「こういうの、僕だけじゃないですよ？ 自分から「男役」を選んで男の格好をして……まあ、成長して体つきが変わつちやつたら無理ですけど、そうじゃない子つて、それなりにこつち側になるんです。 んで、自分は物語の中でしか見たことのない男子扱いをしてもらえて、他の女の子も男子みたいな存在がすぐそばにいて……なんなら恋人同士になれるつていうので、どっちもしあわせになるんですよ。 だから僕のこれは特別じゃないんです」

「なるほどな。 そんなで、前世の記憶を使つて贅沢な暮らしをしてい

るわけだな。勉強もスポーツも万能で、頭も年相応以上に回って、だもんな」

「じゃなければ主席なんて……いいとこの小学校からずっと、9年間も取り続けられませんよ。あ、今年でたぶん10年連続になりますね。でも、それに見合った努力はしているんですよ？ ちよつとした取りこぼしで2位の子に追い抜かれちゃうんですから。運動だって人一倍していますし？ 走り込みとジム通いは日課ですし。まあ今はさぼっていますけど」

えっへん、と腰に手を当てて偉そうな顔をして、そうだと慌ててトイレに向かつて行く。

……確かここは特殊な、治外法権とかになっているほどの学校だ。いろんな国のお偉いさんの娘さんたち……女子たちと、成績がものすごくいい人たちが集まっているところ。

そこに入るだけでもすごいのに、さらには主席。

前世で……幾つくらいまで行ったんだか知らないけど、それでも今世でものすごい努力をしているんだろう。

平均点ちよい上をうろうろしていた俺とはまるで違って。

……………

はあ、とため息をついてソファアームにもつと体重を乗せ、くるくると回る翼を眺めながらぼんやり思う。

……こういうのって、いいな。

中学のときの友だちとの修学旅行での夜を思い出す感じ。

お互いに遠慮がいらなくて、ただただらだらとしていても平気な感じ。

……悲しいことに休みの日や夏休みとかにそういうことをできるような相手はいなかったんだけど、だからいつそうに楽しかった、ああいう感じ。

気軽な感じ。

……この世界に来てから、ずっと息がつまる感覚がしていたのはこれだ。

こうして気楽に相手できる人が、ひとりもいなかったからだ。

もちろん美奈子さんや晴代さ……晴代や沙映はいい人たちだ。

だけど、彼「女」たちはやっぱり女性であつて、女子であつて……俺たちとは違う存在。

早咲が来てからみたいにな、話してはお互いに好きなことをして、ぽつぽつと軽く話すつていう時間はない。

彼「女」たちの前では、ずっと、終わることのない会話が続くんだ。

……俺を気遣っているっていうのもあるんだろうけど、大体の女子つて……女性つて、話すこと自体が楽しくて、延々と話している印象があつたけどそのとおりで。

その上、俺を意識しているのが丸わかりでこっちまで意識せざるを得ない有様だしな。

……ああ、沙映はそういうのが薄いけど、ゼロって言うわけじゃないし。

沙映は気分屋、んでひなたは引つ込み思案なこともって感覚だから……あのふたりはまだ楽な方だけ。

けどどやつぱり俺には、まだ……一時は覚悟もしたし、近い内にしなきゃって言うのは分かっているけど、でも……恋愛なんて、結婚なんて早いんだ。

早すぎるんだよ。

俺、今まで彼女もいたことない高1だぞ？

それが急に、急いで相手と仲良くなって結婚しろだ？

とりあえずでいいから気に入った子に声をかけて……その、しろ、とか？

できたら半年以内には……ええと、孕ませろ、だとか？

……無理に決まっていたんだよ、初めから。

だからこうして……早咲がうまいこと言ってくれたらしく、当分は早咲とふたり、のんびりこの部屋で好きにしていってという時間を楽しんでもいいだろう。

友だちと……男の友だちと寝転がったりして、朝から晩までマンガを読んだりゲームをしたりするのが楽しいんだからな。

「はい、さっきの続きの巻です。　お待たせしました」

「おう、ありがとな」

「これ、ラストで……おっと。　読めば分かりますよ……?」

「何だよそれ!?　気になるって言うか、ギリギリでネタバレだぞそれ!?」

「ネタバレは確かに悪です。　発売初日や上映初日に1番乗りして嬉しそうにネタバレしてくるような輩は罪です。　けど、これくらいならセーフですし?」

「お前な……」

何でもないような顔をしてネタバレをしかけた奴が何を言うのか……とも思うけど、こういう軽さがいいのかもな。

お互いに冗談も言い合えるし……っていうか早咲の方が今みたいな軽口を叩いてくるんだけどな。

……これまでであった人たちみたいに、どこが楽しいのか分からない話題とか、微妙にずれた反応をお互いにして気まづくなったりもしいい。

ただただ、学校で席をくつつけてお昼を食べているときみたいな感じ。

今日は1日中、起きてからずっと思っていることだけ……やっぱり早咲は、いい。

本音を言っても平気な間柄で、何よりも感性が同じって言うのが、な。

食べたものがある程度消化できたのか、ごろ寝しても平気になった俺たちはテレビを前に、ソファーに横になりながらマンガや本を読みふける。

ああ、もちろんソファーは別で、俺には大きい方、早咲は小さめなそれに、テーブルを挟んで対角線上にあるそこに寝転がっているけど、お互いに話しやすいよう視線が合う姿勢だ。

……………。

こういうのは嬉しいけど……、もし。

さつきから、朝からどうしても、何度も頭に昇ってきてはどうか
して落ちつけている考えが、顔を覗かせるんだ。

……もし、こいつが。

野乃早咲っていう肉体は女子なこいつが、心の性別まで女子だった
としたら。

それでもって、今みたいな性格と考え方をするヤツだったら。

女、だったら。

その考えが浮かんでくると同時に、今日何度目かの感覚が起きる。
心臓が跳ねるといふか、体が軽くなるというか。

そう、これは高学年と中学で、結局仲良くなることができなかつた
女子を見るたびに、近づいた時に感じていた感覚。

考えちゃいけないから打ち消すけど、それでも不意に浮かび上がっ
てくる、この感覚と……「意識している」という想いだ。

考えちゃいけない。

感じちゃいけない。

想っちゃ、いけないのに。

それなのに、俺は。

……。

24話 葛藤と……

「! あ、直人っ」

「ん!? ……な、何だ!?」

「あ、ごめんなさい、急に大声出してしまって。その辺りまで読まれたのならいいですよね! そんなところでヒロインが裏切るだなんてびっくりしたでしょう? この驚きを早く直人にも知ってもらいたくって!」

「あ、……………ああ、そうだな」

早咲。

俺の、唯一の……全てを分かってくれる友人。

その「彼」のことを……一瞬でも、「彼女」として見ていたことに気がついた瞬間に声をかけられたもんだから、つい話を合わせてしまったけど。

……………。

早咲は、男だ。

肉体は女かもしれないけど、俺にとっては……この世界で、唯一親友になってくれる相手だ。

それは何も男というだけじゃなく、ここじゃない別の世界のことを知っている相手という意味でも、だ。

だから、こんな考えはまずい。

こいつがほんとうに「女子」だったなら……そんなことを思っていた矢先だったから、頭の中を覗かれでもしたかのような感覚で、手に持っていたマンガすら取り落としそうになった。

……………ああ、まだ序盤までしか読んでいなかったけど、手だけは後半に差し掛かっていたのか。

いや、目では追っていたけど……早咲のことを考えていたから。

「ラストでもう一回予想できないイベントが起きて次の巻ですから、そこからはゆっくり読んだ方が楽しいですよー?」

「……あ、ああ、ありがとうな」

そう言つて、……早咲がジュースでも取りに行くんだろうか、立ち上がつて離れた隙にため息をつき、危なかつたつていう意識を改めて持つ。

早咲は、男なんだ。

男。

あいつは、男。

……男、なんだぞ。

わざわざ男の格好をしていて、……話を聞くにもものすごい数の女性を……その、相手にするくらいのプレイボーイつてやつだ。

なんだから、俺が……間違つても「女」だと思つちやいけないんだ。

……。

……ああ、今のうちに話が分かるところまでページを戻してストーリーを追わないとな。

○

「……

「野乃早咲」という「前世では青年だった少女」は、はあ、とため息を何度もついたり、頭をガリガリとかいたりしながらマンガを読み直した少年……榎本直人を離れたところで、顔だけ出してじいー、と眺めていた。

彼からはちやうど見えにくい、キッチンの端から、数分もかけて、じっくりと。

んー、と唇に指を当てつつしばらく考え込み……彼女はスマホを取り出すと、ずいぶんと長い文章を打ち込み始める。

慣れた手つきで、それぞれ似たような文章を、何人もの人間へと。

○

「……ふう——……、気持ちいいですねえ、おふろ。しかも直人のこの部屋のつて、とつても広いじゃないです

かー。 あー、今日の疲れ……なんてないですけど、でもなんだかりラックスできましたー」

時間は過ぎて夜。

泊まりがけだからと、いちど荷物を取りに行った早咲はそこその大きさのかばんを抱えて戻って来るなり、僕って一番風呂じゃないと駄目なんですよ、とか言っ過ぎてさっさと……いつの間にか湧かしてあつたお風呂に入ってしまった………こうして出てきてしまった。

………。

そうだ、出てきてしまったんだ。

さつきまで、おふろの前までは何にも感じなかったけど、今の早咲の髪の毛からはものすごくいい匂いが漂ってきている。

いや、髪の毛からだけじゃないだろう、全身から。

……俺が使っているのと同じシャンプーとかのはずなのに、どうしてこんなにいい匂いだって感じるんだろうか。

分からない。

……いい匂い過ぎて、まだ少ししっとりとしている感じの髪の毛が頬や首に張り付いていて、顔も少しだけ赤くなっていて、その上パジャマだから体のラインが……明らかに男じゃない女っていう形が見えて、俺の頭は正常に作動しなくなっている。

「……人？ 直人？」

「……ん、悪い、さつき読んだ内容が気になってな」

必死に視線を手元の本に落としつつ、気がつかない内に速くなつていた心臓の音に気がつかれないかって心配になりながら、なんとか頭の中から今の感情を遠ざける。

「直人って、いちど集中すると終わってもしばらくぼーっとしちゃうタイプなんですね。 大丈夫ですよ、知り合いの子にもそういう子、いますから」

「………、それって、お前の「お手つき」な人のことか？」

「当たり前じゃないですかあ。 僕、気になったフリーの子、とりあえ

気がつけば先に視線が吸い寄せられているのが分かる。

さっきのようにもうひとつのソファに寝そべって、ときどき何かを話しかけてきて……俺もまた、適当な答えを返しているのをどこか遠くから見ているんだ。

早咲の体の、女らしい部分を。

この世界に来て……居心地の悪さでそれどころじゃなかったから見ずに済んでいた、女子の体つきっていうやつを。

女は見られているのに敏感だから我慢しろ、って母さんから教え込まれていたおかげで……少なくとも同級生の男たちよりは紳士的にできているはずの俺が、ここに来て、よりによって早咲に対してはできなくなっていた。

そのうえ、これまでに感じたことのない感覚が、胸のあたりにうずうずと回っている感じで。

……………やばい。

これは、まずい。

駄目だ。

早咲の中身は男。

男、男。

男。

……俺と同じ、男なんだ。

いつもの態度からは想像できないけど、学校では女好きで有名らしい………実に男らしいやつなんだ。

「……………直人？」

「わっ、悪い！俺、やっぱり入ってくるよ！ そうだよな、昨日は寝不足なんだから！」

「そうですねえ、その方がいいでしょう。眠くなってからおふろに入ると、目が覚めちゃうことってありますし」

「そう！ そのとおりだな早咲！ だから入ってくるよ！ 好きにしていってくれ！」

「はい。じゃあ適当に過ごしていますね」

急いで寝室に戻って着替えを取りつつ、ふと思う。

.....俺は、襲われたっていうあれのトラウマ
でしばらく外に出られないって言うことになっている。

それは早咲っていう男という方がずっと安心できるからって、早咲
から提案されて美奈子さんにも了解してもらって、それでしばらくは
ここで早咲とふたりで過ごすっていう.....ついさつきまでなら天国
みたいな空間だったんだ。

だけど、今は一気に逆になっている。

早咲が近くにいると、今まで強く「男」だっと思って思っていた分、「女」っ
ていうのが気になりすぎるようになって、抑えきれないんだから。

俺のことを、この世界でたったひとり理解してくれる人間。

それを、俺の方から遠ざけるわけにはいかないんだ。

「.....あ、直人。 お風呂場のマット濡れているのが嫌でしたら変え
てくださいねー」

「.....そうするよ」

だけど、この気持ちの整理がつくまで、俺は早咲と一緒に暮らす。

ほぼ24時間.....寝室まで一緒に。

だから、俺がひとりになれるのは風呂とトイレ.....あとは寝ている
あいだの意識のない時間くらいしかない。

かと言って、いつあのとときの.....目が覚めたら誰かの悪意に晒され
ていた、あのとときの恐怖を振り払うことなんてできないから、早咲が
いなくてもいいっていうことにもできなくて。

だから。

.....。

.....ぶわっ、と、開けたドアから.....風呂場から、さつき俺を悩ま
せていた匂いが流れ込んできた。

そうか、ついさつきまであいつが、ここではだかに、.....。

.....。

.....風呂場も、地獄だな.....これは。

○

「……………」
榎本直人が風呂場に入っていく……その前から、ずっと彼のことを
見つめていた野乃早咲は、笑顔を浮かべている。

彼が洗面所のドアを閉める音が聞こえ、しばらくして今度は風呂場
のドアを開け、閉めるまでを聞き、……湯船に浸かる音まで聞いて、そ
の笑みはより強いものとなる。

そんな彼女の目には、ある妖しい光が灯っていて。

「……………」ええ、いいですね。 実に、いい具合ですよ

……直人」

ぼそり、と、そう漏らした。

25話 失った友情と、恋慕

夜が明けた。

……ある意味、地獄の夜が。

そうして寝不足の、……寝かけては起きてを繰り返すタイプの、夏休みとかにやってもう二度と経験しないって決めていたタイプのそれが、俺を死にそうな目に遭わせていた。

それは、精神的な面と、肉体的な面が……有り体に言えば、興奮しすぎていたからだろう。

恥ずかしい限りだが、こっちは母さん以外の女性……「女」と、こんなにも近いところで暮らしたことがなかったから耐性がないんだ。……うん、これはきつと、同級生の男子の大半と同じだろう。

理性が働いていた分だけずいぶんとマシ……だと、そう思っておかないと俺の気持ちだ。

「直人？　ほんとうに大丈夫ですか？」

………眠い。

頭が働かないっていうか、もういろいろと、どうでもいいって感じになっっている。

頭も体もくらくらするし、ふらふらする。

「……まだたったの2日です。　おとといは……その、緊張が抜けたばかりだからぐっすりと眠れただけで、やっぱりあのときの傷はまだまだ癒えていないんですよ。　ですからっ」

となりを……俺の肩に両手を乗せながら、心配そうに声をかけつつ俺の斜め後ろを歩く早咲。

いくら男に見える格好をしていても、今はどうしても女にしか見えない早咲が。

………その優しさが、昨日の夜からずっと辛いんだ。

「ほら、無理をしたら結局は直人が苦勞するんです。　今からでも部屋に戻って」

「……平気だ。 授業くらいは問題ない」

「いえ、どう見ても眠れなかったんじゃないですか！ お肌の調子だって昨日より悪いですし、クマだってできていますしっ」

とん、と目の前にひとつ飛びして……目の前から両肩を掴んでくる早咲。

ぐい、と……ほんの少しだけ低い身長を補うために背伸びして顔を近づけてくる、早咲。

……だから、近いんだって。

昨日の夜……夕方まではむしろそれがいいって思っていた距離感の近さが、今はむしろ困るものになっているんだよ。

だけど、それを言ったら俺が早咲を「女」として意識してしまっていることを早咲本人に……俺のことを「男の友だち」だと思ってくれているこいつに教えることになる。

それは、絶対に駄目だ。

知られたら……もう、親友どころか友人にもなれなくなるんだから。

「ほ……ほら。 眠れないって言っても、仕方ないから本とか読んでいたしな？ それに俺、一気読みとかゲームとかで徹夜することあるし……慣れてるから大丈夫だ。 なんならテスト前なんかいつもこうだしな」

嘘だ。

俺は徹夜なんてできる体質じゃない。

数少ない友人たちからはよく聞いていたようなことを言っただけだ。

俺自身は、どれだけテンションが高くたって……遅くとも3時ごろには眠気に耐えきれなくなって昼まで寝たくなるものの、母さんにつもどおりの時間にたたき起こされてその日1日を苦しい思いをしながら過ごすしかない体質なんだから。

おまけにその何日か後には決まって風邪を引くしな。

「ほんとうですかー？ ウソはいけませんよー？」

だから止めてくれ早咲。

ジト目なんかされたら、もう完全に女にしか見えないじゃないか。「ほ、ほんとうだって。　そ、それに……そうだ！　少しは外に出て気分を変えたいしな？　いくら安全で安心できるからって言っても、いつまでもあの部屋に引きこもっているわけにはいかないんだしな？

あと、早咲にも負担かけるし」

「僕は……おっと、私はいいんですけど」

「いやいや、悪いって。　主席なんだろう？　俺のところにいるあいだ勉強も運動もろくにできないだろ」

今度は嘘じゃない言い訳ができた。

少しだけ、……少しだけ心が軽くなる。

「ん——……まあ、1週間過ぎたくらいから少しずつしようとは思っていましたけどねえ。　そのくらいの余裕は作っていますよ」

「当の本人な俺が大丈夫だって言っているんだよ。　もう2日近く一緒にいてくれたおかげで、俺、今はずいぶん楽になったんだからさ」

これもほんとうだ。

襲われそうになったあの夜、そのまま軽いカウンセリングとかを受けたけど……実はあの時点で俺はほぼ元通りに戻っているっていう自覚はあったんだ。

あの悪意以上に心強い……絶対に信用できる「友人」がいたっていう事実で、俺はもう引きこもる必要もなかったんだ。

ただ、みんながものすごく……徹底的に顔を合わせないようにしている時点で相当に心配しているんだろうなって考えていただけで、俺にとつてはあの襲撃はどうでもいいものになっていったんだ。

ただ……せっかく見つけた早咲って言う友だちと、もう少しだけ、修学旅行の自由時間のような時間を過ごしたただけなんだ。

だけ。

早咲は、男の友だちから女の、……親しい人になってしまった。

「けど……直人にとって、この世界の男子生徒にとって成績なんて小さいなものですし。　無理に授業に出る必要もないんですよ？　出席だってしなくても卒業できるんですし……なにより、直人にはまだトラウマが残っているはずなんです、そのトラウマの相手の「女性」だ

「向けの教室に行く必要は」

ああ、早咲は優しい。

俺が女なら惚れそうなくらいに。

……男なのにそうなっているっていう時点で、俺はもうどうしようもない人間なんだ。

○

昨日、あの晩、早咲のことを意識しているっていう自覚がはつきりとした後。

早々に風呂から上がった俺は、眠いからとさっさと寝室に行こうとして……昼間に、おとといの夜と同じように同じ部屋に寝ようという早咲の提案にうなずいていたことを思い出した。

俺自身が墓穴を掘っていたっていうのに気がつくと同時に、このままじゃ夜も眠れない、かと言って今さら別の部屋でと言ったら俺が意識しているのを察せられるかもしれないなかつた。

だから俺は、寝る前にタブレットで読むからと……さすがはこの世界の男としてのVIP待遇だな、頼んで1時間もしないで運び込まれた、ちよんどのいい感じのついたて越しに早咲と寝た……、同じ部屋で、別々のベッドで睡眠を取ったんだ。

もともと、俺はたいして眠れなかつたけど。

いや、眠くはあつた。

ただ、どうしても早咲の……姿さえ見えなくなつたものの、寝息とか寝返りの音とかが聞こえてきて、そのたびに目が冴えただけで。

それで、眠くなつては起きてを繰り返すこと数回で朝。

……あんな状態が昼も夜も続くんだつたら、まだたくさんの人がいる教室で学生らしく授業を聞いて……早咲が言っていたとおりの成績っていうのはたいして問題にならないらしいから、なんなら居眠りでもしていた方がよっぽど精神的に楽だからな。

「だから早咲……、えっとほら、こつちで生きていくんだつたらさ、いくら成績気にしなくてもいいって言つたつて、勉強、追いついて……」

そこそこできた方がいいだろう？ 授業出てるうちに一般常識とか……放課後とかに教えてもらってたもんも分かってくるだろうしさ！」

「それは……まあ、それでしようけど。もし……あのときはそう思っていたので、もう、ですけど、直人が私と同じような世界から来たということでしたら、ああいう扱いは」

「そうだよ、ああいう……お客さま待遇って言うのか？ そういう特別扱いされて最初はラッキーって思ってたけど、やっぱそろそろがんばりたくなってきたって言うか！」

廊下で立ち止まったまま、働かない頭で必死に説得しようとして少数分。

周りの護衛さんたちも、これどうしよう……みたいな雰囲気待っているし、予鈴も鳴っている。

ごめんなさい、護衛の人たち。

……と言うかこの人たち、たぶん早咲のこと知ってるよな。

昨日とかに軽い散歩に出たりしたときにも、「僕」っていうのとたまに混じるくだけた口調で話していたりしたし。

もつとも、この人たちは常に俺から……俺と早咲の会話が聞こえない程度のところで立っているから、細かい話は聞こえていないはずだけど。

いや、でも……ときどき聞こえることはあるだろう。

風って、結構声を運ぶからな。

で、この先のエリア……男子生徒の関係者以外の、つまりは俺がこれまで学校だと認識していた場所に出る。

今なら引き返せるよ？……みたいな感じで俺を戻そうとする早咲と、早くここから出て他人のいる空間に行きたい俺。

それはさらに数分続いて…………とうとう早咲が折れた。

「……はあ……分かりましたよ、そこまで言うのであれば。……

あー、まあ、男ならいちど決めたらもう、変えませんよねえ。その辺女の子であればうまいこと言えば僕の言うとおりに……とと。

そういうことでしたらもう止めませんね。それなら私……あ、みなさんの前では「私」で通しているのです。よろしくお願ひしますね？教科書とかを取りに行くついでに先生方に知らせて来ますね。なので、直人さんは先に教室に行っていてください」

「ありがとな、早咲」

配慮してくれて、という意味と、折れてくれて、という意味で。

「まあ、ほんとうに直人が平気かどうかと言う、女子だらけの空間であのときのトラウマが起きないかどうか確かめるいい機会ではありませんし。……けど、まだあれからたいして時間が経っていないんです、無理はなさらないでくださいね？」

「……もちろんだ」

「それでは、また後で、教室で。……すみませーん、直人と話していたんですけど……」

……。

遠ざかっていく早咲。

護衛さんと二言三言を交わした後、もういちど振り返って手を振ってきて……そのまま出て行った。

「……………」

廊下はしんと静まる。

俺がぼけつと立っているのと、俺の周りの護衛の人たちが……身じろぎもせずに立っているだけだ。

と、俺はそこで気がついた。

……………俺、夢中だったから鞆すら持つてきていないじゃないか。

……疲れたし、戻って……少しだけ休んでから教室に出よう。

確か今日の時間割、最初はLHRだったし、30分くらい平気だろうし。

「……………、はあ——……………」

とぼとぼと引き返す。

……早咲とふたりだけの空間が、俺にとってこの世界でいちばんに楽な空間だったはずなのに。

それなのに、それが俺の気持ちひとつで……こうも、いちばんに苦しい空間になるなんてな。
ぜんぶ、俺のせいなのにな。

26話　すでに懐かしい教室の風景

「……ええ、そういうことです。　彼は……その、特殊な環境で育ったのでメンタル的にも私たちが心配するほどではない……と。　……はい、特に気丈に振る舞っているわけでもなさそうでしたし、外にいるあいだはみなさんが守ってくださるので大丈夫だろう、と、先生もおっしゃっていました」

「そうですね。　……承知しました、野乃様。　榎本様が襲われそうになったのは我々の失態でもありますが、まだ残党もいないとは限りませんし、全力で警護に当たります」

「あれはかなり大きい組織の奇襲だったからだと聞いていますけど……はい、私の大切な友人を守ってくださいね。　お願いしますっ。　……それでは、私は授業がありますので」

廊下で直人の護衛への挨拶もそこそこに、ひとり……始業のチャイムが鳴ってしばらくしているために、誰もいない廊下を自室へと歩いて行く早咲。

「……」
彼女は急ぐわけでもなく、散歩でもするかのように……笑顔を浮かべながら、ただ独りの空間を楽しむように歩く。

学園の廊下に出て他の生徒と行き交う内に黄色い歓声を浴びたり、「そういう関係」の女子に囲まれたり。

果てには教師を捕まえて甘い言葉をささやき……約束を取り付けたりしつつ。

……または、「馴染み」の相手を物陰に引っ張り込んだりして数分を過ぎしつつ。

そうして近くに人がいなくなり、手持ち無沙汰になったような様子の彼女は……後ろを振り返り独り言を口にする。

「……ふふ。　ふふふふふふ……。　ええ、やっぱりちよろいですねえ……順調に進んでいて大変に喜ばしいです。　そうです、知っていますよ？　所詮、男という生き物は。　だって、この僕がそうだった

たのですから……………」

○

「ほう……あれからこれほどの短期間で復帰できるとはな。流石直人と言ったところか？ 義理とは言え私の「息子」となったんだ、そうでなくてはな」

俺が恐る恐る……だって、クラスの全員が揃っている今みたいなときに、後ろのドアからこつそりじやなく前のドアから教卓まで行くっていう、とんでもなくハードルの高いことをせざるを得なかったから、早咲といるときとはまた別の緊張で心臓がばくばくとしていて……それでもがんばってノックをして教室に入ったのを見た美奈子さんの開口一番がこれだった。

30人も女子たちからの視線も刺さるよう感じたんだけど、それ以上の違和感……というか、なんだろうか……珍しいものを目の当たりにし、俺はそれが気にならなくなるほどになる。

……なんだか、とんでもなく嬉しそうんだけど、美奈子さん。

こんな顔をした母さん……美奈子さん、そうそうないぞ？

いや、何回かは見たことがあるけど……それは死んだ父さんの話を続けているときとか、俺が俺の限界以上の成績を取ったり、運動会でなんとか活躍できたり。

………一番記憶に新しい、この学校………だった学園に、塾の先生たちからも何十回も志望校から外した方がいいと言われたここに合格できたときに泣きながら抱きつかれたときとか。

そのくらいしかない。

だから……家で母さんと、「家族」として話していたときに比べると知らないも同然だけど、それでも俺には分かる。

美奈子さんはやっぱり、母さんとほぼ同じ思考回路と感性をしているんだって。

だから、こうして褒められるのは滅多にないことで、それが今はとも嬉しい。

「直人。君のその勇氣と持ち直す心の強さは、もういなくなつた「漢」というものだろうな。そうだ、数少ないご年配や壮年の男性だけが持つ心の強さだ。……しかし、ほんとうに無理はしていないか？　ここには」

「大丈夫です」

軽く……勇氣は要つたけど、教室を見回す。

30対以上の目線……その中にはハンカチで目元を拭っている晴代のものと、嬉しそうな顔で腕をぶんぶんと振っている沙映のものも……ぐずぐずと泣いているひなたのものもある。

……だけど、やっぱりあの夜になつたような反応が起きる気配はない。

ただ、大勢の人に見られているって言う緊張感程度だ。

「……ほら。俺はもう、無事、なんですよ」

「……そう、か。それならいいんだ……ああ、私としては君のような強い心意気を持った男子というのは、君の年ごろでは見たことがないから感動すら覚えるな。わずかに、武道を嗜んだりしていたり、上流階級のお年を召した方々くらいだな。……そういうわけだ。

皆も彼からの信頼を損なわないように。ただでさえいちど我々「女」から裏切られたんだ、次はないようにしないとならないからな。

しかし念のため、当分のあいだは節度を意識した接し方をするようにな。距離はこれまでに以上に取ること、なるべく……振り向いたりしてまで顔を見たりしないこと。彼からでなければ、会話もなるべく避けるように」

さあ、と促され、俺は教室を横切つて席に向かう。

「……あの、直人様。その、……ほんとうに、もういらつしやつても問題は無いのでしょうか……？　あ、その……先生がおつしやりましたように、私と沙映様もあまり話しかけない方がよろしいのでしょうか」

「いや、平気だよ。……、ほら」

「……あ……」

席に向かう途中に話しかけてきた晴代……たつたの3日しか会つ

ていなかっただけなのに、なんだかずいぶんと元気がないように感じる。

いつもみたいなお淑やかな印象が、今では沈んだ感じになっているし。

だから俺は、鞆を持っていない方の手を軽く晴代の肩に乗せた。

……………。

……あ。

俺から女子に……この世界に来る前も含めて、触ったのって初めてかもな。

同じような材質の制服のはずなのに……柔らかい。

どうしよう、これで馴れ馴れしいって思われたりセクハラって……

と、ここは俺の世界じゃないんだ、心配は要らない……はず。

だよな？

「……………直人様。よくぞ、ご無事で……………」

と、少しのあいだ俺と目があつたまま固まっていた晴代は、ゆつくりとハンカチを広げると……それに顔をうずめて泣き出してしまった。

そして、晴代みたいな雰囲気……お嬢様の中のお嬢様みたいな性格の子たちもハンカチを取り出し、みんな釣られて泣き出している。

……うん、この世界じゃなきや美奈子さんからも、女子全員からも怒られること間違いないな。

「直人っ！」

「……沙映」

泣いている女の子をどうしたらいいのか分からずに俺もまた固まっていたみたいだ……気がついたら沙映が俺の手を握っていた。

「……………これでも、だいじょうぶ？」

「……うん、なんともない。けど、晴代が」

「……っ、大丈夫、ですわ……すぐに収まり、ますので……」

「晴代ちゃん、直人が元気だから嬉しくて泣いちゃったんだよね。だから直人もいいんだよ？」

くい、と、俺の席へと手を引っ張っていつてくれる沙映。

……沙映は、変わらないな。

早咲とは違う。

違うけど……こんな世界でも男子女子をあまり意識せずに仲良くできるタイプの子なんだ、だからこそ俺も、自然な感覚で手を引つ張られたままで歩いていられるんだろう。

「……うん、ありがとう。今みたいに俺から触れるんだったり、沙映たちから触れられるくらいなら……いきなりだったり、急に近づかれたりしなきゃ大丈夫だと思う。……だから沙映、今みたいに後ろから来られると」

「はいっ、ごめんねっ！次からは気をつける！」

そう言いつつも俺の片手を両手で握り続ける沙映。

……まあ、俺を診てくれたお医者さんが言っていたようにトラウマが残っていたとしても、いきなり来られても……沙映だったら大丈夫だろう、たぶん。

だって、ほとんどそういう目線とかがない沙映だし。

あとは、お子さまなひなたくらいか？

……うん、そうだ。

そういうのはぜんぶ、早咲のおかげでどっかに行ったんだからな。もつとも、早咲のせいでもた別の問題ができたんだけど。

……それは、また後で考えよう。

「……けど、えっと。……俺、あんまり気を遣われすぎると居心地が悪いつていうか。だから、他のみんなもなるべくこの前みたいに、普通な感じに接してくれるとありがたい、つて思う。……沙映、もういいよ」

「はいっー」

カタンとイスを動かして席に着く。

わざと時間をかけるようにして教科書とかを出していると、だんだんと俺に向けられていた視線が減っていき、美奈子さんが話し始めたことでホームルームが始まった。

黒板に書かれていたのはこの先の……試験とかのスケジュール。

……世界が変わっても、こういうところは同じなんだな、つていう、

この世界に来たばかりのころに思ったような感想が浮かんできた。

同時に、「榎本直人は転校直後かつ男子、かつ事情がある故に試験期間中及び試験当日は配布のプリントでの自主学習とする」っていうかたっ苦しい表現で書かれた字を見て、ああ、やっぱり美奈子さんは母さんだ……なんて思ったりもした。

.....

さっきのは、口からの出任せ、ハツタリだった。

さっきのは、結構な綱渡り……強がりだった。

正直、俺自身がああの夜に襲われかけたときの、助けられたときの発作みたいなものが起きない保証なんてなかったんだから。

だけど、今朝まで早咲とふたりきりで過ごしていたし、ゲームに夢中になっているときに肩同士がぶつかることもあった。

.....早咲を女だと意識してからも何度か手が触れたけど、ドキドキとはしたけど……それ以上のことはなかった。

だから、あえて強がってみてみたけど……今くらいのなら大丈夫そうだな。

まあ、あのとときの過呼吸だって、相手が女だったからって言うよりも、感じたことのない悪意っていうものを浴びせられたからなんなんな。

だから……きつと、俺が思っていたよりもショックとかはなかったんだろう。

相手が男だったとしても……したら、きつと、あるとき以上に恐怖したはずだしな。

「直人直人なおとなおとっ」

がた、と大胆にも振り返り、前の席に座っている沙映が話しかけてくる。

「授業、この辺まで進んだよ！ ほら、ノートっ。 次の科目とか写してく？ がんばったら今日1日で……あ、私よりも晴代ちゃんの方がきつといいよねっ、い今とりあえずなんかの教科の借りてくるっ」

「ああうん、ありがとう……」

「ちらちらと他の生徒からの視線を感じる。」

そして美奈子さんは……事情が事情だからか、見て見ぬ振りをして
くれているみたいだ。

「それでね、それでねっ」

……………。

……早咲と一緒にいたいのにいたくないって言う状況から逃げる
ために飛び出してきた形なのに……結果的にはこれでよかつたのか
もな。

早咲とふたりきりで……「男」と「女」のあいだでずっともやもやし
続けて、いちいち感情を抑えるのに精いっぱいなあ状態が続くよ
りも、こうして外に出た方が。

考える暇なんて授業中のぼんやりしている時間しかなくて、授業
と、休み時間の周りの人との話で忙しい登校中っていう時間の方が、
よっぽどマシだもんな。

……あれ。

そういえば、早咲、まだ教室に来ていないよな？

ひなたがきよろきよろと見回して……こっそりスマホを出してい
るし。

あ、……晴代もこっそりと、沙映は堂々と取り出して、じっくり見
て……考え込んでいる？

そんな感じだ。

なにかあつたんだらうか。

……………。

とりあえず、さつき別れたばかりの早咲だ。

荷物を取りに行くって言っても、ここまで掛かるものなんだろうか
？

27話 思いがけない再会

「早咲、開けるぞ——……って、もういないんだっけ」

夕方……もう夕飯の時間だ。

朝、結局1限の終わりぎりぎりに駆け込んできた早咲。

そのときに特段怒られたりすることもなかったから、なにか事情があつたんだろう。

で、あのあとは他の人に話しかけられるままに過ぎ……さっきまで、いつものように晴代と沙映のふたりに勉強とか社会情勢とかを教えてもらっていた。

まあ、今日のふたりはどこか気が抜けていて、いつもよりは雑談もお菓子を食べる量も多かったけどな。

それだけ心配させていたんだろうし、あの子たちと美奈子さんからの気づかいでもあつたんだろう。

もちろん、俺も寝不足だったからきつと気が抜けていたんだろうな。

そう思つて遅くまで付き合っていたから……もう7時。

今晩は早咲と何を食べるか……って思いながら声をかけたけど、そういうやもういないはずだもんな。

だって教室で、俺はもう大丈夫だからって言って……荷物だけ持つて帰るって言って来たんだから。

……

今朝までみたいに困ることはないから嬉しいけど、やっぱり寂しい、かな。

だって……俺が変な風に思い始めるまでは早咲はただの男の友だちだったんだから。

けど、やっぱり肉体の性別って言うのはある。

それで、意識してしまつて昨日ほとんど寝られなかったくらいなんだ。

……だから、これでよかつたんだ。

まあ、これからも学校じや毎日顔を合わせるんだし、だったらさつき約束させられた晴代、沙映との「お出かけ」……婚約者としてのデートのアップールだそうだ、のために、この世界の男女がどんな感じにするのかを聞いておかないとな。

ドアの外まで見送りに来てくれて、きつと今夜も立ちっぱなしで俺を守ってくれるだろう兵士さんに挨拶をしてドアを閉め、部屋の電気をつけようとして……ついていたことに気がつく。

……あれ？

俺、電気とか気になつて必ず消す習慣なんだけど……今朝はあんなだったし、消し忘れたのか？

……だろうな、あのときは……ちよつと。

そうだ、今だから分かる、朝はそれまでずっと早咲と一緒にだったからいろんなことに意識を向けられなかったんだって。

仕方ないもんな、だって。

「……ほはへりははーひ」

……。

何だって？

「はへ？ ひこへてまふー？ なほほー？」

「……、そりゃあ、

な」

「ほっは。 ほほかかっはへふへ、はほほ」

おかえりなさい。

あれ？ 聞こえてます？ 直人。

そっか。 遅かったですね、直人。

……そんな感じのニュアンスだけは分かる、ものすごく変な声が聞こえる。

それも、つい今朝までずっと聞き続けていた……そして今朝、俺が逃げ出したはずの音がする。

靴を脱ぎ、廊下を過ぎた先のリビングへと向かうと……というか、玄関に靴あったしな……テレビの前で、いつもどおり、ソファーに寝そべって……ものすごくくだらない格好で菓子をつまみながら、も

しやもしやと音を立てながら頬を膨らませている早咲がいた。

俺にあいさつしているはずなのに、視線はテレビにくぎ付けた。

……まずいちばんに思ったのは、こいつ意外とだらしないよなっていうこと。

この短期間でよく分かったけど、こいつは制服のシワとか気にしていないみたいだし、冷蔵庫から勝手にジュースとか取ってくるし。

俺のためにとって置かれている菓子とか平気で食べるし。

いや、どうせ俺が出かけているあいだに掃除されて補充される……ホテルみたいなどころなんだし、いいけどさ。

だけど、にしたって。

……………。

いや、待て待て！

「お前……早咲?! 今朝言っただろ、俺はもうひとりでも」

「はっへ、ほふはほほへ、ひひたひひほほは」

……………。

「……食い終わってからでいい。 とうかせめて体起こして……ああもう、ソファァーにこぼしてるじゃないか」

「ほへんへー」

もぞもぞと……もぐもぐと口を動かしながらのたのたと起き上がる早咲。

……やっぱりこいつ、初対面からしばらくまでの印象とはぜんぜん違うな。

なんというか……………だ、だらしないというか。

「はほほほひふー?」

「……いらん。 袋に手をつ突っ込んでないでさっさとそれを食べてくれ」

「はーひ」

……………」

女のはずなのに……いや、中身が男だからか、だらしなすぎる感じで……ああもう、制服だつてよじれているし、横になっていたからかか髪の毛が潰れているし。

そんなこいつを見ているうちに、思う。

……やっぱり、昨日の夜と今朝の感情を抜きにすると。

どうにかして「これ」さえ無くせたなら……、ああ。

やっぱり男の……唯一の友人のこいつがいると、気持ちが休まるし楽しいんだ。

……、あ！

「……おい早咲!? それ俺が取っておいたやつじゃないか!? ……ほら、他に名前書いといたろ!? お互いにどうしても欲しいのは何個かずつ分けてっ！」

「は。 ……ほへんへー?」

「……………本気で忘れてたのか……………、はあ——……………」

もう、脱力しかない。

けど、……やっぱり。

早咲っていう……中身が完全に俺よりもだらしのない感じの男がいるだけで、こんなにも気持ちが悪く感じてなる、なんてな。

○

「で?」

「はい」

食欲に逆らえないらしい早咲に呆れた俺は、もういつそのこと食べたいだけ食べろと言ってしまう……結果、テーブルの上に、毎朝補充される分の菓子の大半を食べ切り、非常に満足そうな顔をしてソファーに寝っ転がっていた。

いや、腹の膨れ具合を見る限り、どうも食べ過ぎて動けないらしい。

……なにやってんだか。

「はい、じゃない。 お前、なんでまたここにいるんだ? 俺はもう大丈夫だから早咲は自分の部屋に戻ってくれていいって言っただろう? それにこのこと、先生にも伝えてくれて言ったじゃないか」

「言いましたね……けぷ」

「んで。 それなのに、お前の私物、みんな置きっぱなしじゃないか。

なんでまた……ああ、これから片づけるのか？　なら、俺も手伝って」

「あ、そのことなんですけどね？　……うぐ」

「……苦しくなるまで食べない方がいいぞ？」

「いやー、つい、だったんですよ。　あ、で、それなんですけど、僕、改竄しました」

「……………は？」

改竄？

何を？

「先生たちに、直人のこと……外には今日みたいに出られるようになったんですけど、本人もまだほんとうに大丈夫か分かっていなくて。　なので、念のためにしばらくひとりにしないうっていう意味での護衛って感じに僕が直人の部屋に引き続き泊まった方が良さそうです。　って、ね？　いいですよね？　これくらいは」

……こいつは、何を言っているんだ？

だって、俺は大丈夫だって、何度も。

「いえ、だって……ほんとうに大丈夫だって、どうして分かるんです？」

「いやいや、実際に今日も教室で最後まで授業受けて、放課後も」

「まだあれから2日ですよ？　いえ、3日ですか？　まあそれはどう

でもいいでしょう。　問題は、まだそれだけの時間しか経っていないんです。　たとえば……ケガだってそうでしょう？　ケガした直後

はそこまで痛くなかったりしても、しばらくしたらそこが腫れてきたり青あざになっていたりしてもっと痛くなるのって。　それで、ケ

ガをしたあとすぐよりも、それから少し経った何日かがピークなんです。　肉体的なケガでさえそうなんです、それよりもっと繊細な心

のケガ、トラウマなんて何年も何十年もぶり返すなんてよく聞く話ですよ？　なのにどうして「もう大丈夫」だなんて言えるんです？　体

が痛みを感じないようにするためにアドレナリンを出すように、脳だって無意識であるときの記憶、覚えていないようにしているのかもしれないんですよ？　それを、君は君自身で判るんですか？」

「……………、それは……………」

「…………と、いきなりまくし立ててごめんさい。 昼間に自分の意識があつて、自分から女性に接しに行っている状態なら確かに大丈夫かもしれない。 けれど、それ以外は？ お家…………しかもここは君のほんとうではなく仮住まい、ホテルみたいなものです、そんな慣れないところにひとりでいるときに、ふとあれを思い出したら？ たったのひとりの空間で。 電気をつけないと真っ暗、テレビとかをつけないと音すらしない。 そんなここで、お風呂に入るとき、寝るとき…………夜中に目が覚めたとき。 そんなときに、隙だらけのときに襲われていた記憶がフラッシュバックしたら？ しないという保証は？

——そのときに、直人がもういちど傷つかないという自信はあるんです？」

「……………」

「大体です。 ……まだ実感がないみたいですからはつきり言いますよ？ 直人。 ……無理やり複数の人間に性的に襲われそうになって。 あんなの、男女なんて関係ない。 ……未遂だとは言つても、ひなたと僕がなんとか通気口伝いに入つて来られて…………あれ、もう少し狭かったら無理だったんですよ？ ……ベッドの下で閃光弾の準備をしていなかったら、未遂じゃ済まなかったんですよ？ まあ、仮にその先に…………直人が男だからそこまで心に傷を負わなかったとしても、そのあとは？」

おなかをさすりつつ早咲が立ち上がり、真剣な顔をして俺と目を合わせ続ける。

「僕たちが、その先にも間に合わなかったら…………直人、今ごろはあいつらに「物」扱いですよ？ 健康な男子っていう誰もがほしがつて…………その肉体だけを、な「モノ」ですよ？ 一生飼ひ殺しですよ？

……………ふう。 直人、少し危機感がなさ過ぎると思いませんか？ 僕は思います。 最初の頃に言いましたよね？

直人は、「男女」というものを真逆に考えないといけないんだって。 10人、100人、1000人の男たちに囲まれた、たったひとりの女の子…………あ、性別は逆で説明しましたっけ。 とにかく、そうい

う話を」

「……それは、そう……なんだけど」

俺よりは背が低い女……の体なはずなのに、早咲がやけに大きく見え、気がついたら後ずさっていった。

「直人。君はもう少し君自身の価値というものを考えた方がいいです。いえ、考えないとこの先が思いやられます」

「……………価値？」

「です。ぴんと来ないのなら君の世界の常識で考えてみてください。もう少しスケールダウンしまして、分かりやすくしてみます。

いいですか？ 君の世界……家、一族でもいいです……は男しかいなくて、このままだと血筋が途絶えそう。そんなときにこのことやってきたのは、実に健康そうで……この場合は元気な子を産めそうな、隙だらけの女の子。お家に連れ込んじゃえば、後はどうなるか……考える必要はないですよ？ さすがに。どんなことをしても、毎年……………ですよ？ 昔の女性たちみたいに、際限なく跡継ぎを……つて。ああ、戦国時代とかの価値観がそれに近いですかね」

ずい、と、顔を近づけてくる早咲。

朝までならこれで思わず理由をつけて逃げ出しそうなシチュエーションだけど……今は、早咲の言う内容に意識が向いていて、逃げることなく見ることができた。

「……………この世界の人たちには。この世界の、……たしかに君の世界よりも人の数はずっと少ないです、ですけどね？ 億を超える人にとって直人はそういう「女の子」にしか見えないんです。つまりはイヴですね。あ、いえ、逆に男であって……人口授精の技術がずっと進んでいるこの世界の人たちにとって、君はアダム……数え切れないほどの女性を幸せにして、数え切れないほどの子を生み出すための貴重な「種」としか映らないんです。……ふう、これで危機感というもの、少しは感じてくれましたか？」

……今朝までのもやもやなんて吹き飛ばすような話を、立ったまま

……鞆を持ったまま棒立ちで聞いていた。

髪の毛はぼさぼさ、服もよれよれ……だけど、ものすごく説得力のある、真剣な眼差しで「男女」なんて気にしなくてもいい、早咲からの……俺を想っての話を。

28話 早咲：女↓男

早咲が、かなり本気で話している。

口調はまだまだ穏やかだけど、目つきとから分かる。

「……………早咲は、怒っている。」

俺のことを想って、…………昨日俺が色ボケ…………そう、色ボケしたばかりにおろそかにしようとしたせいだ。

そうして、この世界に来てから聞かされた…………俺が、どれだけ貴重な「男」というものなのかという事実。

それを改めて早咲から聞かされた俺は、ついさつきまで考えていたようなお気楽な気分を吹き飛ばされる形になった。

「……………ああ。分かつてはいた。分かつて

はいたよ」

「それならいいんですけど」

と、いつの間にもやら取り出したお茶をすすっていた早咲を見ながらソファアに腰を下ろす。

「これ、念のために言いますが、誇張でもなくほんとうのことですよ？ それどころか、だいぶ抑えていますからね？ ……君は、運がと

てもいいです。だって、この世界に来て初めて会って話した相手が、ひなたを初めとした僕たちって言う「男」に執着してないって

いう例外中の例外なんですから。ですから…………そんな僕たちが言う以上そこまでの実感はなかったかもしれない。あるいは、この

学園自体が一種の特別な…………まあ、裏切り者はいましたけどね…………場所ですので、みんな「淑女」だったおかげで、あの夜に襲われた程度

で済んだのですけど」

「…………程度？」

「はい、そうです。あの程度、ですよ？」

こと、と湯飲みを置いて俺を正面から見つめてくる早咲。

「クラスのみなさん…………は、美奈子先生から強く言い含められていますし、学園の生徒自体も選りすぐりのエリート、つまりは将来の価値

がものすごく高い方たちなので、表立って直人に何かを感じさせるようなことはありませんし、積極的に何かを仕掛けてこようとはしません。けど、この世界のほとんどすべての人……女性は、古典的な価値観で言えば「お家の存続」なんです。そして、それに失敗する人たちの方がずっと多いんです。いくら人工授精と言ったって、完璧じゃない。なにより、男という本能が求める存在を欲しているんです。ですので、それくらいに男の血、それも、人工的に薄められてなんとか命を授かるのではなく、生身の男性から注いでもらうっての「血」を受け継ぐっていう欲望を強く強く抱いているんです。そして、あわよくばその男性を……小数点以下の割合しかない、男という貴重な種族を家族に迎えることに、って」

「昔は男性を巡っての戦争が何回もあったというのは先生たちからも聞いたでしょう？ いえ、実は今でもくすぶっていたりする地域は山ほどあるんです。なので、どこの国でも……もちろんここでもです、男性を無理やりに手籠めにしようとするだけでも片っ端から死刑という法律が世界共通で存在しているくらいです。それくらい……金よりもダイヤモンドよりも、何よりも大切な存在なんです。健康な……しかもまだ高校生な男性というのは」

「……死刑。 企んだだけで……」
「はい。 それくらいして……も、あんなことがあったことから、そうするまでの時代はどれだけだったのかは想像できるでしょう？ それこそ、海外の麻薬などの扱いと同等なんです。 言い訳を聞かずに軍隊が突撃して銃で男性以外を……っていう国が圧倒的に多いんですよ？」

男が、それだけの価値。

……………。

……そう、だよな。

たしか、1対1500……とかだったか？

そのくらいしかいなくて、人類の存亡がかかっているんだったもん
な。

「それに、男性は女性と違って……ちよつとシモな、だけどマジメな話ですからね？ ……男性は女性のようにほぼメンタルに影響されずに子を成すということはできませんよね？ 精神的にやられていたら、機能しませんから。それこそ、いちどそうなってしまったら薬を使つてもなかなか上手く行かなくなるというのは前の世界でも聞いたことがありますか？ ……それに薬にも限度がありますし、なによりもその手のお薬は心臓に負担を掛けますので……男性の寿命に強く影響を与えてしまいます。ですから男性にトラウマを植え付けようとするだけでも……そうですね、最低でも数百人の子孫が、血が、人類が生まれないことになるんです。ね？ ものすつごい重罪でしょう？ この世界の人類の滅亡、早めるでしょう？ せつかく小さいころから洗脳まがいの教育をして、許嫁で困つて、たくさん励んでもらうはずのところそんなことをしてきたら……どうなるのか」

「……………ああ」

正直に言つて、今でも俺にとつて……この世界の情勢つて言うのはSF映画を観ているような気持ちだ。

だけど、俺と同じ男だったこいつがここまで言うんだ、いまいちど気を引き締め直さないといけないな。

「悪かった、早咲。俺、そこまで真剣には考えていなかったよ。」

せつかく美奈子さんたちと、それを承諾してくれた晴代や沙映もそうだ、俺のための婚約つていうカモフラージュをしてまで俺を守つてくれようとしていたつていうのに、俺は」

「……………あ、ちよつと待つてください直人」

「……………ん？」

「あの、これは建前です。いえ、今言つたのは事実ですし、そろそろ危機感を持つて欲しいかなーとは思つていましたけど、今のは僕がここにいるのとはぜんっぜん関係がなくなつて。つい熱が入つてしまつてお説教つぽくなつちやいましたけど」

「………………………………………」

は？」

こてん、と……また、首を少しかしげる仕草をする早咲を見て、俺

の頭の中はもういつかいぐちやぐちやになった。

で、その早咲は……どんなマジックを使ったのか、空になっていた湯飲みがなくなった代わりにジュースが入ったコップ……それも、俺のぶんも含めてふたつ……を手に取り、ああ、やっぱり男性に配給されるようなものはジュースからして格別ですねえ、などと言い、こくりとひと飲みする早咲。

どうぞ、と促され、そういや戻って来てから立ちっぱなしで喉も渴いていたなと気がつき、手渡されたコップの中のジュースを一気に飲み干した。

「実は……えつとー、そのー」

……またひとつ、早咲の初めて見せる表情。

これは、……ばつが悪いと言うか、そんな感じの？

「あの……ですね？ 僕、その、身の危険を察知したんです」

「危険!? ……だったらすぐに美奈子さんと護衛の人に連絡してっ！」

「あ、や、待って、待ってください直人っ！ それは困りますっ!!」

「待ってられるか！ この世界でたったひとりのダチってやつのは危機なんだろう？ なら、こんどは俺が、俺の特権を使ってでもっ!」

急いでスマホ……に似た機械、呼び方は違うけど……を操作し、緊急用のアプリを押そうと指を動かす。

なんでも、特殊な間隔で数回のタップさえすれば外の護衛の人たちが俺のところの数秒、数十秒で来てくれるっていうものらしい。

硬いものに思い切り叩きつけてもいいけど壊れたら悪いし、なによりに悪者が目の前にいるわけでもないし……それに、こっそり通報する練習にもなるしな。

だから、早咲っていう、俺にとっていなければならぬ人が……命ではないかもしれないけど危機に瀕しているなら大げさっていうことはない。

美奈子さんだって、これを使って大騒ぎになっただとしても……こうして早咲だけを俺の部屋に入れる許可を出しているくらいだ、早咲がどれだけ俺にとって大事な存在なのかって言うのは分かっているは

ず。

だから。

.....。

.....なのに、なぜ早咲は汗を垂らしながら、息を荒くしながら俺の指を握っているんだ？

「.....はあ、はあ.....。ご、ごめんなさい直人、危機っていうのはそういうのじゃないんです」

「.....そう、なのか？」

「はい、.....とりあえず、指をどけてもらってもいいです？ もしこの件で通報なんかされたら、僕、先生から大目玉どころじゃないので.....」

「あ、ああ.....」

○

「あー、もったいないことを.....まあ、しょうがないですよね、僕のせいですから」

急いでいたからか、テーブルのコップを.....自分の分をこぼしていた早咲がジュースを雑巾に吸い取らせつつ言う。

「身の危険、っていうのは.....えつとですね？ 前に話しましたよね？ 僕、せつかく記憶を持って生まれ変わったので、喜び勇んで女の子たちを性的にめろめろにし始めたって言うのを」

「喜び勇んでとは聞いていないが？ あと、めろめろって」

「まあまあ、ささいなことですよ。で、なので当然に小さいころから.....幼稚園のころから始めてこの歳までずっと続けているんですけどね？」

「当然？」

「はい、当然です。 こういう立場なら、普通そうじゃないですか？」
こてん、と.....反応してはいけないけど、不意打ちで可愛い仕草をしながら俺を上目遣いで見上げてくる。

いつもの癖に、なんだか色気みたいなものが含まれている気がする

る。

……………。

……ほんとうに、他意はないんだよな？

いや、今こいつはとんでもない犯罪を口にしたじゃないか、大丈夫だ。

俺が対象なわけじゃないか。

こいつにとつての対象は、この世界なら無数にいる……女性同士でも平気な女性だ。

いや、まあ、この世界の女性の大半がそうになっているらしいけど。

……だから、男の俺なわけがないもんな。

「……あー、直人は草食系ですもんね」

「ごく普通の男子高校生だけどな？」

「えー、そうですかー？ その年で彼女いたことないって」

「いいから続けてくれ。……俺にそういう人がいなかったのは、そ

こまで色恋に興味がなかったからで」

「あー、はいはい、みんなそう言うんですよねー、ど、おっと、チエ、じゃなく……潔癖な男子って」

「……………」

「で、ですね？ 僕、この学園に……高等部に入ってから手当たり次第に女の子たちを味見してきたわけなんですけど」

「……………」

俺の、早咲に対する……こう、いろいろな感情というか尊敬度みたいなものが著しく落ちてきている気がする。

「あのですね——……んと、僕、ちよーつと調子に乗り過ぎちゃいましたね？」

「調子に」

「はい——……これは反省ですねえ。 浮かれてこれまでの経験を忘れて声をかけてコマしていたせいで……少——しばかり愛が重い系の子たちにまとめて手を出してしまいましたね？ いやー、猫かぶり……深い深い愛情なんですけど、それを見抜けなかった僕が悪いんです。 あそこまでの死ぬ前くらいなものだったので、なんと

かなるって思っていたんですよねー。 いやー、女の子はいくつでも、どんな性格でも女の子ですもんねえ」

俺の早咲に対する感情が、命の恩人、唯一の友人から見境のないナインパ野郎に急降下だ。

それはもう、これ以上下がる余地がないくらいに。

「そんなわけです。 はい」

「……つまりお前は、その人たちから逃げるためにここに来たと？」

「はい!!!」

「はいじゃないぞ?」

とびきりの笑顔も……ついさつきまでだったら感情を揺さぶられていたかもしれないけど、今となっては1ミリも動きやしない。

……こいつが、悲しいくらいに下半身に支配された、根っからの女の子の男だつて、改めて理解したからな。

理解したと同時に、ほっとする俺もどこかで感じながら。

「僕、これまでずうっと。それこそ初めて会ったときからあの夜、そのあともずうっとずうっと直人を助けてあげてきたと思うんですけどー？ それこそスニーキングミッションしたり絶対にはらせないヒミツ教えてあげたり？ ついさつきだって、直人のちよろさをきちんと教え直してあげたでしょう？」

「……それは……そうだけど。……………。いや、まて、ちよろさって」

「や、この世界基準では頭ゆるゆるふわふわ系ってことになるでしょう？ 怪しいおじさんに声かけられて、なーんにも疑わずにふらふら車に乗り込んじゃう女の子的な？ それも、いい年して」

だからこのお菓子もぜんぶいいですよ？ とか聞いてくる。

「もぐ。……お菓子もそうですけど、そういう貸しというものをちよーつと何日かここにいさせてもらうだけで、ぜんぶじゃないですけどチャラにしてあげるんですよ？ いいんですかあ？ 友人に貸しを作ったままで。ねー、直人？」

「……………卑怯だぞ」

「世の中は貸しと借りで動いているんですよ？」

薄々分かっていただけ……こいつ、かなり計算ずくというかぶつちやけ腹黒いよな？

それも、男の理性と女の勘を合わせて都合よく駆使しているもんだから質が悪い。

「……はあ——……いいけどさ、別に」

「ほんとうですか!? 言質取りましたよ!?!」

「ああ……確かに俺も、今が平気だからって言って、不意にあのときの記憶とかで困らないとも限らないしな。あと、部屋に戻って来てもすることがあんまりないし」

この世界の娯楽は、早咲が持つてきて置いておいてくれるもの以外はつまらない。

やることと言えばリビングに置いてくれているそれをするか、勉強をするか。

ほんとうに、それくらいしかない。

だらだらとテレビを観るって言ったって、やっぱり感性が違う人たち
ちが作っているものな以上どうしても声を聞いているだけっていう
感じになるだけだし。

それに、今日は1日を外で過ごしたおかげでだいぶ気晴らしできた
しな。

それもあるし、何より今の会話で……早咲を目の前にしても何とも
なくなっただし。

「嬉しいですっ！ やっぱり持つものは友だちですよねっ！ つまり
は親友！」

「貸しで脅迫してきたけどな？」

「嫌ですねえ、事実を言っただけじゃないですかー。 あ、ついでにな
りますけど」

「まだなにかあるのか？」

「いえ、逃げてきた話に戻って」

「認めるのか、逃げてきたって」

「そればかりは事実ですからねー。 あ、で、直人のところって、ほん
とくに都合がいいんです。 だって、痲癩起こしている子から逃げる
ときに別の女の子のところに逃げちゃいますと、匿ってくれる子が
「私の方が好きなんだ」ってかんちがいしたりして……追ってきた子
を煽ったりして泥沼になったりすることあるんですもん」

「……………お前はそのときどうやってその場を収め
るんだ？」

「そういうわけで、こういうシエルターってとっても大事だなんて思
うんです」

「お前、シエルターって言い切ったな？」

「隠れ家、避難先って大事」

「言い方変えたただけだぞ？」

「直人、僕たち、親友、ですよね？」

「ほんとうにそう思っているのか？」

「本音を言うくらいにはですよ？」

「お前……………」

なんだか、ああ言えばこう言うっていう感じの……それでいて居心地の悪くないやりとりをしているうちに、なんだかもうどうでもよくなってきた。

……はたしてこれが素でやっていることなのか、それとも計算ずくなのかは分からない。

なにせ、早咲だからな。

「……というわけでもうしばらくここにいますね。お世話になります。主に豪華なごはんとお菓子とかで」

「……まあ、そういうのでしょつちゆう来るとかだったら怒るけど、たまにならいいよ、そういう理由でも」

「わあ、直人がデレました。僕、男を墮としたことってないんですけどね」

「気色悪い冗談言うなよ、お前の中身は完全に男だろうが」

今みたいな冗談は止めてほしい。

……せつかく収まったって思っていた気持ちだが、また起きるところだったじゃないか。

「……俺も今日は夕方まで出ていたから疲れた。どうせ早く寝るだろうし、お前もうるさくするわけじゃないしな」

「家主の負担になることはしませんよ、さすがにこどもじゃないんですから」

「いや、お前、これまでのお前の言動を」

「ああそうです、どうせなら直人が頼んだと言ってひととおりのゲーム機とかも揃えます？　実はまだ持ってきていないソフトとかもあるんですよ」

「……………はあ……………」

「あ、あのっ。いいじゃないですか、あったって！　そうすればふたりで……レーシングとかシミュレーションとかして暇つぶしできますし！　どんなソフトなら楽しめるのかも僕なら知っていますし！」

「……ああ、いいぞ。もう、好きにしてください……………」

「!!　なんでもいいんですね!!　ならさっそく」

「限度というものは弁えろよ?」

そんなことを言いつつ……昨日のように、いや、昨日よりは節制して体に良さそうな料理を届けてもらってふたりで食べ、眠くなるまで適当な話をしながらゲームをして。

早々に眠くなった俺は一足先に眠りについた。

○

……………ん。

今は、……夜中、1時前か。

よく寝たと思っただけ、まだ……3、4時間しか寝ていなかったらしい。

なら、早咲がうるさくて目が覚めた？

……………。

……音はなにもしないし、そもそも部屋は真っ暗だ。

というか、これはトイレに行きたかったからか。

寝る前、早咲に釣られる形ですつとジュース飲んでいたもんな……やっぱり気をつけないとな、こんな生活していたら絶対に太る。

体によくないこと間違いなしだもんな……つと。

暗いながらもカーテンからの光でなんとなく分かるから、そのままベッドから下りて慎重に廊下へ出る。

早咲は、……ものすごく静かだし、きつと寝ているんだろう。

起こしたら悪いし、なるべく静かに歩いて……電気もつけないでおう。

こういうところは共同生活の難しいところだな。

修学旅行とかでも少し窮屈って思った覚えがあるし。

だけど、ほんの数日だろうし我慢しておこう。

なに、友だちが泊まりに来ていてるって思えばいいんだしな。

……あいつが言うように、親友かどうかはまだまだ分からないけど。

そんなことを思いながら……長い廊下を歩き、眠気が覚めてくる頃になって洗面所の方まで来た。

……やっぱりここ、広すぎるよなあ。

ひとりで住むには……いや、それにしたって広すぎる。

美奈子さんに言ってもう少し狭いところに変えてもらおうか……、と。

あれ、洗面所の電気、つけっぱなしじゃないか？

ドアは閉めてあるけど、その隅から明かりがかすかに漏れている。

……なんだ早咲のやつ、やっぱり女関係だけじゃなくて全体的にだらしないんじゃないか。

そういえば昼間も夕方もひたすら食べてばかりいたし、マンガとかゲームソフトとかは雑な感じで置いていたしな。

なんというか、ぱつと見もいろんな仕草も上品って感じがあるから騙されていたけど、やっぱりあいつも男なんだな。

こういう点に関してはむしろ俺の方が几帳面なまでであるな、まちがいない。

○

……思ったよりも限界が近かったらしい。

寝る前の……えつと、たしか2時間くらいだったか、ジュースとかは遠慮しておこう。

体にも悪そうだな。

というわけで、さつさと手を洗って……目も覚めちゃったし、軽くお湯で顔を洗ってから寝よう。

疲れているのは間違いないし、現に今もぼーつとしているし……適当な本でも読みながら眠気が来るのを待とう。

そんなことを思いながら……俺は電気のついてた洗面所……風呂のある、その扉を開けてしまった。

「……………あれ？ な、なおと？」

——なぜこんなに夜遅くに入っていたのかとかなぜ鍵を閉めていなかったのかとかいろいろと聞きたいけど、とにかく。

風呂上がりがらしく……髪の毛を拭いていたらしく、その。

明らかに男とは違う、スレンダーな体つきをした女子の姿をした、それも全裸の……早咲が、風呂上がりで顔は赤く全身の肌からは雫が垂れている姿の早咲がそこにいて。

俺はどうすることもできなくなつて、ただ硬直しながら……風呂上がりで全裸で艶めかしくつて……ぽかんとしているはずなのに欲情をかき立てる表情をした早咲を、見ているしかなかった。

30 最後の試練(1)

「あれ……あれ？ 直人？」

「あ……………うん」

「なんでこんな時間に……………って、シャワーの音で起こしちゃいましたか？ ごめんなさい、寝る前にどうしても入っておきたくって。うるさかったですか？」

「いや、その……………」

何で、隠さないんだ。

そんな、……………運動しているって言っていたもんな、体はすぐく引き締まっていて一切の無駄って言うものがなくて、しなやかで。

なのに女って証拠に控えめながらも胸があって、男とは違う尻やふとももの太さって言うものがあって……………全身が白くて、つるつるで。

俺がただ突っ立って見ているだけだからか、いつものクセで、また、こてんと……………少しばかり頭を傾けただけで、ただ不思議そうな顔をしていて。

何で、俺に見られても……………少し恥ずかしい程度の表情なんだ。

タオルは両手で持ったまま、なのに隠すこともしないんだ。

俺に体を……………きつと劣情を込めた視線がなめ回しているのが分かっているはずなのに、それでも平気なんだ。

「恥ずかしい」程度なんだ。

「……………っ、せめてタオルとかで体を隠したらどうだ」

「え？ ……ああ、そうですね、僕、一応女ですものね」

絞り出すようにして声をかけ、早咲の白い体に白いタオルが巻かれ始めてからほつとするとともに、そもそも俺自身が目を逸らすか後ろを向けばそれで済んだのにつて気がつく。

……………出て行けとか見るなどか言ってくれた方がよっほど気楽だと思おう。

下手に俺のことを「同性の友人」って思っているからこそその反応な

んだらうけど。

いつも女子を……聞くところによると手当たり次第に連れ込んだりしているらしいから、人にはだかを見られることに抵抗が無いのかもしれないけど。

でも、初めて見た女性のほだかが早咲だった俺にとっては、今の光景はあまりにも強烈すぎて。

「……ふう、これでいいでしょうか。ごめんなさい、貧相なものを見せてしまつて」

「いや、それ、男のお前が、あ、いや、女になつてるお前が言う台詞じゃ」

……バスタオルで体を隠してくれたけど、たった今風呂場から出て来たらしく髪の毛からは止まることなく水が滴っているし、それが額や肩や胸元……脚へ水が流れ、下のマットに吸い込まれていく。

それがなおさらに生まれたままの姿だった早咲の体を思い起こさせて、俺は……抑えるのに必死で、早咲との会話も虚ろだ。

「だつてー、背が高いのにそれに見合わない体型でしよう？ まあ、運動するときには楽ですし、なにより精神的な体つて言うんでしょうか、そういうものとそこまでズレがない感じなのでいいんですけどね」

「……あ、こんな時間におふろ入つてた理由ですか？ あのですね、僕、さつきまで映画観ちゃつていたんですよー、それも2作続けて。

よくあるじゃないですか、お勧めつて出たから思わずーつて。

あ、直人が寝た後からですよ？ で、さつき見終わつてほつとひと息ついて、お湯湧かして。 入る前にちよつとだけ直人の寝顔見たんですけど、ぐつすみみたいだったので気にしなくてもいいかなーつて思つていたんですけど、やつぱり夜中に長いシャワーは駄目ですねえ。 今度からはなるべく早く入ります」

「あ、……ああ」

「起こしちゃつて、その上、気まずい目に遭わせちゃつて。 ごめんなさいねー、ほんとうに」

「いや、……俺は」

いつそのこと怒られた方が楽だった。

マンガみたいなのに、アニメみたいなのに、引っ叩かれたりして。

だけどこいつは「男」だから、そもそも怒る理由がないんだ。

だから俺は、あいかわらずに早咲のタオルの起伏から目を離せないんだ。

……………。

……こいつ、髪の毛をくくっていないときは肩まで届くんだな。

ぱつと見ると、……いや、見なくても「女」でしかない。

だから俺は動けないままなんだ。

「えっと……………？」

「……………」

沈黙が流れる。

お互いに息をしている音しかしない空間。

シャンプーのいい匂いが熱気とともにこもり続ける空間。

……………男と女だけの、空間。

……………。

いや、そうじゃない。

早咲は男なんだ、だけど体は女、いつまでもここにいたら失礼以前に犯罪だろう。

いくら中身は男だろうと体は女なんだからな。

「……………とりあえず。 ……その、悪い、悪かった。 ノックもせずに入って来て」

「いえいえ、そもそも鍵忘れたの僕ですし。 そもそも換気扇ついてるから聞こえなかったでしょうし」

「どつ、とにかく済まなかった！ 俺、すぐに出るからつ……………!？」

と、急いで出ようとしたのが間違いだったのかもしれない。

一瞬で真後ろを向くつて言う、元々運動神経もいい方じゃなくて最近ろくに運動もしていなかった俺の体にとっては難易度の高い動き

をしたせいか、それともさつきからぼーっとしていたのも寝起きだったからかは分からないけど、気がついたら足首の痛みとともに俺の視界は傾いていた。

バスタオルを巻いただけの早咲を視界の隅に捉えたまま、足がもつれた感覚と三半規管が転びかけている、って言う信号を感じたまま。

「っ！ 直人、危ないっ！」

……
体に、軽い衝撃が走る。

思わずの反応で……体育でボールが不意に飛んできたときとか虫が飛んできたときとか、そういうときみたいに目をつぶり、ただ衝撃に備えていた。

……だけど、思っていたよりはずっと弱いものだ。

それに、なんだか……柔らかくて温かい。

柔らかいのはバスマットののおかげで、温かいのは熱気のせいかな？

いや、それにしても柔らかすぎるし、温かすぎる。

その上、後ろから倒れたと思ったのに……気がついたら突っ伏すようにしているし。

何が起きたの、か、……。

……。

目を開く前に、背中が冷たくなり体の一部が熱くなる。

何とかしてその衝動を、妄動を抑えようと必死になっている内に、耳元から声が聞こえてきてしまう。

——抑えられる限界を超えつつあったところにとドメとして。

「直人。ケガはありませんでしたか？ どこか痛いところは？」

——おかげで、無いよ」

「そう、よかったです。大切な大切な男子で……あ、友人って言うものもありますけど、そんな直人がケガをしたとなれば僕がどんな処分になるか分かりませんし」

——万が一そんなことがあれば、俺が全力で

なのになぜこうしてうつ伏せになっていたんだ？
それに早咲も、あまりにも動きが速すぎないか？

だって、俺が転びかけてから転ぶまでには長くて2、3秒だろう？
そんな一瞬で俺の下敷きになって……しかも、きつと背中痛いはずだ。

頭だって打っているかもしれない。

いくら鍛えているって言っても、いくらバスマットがあるからって
言っても、背中から滑り込んで男ひとりを受け止めるって言うのは間
違いなく痛いはず。

それなのにどうしてこいつは平気なんだ。

身体面でも精神面でも。

だってこの状態は……。

「……直人ー？ あのー、直人ー？」

「……………あ、う」

声が出ない。

あまりの情報量に……感情と劣情とで頭がきちんとした方向に働
かない。

「痛みとかなかったら、そろそろどいてくれますかー？ この体勢、
けっこうきついんですよ。それに天井の光がまぶしいですし」

「……………あと、ですね？」

早咲の声に引きずられ、俺の目が早咲の目とぴったり合う。

心なしか潤んでいて、頬が赤くなっているように見える……ああ、
これが上気した顔ってやつなのか、なんて思考が駆け抜ける。

「いくら男同士でもですね、この状態でおっぱいとかおまたとかを見
たり、腕でおっぱいふにゅんってするのは止めてくれませんか？

……あー、直人ってラッキーなんとかって体質だったりします？
なーんて、冗談です。……で、ですね？ 見ちゃうのはしょうがな
いですけどね、僕だって直人の立場ならそうしちゃうでしょうし。

だから……えっと。……………

……………お、おーい、な

おとー。そろそろどいてくださいよ——……あれ、聞いてます？」

もぞもぞと動く……からこそ余計に目が胸に吸い寄せられてしま
う情けなさに自分を殴りたくなる。

けど、……………どうしようもないんだ。

こんな状態になった以上、俺にはもうどうしようもない。

だって俺には、こんな経験はなかったんだから。

31話 最後の試練(2)

「直人ー。直人ー?あれ、まさかそこまで耐性がな
いなんて……」

「……………」
目の前には早咲の火照った顔と体……むき出しになった胸。

中性的な顔立ちとは言ってもやはり骨格も肌も女だ、ましてや風呂
上がりとあつてどう見ても女にしか見えない。

目を少しでも下に落とすと細いくびれとへそ、……その先の腰から
下が。

「ですからー、くすぐつたいですし重いんですけどー? 直人? 直
人ー」

と、……そうだ、いけない。

俺は今、助けてもらった上に肉体は女な早咲の上に馬乗りになつて
いるんだ。

まだ怒っているわけじゃなく、むしろ心配されつつ動かないのに文
句を言われているだけ。

……友人としての関係を維持したいんだ、とりあえず離れてここか
ら出ないと。

……………。

……………。

……あれ?

……………。

「……………」
早咲

「あ、やっと動きました。直人、重いので」

「すまん、腕と脚に力が入らない」
と。

なんとか気を持ち直してどこうとしたはいいけど、脚とか腰に
力が入らず……このまま体をずらそうとしたら今度こそ覆い被さる
ようにして倒れ込みそうになっているのに気がついたから、端的に事

実を絞り出す。

……下はバスマットで膝も手も痛くはないけど、ずいぶん長いこと同じ姿勢でいたからか、手首と膝がしびれている。

……………これ、詰んでいないか？

このままだと、俺は早咲に馬乗りになつて裸体を見続けるっていう恥知らずになる。

かといって、それを避けるために立ちたいけど、体をうまく動かせない始末だ。

動かないでいると邪な視線が止まらないからたぶん直に怒られ、動く今度こそ押し倒して気まずいどころじゃない事態になる。

俺、どうしたら？

……………。

というか、まずい。

まずいことに気がついてしまったことがまずい。

何がまずいかって、……………その、あれだ。

健全な高校生男子として当たり前前持っている男としての衝動が起き始めているっていう……つまりは欲情しているって言うことだ。

恥ずかしいけど今は恥ずかしがっている場合じゃないし、これまでみたいに気がつかないフリをするわけにもいかないんだ、何とかしないと。

……すでに体は反応している、早咲にも……前世が男だったからこそズボンを見られたらすぐに分かるはずだ、今の俺がどんな状態かって。

仰向けにもかかわらずこてんと……そのせいでまた一段と……とにかく首をかしげて俺の顔を不思議そうに見ているだけだからまだいいけど、ふと下を向かれたらアウトだ。

……………男としてアウト、女にそれを見せてアウト、男にそれを見せてアウト、なにより性別に関係なく友人として……まぢがいなくアウトだ。

男女はほんとうの友人にはなれない、なんてどこかで聞いたフレーズが頭に浮かぶ。

早咲を男と見るか女とみるか……少なくとも今の俺の体は女だと
言っている。

……………俺の心は男だって見たいのに。

この世界で唯一の男の友人だって。

だから、何とかして収める。

けど、どうやって？

恥ずかしい話だけど……この世界に来てから、俺は1回もしてい
ない。

だって、そもそもそんな余裕はなかったんだから当然だ。

学校……学園にいるあいだは女子たちからの肉食獣のような視線
に晒され、へとへとになってここに戻って来て適当に済ませてさっさ
と寝る。

当然ながら俺が楽しめる娯楽がなくて……俺が興奮できるもの自
体がなくて。

そういう欲求すら浮かばなかった。

そうしているあいだにあの晩に襲われ、危ういところで早咲に救わ
れ。

……そして今度は早咲っていう元男な友人と会えた楽しさで、また
それどころじゃなくなっていたんだ。

思えば途中から俺の心がずつと揺れていたのも所詮は性欲って言
う男の悲しい性のためだったのかもしれない。

だって、現に今、女らしい姿を見た途端に発情した犬みたいになっ
ているんだからな。

———こんな自分に、嫌気が差す。

早咲はこんなにも……風呂上がりに転びそうになった俺を助け、背
中から倒れて痛いはずで、なのに俺からはずつと馬乗りになられてい
ても、いつものクセでかわいらしく首をかしげて。

「……………なおとだったら、いいですよ」

「……………え？」

「いくらなんでも直人がそこまで固まって動けなくなつて、苦しそ
うな顔していて……下をそんなにしていたら」

「……………つ、済まない早咲。ヤなもん見せち
まっつ」

「え？ あの、修学旅行とかで普通に見ていましたから別に平気です
けど。前世じゃ見せ合いとか当たり前でしたし？ ……あー、直人
の性格じゃそういうのしない子と一緒にしたかー」

「いや、俺、お前を見てこうなっついて」

あんまりにも不思議そうな顔で聞いてくるもんだから思わずで本
音を言っつて血の気が…………あ、今で少しだけ収まった…………けど、俺の
体はあいかわらずだ。

「いえ、ですから平気ですって。そもそも僕は男でしたからそれを
見せる側だったわけですし」

「……………そういえば、前世から女遊びを」

「そういうことです。なので別に気にしませんよ？ むしろこの状
況では男として反応してしちゃうのが男の体でしょう？ 知ってま
すよ、僕が何百回何千回してきたと思ってるんですか」

「……………悪い」

むしろ怒ってくれたりした方がよっぽど楽なのに…………それなのに
早咲は、変わらずに笑顔……………少しだけ困ったような感じにしつつ、俺
のこのことを見上げ続ける。

「……………直人の性格からして、これまで発散する余裕、なかったんですよ
ね」

「……………ああ。少なくとも、こっちに来てからあの晩までは」

「でしょうねえ、僕みたいにいるいと慣れているのと彼女すらいた
ことがない直人とは違うでしょうし？ ……いろいろと」

「……………、なんで」

「いえ、分かりますよ。据え膳にむしろ腰が引けている感じでした
し、女子の体から目を離せない場面ものすごく多かったですし？
……………ま、こっちの女の子たちも直人に対してそうでしたからほとんど
気がつかれてはいないでしょうけど」

「……………俺は、俺に向けられているのに気がつい

ていたから……俺の気がつかれていないはずはない、んだけど。

「なので……、その。いいですよ？ 僕は。そうして発散でき
ない辛さは身をもって知っていますし。頭の中がごちゃごちゃ
しちゃって、もうどうにもならないんですね？」

——それに、命令されていますし」

「……、命令」

「はい。僕からは絶対に直人に手を出さないって知られていますけど、もし直人が僕を求めたんだったら手ほどきを、って言うのをですね。だって、直人、誰ひとりとしてそこまでの距離にもならないですし……夜になる前に帰しちゃって、呼ばないんです。誰でもいいのでとにかく女の体に慣れさせろー、ってニュアンスで。あと、……いい加減にあのふたりか、それともクラスの誰でもいいのでさっさと抱いてね？ でもムリそうならお前が何とか手助けしろー、って
いう圧力が」

……………。

そんなことが。

なのに早咲は、ずっと俺のそばに……同じ部屋にふたりつきりでも平気で寝息を立てたりして、起きているあいだは楽しくさせてくれて。

「……それは、母さ……美奈子先生やローズ先生が？」

「いえ？ もっともっと上の方ですよ？ むしろおふたりは直人の人権をないがしろにするなって怒ってくれていましたし。だって、直人が襲われかけたあたりから、さっさと手慣れた人を送って……もちろんクラスの人に教え込んでですね……いい感じに襲えつて言うのまで出ていましたから。ほら、最低でもひとりふたりはお嫁さんがいないと大変だって話したでしょう？」

「……………。」

「あとー、えっちなものとか手に入りませんでしたよね？ そもそも欲しいものがあつたら何でもは言われていたでしょうけど、直人からそんなものをー、なんて間違ひなく言えませんか？ ……ま、上の方が手に入らないようにもしていましたから」

「……………それは、ネットとかも」

「調べますよね？ 興味本位でも、実用本位でも。直人っていう健康な、しかも若い男のを1回たりとも無駄にさせちゃダメっていう方針だったそうですよ？ ……ま、この世界の男ってそもそも男になるタイミングで幼なじみたちを宛がわれていますから、そこまで需要がなくて大した数がないっていうのもありますけど」

……………。

確かに俺は調べた。

知らないメーカー、だけど使い方や中身は……少しだけ古い感じのパソコンを使って、ネットを。

だけど、いくらそれらしいのを探しても……この世界の女性向けのはこれでもかってあったけど、俺のような男向けのものは何一つ無かった。

それは、フィルタリング……いや、検閲されていたからで。

「……僕、たくさんの女の子、女の人たちとしてきたっていいましたよね？」

「……………ああ」

「なので、相手によってはそういうのを使って入れられるって言うのもたまーにあったりもしましたんです。……………な

ので、いいですよ？ 僕と同郷の直人なら」

「……………っ！ な……………にを言っているんだ。

だっってお前は男で」

「でも、体は……今世の肉体は女です。 さつきから、直人が見えているように」

「っ！」

早咲は抵抗するわけでもなく、ただ横たわって……潤んだ目つきで俺を見上げてくる。

「その感覚、衝動。 この体になってから……あは、もう16年ですか、感じられなくなっただけはいますけど、それでも覚えてはいますから。

出せないって言う辛さも、ものすごく」

……………

「それに、繰り返しますけど。直人が……何ヶ月経ってもあのふたりに手を出さない、出せないようでしたら代わりに僕がつていうのと、逆に直人が……女の子に慣れないといけないので、もしこういう場面になったら拒否しちゃダメって命令されています。だから、これは「命令」なんです。気にしないで、いいんですよ。」

32話 最後の試練(3) そして……

「確かに僕は男です。心は完全に男です。」

「……でも、同時に肉体は女でもあります。それに……、女の子と遊んでいるときに、おもちゃを入れられることもるんですよ？　なので、入れられることに対する抵抗感もそれほどないです。　なので僕は……直人がそうしたいって言うのでしたらいいですよ。　命令されたって言うのもありますけど、それはあくまで、ただの命令。　僕自身は、まっすぐな直人のこと、嫌いじゃないです。　……それに、この世界なら、直人よりもずっとずっと男らしい性格の女の子っていっぱいいっぱい、いっぱい、いますから」

「……………、早咲」

俺の下で、ただ俺を見上げながら、潤んだ目で口にする早咲。

落ちつけ。

理性で、何とかするんだ。

……そうだ、早咲は無理をしているのかもしれない。

嘘をついているのかもしれない。

命令とやらが……この世界の男関係での過激な何かで厳しいのか、それとも……似たような世界から来た、たったひとりの友人な俺のためだけに言っているのかは分からない。

でも。

——前世は、心の中はまちががなく男で、今でも俺の男の友だちで、絶対に、心の中じゃ嫌がっているはずだっていうのは分かっている。分かってるんだ。

だけど、……こうして分かっているながらも、俺の心と体と……衝動は、早咲に向かっていて。

「……………めんなさい、こんなに貧相な体つきで。　特に胸が、小さくて」

「早咲、お前、何を」

「直人のこと、初めから見ていましたから分かりますよ。直人は胸の大きい女の子が……あのふたりのような女の子が好きですものね。ええ、あの日わざとケンカをしたときにもそう言っていました」

……………ああ。

そんなことも、あったな。

俺を、立ち直させるためにわざと怒らせてきたあのときの。

なのに今は、それがぜんぜん別の文脈で。

「……………めん、早咲。でも、俺。……………ダメだって分かってる。早咲が、本当は嫌がってるはずだって分かってるんだ。だけど、……………体が、我慢が」

ダメだって分かっていても、俺の理性なんてしよせんはただの……彼女もいたことすらない弱いものだ。

だから俺は、早咲の声に引かれてだんだんと「早咲自身がいいって言っているんだし、もういいか」っていう暗い気持ちに包まれていく。

「直人、いいですよ」

「……………早咲」

「僕なら。——男だった僕なら、直人の全部を受け止めてあげられますから。それがどうしようもない衝動で、……………ええ。出すまでは止められない、抗いがたいものだっていうのは、覚えていますから。……………大丈夫です、これからのこと、終わったら無かったことにしますから。ただちよつとだけ困ったことがあった、それだけしか覚えておきませんから。——直人がまた、したくなつたら相手もしてあげます。だって僕は、この世界でたったひとり、直人を理解できる人間なんですから」

早咲は……………俺の手とその胸を……………早咲自身の手で、包み込んで。

「……………ですから直人。おいで？」

「……………早咲」

俺の中で、何かが千切れかける音が聞こえる。

ダメだという理性と、いいんだという欲望が綱引きをしていたの

が、ぷつりと切れかかる音が。

……そして、早咲のことを……目に映っている早咲の柔らかい体を「女」として見てもいいんだって、遠慮しなくなっている、俺が。

……………。

1回。

1回、だけなら。

そうだ、俺はここに来てから……その、1回もしていない。

だから、……早咲もこう言っているんだ、1回だけなら。

そう思つて、手を動かそうとしたところに、早咲の声が飛び込んできた。

「……………」 けど。 直人。 もし、このまましてしまつたら

……僕たちは多分、いえ、きっと。 ただの男の友だち……つていう、ついでさっきまでの関係はもう取り戻せなくなりますね」

「……………」 あ

「しょうがないことなんです。 しょうがないことなんですけど……なんだか寂しいですね。 もう、今日の夕方までみたいな関係には戻ることができないんですから」

「さ、き」

「だって、そうでしょう？ 1回でも肉体関係……えつちなことをしちゃつたら、それはもう友だちじゃなくなります。 少なくとも、ただの友だちには、ね。 それ以上の、別の。 何かの関係になるんです。 ……」 そう、例えば今言つたみたいに、次に直人が

我慢できなくなつて僕に求めてきたりすることだつて出てくるでしょう。 そうすると、また……「男同士」じゃなくて、「男女」の関係になつちやいますから。 ものすごく仲のいい、恋人じゃない……けど、友だちというわけでもないつていう関係に」

「う、……でも、早咲。 さっきは」

「もちろん僕はこのまま……苦しい直人の手伝いをしてもいいんです。 けど。 けどですね？ ……この世界で、僕はたくさん女の子たちと関係を持っています。 だからこそ分かるんです。 仮に肉体が女同士でも、いちどでも関係を持つちやつた子つていうのは、

純粋な友だちっていうものからは外れちゃうんです。だって、お互いにしたくなったらしちゃう、短い間だけでも……恋人になっちゃうんですから」

「……なので、直人と僕は余計に。肉体的には完全に男と女です。きっと、これ1回限りだったとしても、それはもう……男の友だちに近い男女の関係っていうものになっちゃうんです。ですので――

――直人は。直人は、どうしたいですか？」

「……っ、俺、は」

「直人は……君は、どうしたいんです？ 僕は、どちらでも構いません。元、男としての友だちのままでも、関係を持ったことのある男女の友だちっていうものでも、どっちでも。どちらにしても、「普段」なら僕たちは友だちのままなんです。男の。……ただ、1回しちゃうと、少しだけ変わっちゃう。ただ、それだけ。そして――僕は選ぶ立場にはありません。選ぶ立場にあるのは、直人なんです。この世界ではほとんどいなくて、だからこそこの世界のほとんどの女の人よりも……それこそ、よっぽどのことじゃない限り何でも望みを叶えられる立場の、直人。――

――直人、君は、どうしたいんですか？」

頭の中がめちゃくちゃだ。

体の中もめちゃくちゃだ。

俺の中で、何もかもがはち切れそうになっている。

だけど。

……………。

早咲が。

このまま俺が手を出してしまったら、早咲とはもうただの友人には戻れない。

友人に近い、女の友だち。

――早咲が、今言ったように。

――俺が、俺のいた世界に戻ることができる保証はな

い。

それどころか、このままずっと……死ぬまで母さんには会えずに残る可能性の方がずっと高い。

だって、そうだ。

この世界に来てまだ大して時間は経っていないけど、でも、俺には何も起きていない。

ただ、あの夜に校庭で目を覚ました——不思議なことは、ただ、それだけ。

なら——俺は、この世界でできる友人、「親友」になりうる人間はただひとり。

目の前にいる、女の体ではあるものの、男な早咲……だけなんだ。だから。

どうにかして……しびれている腕を、手をなんとかして早咲の手と胸のあいだから離して地面に置き直し、とじくじくと痛んでいる膝を押しして、少しだけ早咲と距離を取る。

「……………なおと……………」

「早咲。……俺は、この世界でたったひとりしか見つけられないだろう友だち……ホンモノの、男の友だちってやつを失うわけにはいかない」

「はい」

「だから、我慢する。止める。だけどさ、俺自身の意志で……は、なんでだか分からないけどとても難しそうなんだ。だから、……その、蹴り上げでもしてこの衝動を収めてくれないか？ スポーツ万能で鍛えているんだろう？ 思い切り膝で俺の腹でも股でも」

「あ、ホントに大丈夫そうですね」

「……………ん？」

と、……俺が懸命に意志を絞り出していたから気がつかなかったけど、早咲の顔はいつも通りに戻っていて。

それで……一瞬の後には、俺の真下には誰もいなくて。

「……………あれ？」

「あ、ちなみに、なんですけど。直人、この際だからもうはつきり

と聞いておきたいんですけど。今、えっちなことしようとしてたじゃないですか。それって、「婚約者」ってことになってて、そこそこ仲良しに見えますあのふたりとできそうですか?」

「え、あ、……?」

顔を上げると早咲の下半身——が下着で包まれていて、もう少し上げるとさつきまでの胸も、もう見えなくなっている。

慣れているのか、手つきは素早くて……あつという間にシャツを着て、ズボンを履き、上着を羽織っていつもの「男装」へと戻っていく。「と、……あ」

四つん這いになった姿勢から上を見上げたせいか、バランスを崩して尻餅をつき……手足がしびれて動けない状態で、俺はただ、ぽかんと早咲を見上げていた。

そんな早咲は、タオルで髪の毛をささつと拭くと雑に後ろで縛り……どう見てもいつもの「早咲」に戻っていた。

「どうですか?」

「え?」

「え、じゃないですよ? あのふたり、オツケーそうですか? えっちなことできそうですか?」

「え? ……あ、ま、まあ、そう、だな?」

「ほんとうですか? おーるおつけー?」

「あ……、う、ん。ま、まあ、多分?」

「あのふたりと、仲良く……卒業してもずっと一緒にやって行けそうですか?」

「え、と……あ、うん、ふたりともいい人だし、優しいし、俺のこと気遣って」

「そ。ならよかったです。まー、直人は男ですし? 生理的にムリでもなければどんな女の子としても平気だとは思いますが、こういうのは本人の意志が大切ですし、なによりこの先ずっと一緒なんです、ハジメテは相性がいい子のほうがいいですもんね。……はいっ、ただの確認ですが、大切な確認ですっ」

……ダメだ、状況が分からない。

さつきまで……ほんの1、2分前までは早咲が全裸で、俺が押し倒して、俺の衝動を受け止める……つまりは男女の関係になるって言う話だったのに、それがいつの間にか早咲は普段の格好になっていて、その相手があのふたりっていうことになっていて？

「あ、もしもし。 僕です。 ……はい、例の件、直人本人からオーケー出しました。 ちよつと……あ、ほんとうです、問題ない程度に盛ったので、今夜「力尽きる」までは大丈夫そうですね。 なので……、ええ、ええ。 念のために、もう1回ふたりと実家の方にも確認と念書を取ってもらってから、すぐここに来てもらってください。 僕、彼を見ながら待っていますから。 あ、あのふたりはいいですか。 分かりました、せんせつ」

……と。

早咲が、訳の分からない電話を終える。

「……あ、直人。 直人の直人の調子は——あ、大丈夫そうですね。 さすがはこういうときのためのお薬、効き目はバッチリみたいですっ」

「……、薬？」

「はいっ」

「こてん、と、いつもよりも首を傾けながら……実に良い笑顔という物をしながら俺に向かってしゃがみつつ早咲が言う。

「というのもですね？ あと数分……いえ、隣の部屋で待っていていましたので1、2分程度でしょうか？ 今夜で直人の婚約者からお嫁さんにランクアップするあのふたりがいろいろと準備してきますので」

「……………は？ 嫁？」

「はい、お嫁さんですっ ♥ つまりはカラダの関係も持つ、立派な男女の関係ですね？」

早咲がしゃがんできて、俺の……を、指で軽く叩き、にたりと笑う。「ああ、いいなあこの硬さ……もう僕にはないんですよ。 その感覚もすっかり忘れてしまいましたし……と、それはいいとしまして。 ——僕はですね、直人。 直人が、ふたりと……直人となんと

なく相性良さそうだって選んであげたあのふたりと、上手いことえつちなことをして無事この世界に適応できるよう、準備してあげたんです」

はあ、何かの事故で生えませんかねえ……と、もう2、3回つついてくる早咲。

「……ねえ？ 男ならいい加減覚悟決めましょう？ うじうじするのはやめにして。もう、分かっていますよね？ この世界の男子で、その歳で……お嫁さんが一切いないって言うやつばーい現状のままですと、またあんなことが起きかねないって。だから、覚悟決めていーっぱいしちゃってくださいいね？ ね？」

身も心もちよーつと奥手気味な、だけどこうして健全そのものな男子
高校生の………。榎本直人、くん？」

33話 この世界を受け入れた朝

.....ん。

目覚まし時計よりも.....ああ、こつちに来てから使ったことないな、そういえば.....先に、自然に目が覚める感覚とともに、俺の意識は浮かび上がる。

閉じたままのまぶたには朝日が、窓の外からは鳥の声が。

そして、体は程よく疲れ切り、なんだか.....そう、ずっとため込んでいたものをまとめて出したときのようなすがすがしさが。

.....。

ん？

体のだるさ？

すつきりしすぎた感覚？

すがすがしき？

——両隣からの、温かさと柔らかさといいい匂いと

吐息？

「.....」

そつ、と。

俺は、昨日の.....昨夜の、早咲とのあの葛藤があつたあのことを思い出しながら、そつと横に.....視線を感じる方へと顔をやってみる。

「.....あら。もう少し、寝顔を眺めていたかったのですが。とても可愛らしかったので.....くす、残念です」

「.....晴、代」

「はいっ、直人様」

どのくらい前から起きていたんだろうか.....両腕をついて起き上がり.....昨夜のアレのおかげで当然ながら何も着ていない、つまりは上半身.....いや、シーツに隠れている下半身もなんだろうけど.....はだかのままで。

昨夜.....明るくなってきたころに眠くなってようやく眠る、なんてことがなければきつと反応してしまっていただろう立派な胸がふ

たつ、その上と横に流れる晴代の長い髪の毛、そして美しいっていう感じの顔が、瞳が、俺をのぞき込んでいた。

「……………うにゅ？　なおとお？」

と、俺の声で目が覚めたのか反対側でもぞもぞと動く音がしたと思っただら体重を掛けてきて……………同じような格好どころか、寝相が悪かったのか脚までシーツが乗っていない、つまりは素っ裸な沙映が、俺にその大きな胸を乗せつつのぞき込んでくる。

「沙映」

「うんっ、おはよっ！　昨日はすごかったねー！」

……………

う、うん。

まあ、こういう自然なところも沙映のいいところだから。

奥ゆかし……………過ぎるくらいの晴代と、素直すぎる沙映。

このふたりの組み合わせがちょうどいいんだろう。

身長も高いのと低いので……………ま、まあ、胸はその、ふたりとも大きかったけど。

「……………ええ。素敵。ただ、その一言に尽きますわ。それ以上で

表現したなら逆に下手になってしまいます。殿方と……………私たちがふ

たりは、縁がありませんでした。そう、末娘として生まれたときから決まっていたのです。ですので、あのような体験は万が一にもあり得ないものだと思っていました」

「だよねーっ。男の子と顔……………あ、お兄ちゃん以外のと、かな？」

と、合わせるのもお話しするのも、昨日みたいなことするのも、沙映には関係ないことだって思ってたよ。もともとキョーミなかったけど」

……………

そう言いつつ、晴代は乱れていた髪の毛を整え始めて……………用意して来てくれたんだろうな、軽く濡らしてあるタオルを沙映と俺に手渡してきてくれて、まずは顔を軽く拭う。

それで、さっぱりした。

頭も、ようやくに覚めた。

「ありがとう、晴代。それで、ふたりとも……ごめん。早映が……なんか企んでたみたいだけど、そのせいでいきなり呼びついたりして。真夜中だったって言うのに、……それに、俺と、その。いきなり、……ええと。……ええと。して、もらって」

「あ！ 直人がそうやって恥ずかしがってるの、いいかも！」

「こら、沙映さん。今は真面目なおはなしですよ？」

「はーいっ」

「……ええと、ですね？ 直人様。まずは、改めてお伝え致します。

私たち、先生方や早映様から直人様が特殊な環境での養育をされてきたのだと説明されてきました。そして、そちらの方針で……ものすごく、ものすごく古い……まるで明治時代のような恋愛の価値観をお持ちであるということも知らされました」

「んー。あのへんのおはなしとか、授業でやったりするけどイマイチよく分かんないんだよねー。だって」

「はいはい、あとで聞きますから、ね？」

「ぶー」

「……こほん。それでですね、直人様。直球に申しますと、私たち女子にとって、数日……いえ、いきなり登録してあります写真で男性から呼ばれたりしても、ですけど……実際に顔を合わせ、近くで、それも友人として接していただけた男性である直人様と。——たとえ昨夜限り、ひと晩限りだとしても、肌を重ね合わせられ、その上直接に注ぎ込んでいただけるといふ幸福は、夢物語なのです。しかも、記念のためのたったの1回などではなく、何回も……ふう……」

「……うん。あれ、うれしかった。ふつーは男の人となんかできないから、細長いあれ……なんだっけ？ ま、いいや、それでちゅーつてやってちゅーつてされるだけなのに、その何十倍、ううん、ものすごいのを沙映たちのおなかの中に入れてくれて。沙映、あの思い出だけでこの先の人生、きつと幸せだよ」

お体も軽く拭ってくださいね、という晴代の言葉に習って俺も体も拭いて……その様子をまじまじと、同じ動作をする沙映に見つめられながらするという恥ずかしさに耐え、どうにか……いちばん汚くなっ

た場所まで綺麗にする。

そうして……これもまた晴代が手配してくれたんだろう、俺たち全員分の下着から制服を手渡され、今度は3人で下着から身につけていく。

……晴代は見ない振りをしてきているけど、沙映は俺の股に視線を注ぎっぱなしだ。

……まあ、昨夜はお互いさまだったんだし……いやいやでも、やっぱり恥ずかしいもんは恥ずかしい。

「沙映さんがおっしやるように、これはとても……私たち女子にとって、幸せなことなのですわ、直人様。直人様がいらっしやるなければ……そして私たちを選ばなければ。学園を卒業しても他の男性からの、先ほど申したようなお相手というものにも選ばれませんでしたら、私たち、もう一生男性とは巡り会えない……はず、だったのです。ですので、これからは家の手伝いをしつつ、人工授精を選び続け、あるいは家の伝手でご紹介をいただけるでしょう男性を待つかありませんでした」

「そーなの？ 私、どっちもしなくてもいいよーって、お母さんから言われてるけど」

「……それは、沙映様にお兄さまがいらっしやるからですわ」

「あ、そーなの」

「ええ、お兄さまがたくさんの女性を幸せにするので、沙映様にはそのような義務はないのです」

「へー」

……もう制服をびしっと着こなしている晴代と、晴代に着るのを手伝われている沙映。

こういう会話を聞いたたびに、ここが俺のいた世界とは……よく似てはいるけど、全く別の世界だって考えさせられる。

ああ、分かっている。

早咲からもさんさんに……いや、初めのあの夜から、美奈子さんやローズ先生、ひなた、そしてこのふたりからもいろいろと学んだんだ

から。

だから、ここは——異国。

異世界。

似ているけれども異なる世界。

そういう場所だつて、理解している。

だけど、それとは別に思うところがある。

.....

俺は、昨夜。

——早咲との風呂場でのあの後すぐにやってきたこのふたりと
.....、した。

とりあえず、早咲に煽られる文句がひとつ減ったっていうことだ。

それだけのことを.....いや。

初めてにしては余りにも上手く行きすぎるし明け方までついでいう
始末だった。

これはもしかや——。

「ピンポーン」

と、俺はもちろん沙映も無事に制服を着終え.....リビングに出たら
ひとまず何事もなかったかのように振る舞える状態になった俺たち。

.....まあ、寝る前はみんな全身汗まみれだったし、.....その、いろ
いろなもんが体じゅうについているから学校に行く前にちやんと
シャワーを浴びないとまずい状態なのは明らかだし、.....そして、
何よりも寝室を見られるのはとても気まずい。

だから、こうして出てきたわけだけだ。

「ピンポーンピンポーンピピピンポーン」

「.....

.....この感じは.....

ああ。

この元凶の、あいつしかいないよな。

頭の上にはてなを.....本当に浮かべているのが見えるくらいの表
情をした沙映と、苦笑している晴代を手で制しつつ玄関へと向かい、
鍵を——そういえばこれ、玄関にあるパネルに触るだけで開くもの

だったら嬉しいな——開ける。

そして、そこには——やっぱり、思っていたとおり。

「いやあ、おめでとうございます直人！ それに綾小路さんに御園さん！ あー、いや、もうこれで仲間、身内みたいなものだから下の名前がいいですか？ ということで直人、晴代さんに沙映さん、ほんつとーにおめでとうございますっ！ まずはみなさんのアバンチュール……じゃないですね、ランデヴーおめでとうございますっ！ これでもうマリアージュはばっちりなので届け出も完了したって先生が言っていましたし、もう大手を振って「夫婦」として出歩けますね!!

.....

あ、で、そんなことはどうでもいいとしましてどうでしたかみなさん!! 特に直人!! 奥手すぎてもうどーしようかってさんさんに僕、おっと、私を悩ませ続けました直人!! 最初っから、童貞かける1と処女かける2っていうまさかの3人とかいうかなりレベル高いスタートでしたけど、どうだったんです!? あ、でもなんだかみなさんスッキリされてる様子なので上手く行ったんですね!! 最初から3人で暗がりの中……どうです、興奮しました!? 気持ちよかったですか!? 本能のままに蠢きましたか!?”

……一応、ほんの少し、微量は理性が働いているのか玄関に入りドアが閉まったのを確認してから一気にまくし立て始めた早咲。

——早朝から、セクハラとかそういうものの次元を越えている気がするんだけど。

だけど、いろいろあったけど——それでもこいつは早咲。

元男で、現女——でも、変わらずに女ばかり追いかけている奴で、親友、だからな。

34話 種明かし

「あー、もうちよつと早ければみなさんのあられない姿を急いで整えた感じの、実にいいのをこの目に焼き付けることができたんですけどねー、残念です。特に晴代さんと沙映さんはほら、僕のリスト的には後回しにしてみましたし、なにより直人が来てからは直人のお相手だからもう拝ませんからねえ……ああ、残念です」

「あー！ 沙映知ってる！ 名前が似てるからつてびつくり、つていうか引かれたことあるもん！ ひどいよ、さえ、と、さき、だなんて！ おかげで沙映が女の子大好きで先生たちにいつも怒られてるって、ここに来てしばらくあつたんだからっ」

「……はあ——……この方が主席、ですか……。この癖さえなければ、ほんとうに才色兼備なお方なのですけれど……」

玄関で立ったまま俺たちを食い入るように見つめながら……ものすごくわくわくしている感じの早咲と、珍しく怒ってる感じの沙映と……頭を抱えている晴代。

そして、何にも言えずにぼんやり突っ立っている俺。

……
やっぱり早咲は……いや、多少面倒見は良かったとしても。

たとえば、正気に戻ることはあつたとしても……その本性は。

「はいっ、と言うわけでみなさんは今日から正式に……法的にも何もかも家族ですつ。国際条約的に。……あ、書類とかはもう全世界に発信しましたので直人の安全もそれなりには確保できましたよ？

ええ、日本国の御園家と綾小路家。あとはこの学園の先生たちや生徒たちのお家を敵に回して何かしようとするだなんて、もうできませんからね。そういう意味ではあのとときの悪い人たちがラストチャンスだったんでしようか？ まあいいです、とにかくそういうことで。今日中は念のために学園にいた方がいいみたいですけど、明

日からは直人も学園の外に出られるようになりますし、沙映さんと晴代さんは晴れて「シンデレラ」として男の子に見初められてお姫さま。

ええ、全員が幸せ、大団円ですねっ」

……早咲、朝っぱらから元気だなあ……。

……………。

じゃなくて。

「……早咲」

「はい!!」

「うるさい」

「はい……」

「……で。俺がふたりといきなり——そうだな。この世界では、何よりも俺の安全のためにとって、このふたりが「お嫁さん」として」

「お嫁さん……はう……」

「……済みません、少し腰が……」

……………。

……今度はこのふたりか。

晴代はぺたんと座り込んでじやうし、沙映はふらふらと危なっかしいし。

「……………俺と結婚した、ことになったんだな。」

そうだよな、俺の世か……じゃない、俺の、その、「偏った教育」で習ったみたいに男女は恋愛のあとに結婚って流れじゃなくて、気に入ったら……男が見初めて、こうしたら結婚なんだもんな」

「そうです。そのあたりの常識が染みつくまでは、あまり外で長居はしない方がいいかもですねえ、直人」

「そうか。……………念のためだけど、晴

代、沙映、いいの？俺たち、知り合ってまだ何日かしか経ってないし、放課後くらいしか一緒に過ごしたことないし、あと……その。

昨日の夜だって、ほんとうに急に、いきなりだったし」

「あ。ちよつと待つてくださいい直人」

「……俺は、晴代たちに」

ぴつ、と指を差す早咲。

その指先を見てみると……ふたりが、晴代は突っ伏すようにへたり込んでいて、沙映はなんでかは分からないけど壁と床のあいだにすっぽりと挟まるようになっていた。

ついでにふたりの息は荒くて……それこそ、昨日の夜みたい、に、……。

「……とりあえず直人。直人の言葉は危険すぎるので……ちよつと時間置きましようか。あの、なんか済みません。僕が無遠慮だったばかりに。みなさん、ごめんなさいでした」

「……お前、そんなことが分かるんだな。あ、いや、気遣いができるんだな」

「ひどいですねえ直人、僕は女の子を墮とす達人ですよ？ 空気くらい読めますって」

○

「……ふう……お気遣いいただき、ありがとうございますわ、早咲様」「いいですって、初めての朝を迎えた女の子なんてそんなものですし」「……本当に評判通りのお方なのですね？」

「そうですよ？ 別に隠していたわけじゃありませんけど、普段見せるものでもありませんし」

「？ ということなの？」

「沙映は気にしなくてもいいぞ。早咲、いや、コイツは変な奴なんだよ」

しばらくして落ち着いたふたりをリビングのソファアに連れてきてから少し。

ようやくふたりは元に戻ったみたいだ。

……。

……その原因、今となってはなんとなく分かるから、聞かれない限りは黙っておこう。

「……んー、それにしてもさあ、やっぱり直人はね？ ……んと、普通の価値観、つての？ 知っておいた方がいいと思うよ？ 私たちと話し

とてもよくわかんないことになるしよ。 そのうち私たちの家族ともおはなしするだろーし」

「ええ、沙映様、確かにそうですね……今すぐには無く、それこそ直人様がこちらにいらしてから放課後のようにゆつくりとしたペースで少しずつ教えて差し上げたらよろしいと思いますわ。 それに、今後は一緒に住むことになるのでしようし、放課後以外にも時間はありますもの」

「そうですね、つまりは夜だつて!!」

「早咲、真面目な話だぞ?」

「はい」

……こいつ、正体をこのふたりにも見せたどたんにと遠慮が無くなりつつあるな。

「こほん。 それですわ、直人様」

「あ、うん」

「……私たちは、直人様が私たちのことをお嫌いにならない限り、あるいは飽きられない限りには直人様の嫁のひとりであり続けたいと思いますわ。 これは、本心です」

「沙映も沙映もー!」

「……ふたりとも」

「ええ。 直人様はお優しい方で、それなのに芯は……ええ、榎本、美奈子先生がおっしゃっていたように芯のお強いお方ですわ。 どこか私たちの知る男性とは違う、それもまた魅力だと思います。 男性の顔は縁のない方のものを画面越しなどでしか見たことがありませんからよく分かりません。 映画やテレビ、ウェブでもはやされている方々は特別に容姿の優れている……よく知らない方だということを理解していますわ。 その上で私は、直人様は素敵だと思います。 分け隔てなく女性を相手に出来て、急にこの学園に来させられたにもかかわらず、教室にまで来て……懸命に知識を吸収なさつて。 そのような直人様と、事情がお有りとのことで選ばれた私たちが……このようにして急に夫婦になることができました。 私たちにとって、これ以上に幸せなことはないと思いますわ」

「沙映も沙映もー！」

「……………ありがとう、ふたりとも」

晴代の、凜とした顔つきで真っ正面から真っ正面な言葉で語ってくる想いが気恥ずかしい。

けど、俺がまだ慣れていないだけでこの世界の女性にとつては……そう、シンデレラみたいにいきなり、どんな男にでも選ばれるっていうのはこれだけ嬉しいことなんだっていうのがひしひしと感じられる。

……きつと沙映も……そう、なんだと……思う。

……………。

……ま、まあ、この子は普段はきちんと話せるから。

主に好きなこととかについてだけで、難しい話とかになるとこうして晴代に丸投げしていた気もするけど。

「ええ、よかったですねお三方！ つまりはひと段落ということですよ。 直人は身の安全と今後の生活に目処が立ってほっとしたでしょうし、晴代さんと沙映さんは無事直人選ばれてしあわせになつて。 ……ふう、昨日いろいろがんばった甲斐がありましたっ」

「……………がんばった？ いや、確かに昨日は改めて俺の常識についてとか世話してもらったし、……あと、夜も迷惑かけたりしたけど。 あと、ふたりを呼んでくれたりもしたけど」

「もうっ、直人は本当に箱入り息子さんですねえ。 純情過ぎると言いますか、ピュア……あ、同じですね、じゃあ純真すぎるといいいますか」

「……………。。 つまり

？」

「つまりですね？」

——昨日の夜、その前の夜に寝

不足で昨日も疲れ切っていたはずなのに夜中に目を覚まして……ま、あれは事故ではありましたが、結果としてコーンを抑えられなくなるほどになったのって、不思議ですよ？ いくら今までが今までだったとは言え」

ずい、と顔を近づけてくる早咲に向けて、手のひらでその頬を押し

返す。

ひどいですー、とか言うけど、どう考えてもコイツが酷い気がするしな。

……「親友」と自称するんだったら、これくらい雑に扱ってもいいだろう。

「でー、その原因はですね？　僕が昨日、直人の分の食事とかジュースとかだけにたっぷり、いろいろ込めて盛っていたおかげですもん。そろそろ限界かなーとか思っていましたし、もういい加減くついたらつてもやもやの限界でした。で、そうなるの見越して先生たちや晴代さんたちに、直人が限界来そうになる雰囲気になったらいつでもできるように手配しておいたのも僕ですし？」

「………待て」

「はい」

………。

盛った？

手配？

………なんだか、それってまるで。

「早咲。お前が、全部仕組んで」

「やですねえ、ちゃんと最後に直人の意志は確認したじゃないですか。

ねえ？　このふたりとえつ、あ、ちよつと待ってください、暴力反対ですつ……ふうつ、結ばれてもいいのかつて。　まあ直人……の

育った環境的には問題無いとは思っていましたけど、念のために」

………そうだ。

早咲が、先生たちに連絡をしたのだから、このふたりを呼んだのだから、あまりにも手際が良すぎた気がする。

「………思い出した。　早咲」

「はい？」

こてん、と……いつもの笑顔、今となっては何かを腹に抱えているとしか思えないほけつとした笑顔で聞いてくる早咲に対して、俺はひとつ、とても重要なことを尋ねる。

「………つまり、お前。　あのときのつて………ぜんぶ、

演技だったのか？ その、風呂……洗面所での、アレは」

「もちろんですっ♥」

と……事情が分からないから不思議な顔をしている晴代たちを尻目に、早咲は。

俺が、こうして女子と……女子たちと結ばれて、しかも早咲の本性的の中の本性を知らなかったら、昨日の夜までの俺だったらまずまぢが
いなく惚れそうなくらいのとびきりの笑顔と声で……もう1回こて
ん、と首をかしげた。

35話 早咲の、もうひとつの秘密

思えば、あのときの……その、風呂場、じゃなくて洗面所での早咲は妙にしおらしくておとなしかった。

普段のこいつなら、例え押し倒された形になっても平気な顔をして重いからさっさとどいてください……とか、そんな感じでさらっと流すはずなのに、あんなにもしつこく話を続けてきて。

あとは、俺と……その、する、だとか、男女だとか、そんな話ばかりしていたし。

「あれはぜんぶ、演技です♥ あ、いえ、話していた内容自体は嘘じゃないですけど。 いやー、僕ってほら、いつもいろんな女の子を手籠めにして歩いているでしょう？ ですのであんな程度の演技は簡単なものです。 だってそもそもですね？ 僕、女の子とするのは大好きですけど……間違っても男子とする趣味はないですもん」

「……話はよく分かりませんが、早咲様はまずまちがいなくそのようなお方ですわね」

「ねー、超有名だもんねー。 主席さんじゃなかったら先生たちから毎日怒られてそう。 や、学園から追い出されてるかもね」

……そんなにも有名なのか、コイツのこれは。

……………

だろうな。

「あ、誤解がないようにふたりにも説明しておきますけど、ちよつとした事故がありました……僕がお風呂から上がったところにはぼつたりと直人と出くわしちやっただですよ。 「あの電話」をする10分前くらいですかね？ それも、僕はすっぱだから。 それで、直人が転びそうになったので支えようとして転んで、押し倒された形になったんです。 で、ですけど……あれだけは僕の予定外です。 だってまさか直人が真夜中にお風呂場に……トイレのあと手を洗おうとして入ってくるだなんて、思ってもみませんでしたし……あー、可能性はゼロじゃなかったのに、鍵掛けるの忘れた僕が悪いんですけどね」

「……まあ、さすがにそこまで計算ずくだったなら、俺、お前と少し距離取るかもな」

「そこまでは腹黒くないのでご安心くださいっ」

「腹黒いのは認めるのか」

「週にふたりは新しい子を口説いて連れ込むような僕に今さらですか？」

「……週に、おふたりも、新しい………はあ、それで主席なのですか」

「はえー、よくお勉強とか運動とかする時間あるねー」

「で。 たまたま僕が押し倒される形になって、直人がちようどいい具合にお薬で興奮しすぎる感じになりましたですね？ まー、これも僕の体は一応は女の子ですから。 で、せっかくなので、僕に「入れる」かどうかって話にまで持ち込んだんです。 けど、それはあのときにそのままふたりに引き継ごうって思いついたからでして。

……… 実際に直人が入れるって言う選択をしようとしてきたら、あるとき直人が言ったみたいに蹴り上げてでも止めさせて、結局はふたりを呼んで代わりを頼む予定でしたし？ あ、そのときはもちろん有無を言わずに問答無用でベッドに放り込んで、ですね」

「………

「………

「………

「………

あれ？」

部屋が沈黙に包まれる。

晴代は……恐らくは事情を察して、俺と同じくらいに頭を抱えて。

沙映は話にいまいちついていけない上につまらないみたいで、きよろきよると部屋の中を見回して。

………で、肝心の早咲は、不思議そうな顔をして俺らを見ている。

「………はあ——………、つまり、何だ？ 俺は初めっからお前に踊らされ

ていたのか。 いや、お前のことだ、嘘はついてないだろうけど、だからこそあの風呂場での会話まで、そうして焚きつけたのか。

「……いや、勢いをもらえたこと自体には感謝はしているけどさ」

「いえ、だってー、考えてみてくださいよ直人。 あ、ふたりは直人のフシギな価値観で、つてことでもお願いしますね? ……どう考えても

女の子と、最低でもひとりとすぐに仲良くなってさっさと結婚しておかないと絶対にひどい目に遭うつて分かりきってましたよね?

それも、わりと初めのころから。 だって直人は馬鹿じゃないんですから。 ま、ちょっと奥手すぎるかなとは思っていましたが?

「……で、そんなことをしてる内に実際に襲われかけて、もう少して手の届かないところに連れて行かれそうで?」

「……分かっていきますよね? そんな状態なのに、それからもまだうじうじしていたんですもん。 いくらメンタルのためだからーつて

面倒見ていましたけど、途中から結構治ってきていましたし、それなのにまだまだ近づく気配すらないんですもん。 それどころか、とり

あえずもう少し経ってから……とか考えていたんじゃないですか? そりゃ発破も掛けたくなりませよ、なんですか、恋愛もののマンガで

何十巻もくつつかない主人公たちみたいなあの感じは」

「いや、それは……分かって、ただだけ」

「ですからー、こちらの……普通の常識って言うものを最初に説明されたときから分かってはいましたよね? 男である以上、選択肢なん

てほとんどなかったんだって。 ふつうはその歳じゃ10人以上のお嫁さんたちがいるんですって。 ……だから

ら先生たちに沙映さんたちを推薦してお嫁さん候補にして、ずっと一緒にして、その気になれば放課後の流れで一緒に夜もー、つていうのが

できるようにしていたのに、そうすることもなくて。 明らかにふたりが好みのタイプだって、傍目から見ても丸わかりだったのに

「……も——……」

ふう、と、これだから元童貞は……って、ぼそりとつぶやかれた。

同時に、卒業できたのは誰のおかげだと思ってるんですか、とも。

……。
いや、理屈は分かっていたんだ。だけ。

……いくらなんでも常識が違う世界に突然来て、母さんが母さんじゃなくなつて、家族も知り合いも誰ひとりいない状態で、彼女どころか仲のいい女子すらできたことのない俺にさっさと好みの女子を連れ込むだなんて芸当、できっこないって。

だからあれだけさんざんに迷っていたんだろが。

———
つて言いたいけど、さすがにふたりがいるからこらえるしかない。

「はあ、いいですねえ……ほんと、うらやましいです。僕が直人の立場だったら……そうですね、とりあえずで結婚とかしてない女の子の写真を見せてもらって実際に何人かと会わせてくださいってお願いしてですね、とりあえずでいい感じの子3人くらいを食べてみてですね、いいなつて思った子は僕の部屋にキープしつつ毎日何人かずつをお相手していつて、男としての……あ、例えですからね？ 男としての義務を、楽しみを、全力で楽しむのに……なのに!! 直人はもう!! ほんとうにもう!! こなくそつて感じでなーんにもしていないんですもん、そりゃいくら温厚な僕だつて、もつたいなさすぎていらいられもしますよ!! ……ええ!! この、意気地と甲斐性と根性のない直人が悪いんですっ! 僕は何も悪くなんてありませんっ!!」

「んーと、沙映、よく分からないけど? でもね? ……さすがにふう? うん、お兄ちゃんと似た雰囲気だしねえ直人、だから多分ふうだね、ふつう。 そんなふつうな男の子の直人くんと、なんで男の子に産まれなかったのがフシギだねーってウワサされてる早咲ちゃんとは比べるのはヘンだと思うなー。 だらしないー、とか、ふけっ、とか、何十股ー、とか、よくトイレで聞かし。 あ、あとねあどね? 直人は……その。 私たちのこと、よく知ろうとしてがんばってくれてたの、分かったから。 そんなに急がなくてもいいんじゃないかなーって沙映は思ってたよ? っていうかー、ここに来る

までお家に閉じ込められてたんでしょ？ それなのに沙映たちといきなり……その、ふーふになれって言うの、大変だと思うな」

「そうですね……はあ……。沙映様のおっしゃるとおりです。それに、昨日の騒ぎは、また早咲様のもですよね？」

「……………騒ぎ？」

「ええ、直人様。女子寮だけでなく学園全体で……それはそれともう大騒ぎだったのですわ……私もひやっとした場面もありましたし。

その発端が、たったひとりの女子を巡る何人もの女子の刃物沙汰でして。なので、安全のために関係のない生徒は自室に鍵を掛けて籠もるようについてアナウンス、が……………あら？」

「早咲」

「はい」

名前を呼んだときにはソファから床に、そして正座をして見上げてきていた早咲。

……………こいつ、正座し慣れてるな？

「……………昨日、俺の部屋に来たときに言っていたよな？ まずいことになったから避難させてくれて。あれ、嘘じゃなかったんだな」

「ひどいですよー、失礼ですつ。僕、嘘はつかない主義ですもん。

……………ただ少し、すこーし情報を省いたり意識を逸らしたりして秘密にしたいことを秘密にしたままなだけですつ」

「……………お前なあ。いつか刺されても知らないぞ？ 昨日だって刃物………だったんだろ？」

刃物を持った女子………何人かは分からないけど、少なくとも刃物が出てくる程度には修羅場になっていただろう昨日の学園。

……………想像もつかないような修羅場だったんだろうなあ……………。

「刺さつ!? ……それはいくら何でもひどいですよ、直人！……………あの、直人

? 少し内緒の………あ、これは大切なことですのでやきもちとか焼かないでくださいね？ ふたりとも。で、直人、耳を」

「……………今度は何だ？」

少し失礼、と席を立った晴代と、スマホをじーつと見ている沙映を見ながら仕方なく早咲に近づく。

内緒の話？

.....

.....いくらこいつでも、昨日の夜のことを聞いてくるようなデリカシーのないことなんて.....ああいや、こいつ、さっき初っ端から聞いてきたっけ。

なら、話って？

「.....あのですね？ 直人。 僕、前世で「死んで」生まれ変わったって言ったじゃないですか」

「まあ、死ななきや生まれ変わらないからな。 けど、今くらいの歳って結構早いよな。 事故とかだったのか？」

「いえ、そういうことではなく.....もうそういうことでいいです。

あと歳のこととも今はいいです。 で、ですね？ その、肝心の死因、なんですけどお.....、その。 女の子、それもふたりから同時にこう.....ぐさーつと、ぐさぐさぐさぐさつて、意識が無くなつていくまで刺されたからなんですよ。 失血死、つてやつなんですかねえ？ おなかとか胸とかふとももとか。 そりゃーもーえぐーい感じでしたよ。 やー、朝っぱらからごめんなさいねえ」

「.....

普段の早咲の言動を振り返ってみる。

そして、昨日騒ぎになっていたって言う聞いたばかりのことも考えてみる。

..... ああ、この女好きならそんな末路辿っても、

何もおかしくないな。

36話 修羅場

「……という訳ですので、できたら僕の前で刺すとか刺されるとか包丁とかみたいなワードは避けてほしいなあって思う次第です」

「自業自得じゃないか……」

「でも、それは分かっているんですけど、えと、さすがに最期の光景と言いますか痛みとか感覚とかがそれなので……わりと、いえ、かなりのトラウマつてもんじゃないものなので……はい、お願いします。この通りです」

「分かったよ、俺だって他人の嫌がることをしたいわけじゃないしな」
ほっ、とした表情でソファに座り直す早咲。

……。

……そうか、こいつ、死んだときの記憶まであるんだもんな。

たぶんそれまでに相当やらかして思い通りの人生だったんだろうけど……まあ、こつちでも実際に刃物沙汰になったらしいし、案外言うほどには気にしていないかもしれないな。

あえて言う必要もないとは思うけど。

「ふう……あ、ないしよ話おしまいです」

「んー」

晴代はどこかへ消えたまま、沙映はスマホを……指の動き的にチャットとかしているんだろうか、俺たちにはまったく興味がない様子。

……一応は……えっと、よ、……嫁。

……奥さん、なのに……とは思うけど、急になったわけだし、なにより沙映はこういう性格だからな。

もう少し付き合っていたら変わってくるんだろうか？

「で、ですね？」

「おう」

「あの子たちもバカじゃありませんし、ひと晩経っていますし、きっと先生方に絞られたでしょうから落ち着いているでしょう。ですか

らきつと安心ですつ。 冷静になってくれたら、いくら僕から「君しかいないんだ」ー、みたいな薄っぺらくて聞き慣れたセリフを聞かされたからって、それがただの口説き文句だって分かるでしょうから本気じゃなかったって分かって」

ふーん。 ふん。 へ

え。 そーなの、昨日のってそう言うことだったの、早咲ちゃん」

背筋が凍るって言うのはこういう感覚なのか、っていうくらい恐ろしい声が聞こえる。

いつものように少しこどもっぽい発音と話し方で、別に声が低くなったりもしていないのに、むしろ可愛い部類の声のはずなのに……それが、恐ろしく感じる。

ゆっくりと顔を……上げる必要もなく目に飛び込んできたのは、ひなただった。

……髪の毛はぼさぼさ、目の下にはクマができていて明らかに疲れ切っていて、制服もなんだか薄汚れている。

そんな、やつれた感じのひなだが……そこに立っていた。
ちっこいののに、ちっこくない。

むしろ大きい。
そう感じる。

「あれ。 ……………ひなた、ちゃん」

そう言えばコイツ、ひなたのことそのままだったりちゃん付けしたりするよなー、って思ってみると……また床に降りて綺麗な正座をしてひなたを見上げる形になっている早咲。

……………

ああ、慣れているのか。
慣れているんだろうな。

ってことは、ひなたって……いや、まさか。
いや、でもこのふたりっていつも一緒だし。

なにより、この……叱る体勢と叱られる体勢に貫禄がある。

……てことは、ひなたも早咲の……えっと、恋人のひとり……なの
か？

「ねえ。聞いて？」

「はい」

「早咲ちゃんのおかげでね？ ひなたたち、とつても疲れたの。が
んばったの。走り回ったの。振り回されたの。分かる？」

「はい」

「そう？ほんと？ とつても大変だったんだって、どれだけ分かっ
てるの？」

「あ、あの、ひなた、ちゃん」

あらあら、と……ああ、晴代がひなたを玄関から連れて来たのか
……なんだか楽しそうな顔をしている晴代。

……もしかして、修羅場とか好きなタイプだったり？

さりげなくスマホとか取り出して構えているし。

……

そういうことも含めて何も知らないまま……その、して、恋人通り
越して夫婦になったっていう事実にもまた心が抉られる。

いくらこの世界の常識だって言っても、やっぱりいきなりは……
なあ。

まあ、もう今さらなんだけど。

「それにね？」

——ちゃんとひなたの目、見て？

早咲ちゃん」

「ひゅ、はいっ！」

こわい。

女子は本気で怒らせちゃいけないな。

母さんも怒りやすい性格だったけど、逆に普段怒らない子が怒る
……方が、こわい気がする。

……

……ってことは、晴代とか沙映も、怒るとこうしてギャップで余計
に……。

「見てるね？　もう逸らさないでね？　いい？　………
ん、でね？　ひなたなんか特にね？　最初の、いちばん大変なときに
ね？　女の子たちから包丁とかカッターとか持って追いかけて回され
たんだよ？　死ぬかもってなんつかいもなんつかいもなんつかいも
思ってたんだよ？　ねえ、本当に分かるの？　早咲ちゃん。　ひなた、
早咲ちゃんの「正妻」だからって、それはもうね？　他の子たちや先
生に助けてもらわなかったらひなた、刺されてたよ？　死んでたかも
しれないんだよ？　そのせいで昨日なんかぜんぜん眠れなかったん
だよ？　こんなに疲れてるのに、うとうとしたらあの声とか刃物が風
を切る音とか飛んでくる音とかが聞こえる気がして目が覚めらやつ
て、ローズちゃんによしよししてもらわないと大変だったの。

ねえ、分かる？　分かる？　早咲ちゃん。　ひなた、大変だったの」
「はい」

「ひなたがいけないんだって。　ひなたがいちばん最初に早咲ちゃん
をゆーわくして、だから何人も、何十人も、何百人もの女の子に手を
出すようになって……だからひなたを殺せばその子たちが早咲ちゃ
んにすつごく愛してもらえるんだって言われながら、叫ばれなが
ら、振り返るのもこわいままにずーっと逃げたの」

「はい」
うん、そりゃこわいよな。

誰だって、コイツのせいでそんな目に遭ったら怒る。
たといひなたでも。

いや、むしろ周りの人がみんな自分よりも背が高いつて状況なら、
余計に。

………

………そういえば、表情がないのもまたこわいんだな。

ちつこい………小学生にしか見えない顔つきなのに。

「分かった？」

「はい」

「ほんとに？」

「はい」

「じゃあこれからしばらく早咲ちゃんはひなたのどれい。　いいよね？」

「はい……………、え？」

「うん、じゃあいいやー！」

ぱあっと、……………いきなり笑顔に、見慣れた表情に戻るひなた。

……………ああ、この子も小さく見えるけど女子なんだな……………。

「で、早咲ちゃんはひなたに逆らえないから言うこと聞くんだよね？」

「あの、ひなた、ちゃん、その、いつまで、……………あ、はい、聞きます」

「修羅場修羅場ー！」

「ここから沙映様。　こういうものは、少し離れたところで楽しむも

のですよ？　直人様も、こちらへ如何です？」

「あ、……………うん、そうするよ」

晴代が……………いつの間に、っていう感じでキッチンにいて、食器とかを用意している。

……………あ、スマホ、カメラがちょうどふたりに向かうようにして立てかけてある。

……………晴代……………。

「ちよ、ちよつと待ってくださいよ直人!?　僕、君のために結構」

「早咲ちゃん？　————ひなたのことだけ見てなきやダメ

だよー。」

「はい!!」

俺に向かって振り向いてきたと思っただけならすぐに戻る早咲を見下しつつ、ソファから離れる。

……………ひなたの怒りの矛先が俺じゃないって分かっている、やっぱり正面にいますとこう……………来るものがあるからな。

修羅場からは避難しておかないと。

「ふう。　でね？　早咲ちゃん。　直人くんのことはいいの。　先生

たち、それについてはがんばったねって褒めてたの。　直人くんのこと

とはいいの。　だけどね？　……………それ以外はね、ひなたたち、

ずうつとあの女の子たちのことで怒ってるの。　ひなたも、先生たち

も、取り押さえるのに協力してくれた運動部の先輩の人たちとかも。何十人なんだろうねー、ひなた分かんないや。けどね？ 怒ってるの。みんな。ね？ ねえ？ 分かる？ みんな、ほとんど寝ないでいるの。みんなぴりぴりしてるの」

「あ、あの」

「じゃ、行こっか！」

部屋の端っこを歩きつつ、真横から見えたひなたは……とびきりの笑顔。

「女の子の心も体も好き放題して止められなくて、いくら怒られても次の日にはもう忘れてる早咲ちゃん？ 今もお気に入りが20人以上いる早咲ちゃん？ ……ひなたたちみたいに昔っから一緒なのに、それなのにまだ飽きない早咲ちゃん？ ひなたね、今回は本当に怒ってるの。毎回、こういうことが起きるたびにこわい思いしたり謝りに行ったりさせられるの、ひなたたちなの。だから、ね？」

——立って、早

咲ちゃん」

「え、あの……はい……あ、ごめんなさい、足がしびれ」

「立って」

「は、い……」

ぶるぶると、子鹿のようになつていう表現がぴったりの早咲

「ひなたとおてて、繋いで？ 離したら——もっと、

怒るよ？」

「はい……」

前屈みになりつつ、1歩1歩をふんばるようにして……正座のあとってキツイもん……ひなたの手を握り、ぱっと握り替えされる早咲。

ちら、つとこつちを振り返ってくる早咲。

……見なかったことにして、さっさと晴代と沙映が席について待っていたテーブルへ向かい、朝食を摂ることにする。

「……………すうっ。みんなー！ 早咲ちゃんが迷惑かけちゃってごめんねー！ 新婚さんなのに、ごめんねー！ みんな仲良くしてねー

！ おめでとーっ！

「新婚……はう」

「新婚？ ……あ、沙映たちそうだったけ」

「……………いいよ、ひなたたちは大変だったんだろ？」

「うん、まーねっ。 直人くんも大変だったんでしょ？ ……あとで早咲ちゃんに問い詰めて先生に追加で怒ってもらうから、気にしないで？」

……うん。

いつものひなただ。

声も、表情も。

……だけど、きつとまだ怒っているんだろ？ というのは察しがつく。

「あ。 あのね、直人くんたち、あとで先生たちのところに来て欲しいって言ってたから……あ、早咲ちゃんのことがあるから夕方くらいがいいのかな？ 来てねって、お願いって！ いつものところに来てって！」

「分かった。 ありがとう、ひなた」

「いいよー。 ……さ？ 早咲ちゃん？ とりあえず美奈子先生がすつつごく怒ってるから、怒られに行こう？ 大丈夫、ひなたもおて繋いであげるから」

「え、……………あ、はい」

「じゃ、あいさつだけして出よっか。 お邪魔しましたー」

「え、もう？ ……あ、はい……………それでは直人、あ、いや、直人さんに沙映さんに晴代さん、また、です……………」

……………あと、できたらいいのであとで助けてくださいー……………」

初めて聞く、ものすごく情けない声が早咲がいると思しき場所から聞こえてきて……………靴を履き、ドアを開けて閉め、オートロックが掛かる音が聞こえ。

部屋は、静かになった。

「……………」
「……………」
「……………」
しん、と。

……早咲は、アイツはやっぱり……生前は男だったわけだし、そりやあもう死ぬ前もろくでもない扱いをされてたんだろうし、今世も今世でやっぱり……あのひなたがあそこまでなるほどにやらかし続けてるんだらうなっていうのが分かる。

「……沙映、おなか空いた」

「……そうですわね、朝を頂きましょうか。それではおふたりとも、今から軽く温めますので召し上がりたいものを私に……」

……………。

うん、どうでもいいか。

とにかく俺たちは……昨日、ずっと運動……いや、起き続けていたから寝不足だしおなかものすぐく空いているんだ。

まずは朝食を食べて、順番にシャワー浴びて……ひと眠りしよう。

37話 久しぶりのローズ先生と。

「……直人様、沙映様、そろそろ起きられた方がよろしいかと」

「ふあ？」

「……ん」

……………。

俺は……ああ、そうだった。

早咲がひなたに連れて行かれたあとに朝を食べてシャワーですつきりしてもういちど寝る……普通の睡眠の方をだ、したんだった。

時間は……もう昼か。

けど、別に遅いわけじゃない。

……ずいぶん寝た気がするんだけど、案外経っていないんだな。

まあ、カーテンを閉めているとは言え今日は晴れているし仕方ないのかもしれない。

それに、寝不足分の時間を考えたらむしろちょうどいいくらいだろうしな。

「……あー、眠ーい。あとおまた痛ーい。あれ、なんか」

「……………はしたないですよ、沙映様。あら、それは」

「……………俺、カーテン開けてくるよ」

眠かったのは俺も同じだったんだけど、急に気ますぐなって逃げるようにしてベッドから……左右を挟まれているから、足元の方へ滑るようにして降りて絨毯の上を歩く。

無駄に広い寝室の無駄に大きいこのカーテンは重い。

けど、ここからの眺めは……周りにあったはずの家がなく、学校を囲んでいる高いフェンスよりも上だから遠くまで見通せるものになっっている。

ぼつぼつと小さいマンションみたいなものがある以外には、学校の周りの家がほとんど無いっていうので、改めて俺が違う世界にいるんだって……今までのこともあって、ようやくすっとんと落ちる感覚があった。

「晴代ー、晴代ちゃん、ねー、沙映おなか空いたー」

「……そうですね。先ほど食べたばかりですが時間も時間ですし、いただきますしよるか」

振り返ると、朝とは違って目のやりどころに困らない服装、制服の上着を取ってシャツとスカートな格好のふたりがいる。

……………。

うん。

時間が経って、ひと眠りして。

俺は、ようやくに馴染んできたんだな。

この、とんでもな世界に。

○

「……それにしてもさー、早咲ちゃんってほんつとーにダメダメさんなんだねえ。沙映、ウワサには聞いてたけどああして見るのは初めてだったかもー」

「……そうだな。俺も、普段とのギャップに驚いたよ」

お昼。

晴代が頼んでくれた、どこぞのシェフが作った感じのおいしそうな料理を食べているうちに、とうとう早咲の話題になった。

……お昼にフレンチはどうかって思うけど、沙映が同じものが食べたいつて言って選んだ「軽めの」コースだからしょうがない。

……………これ、外で食べたらいくらなんだろうな。

俺、無一文なんだけど……っていうのはたぶん、男の特権ってやつなんだろう。

なにか言われたらそのときに考えよう。

美奈子さんに泣きつくっていう手段も残されているしな。

「沙映、早咲ちゃん……あーもー、野乃さんって呼んでたときはぜんぜん平気だったけど、やっぱり同じ感じの名前って困るー！ ……あ、で、教室でおはなししたときとかとはぜんぜん違ったけど、ひなた

ちゃんがあそこまで怒ってたんだもんね。　　いったい何人の女の子に手、出してらんだらうね——……んむ」

「……………少なくとも100人以上、だそうですね。お友だちの方たちからの噂では、そのようになっていると。　　それも、ねんごろ……よく親しくしている方だけで、ですので、実際にはもつとでしようね。　　中学の頃の方や学外の方も含めてしまいますと……………」

「……………」

お上品すぎる味は薄い。

軽く塩を振ってごまかそう。

「そりゃーさー、早咲ちゃんの言ってたことがほんとうなら直人のお嫁さんに沙映たちを選んできたのも、こうして同じ部屋で寝て起きて食べるようになったのも早咲ちゃんのおかげだけさー。

……………なんかヤダなあ。　　ぼっちい感じするー」

「……………同感です……………。　　いえ、感謝はしてもし切れないのですけれど、その。　　せめて、先ほどの騒ぎがなければ、早咲様のセクハラまがい……………いえ、セクハラそのものな話し方さえ無ければ。　　あ、あの修羅

場はとて素晴らしいものでしたわ！　　あの早咲様とひなた様があのように、普段とは真逆になるだなんて！　　特に、愛い見た目な上にあの甘えん坊なのが可愛らしいひなたさんが！」

すつ、と晴代が取り出したスマホをで再生されるのは、正座している早咲とそれを見下すひなたの場面。

ひなたが部屋に入って来て少ししたところから始まり……………やがては立ち上がらせられ、足のしびれを我慢しつつ腕を引つ張られながら歩いて行く早咲の姿が……………それはもうばっちりと、あのとときの声も含めて残されてしまっている。

……………こういうのはきつと、女子同士で……………と
　　どうか女子しかいないしなあ……………広まっていくんだらうな。

隣れには思うけど同情は出来ない気がする。

「けれど、あれほどとは。　　学園中が大騒ぎになるほどにいろいろな方と……………その、恋仲になつたりしていたのですねえ。　　しかし、聞け

ば中学以前からあのようだと言うことですし、1度痛い目を見ないと
いけなかったのでしょうか。それで早咲様が更生……出来るのか
どうかは分かりませんが、せめて落ち着いてくだされば。え
え、またあのような騒ぎは楽し……心苦しいですし、なによりも学園
の主席、来年以降にはきつと生徒会でも活躍されるのでしょうかし、そ
のような方が……あのようでは、他の方たちに示しがつきませんも
の」

「生徒会……そうか、主席で入ったんだもんな」

「ええ。この前の試験も学年1位でしたし、きつと体育祭などでも
大活躍なのだ……中学のときの噂から伺っております。品行方
正、という大きな課題さえクリアすればまずまちがいなく選ばれるで
しょうね。……それにしても、ご自分のせいで大変なことになった
らさつさと逃げ出されて他の方が絶対に入って来られないこちらの
建物、それも直人様のお部屋に逃げ込んでいらつしやっただなんて
……修羅場もお手の物、なのでしょうか」
「まるで怒られ慣れてることもみたいだねえ」
「……………」

沙映が言ったそのままなんだろうな。

精神年齢っていうのがどのくらいなのかは知らないけど、女に見境
のない、性欲に忠実過ぎる中学生。

アイツにはそう言う表現がしっくり来る。

……………。

精神年齢。

単純に加算されて俺たちの歳の倍くらいなのか……肉体的には俺
たちと同じ年だし、あくまでも前世って言う知識があるだけの高校1
年生っていう感じなのか。

それは分からない。
けど。

バカは死ななきや治らない……どっかで聞いたセリフだけど、実際
には死んでも治らないんだからアイツのアレは本性、いや、本質って
いうものなんだろうな。

魂って言うものがあるんだったら、きつと魂からのそういうものな
んだらう。

……もはや依存のレベルだし、専門のところでカウンセリング受け
た方がいいとは思うけど。

……………。

俺の友だちには……なにせ、そういうグループとは縁がなかったか
らな、いなかったけど……まあ、悪いやつじゃないよな。

むしろいいヤツでもあるくらいだ。

……………あの女癖さえ、なければ。

「ねー、沙映これ嫌いだから誰か食べてー」

「あの、こちらは滅多にない素材のものなので……」

「家のみんなとよく行くところまでこれ出てくるから知ってるー。で
もキライなの」

「……では、代わりにこちらを差し上げますわ」

……………。

目の前の、俺とこのふたりとの関係を……ものすごく強引だったけ
ど、作りだしてくれたのは……いや、初めからそうしようとしてくれ
ていたのは確かに早咲だ。

まあ、昨日の思い切り騙されたし、感謝半分怒り半分だけど……
でも、決心はついた。

俺は、この世界を——。

○

「ゴブサタしてますー直人さんー？ やー、よかったですねー、ご無事
でー」

「おはようございます……あ、いや、こんにちは、ジャーヴィ、ローズ
先生」

「はいー、そっちで呼んでもらえて嬉しいですよー。直人さんと最
近ほとんどおはなしできていませんでしたがお元気そうだとでも
グッドですー」

いつもの部屋。

いつもの……校長室みたいな豪華すぎる部屋、だけどようやく慣れてきた柔らかいソファに座って、たったの数日ぶり、だけど久しぶりに感じるローズ先生から出されたお茶を飲む。

……もつとも、俺にはこれがどんな銘柄かだなんて分からないけど。

コップとお皿……ソーサーっていうんだっけ……で上品に飲むローズ先生は、やっぱり美しいっていう感じの、俺たちが想像する、いわゆる金髪美人。

見た目の雰囲気的には晴代の将来で、話し方的には沙映……や、ひなただな。

いや、ローズ先生にとつては外国語なんだし、それは失礼か？

アクセントはともかく、話し方の癖は……外国の人だし、何かのアニメのキャラクターの話し方をそのまま覚えてしまったのかもしれない。

「綾小路さんと御園さん……あー、おふたりは……ん、ハルヨさんとサエさんでしたねー、あのおふたりからの連絡で大体は聞いてますよー？ とつても仲良くしているらしいですねー、羨ましいですねー」

「……連絡、ですか？」

「あ、そうですー。私が直人さんの護衛とカウンセリングをしているのでー。美奈子が保護者……んー、後見人？ ちよつとゴイが出てきませんけど、そういう感じのお仕事とかで忙しいので、私、がんばりましたっ。がんばって日本国のセントラルにこそこそして、直人さんのいい感じーな経歴、あ、あとコセキですね！ 日本国のお役人さんでしたらまず分からないように作り上げてきましたのでもう表に出てもだいじよぶです。パスポートも用意してますよ？」

「……ありがとうございます」

ローズ先生。

確か、最初の頃にもちらつとそんなことを言っていたけど……まさか経歴とか戸籍まで捏造できるなんて。

あの兵士さんたちの指揮をしているのといい、その情報スキルと言
い……この人は一体なんだろうか。

「なのでー、直人さんはめでたく美奈子の弟さん……そこは上手ーく
操作しまして、血縁関係を複雑にしましたので義理の弟さんかつ息子
さんってなってますよー？ 美奈子は息子さんとして扱いたいわって
言ってますしー？ もちろん、シュツセー……出生記録とかー、男
の子が産まれたらまず組まれるでしょー縁談とかもないですしー、学
校どころか監視カメラとかにもぜんぜん映っていなかったマボロシ
の存在ですので、そこはうまーく、悪ーい親戚の方が悪ーいことをし
て美奈子から直人さんを取り上げて親戚の家に悪ーいことをされな
がら閉じ込められていたですー、っていうカバーストーリーもばっち
りですつ。ま、その親戚すらいらないないのでゴーストさんです
けどねー？ ですがこれで親権は美奈子つ、正真正銘のお母さんと
……息子さんでいいですねー、っていうことにしましたしー、あ、美
奈子がすつごく喜んでいましたー、直人さんがこれからずっと息子さ
んなら嬉しいなー、つて。で、架空のチョウショとかにこの歳まで
ひどーいめに遭ってきたっていうのをこれでもかーつて書いてきま
したのでー、あんまり突っ込んで聞かれなくなっただんじやないかって
思いますよー？ やー、その手の文書じよーずな部下の子に書いても
らったんですけど私でもドンビキしましたしー？ 文才あります
ねー。なのできつと同じはずですよー、それを目にします日本国の
お役人さんとかマスコミさんとかー」

「……あの。俺、口下手なので上手く言えないですけど……ほんと
う、ありがとうございます」

「ノープロブレムですつ。生徒を守るのは先生の責任ですしー、な
により私はこの学園……あ、直人さんには説明しましたけどたぶん忘
れてますのでもつかいえますねー。この学園、日本国の中のいい感じ
の立地を借りていますけどー、紛れもなくひとつの国に近いものでは
ので。ですのー、私はこの学園……国家？ の defence と
offence、あ、えーとですね、つまりは防衛部門でー、あとは
サイバーセキュリティの責任者っていうものなんですー。直人

さんに馴染み深いかもな表現ですとぼーえー大臣みたいなものですかねー？ あー、ちよつと違いますかもですね？ ……国としての規模はちびっこいものですけど」

「……………あの。ローズ先生って、そこまですごい人……………方、だったんですか？」

「ですよー？ これでも飛び級の天才としてステイツでいろいろお世話になってきましたしー、今でもあっちこっちから来てちようだい？ って言われてますからねー。 よくお仕事もお願いされてますしー。 ですが、ふだんはこちですねー。 ここには美奈子がいますし……………あとは、ここには「ダーリン」がいますから」

そうか、美奈子さんと、……………ん？
ダーリン？

……………あ、あ、そういう

えばローズ先生って既婚者だったっけ。

そのお相手がいるっていうけど……………でも、それなら男のはず。

なら、カウンセリング……………主に襲われたときとかの、にはその人の方がよかったはずじゃ？

それに、そんな……………男の先生だなんて、まだ見かけたこともない気がするけど。

……………。

ああ、外……………この学園の外から通ってきてるに決まっているんだから、その旦那さんも外の、ローズ先生の家とかに住んでいるんだろう。

いずれ会ってみたい気がするけど……………ローズ先生と同じく外国の人で言葉が通じなかったらどうしよう。

38話 最後の真実

「ま、ダーリンのことは秘密にしておいてって頼まれてましたので、あとちよつとだけ後回しですなー」

と、両手をぽんつと合わせるローズ先生。

「そう言うことですのでおめでとですつ、直人さん。これであなたはハルヨさんとサエさん、おふたりと正式に結婚した夫婦の夫として登録されましたので、今日にも……えーと、あ、これですね、綾小路家と御園家は日本国のビッグなファミリーメンバーでもありますしー、榎本家……美奈子はふつうの人ですけどそれでも家族には変わりはないのでー。直人さんのこと、ある程度いじくった過去と一緒に世間に公表しまして結婚相手になりたいって人がわんさか来ましても？ まずはそのちらから許可を得ませんと直人さんと直接に会うこともできませんので……これからはもう実質自由ですよー」

「あ……そうですよね、ローズ先生がそうやって俺のこと、「この世界に元からいた人間」ってことにしてくれましたから」

「ですー、そして保護者は美奈子とー、私やこの学園だけだったのが日本国の旧いお家ふたつも加わりますからねー。やー、さつき連絡したときはびつくらこかれてましたけど、ほんとだってハルヨさんたちにも電話してもらったらー、それはとーっても喜んでいましたからねー。何が何でもがんばるよーって張り切っていましたー」

「……もう、何から何までお世話になりっぱなしですね、ローズ先生には」

「いいんですよー、そもそも私は先生です。 ついでに直人さんのヒミツには最初からご興味ありましたし？ それに、こことは違う世界から来たということについても逆に……あ、直人さんを信じていないわけじゃなかったんですけどもね？ しっかりと信じられるようになったんですー。だって日本国のデータシステムのどこにも完璧に存在しない男の子ですからね？ ……あ、で、直人さんには今後とも護衛はつけますけど基本的には自由の身ですー。直人さんに自分

から接触したい人って、まずは美奈子やお嫁さんたちのお家からオツケーもらわないとですからね？　そうですねー、サエさんたちや私たちを連れてでも、おひとりでのおでかけもいいですしー、行きたいのなら海外旅行だって行けますよー？　まー、警備がものつすごく大変になるので当分は安全な日本国でガマンしてもらいたいところですけどもー」

「……とりあえず、俺、海外とかは行ったことないですしいですよ。あ、でも、この近くの町とかを適当に散歩したりするのも楽しみです。俺の家の……あつちの世界で住んでいた家の周りやよく行つてた場所が同じなのかも知りたいですし」

「ですかですかー、いいアイデアですねー？　いくらこの学園が素晴らしいところでもお遊びに出られないとうつつしちやいますからねー。……あ、そろそろそわそわしてますのでこのおはなしはおしまいにしましてー、私の自慢いいですー？」

「？　ええ、いいですけど」
「やー、突然でごめんさいねー。　けど、どーしてもダーリンがダメだつて言つてましたのでー」

本題は終わったとばかりに真面目な顔を崩し、にへらという感じで本当にそわそわとし出すローズ先生。

……男が多い、あ、いや、男女が同じくらいの俺の世界のローズ先生は、それはもうすつごくモテていたんだろうなって感じた。

晴代たちのことがなければ、ほんの数日前の……ああ、ここに来たのはたったの数日前なんだよな……どきつとでもさせられただろう表情と仕草だ。

でも、自慢？

……ああ、ダーリンって言ってるし、旦那さんのことか。

そりやそうだよな、こんな男が少ない世界なのに旦那さんがすぐそばにいるっていうだけでものすごく幸運なこと、なんだもんな。

テーブルに両手をつきつつ身を乗り出してきて、早く話したいっていう雰囲気しか見せないローズ先生に、どうぞと身振り知らせる。

……この世界で、気軽に話せる……年上の男性。

そんな人なら、俺もよく知っておきたいしな。

あ、そうか。

その人を俺に紹介するために、まず先に説明を終えるってことになつていたのか。

なるほどな。

そのダ——……んなさんは、きつととてもいい人なんだろうな。

「いいですかー？ いいですかー？ ……私の自慢のダーリンを紹介するですよー？ ……まずは入って来てくださいなー、みなさんっ」

後ろを振り返って声をかけるローズ先生の顔を追つてこの部屋の奥のドア……あつちは確か俺が検査受けたりしたところに繋がっていたよな……が開いて、そこから出てきた人たちは、は、……。……え？」

「あー、やーつと解放されましたよ直人——……奴隷なのはひなたちゃんの気分次第ってことなのでどうかにかしなとですけど」

さつき引つ張られて行つたままの、あ、いや、相当に叱られたんだろうな、やつれた感じもする早咲と。

「ふんふーん♪ どっれいー、どっれいー♪ 早咲ちゃんにどーんなめーれーしよっかなー？ まずは首輪と手錠と猿ぐつわと目隠しとロープとお——……あ、直人くんよかつたねー、おめでとー」

その手をまだ握つたまま、ものすごく嬉しそうな顔になっていて、鼻歌が止まらないひなた。

……何だか物騒な言葉は聞かなかつたことにしよう。

でも、こうして疲れた感じの笑顔を見せながら手を引つ張られている早咲と、普段以上に嬉しそうにその手を引つ張っているひなたをみるだけで、今のこのふたりの関係がよく分かるな。

……というか、早咲。

ものすごく叱られたはずだろうに、やつれた程度で済んでいる辺り……慣れてるんだらうなあ……。

「……おはよう、直人。……ああ、今日からはきちんと「直人」と、息子と呼んでやれるのだな」

「……美奈子さ、……いや、母さん」

確か早咲の件でぜんぜん眠れなかったって聞いていたけど、ローズ先生と同じように平気そうにして、俺に笑顔を……俺にとっては何よりの顔を見せてくれた美奈子さん。

そして……俺のことを引き取ってくれた形になって、こつちの世界での母さんになってくれた、美奈子さんだ。

「……うん。昨日よりも、ずっといい顔をしているな。……よかったな」

「……はい」

俺のすぐそばまで来て……ちよつとためらっていたけど、おそろおそろって感じて俺の頭を撫でてくれる。

——ああ。

世界は違うし、年も若いし、俺に対して厳しくはないけど……この人は、母さんと同じだ。

おもわず何かがこみ上げてきそうになったけど、さすがにみんなの前では見せられない。

いずれ……親子ってことになったなら、母さんとふたりきりの時間も取れるだろう。

そのときに、——この世界に来てからどれだけ俺が不安だったか、どうしようもない気持ちだったか。

それで、美奈子さんが母さんになってくれたっていう嬉しさを話し切ってしまったてもいいかもしれない。

「……隣。いいか？」

「はい、どうぞ」

ローズ先生に合わせてちょうど真ん中に座っていた俺は、少しだけ横にずれる。

少しだけ。

……察してくれたのか、俺と肩が触れる距離に美奈子さんが腰を下ろしてくれる。

……母さんの、匂い。

家で、さんざんに……当たり前前にあると思っていた匂いがふわりと

漂ってきた。

「美奈子もよかったですねー、直人さんのことー、ずーつと気にしてましたものー」

「ああ、今回は助かった。礼を言うよ、ローズ。……別の世界では私の息子として生まれ育ったという直人という少年だ。できればこうして迎えてやって……私に出産と育児の記憶はないから本物の母親にはなれないが、それでも母親らしき者として接してやりたいと思っていたからな」

「……………美奈子、さん……………」

「母さんでいいよ？ ……と、言うかだな、そう呼んでもらう癖をつけておいてもらった方がいいだろうからな。その方が皆にも納得してもらいやすい。……最初はローズとの設定のすりあわせが上手く行かずに弟とも説明したこともあったが……まあすぐに忘れられるだろう。いや、確かどちらとも取れるように設定してくれたのだったか。ならどちらでもいい、か」

「……………いいですねー、美奈子も直人さんもすごく嬉しそうでもすごくすだくハッピーですー。……………それ……………それ……………」

「そう、ですね。早咲にもですけど、なによりもここにいるみなさんのおかげで」

「はいっ！ ハジメからぜーんぶ計算ずくで私たちに指示してくれたサキのおかげで……途中は行き当たりばったりだったり刃物で戦う生徒たちがあつたりしてけっこうに強引でしたけどー、でも直人さんを安全に暮らせるようにしてくれましたー！

……………そうやっていろいろ考えてこそそこそ動いたりして目標を華麗に達成するサキ。気まぐれで好きなことばかりしてますサキ。それが s o c o o r なのです……………」

ん？

あれ、なんだかローズ先生の様子が？

早咲を見上げて……恍惚としたっていう感じの表情をしている。

え、え？

まさか？

いやいや、そんなはずは。

「でしようー？ もっと称えてくれてもいいんですよ？ ローズ。

……さつき美奈子先生とひなたと他何十人からいいところで助けてくれましたし、今日はローズ。君だけの夜を過ごそう？」

「R…really?ほんと、ですか？今日は私ですか？わー、嬉しいですー、今夜は私が早咲を独り占めですよーっ！」

ソファから飛び上がって早咲に駆け寄り抱きつくローズ先生。

そして、さりげなくローズ先生の体じゅうを撫でるようにしている早咲。

で、……ちら、とこつちを見てくるアイツ。

………まあ、コイツならローズ先生みたいな人、逃さないよなあ……。

「直人の心配はもうなくなりました。それも、ぼ、私のおかげで！

私のおかげです!! ……なので、貴重な男子を無事にこの世界で生きることが出来るように策略を駆使して導いた私はMVPですよね？ なら、当分は好き勝手してもいいですよね!? ね!」

「む~~~~!! 早咲ちゃんはひなたのどれいになったの！ ひなたは早咲ちゃんのせいで、早咲ちゃんのおかげでとっても大変だったの！ 特に昨日は!! だから……それに、ひなたはしばらく夜一緒にしてないの！ だから今夜はひなたの番！ じゃないの、あしたもあさっても、ひなたのどれいのあいだはずうっとうっ！」

そう言いながら早咲の……腰の辺りにへばりついて怒って……ふつうに怒っているひなた。

………。

うん、なるほど。

そういえば、ひなたもローズ先生も最初っから……母さん、を除いて最初っから早咲と一緒にいたもんな。

ということはひなたもローズ先生も早咲の恋人のひとり……いや、確か。

ひなた、自分のことを正妻だとか何とか言っていないなかったか？

……つてことは、まさかこの3人。

「……こほん。あー、仲がいいことについては……特にお前たち、昔からの仲のローズたちについては今さら何も言わない。言わない……が、せつかく私たちが親子の契りを交わして浸っていたというのにだなあ……空気をとは言わないが、せめて余韻くらいはだなあ……はあ——……」

「お——う……ごめんなさいです、美奈子。ついはいやいでしまいましてー」

「あ、う。ごめんなさい、美奈子先生。それに直人くんも」

「いやあ、いいじゃないですか美奈子せんせー。ここにいるのはもはや身内だけです、遠慮なんて」

「いくら仲がよくとも節度は大事だぞ？ ……はあ、お前にはもつと落ち着いてもらいこの学校の品格を疑われないようにしてもらわないと……」

……

最初からの、この人たち。

ひなた、美奈……母さん、ローズ先生、——そして、早咲。

俺のことを……疑ってもいただろうけど、それでも受け入れてくれて、こうして安心できるところまで面倒を見てくれてこの人たち。身内。

早咲が言ったように……俺にとっての身内は、晴代に沙映つていうお嫁さんたちと……この人たちだけ、なんだもんな。なら。

——ちよつとくらい騒がしくても、それを楽しむくらいはいいだろう。

39話(終) 俺と早咲という異邦人は、これからこの世界で。

きつと昨日の夕方から今朝までずっと忙しかったんだろう、疲れ切った様子……だけど、柔らかい顔つきになっている美奈子……母さんが言う。

「……ずいぶんと嬉しそうな顔をしているな、直人く……直人」

「慣れるまでは無理をしなくてもいいですよ、母さん。だって、こんなに急なんですから」

「……はは、それを言うのなら直人、君の……と、お前の、の方が正しいのか？ ……の話し方自体も変えないとな。母親に、敬語ではなくともそう丁寧に話すというのはあまり無い。そういう家もあるにはあるが……例えばこの学園とかな、だが私はほら、ただの一般人の家庭出身だからな」

「そうでした……そう、だね。なら、俺が家で、「あつちの」母さんに話していたみたいにしてみるよ」

「……うん、それがいい。男性の限りなく少ないというこの世界は、君……直人にとつては大層に窮屈だろうけど、直人がある日突然に……私たちとしては考えたくはないし、直人としてはその方が望ましいのだろうが。「ある日突然に、また、直人のいた世界に戻る」というその日までは、ここにいる私たち……や、次第に受け入れていくだろうもつと多くの嫁たちやその家族が、直人の居場所になるよ」

「………………。俺、もう、帰りたいのか帰りたくないのか、分からない。たったの数日しかないのに……だけど、そのたったの数日でもうひとりの母さんもお嫁さんたちも……あと、変な友だちもできたから」

母さんがさつき静かにして欲しいって言ったけど、やっぱり……そうだよな、男……女性同士が結婚する場合はどう表現するんだろうか、とにかく男役？……旦那の方はたぶんひとり。それに対して女

性は、お嫁さんというものは何人もつていう形になるんだろう。

そうじゃないと、この世界の女性のふたりにひとりには……女性らしい女性であつても男として、男の気持ちで生きていけないといけない。

それが難しそうなのは、この学校で男子の制服を着ている女子をほとんど見かけないというのからも想像がつく。

ちらつと聞いたように、ひとりの男装女子にたくさんの子が……早咲ほどじゃないだろうけど、群がるそうだしな。

けど、それでも男と女が一对じゃないといろいろと困るっていうのは、現実としては……目の前で次第にヒートアップしていく姿を見れば、それは想像に難くない。

「だーかーらー！ 直人は今日からひなたのどれいなわー！ なんでも言うこと聞くんてせいやくしよかかせたのー!!」

「でもでもですよー？ 昨日の夜一緒に横になって、何度もうなされて泣いていたヒナタを毎回起きてよしよししてあげたのは誰ですかー？」

「う。……でも大変だったのー！」

「ですよねー？ あー、じゃあー、私もヒナタがいって言った日には混ぜてもらおうっていうのでどうでしょー？ 今日から毎日ヒナタがサキを独占するのはしよーがないですがー、そこにお願ひして混ぜてもらふのはいいですよねー？ もちろん他の子たちも、ヒナタの許可次第ということですよー」

こういうときには床で正座するのがいつものことなのかは分からないけど、それはもう綺麗な正座っていうものをして身じろぎすらないで少し前の床を見つめている早咲と、その上の方で言い合い……にもなっていないじゃれあいをしているひなたとローズ先生。

話している内容が察せられてしまうけど、それって俺たちがいるこの場所でもいいものなんだろうか？

「……………」

あ。

しよぼくれてしぼんでいる早咲と目が合ってしまった。

.....。

「.....」

「.....!?!」

視線を逸らしておく。

夫婦喧嘩……になるんだろうか、それとも痴話喧嘩？
それに巻き込まれたくはないからな。

「……あの正座している姿を見て安心できるくらいには、まだたったの数日だけど、俺、慣れてきているんだ、母さん。

……初めはこの世界そのものに。その次はどうして俺が、って。それでいきなり晴代と沙映……さんを婚約者ってことになってなって、どうしようって、慣れない中なんとかしていたら襲われかけて。で、あそこで正座してる早咲に助けられて。

で、昨日は……その、奥さんがふたりも一気に出来て。こんな怒濤の数日にずいぶん悩まされたし振り回されたけど、でも、おかげで生きていけそうだよ。……あつちの母さんには、とても悪いんだけど、でも、もう、思うんだ。——ここで死ぬまで生きていなくて思うくらいには。大切な人たちができた、からさ」

「.....っ、そう、か.....」

「うん。こつちの母さん。美奈子さんも、そうだよ」

数日前までは何も考えずに、ただ学校が面倒くさいって思いながら過ごしていた。

今だから分かる、恵まれた環境なのになにひとつ俺からは何にも興味も持たず適当に過ごしていたからこそ、母さん……産みの母さんは怒ることが多かつたんだって。

でも、それをこつちに来て……こつちでも相変わらずに恵まれているけど、それでもボタンを思いつきり掛け違えたみたいの世界に来て、さすがの俺も意識が変わった。

今、母さん……これからの母さんに言ったように。

……その直接の原因は、たぶん、俺自身のことながら単純すぎることだろう。

たったひと晩を女子……ふたりと過ごした、ただそれだけのこと。

それだけで……早咲に言ったらちよろすぎ、とか言われるだろうから絶対に言わないけど、でも、暇に飽かせて読んでいた小説とかに書かれていた気持ち、今なら分かる。

そういうものに、俺たち人間は逆らえないんだって。

……………
気がついたら美奈子……母さんが肩をふるわせているのが伝わってくるけど、黙っておく。

そうするついでに目の前の修羅場のあとの喧嘩を眺める。

……………

もし。

仮に、だけど。

俺が、この世界に……同じように来たとしても、そのときにあのグラウンド、そしてひなたたちが見つけてくれるような場所じゃなかったら。

……………
……………美奈子さん、こっちの母さんになった人っていう、俺がたつたひとり顔を知っていて性格も知り尽くしていて安心できる人が、絶対に信頼できる人がいなかったら。

そして、母さんと一緒に働いていて、俺を見つけたもうひとりの早咲の……奥さんなローズ先生っていうすごい人がいなかったら。

——早咲って言う、俺の価値観……常識、考え方、感じ方と同じ「男」の友だちがいなかったら。

そうだ、なによりも早咲。

アイツがいなかったら、俺の心は今ごろどうにかなって。

「……なおとー、なおとー？ 聞こえてますー？ ……あ!! あのです、ね、そろそろ見ていないで助けてくださいーい……」

「……………ふう。 さて、野乃？ お前、どうやら反省が足りないに見えるな？」

「え？ あ、あのー？ 榎本先生？」

「呼び方を変えただけで私は変わらないぞ？ ……途中でひなたが絆されてしまったから中途半端に終わってしまったことだし、せっかくだ、喧嘩両成敗と行こうじゃないか」

「あの、美奈子、せんせい？ それは」

「……お前が昨日大変なことをさせたあの女子たちと、同室で反省文だ。何、私が納得する内容のものができあがるまでは、私が教卓で監視しておいてやろう。そうすれば安心だろう？。なあ、野乃。」

「そうだ、席は彼女らに挟まれる形で、机をくつつけてやろう。そうしたら、仲良く反省できるだろう？」

「……………」

「まあ、ちよつと……いや、相当に、女関係にだけはぶっ飛んでいるヤツだけだ。」

「友だちって言うか、あれは悪友……いや、俺が悪いわけじゃないけどそれ以外の言い回しが分からないし、けど俺は別に悪いことはしないけどなあ……まあ、アレだけだ。」

「でも、この世界でも素で話すことが出来て、素で話を楽しめる友だちがいる。」

「故郷の話をできて、同じ男として……適当な話ができるヤツがいる。」

「親友かどうかも怪しいけど……まあ、そのうちになるんだろうな。」

「だって、コイツはこの世界でたったひとりの。」

「美奈子せんせい……ひなた、知ってます。どーせひそひそっていいことささやいている内にあの女の子たちを丸め込んでやって、今度こそ……仲がいい女の子たち、恋人たちにしちゃうんですよ……はあ。そういうの、もう10年以上見てきたんですからあ——」

「……………」

「……ひなたー？ 泣いてもいいんですよ？ 私もヒナタのちよつと後から知ってますから、それもまたちゃんとかかってますしー。」

「あのふたり、ジヨォー？ ……うーん、アイが深い以外には、性格も体つきもなにもかもサキのすどらいーくですからねー。だいいじよぶでーす、私がきちんとキョウイクしますのでー」

「……………」

「……………」

「早咲の情けない顔つきが俺に迫る。」

だがいくら見つめられようと、俺は助けられないぞ。

で、あんな奴は置いておいて……俺にはもう、帰ることができない、いや、帰りたくない理由ができているんだ。

なりゆきとは言っても、早咲の策略とは言っても、何日か前までは知り合いですらなかったとしても——俺には、彼女を通り越した奥さんたちがふたりもできた。

俺の気持ちはともかく、あのふたり……沙映と晴代にとっては、俺は生涯を一緒に過ごす相手として想ってくれている。

ここに来る前には想像もできなかったような……美人で、俺に対して最初から好意的で、あとすんごい家の出らしいお嬢様って人たちと、たとえ勢いだとは言っても結婚をしたんだ。

お嬢様そのものも晴代も、あつちの世界のどこのクラスにもいそうな雰囲気的沙映も、俺にはもつたいないほどの人だ。

だけど、それは俺から見た……異邦人から見た話であって、こつちの世界で生まれ育ったふたりからしたら、俺こそがそういう感じの存在ってことで。

だから遠慮は要らない——っていう事実、常識に、ようやく慣れてきたんだ。

「……なおと——……」

あと、俺の爺さんと婆さん……両方共の、のこと。

ふと気になって母さんに尋ねたらすぐにスマホで見せてくれたけど、俺が知っているのと同じ顔をしていた。

っていうことは、世界自体は相当に違うものだけど、その本質……みたいなものは、変わらないのかもしれない。

だって、こんなにも母さんの若いときの写真そのものの母さんがいて、母さんそのものの……きつと慣れてきたら少しは荒くなるだろう話し方、そして怒り方をするだろう母さんが、ここにいるんだからな。

10年くらいしたら、俺が見慣れた顔つきにもなるだろう。だったたら、悪くはない。

こんな変になってしまっている世界で生きていくのも。

俺のいた世界みたいな気軽さはないし、自由はやっぱり少ないんだ

ろうけど……その愚痴を言うことが出来る悪い友だちが。

「……………お願いしますう——……………」

……………。

同性の、友人。

いくら少ないって言っても、いないわけじゃない。

話したいって頼めば、この世界の男子……や、年上、年下の男の人たちとだって話せるだろうし、そこで友だちもできるだろう。

時間がものすごく……俺が戸惑っていたせいでかかってしまったけど、それでも俺は、この世界で生きていくって言う決意をようやくでき。

「……………直人直人なおとー！ 聞こえてますよねー！ あー、もうこうなればヤケですつ。 直人のひと言でこの場から助け出してくれたら私、直人が好きそうな女の子たちをリストアップ……あ、もちろんまだ私が出していない子たちです……したものをあげますからっ！ ですからどうか」

「……………野乃。 お前、いつの間にそのようなものを？」

「いえ、だってですね美奈子先生!! 直人のお嫁さん候補に私のお手つきを紹介するのはなんだかとも悪い気がしますし、かと言ってですね、じゃあその子たちをそのままにしておいていいかって言ったらそう言うわけでもないわけですし、直人がある程度選んでくれたら残りはと思っけています」

「……………早咲ちゃん……………」

「……………ダーリ、……………サキ……………」

「……………早咲？」

「!! あ、いいんですかお願いし」

「そうじゃなくて、早咲、お前……まさか、この学校、あ、いや、学園だったか、ここにいる生徒のうちの未婚者全員を毒牙にかけようか？」

「さすがの私にも好みはありますよ!」

……………これから先、どう考えても……一緒に暇を潰したり愚痴を言ったり出来る代わりに早咲のやらかしの尻ぬぐいに駆り出されそうな

気はするけど。

.....。

けど。

「.....まあ、「親友」の頼みだもんな」

「直人!？」

「.....みなさん、今日は俺が、晴代と沙映っていうふたりと結婚できた記念の日なんです。なので、とりあえず今日のところはこの辺で許してやってください」

「直人.....」

「どうせ。きつと、明日にでもまた悪さするでしょうから、今日のいろんなのは明日にまとめてお願いします」

「なおとつ!？」

「いや、お前、絶対するだろ.....しないって言えるか？ 誓えるか？」

「いえ、あの。.....否定はできませんし誓いませんけども」

そこはしてお.....けないんだろうな、コイツは。

けど、こんな冗談を言える相手がひとりでもいるんだったら、俺は平気だ。

「.....あのさ、直人？ 私、直人のこと最初からゼーんぶ面倒見ていたんですよ？ もちよつとですね、もちよつと感謝してくれてもいいんじゃないです？」

「しているから言っちゃったんだろ？それに、今朝もさんざんに見たし聞いたからな、お前の悪行も。だから、どうせムダだっと思っただけ今のを助けてやっただけだ」

「ひどいですねえ、もうっ。.....ねえ、直人?」

「今度は何だ？」

正座から.....今度はしびれていないみたいだ.....すつと立ち上がり、俺のところまで近づいてくる早咲。

そうして、俺の方に屈むようにして.....告げてくる。

「.....言い忘れていました。言うのが遅くなりました。ねえ、直人。「僕たちの世界」へようこそ。これからも

ずっと、よろしくお願ひしますね？」

「……………ああ、うん。そ

うだな、きつと長い付き合いになるだろうからな」

「ええ、だって僕たち、もう親友ですからね!!」

「……………やっぱりさっきのは撤回だ。親友かどうかは今後次第だな」

「ひどいっ!」

「……………冗談だよ。俺の方こそよろしくな、早

咲」

新しい母さんの美奈子さん、俺の奥さんになった晴代と沙映。

早咲の奥さんのひなたとローズ先生——そして、親友、の早咲。

今、俺はきつと幸せなんだろう。

誰もが……俺の世界の男の誰もが羨むような世界で、きつと、羨まれるような人生に進んでいくんだろう。

この、女に関してだけはとにかく見境のない元男な、野乃早咲って
いう親友、あるいは悪友とともに。

ああ——きつと、悪いものじゃないはずだ。